

A night street scene in Japan, likely a traditional district. The street is illuminated by various lanterns, including square white lanterns and round yellow lanterns. Buildings with traditional architecture line the street, and the overall atmosphere is dark and atmospheric.

娼妓物語

なたく

私が外を見た時、彼女は何を思っていたのだろうか。何処か古ぼけた喫茶店の店内には私と彼女、それにけして二人の会話に立ち入ることのないマスターがカウンターの奥でグラスを磨いているだけだ。窓ガラス越しに見える光景は、真夏の日差しに照らされて今にも陽炎が立ち上りそうになっている、狭いくせに意外と交通量の多い道路と、その向かい側から始まる墓地くらいのもだろう。坂の途中に作られた墓地は、ここから随分と上の方まで見渡すことができる。それは到底、見栄えのするとは言いがたい光景ではあるのだが、私は彼女の顔ではなくそれを見ていた。私が木製の丸いテーブルに置いた、茶色くくすんで一目見るだけで長い年月を経てきたと分かる大学ノートを、彼女が座っている席に向かってそっと押しやったのはつい今しがたのことだ。彼女はそれを手に取ると、表紙をめくりとても不思議そうな表情をした。私が彼女から目を放したのは丁度その時である。私はその大学ノートに何が書かれているのか、つぶさに知っている。一行たりとも無駄にすることなく、丁寧な字で最初のページから書かれている内容には、ちゃんとした文章は存在しない。最初に野上武雄という名前で始まり、そこから最後の一行に至るまで、延々と人の……それも男性の名前が書き連ねてあるだけだ。中には、濡れた跡とか破けている箇所とかあるのだが、それ以外はただひたすら名前が書き連ねてあるだけのノートである。まったく説明なしに、ひたすら名前だけが書き連ねてあるノートを読んできたところで、けして面白いと思えるようなことはない。ただそれでも

、一文字一文字がとても丁寧に書かれていて、どの文字一つとして手を抜いた形跡がないのを見ると、これがどれほど大切な扱いを受けてきたものであるのということは、よっぽど感性が鈍くなければ理解することはできるだろう。だけどそこまでであり、そこから先は私がこのノヲトの持ち主のことを話さない限り何一つとして理解することはできない。　だから、痛いくらい無慈悲な太陽に照らされている墓石が連なる向こう側。先ほど二人が出会った無縁墓がある方角を眺めながら、私は待っていた。彼女が、私に聞いてくるのを。その大学ノヲトに書き記されている名前が一体どういうものであるのか、という質問をしてくることを。「すみません……このノヲトは、一体？」　おそらくだ。彼女はもっとたくさんのことを聞いたかったに違いない。それも、初対面の私からなんの説明も受けずに、名前だけが書かれた古い大学ノヲトを渡されたのだから当然のことだ。それでも、まったく手がかりがないというわけではない。というよりは私と彼女、二人の出会いこそが答えであった。　私はそこで、ようやく墓地の向こう側から彼女に視線を移す。すると彼女は、真っ直ぐに私の方を見ていた。この時私は、あまりに真摯な眼差しに内心たじろいでしまった。たぶん不意をつかれたのだ。ノヲトを渡しただけでは、たぶん何も理解できないだろうと、そう高を括っていた。だけど、彼女はノヲトから何かを感じ取ったようだ。白いワンピースに清楚な美貌。どこかお嬢様っぽい雰囲気を持った女性の感性は、私が勝手に想像したよりずっと繊細で聡いようだ。　私は、自分の不覚をさとられないように、アイスティーの入ったグラスを取り口を付ける。グラスを置いた時に、驚くく

らい透明な氷がグラスの中で落ちて、カランと澄んだ音を立てた。「もう、十年程前のことになります。春子さんとお会いしたのは。……貴方のお祖母さんです」　あの日も暑かった。ゆらめくように焼けつく路上を歩き、春子さんに会いに行ったのだ。

私は、話し始めながら、自分の記憶を辿り始める。　それは、私の記憶の中にある、一人の女性が語った生涯の記憶であった。

大通りから細い通りに入ったすぐ右手の場所に、旅館があった。あまり広くない玄関ではあるが、アーチ状の入り口を縁取るのは、まるで千切り絵のように色とりどりに配色されたタイルである。密集した建物に埋もれかけたその建物が、まるで洋上に背中をだして息をつく海豚のように見える。ただし、左右からか覆いかぶさってくるような建物は、左も右もそして通りを挟んだ向いに建っている建物も全て鉄筋コンクリート製であり、入り口だけでかろうじて自己主張をしている古ぼけた木造の、今にも崩れ落ちそうな建物とはまるで比較にはならないくらい立派に見えた。よく見ればそれと分かるのだが、あまりに古ぼけてみすぼらしいその装いは、いくら玄関が自己主張をしようとしても、どうしても周囲の景色の中では目立たずすっかりと埋もれてしまっていた。ましてや、一軒はさんでその隣には客を寄せるために、これでもかというくらい派手に飾り付けたソープランドが店を構えていて、蛍光灯の隣に点っている豆電球のように、まるでめだたなくなっていた。そのソープランド店から右手の通りは、大小合わせて四件の店が軒を連ねており、それぞれの店の前に男が一人ずつ立ち店番をしているのが見て取れる。夕暮れには早々と明かりがともされ、風営法で定められた深夜まで男たちは立ち続けている。その中で行われていることは、形を変えながら太古の昔から続けられてきた商売であり、現在は違法とされている商売である。ただ、明かりを点せば闇が生まれるように、いくら否定したとしても、けしてなくなることのない、そんな商売

であった。一方信号も横断歩道もない小さな交差点を挟んだ左手には、普通の住宅と事務所が軒を連ねているかのように見える。ただし、鉄筋コンクリートの建物の中に、木造の二階建ての建物があり、旅館と書かれた小さな看板が二階の窓際に掲げられていた。この界隈にある三軒の旅館のうち、二件目の旅館である。後の一軒はこの路地ではなく、表通りにあるやはりいたって古ぼけた二階建ての旅館である。太平洋戦争当時、幾度となく繰り返された空襲により焼き払われ、終戦直後になって建てられたものだった。当時は、旅館ではなく貸し座敷と呼ばれGHQにより定められた公娼街、通称赤線街として売春禁止法が施行されるまでの間、最大48件が軒を連ねていた。今はもう当時を偲ばせるものといえ、古ぼけた三軒の旅館と公娼街が廃止された後にやってきたソープランドー—当時トルコ風呂—と呼ばれる遊興チェーン店が四件だけであった。ただ、そこに生きる男はもちろん、本来主役であるはずの女たちも、月見草のように日が差せば消えてしまい、誰に語りづくような歴史も持ち得ない。だから時が来れば、粉雪のようになったドライアイスみたいに、水滴すらも残すことなくその姿を消してしまう運命にある。ちよんの間として残っている三軒の旅館は、かろうじてその歴史を形としてとどめているものの、時代の流れとともにいずれ消えてしまい、もう何も後に残るものはなくなる。それが悪いことだとは思っていなかった。そのことに寂しさを感じるのは、夕日を見て悲哀を感じるのと同質の私個人の感傷に過ぎないからである。かつて貸し座敷と呼ばれたこの手の旅館には、女たちが流した涙が染み付いていることもまた間違いのないことだからであった。

とは言っても、当時を偲ばせるのはわずかばかりの資料から得た、井の中で暮らしたことのない人間が中の蛙を語るような、そのようなものでしかなかったのであるが。所詮私は男であり、彼女らの暮らしていた世界のことをどれほどつぶさに知ったところで、それは知識が増えるだけのことであり、彼女らのことを語る言葉は想像でしかない。そこのところは、結局の所いかんともしがたいことであった。それに女という括りでわけたとしても、この場所で生きる女とそうでない女とは、遊郭で働く女たちが、かつて中と外を厳密に分けて考えていたのと同じように、たぶん別の生き物に近いのだ。どこからが蝶であり、どこからが蛾と見なされるのか厳密な意味で分け隔てるのは難しいとしても、それらの区別は動かしがたくはっきりと存在するのである。ただそれも、時代の流れの中では二つの絵の具が垂らされた水のように、それまでとは異なった色合いを見せているが、混ぜれば混ぜるだけ結局のところどんどん灰色に近づいているだけのことであり、本質的なところはあまり変わっていないのかもしれない。私に理解できることなど本当はなにもなく、最初から最後までほんの表面的なところ以外理解できないというのが、正解なのだろうと思う。ただそれでも話を聞くことはできる。今ソープランドで働く女性たちの語る話は、それぞれの事情であったりあるいは仲間内の話であったりする。だが、そこに語られる話には概して個人的な話であり、それが彼女たちなりの世間話なのであった。それはそれで興味深い話であったが、この狭い世界の中の歴史を知ることはできなかった。彼女たちにとってそういったこ

とは、まるで興味を引かれるようなことではなく、積極的に話したがる事柄ではないようであった。そもそも、彼女たちにとって自分の経歴を残しておきたいようなことではない。此処で働いたという記憶が、自慢になるという女性は私の知る限り一人もいない。だから人の記憶というよりはむしろ、そこで行われている行為が、歴史をとどめるための記録 | 媒体《メディア》として機能している。ただし、ソープランド自体は比較的歴史が浅く、今見ることができる三軒の旅館へと直接繋がるものではない。これらの旅館は、戦後すぐに建てられたということもあり、ひどく安普請であり、例えば江戸の世から続くような武家屋敷と違って、本来長い風雨に耐え続けられるような家ではない。それが未だに建っているという事実は、ある意味幸運なのかもしれなかった。私が向かったのは、今は存在しないその中の一軒である。ソープランドが並んで建っている通りのはずれに、現在は駐車場になっている土地がある。21世紀が始まるまでは、その場所に他の三軒の旅館と同じような旅館が存在していた。客を泊めることが目的ではなく、三十分ほどの間男が座敷を借りて、そこにやってきた女性が特殊なサービスを行うことが目的の旅館。通称ちょんの間と呼ばれる宿であった。そこを切り盛りしていたのが、一人の老婆であった。ずいぶんとくたびれてはいるが、きちんと化粧はしていたし、しゃんと伸びた背筋はおそらく農作業はやったことがないことを示している。昼間でも陰鬱とした感じのする、木造の古びた建物がよく似合いそうな老婆であった。当時私は今よりもだいぶ若くはあったが、若過ぎるということにはなかった。ちょんの間を利用することは決して多くはないとしても、

初めてということでもなかった。利用目的としては、むしろ不純な動機なのだろうが、そこで働く女性達と無性に話しをしたくなることがあり、そんな時に行った。なじみの相手だと、行為そのものを行わずひたすら話だけを聞いていることもあった。そんなときには女性には支払いをすることなく、座敷代だけを払ってでてくることになる。 そんな私にとって、そのちょんの間にいる老女は、ひどく興味を引かれる存在であり、何度か通ううちに益々彼女と一度話をしてみたいという欲求が増してくるのはある意味必然だったのかも知れない。ただ、客でしかない私にとって、じっくりと話せるようなチャンスが訪れるはずもなく、半ばあきらめていたのだが、思わぬことから彼女の話をつぶさに聞くことのできる機会が訪れたのである。 その日、私は表通りからではなく、市内を東西に貫く大きな川沿いに続く道の方から宿へと向かった。いつもは少し離れたところにある有料駐車場に車を止めて、そこから歩いてやってくるのだが、その日はたまたまその駐車場に空きがなく、大きな川の向い岸にある駐車場に車を止めたのだ。 川岸は両岸に桜の木が植えてあり、茂った葉が夏場の西日をさえぎってくれている。もうすぐ夏も終わろうとしている時期で、真夏にくらべてだいぶ陽が短くなっているものの、それでもまだ六時を少し過ぎたばかりで焼け付くような日差しの名残は存分に残っていた。東西に長く伸びている川面は、夕暮れ時の陽光を惜しげもなく反射して、きらきらと煌いていた。風がほとんどないので、大気に溜まった熱気がまるで私の体を押しさえつけるように感じられたが、夕日に照らされた水面を見ていると妙

に懐かしく、特に理由があるわけでもないのになんとも言えない寂しいような心持にさせられた。 塊のような熱気の中を、あたかも夕暮れの風景を切り取ったかのように川面に映った景色を眺めながら、私は時間を少しだけ先取りした桜の木の陰の中を、ゆらゆらと歩いていつもの旅館へと向かったのだ。 ソープランドとは違って、ちよんの間には基本的に風呂はない。到着した時には、すっかり汗だくになってしまっており、遊ぶ気持ちもすっかりと失せてしまっていた。だから、旅館の前までやってきたのはいいのだが、このまま引き返そうかと足を止めていたところ、たまたま旅館の中から出てきた老婆に見つかって声をかけられたのだ。「はいりなさんのかネ？」 独特なイントネーションを持った言葉に、奇妙な愛想のようなものを感じる。今まで短いやりとりをしたことはあるが、どことは言えないが、いつもとは異なっているような気がした。 私は少しだけ迷った後、恐る恐るたずねてみることにした。それは不純な動機で、前々から話してみたかったので、丁度いい機会になるのではという思いが頭をよぎったのだ。「なにか、あったのですか？」 私がそう声をかけると、老婆はまるで夕日を直視したかのように目を細めた後、カカカとつかえるような笑い声を立てる。「よかったら、お茶飲んでいかれたらよいのサ」 一体どこの方言が判断つきかねる、独特のイントネーションで私を誘ってきた。まるで古木のような味わいのある声に、郷愁めいた親しみを覚えながら私は返答を返す。「すみません、お邪魔します」 元々、変人めいた理由からここに通っていたこともあり、私は二つ返事で誘いを受けた。夕日を斜めから受けた木戸は、深い洞窟の中へと続く入り

口のようにも見える。その先にある闇は、たぶんこの木造の旅館に深く根を張る歴史そのものなのだろう。先に入ってゆく老婆とともに、それはこの旅館を構成しているものの一部だ。私は、明らかにいつもと違う何かを感じながら、老婆の後に続いて中に入ってゆく。意外なくらいカラリと子気味く動く木戸を後ろ手に閉めようとしたとき、背後のどこかでチリンと音がした。思わず振り返ると、入り口の軒先に風鈴が一つつってあった。どうも、家の中からそよぎ出した風に吹かれて鳴ったらしい。透明なガラスで出来た風鈴には、水玉模様の絵がかかれてあり、涼しげな様をしている。私は自分でもわからぬまま、なぜだか少し笑って、そのまま木戸を閉めた。旅館の玄関は、普通の家より少し広目に作られているのだが、それでも二人並んで靴を脱ぐことができるのがせいぜいといった広さであった。私が靴を脱ぎそのまま玄関を上がると、すぐに老婆が靴を下駄箱の中に放り込む。いつもならこの後、二階の開いている部屋に通されるか、一階にある和室で待たされることになるのだが、今日はそのどちらでもなく玄関脇にある小部屋に通される。少し痛んではいるが、それでも綺麗に整えられた畳張りの部屋は、四畳半の広ささしかないのだが、ちゃぶ台がひとつ置いてあるきりなので、さほど狭くは感じない。部屋の奥には比較的小さな感じのする仏壇があった。

「まあま、座んなさいネ」 独特のイントネーションと言い回しで座布団を勧めてくる。私がその上に胡坐をかいて座ると、老婆は何処か億劫そうな感じで足を動かしながら部屋を出て行った。

一人になった私が、部屋の中を見回すと壁の周囲の何箇所かに

畳の色が違う場所があることに気がついた。日に焼けていないので、妙に白い色をしている。明らかに何かを動かした跡であった。しょせん老婆の一人暮らし、それほど物が入用だとは思わないが、それにしても置いてあるものが少なすぎる。ここで暮らしていないとすれば、仏壇が置いてあるというのは奇妙である。

私が改めて仏壇に目をやると、奇妙な物が置いてあることに気づいた。日に焼けて茶色くくすんだ一冊の大学ノヲトである。普通なら過去帳とか位牌とか置いてあるだろうに、代わりにそこにあるのは古ぼけた大学ノヲトであった。あれはなんだろうか、と私が考えているところに老婆が戻ってくる。両手でささげ持つように、小さな木の盆を持っている。その上に乗っているのは、色が落ちかけた感じのする急須と湯呑みが二つで、片方の湯呑み柄は急須とおそろいであった。急須の柄は白地に青い玉模様が並んだもので、湯呑みの一つも同じもの。これは、おそらく客用のものだろう。もう一つの湯呑みは、それより幾分厚手の赤焼きの陶器。ひび割れが何箇所か目に留まる。これが、普段老婆の使っている湯呑みらしい。私が黙って待っていると、老婆は私の目の前に白地の湯呑みを置いて、お茶を注いだ。さらに、盆の隅に乗っていた小皿を置いた。香の物の鮮やかな緑が白い小皿に映えている。どうやら、小さく刻んだ高菜付けのようだ。「しょうゆ、かけなさるかネ？」老婆が聞いてくるが、薄味の好きな私はそれを断った。すると、老婆は座布団は使わずに畳みの上に直接正座して座った。場所は、私の正面ではなくちゃぶ台の右隣。どうしてその場所なのかはわからなかったが、あまりに自然に座ったのでなぜだかは聞きそびれてしまう。「もしかしたら、

引越しされるのですか？」　老婆が自分の湯呑みにお茶を注ぐのを見ながら、そう話しかけると、彼女は手を止めずに答える。「なんで、わかりさったんかネ？」　老婆は私の推測を肯定しながら逆に尋ねかけてくる。「畳のそこここに、日焼けの跡があるので、箆笥が置かれていたのかなと。ですから、もしかするとお引越しされるのかと思ひまして」　まるで古物のような部屋に入ってから、適当に考えてみた推測を私が話してみると。「頭のよろしいことじゃネ。もうすぐ、ここはしめるんヨ」　老婆は足元に転がっている本でも拾い上げるような何気なさで答える。深いしわの刻まれた両手は、赤い茶碗を包むように添えられていた。私は老婆がお茶を一口すすめるのを黙って見ながら、どう話しかけたものか少し考える。元々動機が動機だっただけに、幾分やましい気持ちもあるが、それ以上にこの機会をふいにしたくない。同情めいた言葉や、ましてやそうなんですか、などというのは論外である。　老婆が湯呑みを机の上に戻すのを見ていたら、自然とその言葉がでてきた。「いつ頃から、この仕事をされているのですか？」　私の質問に答えず、老婆はちゃぶ台に手を突くとひどく疲れたような様子で、「どうれ、少し暗くなってきたネ」　ため息のようにそう言いながら、ゆっくりと立ち上がり、天井からつるしてある蛍光灯の紐をつんと引っ張った。するとグローランプがかつかつと瞬いた後、二つの丸い蛍光灯がふっと点く。いくらか驚くくらい小さな部屋は明るくなり、それまで部屋を包んでいた薄闇を残酷なくらい容赦なく追い払ってしまう。　もう一度ちゃぶ台に手をつきながら、ゆっくりと荷物を降ろすように老

婆はかがみこむ。しらじらとした残酷な明かりの中、私から見た向こう半分側を陰にしながら老婆は同じ場所に座った。「こんな年になると、いかんのサ。昔と違って、よっぽどつよいでネ」何とは言わなかったが、私は蛍光灯のことを言っているのだろうと思った。ただそれに関しては、コメントを差し控える。私には女性の気持ちを察するほどの経験はないからなんと答えたものか分からなかったし、それにこの時の私にはそれがさほど重要なことだとは思えなかったからである。だから、聞き流すというほどではなくても、あえて反応しようとはしなかった。私は催促するわけではなく、ただ黙ってお茶をすすった。ずずっという音が、狭い部屋の中に満ちた白い光の中に響く。その後老婆が出してくれた、香の物を指でつまんで口の中へ放り込んだ。かなり塩気が効いていて、これだけでは辛いので、またお茶を口に含む。丁度その時だった。「十五の年やったネ。売られたんヨ」私は口の中の物を喉の奥の方に滑り込ますと、すぐにたずねる。「それは、戦前のことですか？」まだ熱いお茶を吹いて冷まそうともせずに、そのまま口に寄せようとしていた老婆の動きがすっと止まり、合わせ鏡の奥底でも覗きこむように私の顔を見た後力力力と声を立てて笑った。「これが、幾つに見えなさるんかネ？」

これというのは、老婆のことだろう。質問された私は、畳みに両手をついて体全体を老婆の方に向ける。老婆の左前から、お茶をすする老婆の姿を改めて見直した。まるで年輪のように深く顔や手に刻まれた皺は、老婆の過ごしてきた歳月をしのばせる。ただ、それだけで年齢を言い当てるなんてことができるわけではない。顔はきちんと化粧してあるし、結い上げている黒い髪には

白い物がまったく見当たらないくらい丁寧に染めてある。濃紺に近い感じの紫色の服は、あまり着古した感じはしなくて、今の流行とかとはまるで違うのだけど、ずっと昔に流行っていたであろうと思われる、ハイカラという言葉が合いそうなそんな服であった。たぶん意識して目立たないようにしてあるのだろうが、改めてこうして見るまでは気づかなかったけれど、彼女は女性としての身だしなみをととてもきちんと整えている。それは彼女がこういう仕事を続けてきたからなのか、それとも自分を女性だと意識し続けているからなのか……あるいはその両方なのかも知れない。私は、老婆のことをこうして見直してみて、一つのこと気がついた。ここから、この位置から彼女のことを見ているととても綺麗なのだ。美しいという表現はたぶん違う。人が花や蝶を見て、あるいは若く華やかに輝く女性を見て感じる美しさとは近いようでいながら、その本質はまるで異なっている。とても分かりにくいことなのだが、たぶんこういうことなのだ。花も蝶も空の青も若い女性も、私がいなくても美しくそこにあるだろう。でも、彼女が綺麗であるということは、私が見ているからそうなのだ。彼女は見られることを意識してそこにいる。そうであろうとして、綺麗でいる。たとえば私でなくても、誰かがいることで、彼女は綺麗なのだ。もちろん、ただ私がそう思っただけなのだが。そのことを確かめることは出来ないし、またそんなつもりも私にはない。女好きで卑猥な男であるが、少なくとも無粋な人間にはなりたくなかった。もっとも、その差を重視する人間なんて本当に限られているし、私が下らない類の人間であること

は間違いないのだが。　　そうやって細かく見ていっても、彼女が何歳なのかということになるとはっきりとは分からない。結局のところ、私が受ける印象で答えるしかない。とはいってもこういうことは、正直に答えればいいというものではない、というくらいの常識は私も持っている。率直に言えばお世辞ということになるのだが、社交辞令ということにしておく。こういったのものは、暮らしの潤滑油。たとえ社会の足下に生きている人たちであろうと……いや、だからこそ必要なものだとは私には思える。「そうですね、七十台前半くらいですか？」　　私には七十七、八歳くらいに見えていた。幾分あいまいに濁したのは、ひょっとしてもっと若かったならと思ったからだ。こういうところは大人の嫌らしい対応である。　　彼女はあのカカカとつかえるような笑い声を立て、「もう、今年で八十五になったんサ」　　そう言った後、皺に笑顔を刻みこんだ。「これは……ほんと、お若いですね」

思っていたよりずっと老いた年齢に、私は本当に驚いていたのだが、出てくる言葉は社交辞令とかわらない。いつも、社交辞令ばかり使っていると、こういう時には歯がゆい思いをしてしまう。言葉はあっても、何度も洗濯を繰り返してきた着物が色あせていくように、言葉のもつ力も薄れてしまうのだろう。「こんな婆に気を使っても、いいことないさネ」　　すましたように彼女は言ったが、まんざらでもなさそうな様子であった。私にもっとうまく伝えられる言葉があればいいのだろうが、どんなに綺麗な色彩でも何度も塗り重ねれば鮮やかさはどんどん失われていくだけで、元以上の色彩を取り戻すことはけしてない。たぶん、言葉もそれと同じで、記憶の中の言葉は戻ることなく、重ねるたびに輝き

を失っていくだろう。だから私は、このことに関してこれ以上触れることはしない。　かわりに、頭の中で計算を試みる。二十世紀最後の年、西暦二千年。この年に八十六歳を迎えたということは、彼女の生まれた年は西暦一九一五年に生まれたということになり、和暦に換算すると……。　「それじゃ、大正四年生まれということですか？」　計算が間違いでなければ、これは正しいはずである。　「さいですネ。もう、いつお迎えが来ても、大往生サ」　老婆はお茶をずずっと音をたててすすりながらそんな風に言った。彼女でなくても、死期が遠くでないことはよく分かる。そこ二三年というのならばわからないが、十年となればけっこう難しく、二十年となればまずもって無理だろう。さらに三十年というのは、もはや空想の世界でしかない。　人の死というのは、いささかタブー視されているところがあり、たとえば私が自分の死のことを口にすれば、周りから引かれること請け合いだ。だが、彼女がさらりと口にする往生という言葉からは、死に対する陰鬱な響きはまったく感じられなかった。　おそらく、こういうところは齡《よわい》を重ねるということの、悪いことばかりではない面の一つだと思える。　それに、さっきはサラリと流したが、彼女は売られたと言った。明治に入ってから法律で人身売買は禁止されてはいたが、明治、大正と女衞の歴史は確かに続いてきたのだ。親が、あるいは本人が借金をして、売春婦として働かされる。彼女達を雇っているのは貸し座敷業者であり、働いている女性達は個人契約で働く娼妓として所轄の警察署に登録されている。　そういった娼妓たちのことを公娼と呼び、法律によっ

て認められた商売だったのである。もちろん、借金で縛られた女性達に自由はなく、彼女達が幸福であるなどとはとても言えないだろう。今だとして借金漬けになって体を売る女性がいなかったことではないが、それよりも手っ取り早く現金を手にすることができるとい理由の方が多いうように思える。まあこれは、自分が仲良くなった女性達から聞いた話なのだが。いずれにしても、老婆がさらりとやったことは、彼女の人生が一般的に言って良好なものであったといえないことを意味する。ただし、現在老婆がやっている商売を考えれば、それほど意外なものではなかったが。このことは私にとって、むしろ願ってもない展開であって、これはもう性根を据えて老婆の話を聞いておきたいと決心するきっかけとなった。このまま世間話の延長で、話を引き出して言ってもいいのだが、それではとても深くまで話を聞くことはできない。だから、私は改めて老婆にきちんとお願いをすることにする。その結果、断られるかも知れないが、そうなれば仕方ないと思えばすっぱりとあきらめるつもりであった。たとえ、諦めきれぬ自信がまったくなかったとしても。どんな鳥も羽を広げなくては飛び立てないように、まずは行動を起こしてみないことには始まらない。そのためには、お願いするより先に、すべきことをやらなくてはいけない。「私は木戸渉《きどわたる》と言います。よかったらお名前、教えていただけますか？」まず自分から名乗って、老婆に名前をたずねる。本来、こういう場所では、女性が本名を名乗ることはまずありえない。それが仕事と自分を隔てるための、この世界に身を置いた女性の常識であった。ただ、それは嬢と呼ばれる直接接客を行う女性のことで、はた

して老婆のように店側の人間にも通用する話なのかまでは私には分からなかった。そもそも、嬢の呼び名は気にしても、従業員の名前を気にするような男はまずいないだろうから、常識のようなものがあるかどうかすら疑わしい。「木戸、渉？　もしかして、さんずいに歩くと書く渉さんかネ？」　老婆は口元に運ぼうとしていた湯呑みをちゃぶ台の上に置きなおして、私に聞いてくる。「ええ、そうですが？」　私は怪訝そうな感じがうまく伝わるように意識しながら、少し大きめの声で言ってみた。すると、老婆は歳と共にすっかり落ち窪んでしまった目をゆっくりと閉じながら、自分の中にある命を吐き出すかのように、ふーっと大きく息を吐き出した。それから老婆は、まるで眠るようにしばらくの間動かなくなってしまうが、私はじっと黙って待ち続ける。外からは車音が聞こえて、そのまま店の前を通り過ぎていった。おそらくこの宿の先にあるソープランドへと向かう客の車だろう。この宿には駐車場がないので、直接車で乗り付ける客はいない。それに、元々客の数もずいぶん少なく、この旅館にやってきたとき、私以外の客に会ったことは今までなかった。今日も今日とて、こんなに暇でいいのかと心配になるくらい、客の気配は存在していなかった。それだから、店を閉めることになったのだと言われると十分納得できる理由になるだろう。　本当に老婆が寝てしまったのではないか、と心配になり始めた頃、老婆は目をしばたかせながら頭をゆっくりと左右に振る。「昔、おられたんヨ。ちょうど、今のあんたくらいの飛行隊長さんでネ。二十歳にもならん少年を、敵艦に体当たりさせているのに、自分がのうのう

と生きているのは何より辛いと言いさってネ。ついに、ご自分もお逝きになられた隊長さんがおられたんヨ。その隊長さんの名前が、あんたと同じ木戸渉さんだったんヨ」　　どう答えたら良いのだろう。たまたま、私と同じ名前の持ち主がいたらしいということなのだが。この国の歴史の一部として知っている事実。それを目の前にいる老婆の口から直接聞きされることになるとは、まったく想定していなかった。それには十分驚かされたのだけれど、私がそれ以上に気になったことがある。老婆が私の……いや、飛行隊長さんの名前を口にしたときの老婆の表情。終戦からこれ程の時間が過ぎているというのに、和らぐことのない痛みというものは存在するのだろう。　　彼女は大正という時代に生まれ、昭和という日本の歴史上比類ない激動の時代を日本の社会の底のほうからずっと見続けてきていた。　　私が何と話していいものか、まるで言葉を見つけられずにいると。「秋本春子《あきもと　すずこ》いうんよ。その頃は、小春と名乗っていたんね」　　老婆……いや、春子さんは名乗ってくれた。白い蛍光灯の光に照らされた、白粉の乗った皺の刻まれた顔の向こう側には深い影が落ちている。ただの影でしかない明かりの向こう側に、宿に入る前に感じたような底の見えない闇のようなものを感じる。宿だけではなく、春子さん本人にも深く根付いていた。「ありがとうございます。ところで、お願いがあるのですが？」　　私は、率直に切り出した。そもそも個人的な興味に根ざす頼みごとなのだから、断れることを前提にした質問である。それに妙な駆け引きとかもしたくなかったし、なによりもどれだけ本音に近い処の話が聞けるのかという処が最も重要だったからだ。　　すると、春子さんは

幾度か目を瞬かせた後、私を水槽の底の方から覗き込むような視線を向けてくる。私は、まるで水槽の中で泳いでいる金魚にでもなったみたいに、何もかもどの角度からでも洗いざらい隠すことができず、自分という物がすっかりとあからさまにされてしまっているような気分になった。 実際の処、春子さんほど多くの男というものを、綺麗事ではなく良くも悪くも知っている女性はいないであろう。「旦那さん、あんただいぶお変りなさってるネ……」 春子さんの評価は至って穏やかなものであった。端的に言えば、変人の部類にはいるであろうと私は思っている。風俗、否、女という存在にたいして人一倍の興味を持っている。

ただ名前を告げただけなのにも関わらず、春子さんが旦那さんと呼んだことで分かるように、まだ私のことを客として扱っている。だからこれは、かなりオブラートに包んだ表現なのだと考えていたほうがいだろう。 本当ならば、もう少し胸襟を開いてから話しを伺ったほうがよいのだろうけど、もうこんな機会はこないかも知れない。春子さんは店を閉めると言っていた。それになにより、春子さん本人がとても高齢であるという事実もある。私自身、駅で発車のベルを聞きながらプラットフォームに駆け込んできた、電車の乗客にも似た焦燥感があったことも付け加えておかななくてははいけないだろう。 そういった内心の焦りを見透かしたように、春子さんは言葉をつなぐ。「まあ、言ってみなさいナ」 良いとも悪いとも言わず、春子さんは私の話しを聞こうと言った。結果がどうであれ、そもそも私に否はない。「話しを聞かせて欲しいのです。春子さんのお話しを、ぜひお聞かせ

下さい」 私はまるで童貞を捨てるために、初めて風俗にやってきた少年のように少し裏返りかけた声で、それでもなんとかつかえることなく厚かましい願い事を口にしてできるだけ深く頭を下げた。「ほんに、かわっとらさるネ。旦那さんのような方は初めてサ。それで、なにを聞きなさるんかネ？」 春子さんは枯れ枝のような両手の指を、お祈りでもするかのようにちゃぶ台の上で組み合わせながら聞いてくる。なんとなくだが、春子さんの声は何処と無く楽しそうな、そんなふうに聞こえた。私は少しもためらうことなく、蛾がただひたすら光に向かって進み続けるように、私は自分の欲求に従った。それは男が本能に誘われて女の体を求めるのと同様の、私にとってはいたって根源的な欲求であった。「全部です。できるだけ、詳しく、できるだけすべてを。春子さんが生きてきて、見たこと聞いたこと、どんな人と出会い、どんなふうに考え感じ今まで暮らしてきたのかを。貴方の美しい思い出も、嫌な思い出も、辛かった出来事も、そういったもの全てを私に聞かせて欲しい」 春子さんの白く塗られた顔の奥にある、すっかりと落ちくぼんでしまった目が何度か瞬きをして、私の奥の方を覗き込む。それを私は深き淵でじっと見ていた。ずっと昔。明治という時代が始まるもっと前。遊郭に囲われて、その身を鬻《ひさ》いでいた女性達ならば、春子さんのように男の底を覗き込むことを当たり前のように出来たのかも知れない、とそんなことを考えながら。 どのくらいそうしていただろうか。焚き火の火の粉がゆらりと光る間ほどのようでもあったし、かがり火がすっかり燃え落ちてしまうほどの間のような気もした。だが、実際にはそのどちらでもないことは間違いない。私がふと

手を伸ばして掴んだお茶は、まだ熱いままであったが、飲み加減くらいには冷めていた。 私が春子さんから目を放した僅かの間に、春子さんは前かがみになり立ち上がろうとしていた。

「ちょっと、お待ちなさいナ」 億劫そうに立ち上がりながら、春子さんが言う。私は黙って頷き、自分の口をふさぐようにお茶を口元に運んだ。 春子さんが部屋をいったんでてゆくと、玄関からカラカラと小気味良い音がして、風鈴がリン鳴るのが聞こえてきた。それからしばらく間があって、また玄関のカラカラと音がする。古い木造の壁にアルミサッシを後からはめ込んだのだとすぐに分かるアルミサッシの窓から外を見ると、もうだいぶ薄暗くなっている景色が見えた。 車をどうにか二台並べることができる程の狭い通りを挟んだ向こう側には、市内を貫く川の土手が見える。外の景色を見ながら私が考えていたのは、なんともとりとめのないぼんやりとしたことであった。一体春子さんが今何をしているのか、この時の私はどうでもいいことだと思い込もうとしていたのである。それは小学生の頃、遠足の前の日になると時間がすっきりと間延びしてしまう現象によく似ている。あまりに明日が遠く感じられて、できるだけ考えまいとする。けれども、結局のところそんな試みはうまくいくはずもない。どうしても私の思考は、春子さんがこの部屋に戻ってきたときに、いかなる返答を聞かせて貰えるのかということに回帰する。 砂時計の砂がどんなに少しずつこぼれ落ちていたとしても、砂がとどまることがないように時間は確実に流れていくし、朝起きたら遠足の当日になっていたし、部屋からでていった春子さんもまた部屋

に戻ってきた。「今日は客はいないから、もう店しめてきたでネ。ゆっくとしなさるサ」 しんどそうな様子で、膝をおり背中をしゃんと伸ばして春子さんが言った。右手に持っていた茶封筒をちゃぶ台の上に置きながら。それがなんなのかを気にしなかったということはないのだが、それ以上に春子さんの言ったことがもっとずっと気になったので、この時には何も触れなかった。

「話しを聞かせて貰えるのですか？」 私は、少しばかりうわずりかけた声で、勢い込んで尋ねる。話しの流れからすると、ほぼ確信してもよいのだろうが、ずっと求め続けた結果が目の前にあるとなると、どうにも落ち着かなくなるものである。私の質問は、まさにその表れに過ぎず、それ以上の意味などなかったのであるが。「古びた女郎一人の人生さネ。そう、大層な話しはできやしやせんサ」 言いながら春子さんは、半分ほどになった私の湯のみに濃い濃いとしたお茶を継ぎ足した。直接的な返答ではなかったけれど、間違いなくそれは承諾の言葉であり、私の望みが叶うのだということでもあった。 私は春子さんのように、しゃんと姿勢を正してみる。長時間維持し続けられる自信はまるでなく、春子さんから見たら所詮真似事とか付け焼刃とか、あるいは弥縫《びほう》とも見えるかも知れない。それでも私としては、この時そうせずにはいられなかったのである。 私は、改めて春子さんに向かって問いかける。「それでは春子さんのこと、お聞かせて下さい」 いたって曖昧な、あるいは大雑把とも取れる問いかけをしたのは、春子さんにできるだけ自由に話して欲しかったからである。ただそれが仇となって、春子さんの話しの前後がうまくつながらなかつたり、一つ話しを何度も繰り返したり、ある

いは明らかに矛盾した話があったりとか、非常に曖昧でふわふわと風に漂う蒲公英の綿毛のように何処に着地するのかさっぱり検討もつかないこともあった。 それでも、出来る限り春子さんの好きに話させ、私は軽く相槌をうつつに留めてその話しに耳を傾けたのである。 よって、この先の話しは、春子さんが語った話しそのものではなく、私の記憶の中に作られた春子さんの生涯であり、その中には歴史的な背景に即した形になるよう、私の記憶に補正が含まれているということも考慮しなくてはならないだろう。 ただそれでも、春子さんの語った話しに忠実になるように最大限の配慮をしているつもりである。「あたしはネ、百姓の生まれなんよ」 春子さんが、春子さんの物語を語り始めた。

買われていった時には、正直それほど嫌ではなかった。不安はあったが、家は貧しくその頃はまともに飯を食べることができず、毎日お腹をすかしていかないことはなかった。とにかく、腹一杯何かを食べた記憶がない。だから、一処に行けば腹一杯食べさせて貰えると言われると、むしろ喜んでついていった記憶がある。その頃の思い出といえば、薄暮の中で家族が息もできないような窮屈さの中に、ぎゅうぎゅうに押し込められている、そんな記憶。手も足も伸ばせず、赤子の鳴き声はやまず、そのたびに不機嫌そうな父の怒鳴り声がして、春子は出来る限り息を潜めて体をちぢめていた。殴られなければかなり幸運であり、殴られるだけですめば幸運であった。酒をあびるように飲んだ父親の機嫌次第では、せつかく作ったご飯を全部外に放り出すことがしばしばあった。そうなれば翌日までお腹をすかせたまま一睡もできずに、ひたすら小さく丸くなっていなくてはならなかった。お腹が痛くなるようなひもじさで眠れない夜というのは、なによりも辛いもので、たとえ殴られてもいいから一口何か食べたいとそれしか考えられなくなってしまう。だから無意識のうちに薄く固い布団の中に身を潜めて、まんまるに固めた両の手にしゃぶりついてくちゅくちゅやる。父親に見つかりとすぐに殴られるので、できるだけ音を立てないようにくちゅくちゅとしゃぶるのだけど、たまに見つかって殴られた。見つからなかったら、朝までずっとしゃぶり続けた両手は糊のようにフヤフヤになっており、それでもしゃぶり続けたものだから、そのうちあちこちの皮が剥がれて

血がにじみだしひどく痛んだ。こんなことをしても、痛いばかりでなんにもならないということは幼い春子でも理解していたのだけれど、あまりにひもじいものだから、どうにもやめることができなかつた。　　そういう暮らしをしていると、たんまりとご飯を食べられるからと誘われると、たらふく食べられるかも知れないという妄想で頭がいっぱいになってしまう。行く先で、どういう暮らしが待っていたとしても、その時の春子にはもうどうでも良いことだとしか考えられなかつた。　　女衞が春子を迎えにやってきた日は、普段見たことがないくらい父の機嫌がよくて、初めて見る愛想良さが印象に残っていた。対照的に母は悲しそうであったが、何処か後ろめたいような感じで始終そうそわとしていた。春子が顔を向けるとすぐに顔を逸らしていたような気もするが、それほどはっきりと春子の記憶に残っていたわけではない。良くも悪くも父に言われるままに従う母親は、春子にとっては空気のような存在だった。　　家から離れることの不安がなかつたという嘘になるだろう。けれど、それよりお茶碗一杯分のご飯のほう春子にとっては大切だったので、女衞の男に連れられて大門をくぐり抜けた時も悲しい気持ちになつたりはしなかつた。　　真夏の日差しはきつく、べつとりと粘りつくような蟬の鳴き声を聞きながら、門番が見張りに立っている大門を春子はくぐり抜けた。殆ど木戸の真下に落ちている影は、まるで焼けついた地面の上で焦げてしまった墨のように春子の目には映つた。　　間違いなくこの瞬間こそが、春子にとって運命の時であつたのだが、予感めいたものはまるで感じていなかつたし、無性に熱かつたという程度の記憶しか春子には残らなかつたのである。　　大門を抜けた向こ

う側に、特別な世界が広がっていたわけではなかった。沖之村と呼ばれていたこの部落が、一体どういう所なのかについていくらかでも知識があったのなら、少しは別の見方もできたかもしれない。でも、そういった知識なしに見ていれば、閑散とした通りに面して二階建ての同じような作りの家が立ち並んでいる通りにしか過ぎなかった。丁度昼間ということもあり、天頂付近にある太陽が羽虫のようなしつこさで、外にいる人間の全身をたたき続けている。ただでさえ、昼間は少ない人通りがこの日はさらに少なかった。それでも、まったく人影が無というわけではなく、何人かの男とすれ違った。大通りをしばらく歩き、路地を抜けて何度か曲がると少し開けた通りに出た。その通りをそのまま横切ってさらに進むと、今度は大きな川の辺りに出る。川の辺りには桜の木が植えてあり、茂った葉が黒々とした木陰を作ってくれている。女衞の男はその木陰には見向きもせず、川沿いに伸びる道を上流の方へと向かって歩き出した。大門から続く大通りとは違って、人影はまったく見当たらず二階建ての建物も並んで建っているところはめったにない。また建物の作り自体もひどく地味で目立たない感じのする建物が多かった。春子が連れていかれたのは、そういった並びにある一軒の家。そこは、黄蝶楼《きちょうろう》という名の貸座敷であった。楼主の名前は阿南健一《あなみけんいち》。女衞の男と一緒に初めて阿南を見たとき、餅を大量に詰め込んだような巨躯を目の当たりにした春子は、その重量感に圧倒されてしまう。女衞の男と阿南の話が終わると、女衞の男は金銭と引換に書類を渡し、この時初めて

春子はその書類が前借金として親が受け取った金の借用書である
ということを知られた。長旅の途中、薄々と気づいてはいたが
、これではっきりと自分が親に売れたのだということを知った。

女衞の男は春子を残し、そそくさと帰っていった。すると、
六畳ほどの居間に阿南と春子の二人だけが残される。男が一人い
なくなったというのに、居間は少しも広くなったようには感じら
れなかった。日に焼けたゴザの上にあぐらをかいて座った阿
南は、首にかけて手ぬぐいでひっきりなしに汗をぬぐっている。
目の前の巨漢を見ていると、むせ返るような暑さがすべてこの男
のせいのような気がしてくる。阿南が近くにくるように命じ
ると、春子は黙ってそれに従った。近くに來た春子のおとがいに
ついつと指を掛け、馬の毛並みでも見るような感じで顔をいろん
な角度から確認する。「うちは歩合制だ、おまさんだったら五年
とかからず全額返せるさ。まあ、せいぜい気張んな」 気張ると
いうのはこちらの方言で、頑張れというような意味であるが、春
子には意味がわからずただ頷いた。こうして、春子は黄蝶楼で
働くことになったのだが、娼妓として働き始めるのはまだ四年も
先の話しであった。というのも、最寄の警察署に娼妓登録の届出
をするために戸籍を確認したさい、春子の年齢が十四歳である
ということが発覚したからである。娼妓取締規則によって、十八歳
に満たない女は娼妓としての登録はできない。女衞の男がいい加
減であったということもあるが、四歳もサバを読んで娘を売り払
った両親もしたたかであったということなのだろう。即戦力を
失うことになった阿南は怒りを隠しきれないでいたが、父と違っ
て春子に手をあげるようなことは一切しなかった。この年は1

929年であり、過ぎる10月24日は暗黒の木曜日として知られている。世界恐慌が始まり、全世界が二度目の大戦へ向かって舵を切るきっかけとなった運命の年であった。そんな年、春子は娼妓としてではなく、黄蝶楼の手伝いとして働き始める。

沖之村は市の南東の外れにあった遊郭地帯で、南には県内で一番広い川幅を持つ川が流れており、その北には支流になる細い川が流れている。支流の川には思案橋という橋がかかっている。この橋を渡って沖之村に入ろうか入るまいかと迷ったことからつけられたとされている。橋の入り口には木戸があって、沖之村を中と外とに分けている。そこから壁が東に向かって続いている。途中、春子が女衞の男に連れられて入ってきた北の大門があった。此処から外に出るとそのまま市の中心部となる繁華街へと続いている。この場所は本当の意味での入り口であり、遊郭の中と外を分けている大門でもあった。それがそのままこの地域の地名として残り続け、遊郭がなくなった後でもこの地区は大門口と呼ばれている。そこから少し東に伸びた壁は、また真っ直ぐ南へと戻り、川の辺りで終わる。この木の壁と川の水で隔てられた場所が、春子がこの先ずっと暮らしてゆくことになる世界であった。日本では明治維新後の一八七二年、明治五年に芸娼妓解放令が施行されたが、明治時代を通してその実態はほとんど変わることはなかった。明治の御代が終わり、絢爛とした大正の御代と共に大正デモクラシーと呼ばれる一連のリベラル運動が広がりを見せ、遊郭にあっても娼妓が年季明けを巡り楼主に裁判を起こしたり、待遇改善を求めてストライキを起こしたりという事件が

世間を賑わせたこともあったが、大きな流れとなることはなかった。それというのも、そういった主張が可能なのは、飛抜けて稼ぎのよいほんの一握りの娼妓のみであり、自分の食い扶持とトントンの稼ぎしかないような娼妓になると、自分の首を絞めてしまいかねないからである。 それにもう一つは、この頃は世界中が記録的な好景気を迎えようとしている最中であり、日本もそれを謳歌しようとしていたということも理由としてあった。 明治初期にはまだ遊郭の伝統が根強く残り、前借金によって縛られた女たちは、大門の外側に出ることは許されず、楼主によって過酷な性的な労働を強いられていた者も多かった。逃亡する女もいて、そういった女は警察の捜索によって捕まえられて無理やり連れ戻された。見せしめとして、ひどい扱いを受ける女性も多かったが、そのことが明治後期から大正にかけての時代の変化の中で問題視されるようになり、警察や役所は逆に遊郭に対する締め付けを強化させるようになっていく。逃亡した女性を無理やり連れ戻したことがわかったら、借金が残っていようが彼女の娼妓登録は抹消される。それだけですめばまだましで、地方によっては貸座敷の認可を取り消されて廃業に追い込まれる所もあったのである。 黄蝶楼もそういった時代の流れの中で、どうにか生き延びようと模索していたのだが、いかなる時代になろうと貸座敷である以上は売り物となる娼妓が必要である。 春子が黄蝶楼にやって来たとき、四人の娼妓が勤めてていた。そのうちの一人が年季明となり店を去るため、入れ替わりとなる予定だったのである。黄蝶楼は貸座敷屋としては規模が小さく、外れの方でかつかつと商ってきていて、阿南は楼主としては強欲さにはほとんど

疎かったので、必要以上に娼妓に無理をさせるようなことはしなかった。ここらを仕切るやくざ者や地元警察への付け届け、地元政治家への纏まった献金をするための遊郭組合への積立金。それになにより税金を払わなくては黄蝶楼は店を閉めなくてはいけない。それらを控除したものから、店の経費と娼妓や使用人達への給金が支払われる。残りが楼主の金であるのだが、その中から次の娼妓を雇い入れるための前借金が積み立てられている。一人雇い入れるために六百円の積立金が必要であり、これは現在の金額に換算すると一千万円近い金額に相当する。黄蝶楼規模の貸座敷では、右から左に用意することのできる金額ではなかった。

一般的に強欲だと思われる貸座敷ではあるが、財閥のようにいくらでも国から仕事が降りてくるわけでもなく、社会の底辺とされている貸座敷に融資してくれるような銀行など存在しない。

しかも前借金として大金を投じ無くてはならない割に、娼妓によって稼ぎ高は千差万別であり、もし結核にでもなられたら投資した全額を失うだけでなく、店そのものの客足が途絶えてしまう。

実態は非常にリスクの高い商売であったのである。 春子が働き

に出れないとなっても、すぐに次の娼妓を雇入れるということは黄蝶楼には到底無理だった。 年季が開けて故郷に帰ろうとして

いた.....穂垂《ほたる》姉さんと春子が呼んだ娼妓に阿南は何度も頭を下げて残ってもらい、どうにか黄蝶楼は生き延びることができた。 こういう事例はめったにあることではなく、阿南だった

たからというべきだろう。黄蝶楼の人間は全部で七人、春子を合わせて八人だった。構成は楼主である阿南、穂垂を含めて四人の

娼妓。下男が二人、そして春子である。　まだ娼妓になることが出来ない春子は、自分の部屋をもらえない。そこで、下男二人と一緒に住み込むことになりそうだったが、水揚げ前におかしなことになってはと、穂垂が春子と一緒に暮らすことになった。春子が初めて見た穂垂の部屋は、香炉の香りと饅えた女の香りとおしろいの香りが入り交じり、喉の奥の方で何かがつっかえそうな独特の匂いがした。気が遠くなりそうな熱気が、部屋の中にどっしりと居座っていて、障子を開放していてもまったく立ち去る気配はなかった。　鬱陶しくなるくらい、流れ続ける汗は拭いても拭いても止まる気配はまったくなくて、部屋の主である穂垂も手ぬぐいを手にしたまま頻繁に額の汗をぬぐいつづけていた。

ずっとそんな状態が続くのだから、着ているものはべっとりと湿気って、手ぬぐいも絞れるくらいに汗を吸っている。そうなれば当たり前のように、部屋の中には汗の匂が充満することになる。汗臭さをどうにかしようと香を炊いているのだが、気休め程度の効果しかないようであった。　ただ、春子が部屋に入って気になったものはもっと別のことであった。窓辺に右腕をかけて、足を前に投げ出して座っている一人の女。襦袢一枚の格好で、胸元まで大きく前襟を開け、そこに左手に持った団扇で風を送り込んでいる。頭の上に纏め上げた髪が、襟足でしどけなくほつれ汗で素肌にしっとり絡み付いていた。男が見ればなんとも艶めかしい女と目に映るのだが、未通女《おぼこ》の春子から見ればだらしの無い女でしかない。　それが、穂垂であった。　もちろん、春子にとってはそれとても大切なことではなく、穂垂がどういうふうに見るのか……有り体に言えば、自分のことを

叩いたり殴ったりとかするのではないのかということ。幼い頃からずっと、草の中に身を凝らせて潜んでいる虫のように生きてきた。両親……特に父親の視線から逃れ、できるかぎり目の届かない、届いたとしても極力気を引かないように暮らすのが、春子にとっての日常であった。気に止められなければ、機嫌を損なうこともないという子供なりの知恵であった。よくよく思い起こせば、それでは済まない不条理な怒りを買うこともよくあることであったが、そうであっても春子に一体何ができたというのだろうか。だから春子にとって、穂垂が自分のことをどういう表情で見ると探ることは、小鼠と同じく生き延びるための本能だったのである。二階に春子のことを案内してきた阿南が、廊下の襖を開けて春子と一緒に中に入っても穂垂はまったく何事もないかのように、外を眺めたままだった。窓辺に侍っている穂垂に向かって、少し眩しそうに目を細めながら阿南が声をかける。

「何が見えるね」すると、そこで初めて穂垂は反応をみせる。「帆掛けが一艘……風がてんでないんで、この熱い最中に櫓を漕いでますネ」明らかにこちらの方言とは違う、独特の口調で言った。視線は外を向いたままで、阿南のことも春子の事もまだ見えていない。無礼とも言えるような態度で、もし仮に今ここにいるのが春子の父親であったら絶対に無事ではすまさないだろう。こういうことを見逃すような人ではなかった。だが、阿南はまるで気に掛ける様子もなく、部屋の中央付近で適当にあぐらをかいて座った。そして、春子を手招きして呼び寄せると、自分の隣に座わらせる。もちろん、春子はきちんと正座して座った。ま

るで、それを見計らったかのように、穂垂はいきなり二人の方を見る。すると、春子は何も悪いことなどしていないはずなのに、びくんと身をすくませてしまう。「こりやまた、ずいぶんと貧相な娘っ子だネ。やせちまって、骨と皮ばかりじゃないか。いったい何処の女衞が、こんなの拾ってきたんだか……」 怒ってるというよりも、呆れているように春子には見えた。ただし、春子は身をすくめるようにしてじっと息をひそめていたのだが。 そんな春子の様子を見て、穂垂はますます呆れた様子で阿南に話しかける。「この娘、何に怯えてるんです？ 水揚げ前の娘っ子の怯え方にしちゃ、おかしくないですかネ」 穂垂も年季明けまで勤め上げてきた遊女である。自分も借金の形に取られて入ってきたくちであるので、初めての時に抱える不安は理解できたし、長年勤めていると新しく入ってきた女の指導も任されるようになる。もともと、娼妓登録もできないような小娘というのは初めてだが、まるで周り中が敵だらけのように身をすくめてピリピリしている娘というのはそうそういるものではない。これが私娼ならば、店側もほっぴり出してそれでおしまいになるのだが、前借金を渡してしまっている公娼となるとそうもいかない。折檻して言う事を聞かせるような事をしたところで、傷ものにすれば客にそっぽを向かれるだけだ。まして警察に駆け込まれでもしたら、楼自体の許可が取り消されてしまう。そこまでいかないとしても、あからさまな手抜きの仕事をするだけでも店の評判に傷がつく。実際問題、そうやって経営難に陥って自殺に追い込まれる楼主も少なくはない。また、遊郭の楼主が自殺したからといって、同情してくれるような人間はいやしない。遊郭の存在自体が社会の恥部

だというのが、世間一般の評価である。それは、遊郭で働いている人間たちも承知していることであつた。どういう事情があつたにせよ、前借金を渡してしまっている以上、ほっぱり出すことは出来ないのである。　いずれにしても、穂垂は間違いなく厄介ごとを引き受けることになった。唯一の救いというのは、春子がすぐに娼妓として働き始めるのではないということ。このままでは、とても売り物になりそうにはない。「事情はこの子から直接聞いてくれ。それと、源氏名も考えてくれ」　それだけ言い残すと、阿南はそそくさと部屋をでていった。　穂垂はその様子を特に気にすることもなく、春子のことを少し斜に見ながら、じっと観察している。そんな穂垂のことを春子は亀の子のように身をすくめ、そろりと様子を伺っていた。　穂垂はそんな春子に向かって手招きすると、春子はしばらく躊躇している様子であつたが、手招きをずっと続けているとやがてゆっくりと動き始める。やがて手が届く距離まで近づくと、穂垂はいきなり春子の腕を掴んだ。春子はびくんと身をすくませたが、一切抵抗はしなかった。そのまま穂垂はぐいっと春子を自分の方に引き寄せると、春子の着ていた洋服をあっという間に脱がしてしまい、裸に剥いてしまう。すると、年頃の少女としてはあまりに貧相で肉付きの薄い、有り体にいって骨に直接皮が張り付いているような体が顕になった。穂垂は素っ裸になった春子の体をまるで轆轤《ろくろ》の上に乗せてるかのように、ぐるぐると回しながらなめるように見ていった。「もういいよ、服を着ナ」　頭の前からつま先まで、ひとしきり見終わると春子に命じるように言う。春子は返事をおかえ

すことなく黙ったまま、従順にその言葉に従い服を着る。ただ、ボタンかけがうまく行かないようで、しきりと手間取っていたのだが、穂垂は一切何も言わずに黙ってそれを見ていた。服を着終わった春子はその場に立ったままいるので、左手に持った団扇で自分が座っている脇の畳をトントンと叩きながら穂垂はまた声をかけた。「つたってないで、お座りナ」すると春子はまた何も言わずに命じられた通りに従う。穂垂はその様子を見ながら、何か確信をもった様子であった。自分のすぐ脇に、ちょっと座った春子に向かって穂垂は何かを見透かしたように言う。「あんた、親が怖いかい？」すると、これまでずっと無表情のまま黙っていた春子に変化が現れる。歯を食いしばり、何かを必死で耐えているようにうつむくと、下を向いたまま首を振る。普通にとれば、違うと言いたいのだろう考えるのだが、穂垂は違った。「安心しな。ここにや、あんたを折檻するようなやつはいやしないヨ。ご飯だって、たらふく食べられるサ」ご飯の方は、年が進むに連れてどんどん怪しくなっていくのだが、この当時はまだ十分にあった。それを聞いた春子は、初めて口を開く。「……ほんと？」あまりに長く話さないでいたためか、虫の羽音ほどの大きさの声であった。その声は穂垂の耳に届いていなくてもなにに不思議もなかったのだが。「ほんとうサ。あんたの親は、ここにや絶対これないからね。なにせここは、籠の中だからネ」最後に付け加えた言葉の意味が、一体どういう意味なのかこの時の春子には想像する術もなかったのだが、前半部分に関してははっきりと理解することができた。この当時の春子にとって、一番恐ろしいのはまさにそれだったのだから。父親が来て

、あるいは母親が来て、あの薄暗い家に連れ戻されること。それこそが、一番の気がかりであり、それより他のことなどは有り体に言って大した問題ではなかった。家にいる時には気絶するまで殴られたり、腹痛を感じるほどお腹を空かせていたり、いつも怯えて暮らさなくてはならない、そういった日常を受け入れていた。目先の苦しみから逃れるためには、そうする以外なかったからなのだが、こうしてあの日常から離れてみるとどれほどの苦痛の中で暮らしていたのか初めて理解できる。ただあの家に戻ることを考えるだけで、体が小さく震えてきてしまう。それは、健全さを取り戻そうとする生命が発する、根源的な恐怖であった。本当にあのまま家で暮らしていたなら、確実に飢え死にするか殴り殺されていたことだろう。「絶対に、絶対？」　まだ、か細く震える声であったが、今度ははっきりと聞こえるように春子が言った。穂垂のことを覗き込む目には、溺れた人間が浮き輪にしがみつくような必死さがある。「そう、絶対。ここにいれば、よう連れてかれんサ」　特別てらうこともなく、いたって普通に穂垂は答える。この世界に身を墮とす女は、大抵は色々な事情はあったにしても、結局は似たような理由で落ちてくるものだ。穂垂もその例に漏れず、多額の前借金に縛られてこの世界に身を置いている。ただその前借金を元手に家族全員が満州へと渡り、今では消息を掴むための手がかりすらなくなっている。年季明けしたというのに、阿南の願いを聞き入れて此処に残ったという理由の一つに帰るべき場所が無いのだということもあったのである。　春子も春子で理由は借金であったにしても、事情は特殊な部類に

入る。娼妓という商売、商品は自分の肉体である。普通の女性には到底耐えられないような嫌な思いもたくさんするし、楼によっては過酷な労働をしいられる所もある。ここが煉獄なのだと表現する女も少なくない。だが、それよりも遥かにひどい地獄に住んでいたとしたならば、少女にとってはこの場所が避難所となるのである。しばらくの間、春子は穂垂の顔をじっと覗き込んでいた。何かを探しているように見える。穂垂が、団扇を使いながら何をするでもなく、ゆったりとしていると、次第に春雪のように春子の体から緊張が溶けていくのが見て取れた。おそらく、今までずっと身を縮めて怯えていたのだろう。それを溶かしたのは、穂垂の言葉とゆったりとした態度であった。そして、春子を見ている穂垂のひどく落ち着いた視線が、春子の中に残っていた野良猫のような警戒心を解いていったのだろう。その時、不意に廊下の襖の向こう側から声がする。まだ、聞いたことのない男の声であった。「穂垂さん、お願いします」穂垂はすぐに立ち上がると春子には目もくれず、手早く乱れた襦袢を整え、衣桁《いこう》にかけておいた浴衣を手早く身につける。さらに汗をぬぐった後、鏡台に向かって着付けと化粧を整えて、するりと襖を開けた。声がかかってからこれまでに、ものの五分と経っていないが、元からきちんと支度を整えていたようにしか見えない見事さであった。廊下には、正座をして軽く頭を下げた姿勢で三十半ばの男が一人控えていた。二人いる下男のうちの一人である。穂垂が外に出ると今度は下男が春子に声をかけて外に呼び出す。春子が外に出たところで、襖がトンと音をたてて閉まった。結局この日は春子は部屋に戻れず、会話はそれっきり

になってしまった。

あれから四年の月日が流れた。入楼した年に始まった世界恐慌を発端として、世の中は絶え間なく底なしの淵へと落ちてゆくかのような流れをたどっている。昭和六年には満州事変が起こり、日本は大陸の奥底と引きずり込まれていく。翌年の昭和七年には上海事変、満州国の設立、そして五・一五事件と立て続けに日本の運命を変えていく出来事が起こった。そして、ついにその翌年の昭和八年に日本は国際連盟を離脱し、西欧列強との対立の図式が鮮明になってくる。そしてこの年日本は昭和九年ワシントン海軍軍縮条約を破棄し、軍備拡張への道を邁進することになる。

そういった歴史のうねりは、確実に民間の暮らしにも影響を及ぼし、当然ながら黄蝶楼も無縁ではいられなかった。もっとも春子にとっては、世界情勢がどうか、戦争の話題がどうかそういったものは特に関心を引くようなものではなかった。暮らしていくために、特に必要な知識ではなかったから。これまでの四年間、春子はずっと黄蝶楼の中で生きてきた。正確には大門の内側であり、そこから外に行くことは禁じられていたが、そもそも春子にとって外の世界に良い記憶はなかった。それに、黄蝶楼で働き始めてから、春子には覚えなくてはならないこと、やらなくてはいけないことがあまりにたくさんあったので、他のことに気を取られている余裕はなかったのである。黄蝶楼にやって来る前、ずっと働いていた。他の子供達が尋常小学校に通っていた時も畑仕事や家の手伝いや幼い弟妹の世話をしたり、とにかく働き続けていた。子供の力、それも女の子では限界があり、そのこ

とで絶え間なく父親に叱りつけられていた。とてもではないが、学校に行く余裕はなかったし、そもそも父親にいたれば学校に行ったところで一銭にもならないというのが口癖であった。学校に行くこともなく、家でもまともに教育を受けてはいない。その結果、春子は足し算や引き算も指を使わないとうまくいかなかったし、九九になるともうお手上げだった。当然、読み書きはまったく出来なかった。しかし、それでは客相手の商売はできないからと、客待ちの時間を使って穂垂が一から教えてくれた。どうしても、手があかない時には阿南が冬でも汗をかくような暑苦しい巨体を、春子に合わせて小さく屈めながら教えてくれた。やさしいばかりではなく、あまりに間違と手の甲を叩きの柄で叩いたり、おでこを指で弾いたりしたけど、父親のように気絶するまで殴らるようなことはなかったし、どんなに叱られてもご飯抜きになるようなことは絶対になかった。もちろん二人とも両親などではなく、愛情いっぱい育てられたということではない。けれど、まったく水を与えられることなく、すっかりしおれて後少しで枯れてしまいそうになっていた蕾にとっては、ただ普通に水を与えられることだけでも、劇的な効果をもたらした。痩せっぽちで貧相な、なんとも陰鬱な目をしていた少女は、今や力強く美しい花を咲かせそうとしていたのである。ただそれは、遊郭の中の世界での花である。男を相手に売るための花であった。世間一般的な教育だけでなく、穂垂についてその手伝いをしている間に、男を相手に何をするのかという知識も自然身につけていた。それは、良い悪いということではなく、必然から覚えていくべきことであった。自分がなんのために黄蝶楼にやってきたの

かということを知るのは、漢字を覚えるよりずっと早かったし、自分が何をしなくてはいけないのかということも必然的に理解できることであったのだ。それに、黄蝶楼での暮らしは春子にとって夢のような時間であり、おそらくこの四年間が人生の中で最も幸福な期間であったろうということである。ただそれはこの時が、ずっとずっと気が遠くなるほど遠い過去になってから振り返ってみると、そうであったのかと気づく幸せであった。この四年間の間に、春子の人生が大きく変わったのと同様に、穂垂の人生も大きく変わっていた。年季を明けて、娼妓から足を濯うことができるようになってからも、楼主である阿南のたっでの願いで黄蝶楼に残っていた穂垂であったが。二年目に阿南からの求婚を受け入れて、二人は夫婦《めおと》となっていたのである。阿南は祝言をしようと言っていたようだが、穂垂がそれを断っていた。娼妓である自分が、人さま並に祝ってもらうのはおこがましいということであった。だからそのことを吹聴するようなことはしなかったし、二人が夫婦になったという事実を、しばらくの間は店の者も知らなかったほどである。ただ春子にだけは、直接穂垂の口から教えてもらっていた。それを聞いた時、春子は声も出さずにしばらくの間、涙を流していた。おそらくこれが、生まれて初めて誰かのために流した涙であったろう。その時は、自分の感情が良く理解できないまま、いっぱいになっている風呂桶に飛び込んだときのように感情が溢れ出すのに身をまかせるしかなかったのである。めまぐるしく変わっていく日本の情勢より、春子にとってはそういったことの方がよっぽど大切であった。

そして、春子は今日という日を迎える。これからは、春子の人生の中で日常となっていく一日であるが、間違いなく特別な日であった。たとえ、日々の生活の中ですぐに忘れてしまうことになったとしても、春子のその後の生き方を決定付ける一日になることは間違いない。 三日前、阿南と一緒に最寄の警察署まで行って、娼妓登録をすませてきていた。昨日ははじめて、穂垂から男を喜ばせるための指導を受けた。そして今日が、水揚げの日であった。この日のために、特別な客が選ばれた。黄蝶楼の古馴染みの客の中から、阿南の肝入りであり穂垂のお墨付きの客である。 水揚げともなれば、普通は金持ちの男相手に高値で売るものなのだが、黄蝶楼では娼妓のことを第一に考えていた。 それは体への負担だけでなく、心の問題も含めて。 選ばれたのは、野上武雄《のがみたけお》大尉という陸軍飛行戦隊の飛行小隊長で、頻度は多くはないもののもう長いこと黄蝶楼を鼻屑にしてくれる客であった。実の所、穂垂の水揚げをしたのも野上大尉であったのだ。 もちろん、そういった細かい予備知識は春子には伝えてはいなかった。阿南の配慮は見えない形で行われていたのだが、結局のところ春子に求められていたのは、客を満足させることであったのだから。 春子がその時を待っていたのは、初めて黄蝶楼にやってきたときに穂垂と出会った座敷であった。白粉と香の香が煮詰まったような部屋で、一人その時を待っている。開け離れた障子の外に流れている川を見ていたが、胸の奥が苦しくなるほど、鼓動が激しくなっていた。 これから一体自分はどうなるのか、これまでずっと黄蝶楼の手伝いをしていたので当然知識はあるのだが、自分自身の感覚としてはまるで想像でき

ない。好きとか嫌いとか、一切そういった感情のない相手に自分の体を提供するのである。穂垂のことをずっと見ていたが、結局それは鳥かごの中の鳥を観察するようなもので、鳥の気持ちが理解できていたわけではなかった。そして、春子は本当の意味で、籠の中の鳥になろうとしていたのである。昨日、穂垂が下男の厚夫を客に見立てて、男性を喜ばせるための技を教えてくれた。その後、郭の中で生きる女が絶対に守らなくてはいけない決まりごとのようなものを話してくれた。その時には、こうして部屋で待っているときにも、それが一体どういうことなのかまったく理解できていなかった。「客を相手に本気でヨがっちゃだめサ。あえぐのは、あくまで仕事のうちさネ。やさしい言葉をかけられたって、外の男に気をゆるしちやなんないヨ。こっちも向こうも、ろくなことになんないからネ。どうしてもっていうなら、明けて外に出てから、好きにすることサ」いつものように、独特の言い方で春子にそう教えてくれた。「とくに気をやるのは、恥だからネ。体は売っても、心まで売り物にしちやいけないヨ」

そんなふうに教えてくれたのだが、その時の春子には理解できなかったのである。男が客であるということは、春子にとっては至極あたり前のことで、男を好きになるということはまるで想像もできないことであつたのだから。点描画のようにぱらぱらと取り留め無い記憶を繋ぎ合わせて、ぼんやりとした絵を描くように、空想の筆をはしらせながら待っていると、襖の外から声がかかる。「小春、野上様がお越しになられた、支度をしなさい」

それはいつも呼び出しにくる下男ではなく、阿南であつた。楼

主自らがわざわざくることはかなり特別なことで、少なくとも春子が知る中では初めてのことであった。小春というのは、これから春子が名乗ることになる源氏名である。自分の名前から一文字だけとって、小春と穂垂から付けてもらった。春子が鏡台の前に座ると、そこには痩せすぎの貧相な少女ではなく、固い表情をした年頃の女が座っていた。鏡台の上に乗っていた口紅を筆に移し、その筆で自分の唇に紅を乗せようとするがうまくいかず、その時初めて自分の手が震えていることに気づいた。ずっと黄蝶楼で働いてきて、穂垂だけでなく他の遊女達の手伝いもしていた。朝起きるとかならず炊事の手伝いから始まるように、遊女達が使う座敷の掃除や敷布の洗濯なども日常の一部であった。もちろん、遊女達が客相手にどういう行為をしているのかも知っていたし、体を売るという行為を特別なことだと感じたことは今までなかったのである。でも実際に自分の体を見知らぬ男に預けるとなると、自分で想像していたより遥かに春子の肉体は繊細にできていたようである。しかし、どんなに震えていようとも、逃げ出すという考えは全く脳裏をかすめなかった。黄蝶楼より他に良く場所がない、ということもある。でもそれ以上に、ここが好きだった。中と外。籠の中に閉じ込められた女たち。好きだと言って廊から送り出す男たちの背中に向かって舌を出す、そんな世界だ。社会の底に住んでいる女たちは、ずっと汚泥の中でもがいている。大部分の女たちはこんな場所から少しでも早く逃げ出そうと、いつだってもがいていた。晴れて前借金の精算が終わり自由の身になることだけを祈っている。それが普通であり、年季が明けても黄蝶楼に残り、楼主と結婚してしまった穂垂。こんな底

辺の場所で、生まれて初めて普通に生活することがどういうことなのかを知ることが出来た春子。この二人は他とは事情が特殊なのであって、この場から逃げ出したいくたとしてもそれが普通の反応であった。大門には見張りもいるし、なにより借金を背負っている。逃げれば家族に取立てがいくことは確実であった。逃げるということはすなわち、自分の家族を見捨てるということになる。だから、どうしても逃げ出せない。この時確かに春子は震えていたし、不安も時がたつに連れて大きくなっていった。それでもなぜか、逃げ出したいという考えだけは、ついで頭をよぎることはなかった。うまく唇に紅を置けない右手を左手で無理やり押さえつけ、自分の姿を鏡に写し慎重に紅を差す。はみ出している場所がないことを確認すると、唇で半紙を軽くはみ余分な紅をこれに移した。半紙を置いて立ち上がると、鏡台の前に立って自分の全身を映し、もう一度着ている浴衣の合わせや裾に乱れがないかを確認する。しつこく震え続ける手で、めいっぱい強く握りこぶしを作ると一つ大きく息を吸った。そして、襖を開ける。「いくか？」阿南は支度にかかった時間のことには触れずに、それだけを聞いてきた。「はい」決意を込めて意外と強く頷いた春子を見た阿南は、表情を変えることなく「いい返事だ」とだけ言った。その後二人は何も話さず、野上大尉の待つ座敷へと向かった。阿南は座敷の前で膝を付き、中に向かって声を掛ける。春子はその脇に控えた。「お待たせいたしました。小春でございます」言い終わる拍子で阿南はそろりと襖を引いた。開らかれた座敷の中には、座敷椅子にの背もたれにゆった

りと持たれながら、ぐい呑を右手に持った格好で寛いでいる様子の男がいた。ひどく端正な顔立ちをしていて、焼酎をそれなりに飲んでいるはずなのに、まったく乱れた所がなく、表情は日本刀のような鋭利な刃物を思わせる男であった。開かれた襖の向こうに控えてる春子を見つけると、男は手にした黒い猪口《ちよこ》の中身を一気に飲み干し、目の前の座卓に拍子木を鳴らしたときのような心地いい音を立てて置いた。阿南の視線に後押しされるように、春子は座敷に入った。背後から不意に聞こえたタンという襖を閉める音に、春子は反射的に体を震わせる。阿南とはまったく別の意味で立派な体をした男が、座卓の真ん中に座りじっと春子の様子を見ている。入ったはいいが一体どうしていいか分からなくなった春子が、その場で立ち尽くしているといきなり話しかけてきた。「自分は野上武雄。君の名前を教えてくださいませんか？」 軍人独特の歯切れのよい話し方で、春子の名前を聞いてきた。「春……小春です」 野太く、とても迫力のある声に、春子は思わず本名を言いそうになりあわてて言い直す。「では、小春君。まずは、酌などしてはくれませんか？」 一旦、机の上に置いた猪口を手にとると、野上は驚くくらいに人懐っこい笑みを浮かべて春子向かってぐいっと差し出す。仕事を言いつけられた春子は、少しほっとしながら野上の正面に座る。座卓の上には盃を二つ合わせたような形をした千代香《ちよか》が置いてあった。春子は上に弧を描いて造りつけてある籐製の握り手を、右手の人差し指と中指で引っ掛けるように持ち上げて千代香を傾ける。焼酎が注ぎ口からちよろちよろと流れ出し、八分目ほどのところで注ぐのをやめる。すると、野上は手にした猪口を僅かも動かさ

ず注文をつける。「山盛りたのむ」 春子は意味がわからず、首をかしげたが、とりあえずもっと注げばいいのだと思い、さらに大きく千代香を傾けた。もう殆ど中身が空になっていた千代香は、かなりの角度で傾いていたので、春子は左手で蓋が落ちてしまわないように押さえながら焼酎を注ぐ。さらに水面が猪口の縁に来た辺りで注ぐのをやめた。「まだまだ。山盛りにしてくれ」

まったく微動だにさせず、野上は猪口を持ったまま言った。猪口の縁すれすれに達している焼酎を見て、春子はさすがに注ぐのをためらい恐る恐るではあるが、そのことを指摘する。「……こぼれますヨ？」 まるで穂垂のような言い方で春子が言う。

「まだいける。もうあと何滴か入れると、焼酎がすこし盛り上がる感じになる」 野上の言っている山盛りというのは、どうも表面張力で水面が盛り上がっている状態を指して言っているらしい。もちろん、春子にはそんなことなど理解できないので、もうなるようになれという気持ちで言われるまま千代香を傾けた。もしかすると、運がよかったということかも知れないが、千代香の中身は空になっていた。搾り出すように傾け続けてっていると、千代香の底の方にあつた微かな残りが、三滴だけ猪口の中の焼酎の上に落下して小さなさざ波が立つ。焼酎は、際どいところであふれることなく猪口の内に踏みとどまった。「おおっ。これよこれ……」 なんととも言えない笑を浮かべながら、そっと囁くように野上が言う。 大道芸じみた器用さで、猪口の位置をそこからまったく動かすことなく唇を猪口に寄せていく。最初はズズッと音をたててすすり、そのまま残りをいっぺんに口の中に流し

込む。「うまい。やはり、手酌とはちがうな」　嬉しそうだか、
、いたって平静な声で言った。野田は、春子の父親とは違って、
見た目から酔いが伺えるような男ではないらしい。すぐに猪口を
座卓に置くと、すくっと立ち上がる。それを見て、思わず身構え
てしまった春子には目もくれず、そのまま横を通り過ぎ、襖を開
けて廊下に顔を出す。「焼酎、もう一つ頼む」　大声を張り上
げているというでもないのに、野上の張りのある声はかなりの大
きさで聞建物の中に響いた。少し間を置いて階段下から応えがあ
ったのだが、野上はそれを待つことなく後ろ手に襖を閉めていた
。すぐに座卓へと戻って来たが、元の場所には座らずに春子のす
ぐとなりにとどかっと座った。「もてなす女が、客の向かいに座っ
てどうする？　酌というのは、男の隣に座ってするものだ」　け
して叱りつけるような口調ではなく、淡々と諭すような口調で野
上は話す。春子は隣に座っている大きな体の野上を、覗き込むよ
うに下から見上げた。「はい、ごめんなさい」　春子は素直に
謝罪の言葉を口にする。今まで何度も口にしてきた言葉であっ
たが、何かが今までとは違う感じだった。実家にいた時、それは
春子にとって唯一の身を守る手段であった。黄蝶楼にやって来て
からは、此処で暮らすための必死さの現れだった。だけど今口に
したその言葉は、それらとはどうも違う。気がついたら、口にし
ていた。一体何が違っているのかということは、はっきりと表現
することは出来ない。ただ春子は、そう感じたのである。　そん
な春子の右の肩に、いきなり野上のゴツゴツとした太い手がか
けられて、圧倒的な力強さでぐいっと引き寄せられる。反射的に春
子が身を固くすると。「どうだ、怖いか？」　明らかに驚いた

ような顔をした春子に、人懐っこい笑みを浮かべた野上が聞いてくる。春子はこれも反射的に、まるで幼児がそうするみたいに首を横に何度も振っていた。考えてそうしたわけではなく、気がついたらそうしていた。「わからないか？」　まるで、奥底まで見通すような目で、春子のことを覗き込みながら野上が言った。春子は、やはりどうしていいのか分からず、でも野上が言ったその通りだったから首を縦に振る。今度は小さく一度だけ。「そうか」　それだけ言うと、野上はさらに強い力で春子の体を抱き寄せる。ゴツゴツとして太くて無骨な腕は、驚くほど優しかった。少し苦しく、それでも我慢できない程ではないくらいの力で抱きしめられていると、春子は自分の体から自然に力が抜けていくのがわかった。固くなっていた体を、大きく力強い男の体に預けていると、今までに感じたことのない不思議な安らぎを覚えていた。まったく未知の感覚であったが、けしてそれは嫌なものではなかった。　立て続けに感じる初めてに、春子は流されてしまい、半ば自分の状況がわからなくなりかけていたが。「焼酎お持ちしました」　ふいに声が聞こえて、春子ははっとする。そして、反射的に体を離そうとしていたが、抱きしめていた力強い腕は微動だにしなかった。「すまん。持ってきてくれ」　春子の頭の上で野太い声がする。さっきは、感じなかったが、無骨な腕の中で聞くその声はひどく心地いい。「では、失礼します」　後ろの方から声が聞こえて、襖を開く音が聞こえる。入ってきたのは下男だった。入って来ても、野上とも春子とも一切目を合わせず、余計なことも言わずに焼酎の入った千代香と新しい猪口

を盆から座卓の上に移し、前の千代香と猪口を盆に乗せてさっと引き下がる。後は、襖を閉める音だけがトンと聞こえた。それを合図に、というわけではないのだろうが。春子を抱いた右腕はそのままに、野上は左手で猪口を取り上げると、春子の目の前に猪口を差し出す。春子はしばしの間、それをぼっと見ていたが不意にはっと気がつき、あわてて行動を起こそうとする。酌をしなければいけない。ようやく、そう思いついたのだ。ところが、野上の力強い腕に阻まれて動くことがままならなかった。訴えかけるように、春子が腕の中から野上を見上げると。「酌はいいから、これを持て」　　どうやら、野上が望んでいたのは酌ではなかったようである。言われるままに、春子は野上から猪口を受け取った。すると野上は、すぐに千代香を持ち上げて、春子が持っている猪口に焼酎を注いだ。ギリギリまでついで、その上に二、三滴垂らす。焼酎が猪口の縁に引っかかるように踏みとどまり、水面がわずかに盛り上がった。どうやら山盛りにしてくれたらしい。春子は困ったような顔を野上に向ける。動けなくなってしまったからだ。ちょっとでも動けば、焼酎がこぼれてしまいそうだ。「大丈夫、ゆっくりゆっくり」　　春子の困ったような顔を見る野上の顔には、意地悪そうな笑みが浮かんでいた。今の野上は、さっきまでの大人の男ではなく、ほとんど子供のように見えた。いたずら好きの男の子の顔である。春子は顔をしかめながらも、内心この遊戯のようないたずらが楽しくなっていた。要するに、こぼれないように口に運べるかどうかということである。　　ゆっくりと、慎重に口に運ぼうとするが、慎重になればなるほど、なぜか腕が細かく震えてくる。その震えが猪口に伝

わり、溢れそうになった。だが、ギリギリの所で春子は手の動きを止めて、なんとか持ちこたえることができた。再開しても、すぐに溢れそうになり、動きを止めることになる。そんなことを繰り返すうちに、春子は夢中になってしまっていた。他の事を考えたりする余裕がなくなっていた、というのが真相だろう。そして、なんとか無事に口に運び、その勢いで猪口の中の焼酎を一気に飲み干してしまう。口の中に辛くて熱い刺激と共に、芋焼酎独特の強烈な香が広がった。喉の奥へと飲み下すと、アルコールが喉を焼きそのまま胃の中へと降りていくのがはっきりと感じられる。それから程なくして、体が火照り出してきた。これまでほとんど、アルコールを口にしたことのない春子は、少しの焼酎でも酔が回り始めるのがわかった。「もう一杯」春子の飲みっぷりを見た野上が、有無を言わずに焼酎を注ぎ足した。春子はとくに考えもせず、目をつぶってそれを飲み干す。慌てたためか、それともアルコールにむせたためか、小さくケホケホと咳き込んでしまう。それを見た野上は何も言わずに、黙って春子の背中を優しい手つきでトントンと叩いてやった。ただ、咳が収まるとすぐに次の焼酎を注ぎ足した。それを見て春子は、息を一つ整えるとまた猪口の中身を一気に飲み干す。独特の匂いに慣れて来たためか、それとも酔が回ってきたためか、さっきよりもずっと飲みやすかった。世界がぐるぐると回るような気がして、春子は野上にしがみつく。しばらくしてからだ。「ご、ごめんなさい！」春子は野上の胸元であやまった。猪口を手にしてたことを失念していた。野上にしがみついたとき、呑み残していた

焼酎が野上の軍服に染みをつくってしまったことに、ようやく気づいたのだ。ただ、頭がふわふわとしていて、現実と自分との間に奇妙な隔たりを感じている。それでも、頭の中ではとんでもないことをしたのだと、理解してはいたのだが。「陛下より賜った軍服を汚すとは何事だ……とでも言うと思ったか？」自分の腕の中にある春子を見下ろしながら、いたって真面目な顔を作り野上が聞くと、春子は何処かぼうっとした表情をして頷いた。この時代、社会における軍人の地位は非常に微妙なものがあつた。やくざだろうが、警察だろうが一蹴できる力を持ちながらも、安い俸給で命を捨てる覚悟を求められている。表面上は敬意を払われながらも、社会的な地位はけして高いとは言えない。そのどうしようもないギャップを埋めているのが、軍人の矜持であつた。お国のために、天皇陛下の御為に命を捧げて戦うのだという大義名分を錦の旗として、俗人とは違うのだと自分を納得させている。よって、少しでもその矜持を傷つけられるようなことでもあれば、烈火のごとく怒り狂う連中がいたる所にいた。春子自身、何度か客としてやってきた軍人に怒鳴られたことがある。なぜ怒鳴られなければならないのか理解できないことがほとんどであつたが、口答えすることなど考えもつかずひたすら頭を下げるしかなかつた。それがもし、本当に粗相をしたものならば、一体どういう目に合わされるのか、本当に恐ろしいことだ。実際には特高警察でもなければ、民間人相手にそうそう手出しできるものではないが、高圧的な態度は春子のような小娘にしてみればただただすくみ上がる他なかつたのである。だから、春子は野上が言ったように怒鳴られることを、まさしく覚悟して頷いた。小春がう

なづくのを神妙な面持ちで見ながら、野上は小春のうなじに手を置いて、肩まで伸びた髪をやさしく掬うようにかきあげる。「焼酎だ。すぐに乾くし、後も残らん。陛下もその程度、気にも止めんだろ」胸元にしがみついたままの春子の頭をなでまわしながら、野上はいたった真面目に答える。さらに、もう一言付け加えた。今度は、少しばかりいたずらそうな笑みを浮かべて。「それに自分は、保険を売り歩く予定もないから、少しくらい汚れてもかまわん」それを聞いた春子は、野上の少し笑い声を漏らしてしまった。退役した軍人が軍服を着て保険の外交員をやっていることがよくあった。国から降りる恩給ではとても食べていくことはできないし、多くの貯金を出来るだけの俸給もらってこなかった。軍人が尋ねてくれば、門前払いをする人間などそうそういないし、話を聞くことくらいはする。それだけで、普通の外交員より有利と言えた。そうやって現役の頃よりよっぽど裕福な暮らしをする退役軍人もいた。正面きって指摘する者はいないが、世間的の評判的にはけしてよいものではなかった。野上は遠まわしにそれを揶揄したのである。といっても、春子にはなんと答えて良いものか判断つかなかったもので、短く「はい」とだけ答えた。すると、真面目そうに取り繕っていた野上の顔が崩れて、陽の光が差し込むような感じの笑顔になった。「いい答えだ」男らしののに少年めいた、なんとも表現しがたい魅力的な笑顔を見ていると、春子は自分の体が溶け出してしまうのではないかという気持ちになってくる。それが生まれて初めて飲んだ焼酎に酔ったせいなのか、それとももっと別な物に酔ってしまったのか。

この時の春子は、ただ流されるだけで、まったく理解することが出来なかった。不意に、春子の唇に暖かい何かに覆われる。それが何かを理解する暇《いとま》もなく、自分の体がふわりと浮き上がるのを感じた。はっとする間に、春子の体は仰向けに畳の上に、仰向けに寝かされていた。春子の手から離れた猪口が畳の上でトンと音をたて、何処かに転がっていった。その行方を気に掛ける者など、今この部屋にはいない。重なった唇から生まれて初めて感じているものを、春子はうまく表現することができなかった。ただ言えるのは、まったく不快ではない。その感覚は圧倒的な陶酔のようでもあり、何か未知なる場所に己を連れ去ろうとする津波のようでもあった。閉じていた春子の口が開かれ、中に熱いものが滑り込んでくる。春子は自分でも分からないうちに、夢中になって自分の舌を絡ませていた。必死になって春子は己の腕を野上の体に巻きつけようとする。しかし、野上はすりとそれを逃れて、春子の体を自分の膝の上に持ってくる。気がつけば口づけを交わしたまま、春子の体はふわりと浮いていた。もちろん、野上の腕の中で抱き上げられていたのだが、あまりに優しく抱き上げられたので春子には自分がどうなったのかよく分からなかったのである。次に気がついた時、春子は布団の上に寝かされていた。すべてを覆い尽くすかのように、野上の体が春子の上にあった。あいかわらずふわふわと空中に漂うような感覚は続いていたが、これから何が起きようとしているのかははっきりと理解することができる。自分でするのは初めてだが、ここは貸し座敷。男に春をひさぐ場所。ここで暮らして長い春子に知識がないはずもなく、手ほどきもきちんと受けてきている。春子

は自分の肉体を使って仕事をするのだ。　　だけどそれは頭の中で思っているだけで、水面に落ちた蟻のようにどうしようもなく浮かんでいることしかできないことがない、というのか現実であった。手馴れた手つきで、野上は春子の着ていた浴衣を脱がし、大きくて無骨で暖かい掌が素肌に触れる。その瞬間、春子の唇から「くんっ」という火照った吐息が漏れた。肩から浴衣と一緒に襦袢がはずされる。野上の腕が背中にまわされて、春子の体がまたふわっと浮いた。次の瞬間には、春子の体から全ての布が剥ぎ取られていた。その時にも、春子の全身を野上の掌が、生まれて初めて経験するやさしきでそっと撫でまわし続けている。春子は目を閉じて、自分の中から湧き上がってくる何かを必死で押さえようと唇を噛む。体にまったく力が入らない。野上の触れている所が、とても熱くてやけどしそうな気がする。でも、微塵も嫌な感覚ではなく、もっともっとと貪欲に求めようとしている自分が怖かった。　　不意に野上の腕が離れる。しばらく春子は、目を閉じたままじっとしていたが、人気のない夜道で親に突き放されてしまった幼子《おさなご》のように体を震わせる。確かに感じていた野上の掌。その喪失感は、春子に恐怖すらもたらすものであった。恐怖に駆られた春子は、耐え切れずに目を開ける。すると目の前には、春子と同じように浅黒い全身を晒した男がいた。春子の上に覆いかぶさる野上は、一瞬で春子の恐怖を吹き飛ばしてしまう陽光のような笑みを浮かべて、春子の顔を見つめている。それを見た春子は、本能のままに野上の体に腕をまわし、今度は自分から野上の唇に自分の唇を重ねていく。そして、野上の反応

を待つまでもなく、自分のほうから舌を野上の中へとすべりこませた。深く唇を重ねながら、野上の体に回した自分の腕にありったけの力を込める。まるでぶつけるように、春子は野上の体に自分の体を重ねた。花崗岩のようにごつごととしていながら、竹のようなしなやかさを持っている野上の体。春子が自分の全体重をかけてぶら下がっても、まったく問題にしない力強さも持っている。直接触れ合った野上の肌と春子の肌。それを感じた時、春子は自分というものが分からなくなり始めていた。一体どこからが自分で、どこからが自分でないのか、その境目がひどく曖昧になっていた。絶対に確かな物がどんどんなくなってゆき、すべてが曖昧になっていく。ただ一つだけ確かだと感じられるものは、自分の体ではなく野上の硬く力に満ちた熱い体。春子にとって、自分を保つただ一つのこと、必死になって野上の体にしがみついて一部の隙間もないように肌と肌をぴったりと合わせることであった。まるで子供をあやす親の手の様に、あるいは白い半紙を黒く塗らんとする筆先のように、春子の首筋を背中を脇を尻をくまなく触れていく野上の指。野上の体を自分の全身で感じながらも、春子は自分の体が野上の指や掌によって甘い香りをたてながら崩れていく飴細工のように溶かされていくことを同時に感じていた。春子は、何が自分の身に起こっているのか理解でかきない。できるのは、野上と野上が与えてくれるものを感じるだけ。この瞬間、たとえ世界が終わったとしても、きっと春子にはそれが分からなかっただろう。酔っていた。間違いなく、これは確かだ。でも、春子が酔っているのは、焼酎ではなく野上という男であったのだろう。気持ちいいということすらも理

解することができず、春子は酔いしれていく。何一つとして余裕はなく、現実というものも理解することができず、当然自分が仕事としてこれを行っているのだという認識もそこにはなかった。自分が自分でなくなっていくような感覚。何もかもが、ひどく現実味を欠いていた。そんな春子を、一時的に現実に引き戻したのは野上であった。「できるだけ力を抜いて楽にきなさい」春子の耳元で囁く声に春子はうなずいたが、この時は反射的に反応しただけで野上の言ったことの意味を理解していたわけではなかった。春子を現実に引き戻したのは、突然感じた下腹部の痛み。はっきりと感じたわけではなかったが、野上の腰がゆっくりと動いたとき自分の腰に鈍い痛みを感じていたのである。その痛みは自分の体の中心にあって、熱く存在を主張していた。春子を現実に引き戻した痛みであったが、春子は不思議と嫌だとはまったく思わなかった。痛みと共に感じる熱く力強い物の存在を、よりはっきりと感じさせてくれるので、春子にとってはむしろ幸福感すら感じさせる存在であった。だがそれを感じていたのも、そう長いことではない。野上は動いていることをわからせることなくゆっくりと腰を動かしながら、指を掌を春子の肌に滑らせていく。ただ、その動きはこれまでとはまったく違って、満遍なく肌をまさぐるのではなく、特定の場所を集中的に攻めている。そこを攻められると、春子の意識は何時までも現実にとどまっていることが出来なくなってしまう。春子が自分がどんなふうになっているのか、ということ意識することができたのはこの辺りが限界であった。体中のありとあらゆる感覚がすべて混沌

として、一つでありながら同時に無数の刺激となっていた。痛みも快樂も時間もすべての感覚が渾然として春子の内で圧縮されていたのである。意識が失われたわけではない。春子はこの時、空の器であり野上から与えられたありとあらゆるものを、ただ貪欲に飲み込み続けていただけであった。純粹にただそれだけであり、それ意外の要素が一切介在する余地はない。そのことを認識することも困難なほどゆっくりと、それでも確実に野上の動きは激しくなってくるが、春子にはまったくそのことが分かっていなかった。嵐によって荒れた湖のように、激しくうねり岸辺に激しく波を叩きつけながら、湖底ではそんなことなど露程も気づかない様子によく似ていた。すっかりとすべてを受け入れている春子にとって、いくら自分の肉体が激しく乱れ狂おうとも、その只中にいる春子の心はひどく心地よい状態で安定していたのである。ただし、そのことを意識できるというわけではない。すっかりと、溺れてしまっているという現実是不変変わらないのだから。野上の動きは激しさをどんどん増してゆき、優しさよりも荒々しさが圧倒的に増してきたとき、完全に心が何処かに飛んでいってってしまった春子の口からは、悲鳴にも似た或いは絶叫のようでもある強烈な声があふれ出していた。野上の動きが止まるのと、春子が全身を弓のように限界まで引き絞るのとは、まったく同時であった。これは偶然ではなく、明らかに野上が時をあわせたからである。暫くはのけぞったままであった春子の体が、空気の抜けた風船のようにくたっと崩れても、野上はそのままの姿勢を保ち、自分の体重を預けることなく春子の上にいる。最初から最後まで、春子に負担を掛けることなくことをすませ

ていた。春子の体から完全に力が抜けてしまうのを確認すると、ゆっくりと自分の体をどける。その時、野上の体から春子の体へと汗が滴り落ちたが、春子はまったく気づく様子になかった。それどころか、果たして意識があるのかどうかすら分からない。野上はさっき春子の手からこぼれ落ちた猪口を拾い上げると、千代香に残った焼酎を手酌で注ぎ一気にあおる。そのとき、また野上の体から汗が飛び散った。「小春君。君は男に惚れたことはあるか？」野上は、背中を向けたまま春子にそんなことを聞いた。布団の上で汗にまみれながら、そのことにすら気づかずに魂が抜けたようになっっていた春子は、すぐにはなんのことか理解することができず、当然答えることもできない。野上は背中を向けたまま、それ以上何も言わず、かと言って春子の方を見るでもなく、ただそのままじっと春子の反応を待ち続けた。春子はまず、話しかけられているらしいことに気がついた。それでようやく、自分が今どういう状態になっているのか、ということを確認する。布団の上で、なんともだらしなく呆けていたのだという現実をである。あわてて身を起こしすと、まるで水でも浴びていたかのように全身から汗が流れ落ちる。汗が布団をぐっしよりとぬらしたが、そのことは気にしなかった。この時期に、姉さん達が仕事を終わると布団がこういう具合になるということを知っていたからだ。今大切なことはそれではない。この部屋に入ってきてから、春子がやった仕事というのは、焼酎を注いだことくらいであった。そして今も野上から話しかけられているが、それにまともに答えられないでいる。というのも、意識が完全に飛んで

しまっていたので、なんと言われたのかまったく分かっていなかったからである。これではまったくの役立たずでしかない。そう考えたとき、春子は急に恐ろしくなった。初めての仕事であり、同時に初めての経験でもあった。すっかり分からなくなってしまった自分の身に、一体何が起こったのか気にならないわけはなかったのだが、今の春子にとってはそれどころではなかったのである。殴られたり、叩かれたり、もっと辛いのはご飯が食べられなくなったり。そういうことが怖いのは間違いないのだが、今の春子にとってそれよりもっと怖いことがある。黄蝶楼にやってくる前には、けして感じることのなかった恐怖であった。黄蝶楼にとって、必要のない存在になること。ここにやって来て、初めて春子は誰かに必要とされたのだから。少なくとも、そう感じる事ができたのだから。そして春子は今、期待されていたはずの仕事がまるでできていない、そう気づいたのである。同時にそれは春子の内に深く眠っていた恐怖を呼び覚ましたのである。

恐怖は春子の心臓を驚づかみにしてしまう。まるで崖の上から深い谷底を覗き込んだかのように、体を硬くして立ち尽くす以外には何もできない。何かをしなくてはというあせりはあっても、ちゃんと考えることができない。ただ一つ、恐怖を覗き込むことを除いては。あやまって、もう一度聞き返すこと。それだけでいい。何も難しいことではないはずだ。だけど、今の春子にはそれが出来なかった。時がたつと、ますます春子はどうすればいいのかわからなくなる。時間そのものの感覚が、まったくなくなってしまった。さっきまでとはまったく逆の意味で。今になって気づいたのだが、窓から射していた陽光はすっかりと陰り、

座敷はすぐにでも夕闇に包まれようとしている。だけど春子の目には、薄暮の時間が凍りついたかのように見えていた。春子が両手を自分の胸の前で握り締め、冷たくなってきた汗をそのままにどうしようもなく立ちつくしていると。「冷えて来たな」野上はそう言って、唐突に立ち上がる。引き締まった肉体に残ったままになっていた汗が、僅かに残った残光を受けて煌いた。春子は何かしなければいけない、という強迫観念じみた思いに囚われて、何もできずただ野上の体を見ていることしかできない。

野上はそんな春子のすぐ脇を通り過ぎると、枕元に畳んでおいてあった手ぬぐいを取り上げる。その端を持ち力強く一振りすると、手ぬぐいはパンという音と共に大きく広がった。広げた手ぬぐいを右手に持って、野上は春子に近づくと言った。「背中をむけなさい」春子が言われるままに背中を向けると、野上は乾いた手ぬぐいを背中に押し当てて汗をぬぐい始める。少し痛く感じるくらいに強いが、やさしい力であった。自分が何をされているのか気づいた春子の口からは、身をこわばらせながら謝罪の言葉が溢れ出る。「ごめんなさい。ごめんなさい。お客様にこんなこと……ほんとにごめんなさい」仮に夫婦であっても、こういうことは本来女の役目であった。ましてやここは、女は店員であり男は客なのだ。立場上ありえないことである。恐怖で立ちすくんでいた春子も、ようやくそのことに気づいたのだけれど、やはり今の春子には何をしたいのか分からない。だが、野上の方はまったくそのことを気にかけていない様子であった。「風邪をひくといけないからな。君の体は飯の種だ、ここ

を出ていくまではなにより先に気かけなさい」　　そう言いながら、野上は背中を拭き終わると胸元から乳房を、そしてお腹を拭いていく。さらに右手を持ち上げるように右の脇、左手を持ち上げるように左の脇、最後は両手を拭いてぐっしりと濡れた手ぬぐいを春子の手の中に残す。　　手の中に残った手ぬぐいを急いで畳むと、布団の上において、枕元においてあった乾いた手ぬぐいを手に取り広げる。まったく何をすればいいのか分からず、恐怖にすくんでしまっていた春子だったが、ようやく気がつく。手ぬぐいはバトンであった。何も言われずとも、そこになすべきことが託されたのだ。　　小さな心のリレーが、野上から春子に引き継がれた。　　春子は、自分のひ弱な手であらん限りの力を込めて、野上の大きくごつごつとした背中をおもいきり拭き始める。汗は乾き初めていたが、その肉体はとても熱かった。ついさっきまで、このたくましい肉体に自分は包まれていた。そう思うと、生まれて初めて経験する感情が心の奥底からごく自然に沸き上がってきた。だが、このときの春子には、それがどういう感情なのか表現することはできなかった。「小春君。君は男に惚れたことはあるか？」　　背中を春子に預けたまま、野上が春子に尋ねかける。それは、さっき春子が聞き逃した時の質問と、一字一句たがわず同じものであった。ただそのことは春子にはわかろうはずもなかったし、野上もそのことを指摘するような野暮な男ではない。今の一連の野上の行動が、立ちすくむ春子の恐怖を取り除き、余計な気を使わせることなく自然にもう一度質問するためのものになっていた。そうと承知でやったのかどうかは、野上本人でなくては知りようもないが。ただどの道、結果は同じこと

であった。「惚れた……」 質問に春子は即答することができない。あるなしとかいうことではなく、そういったことに意識を向けたことがなかった。穂垂から客に惚れたらいけないと、何度も聞かされていた。その時には、素直にハイと答えていたが、決して理解してうなずいていたわけではなかった。男に惚れるということがどういうことなのか、春子には理解できなかったからである。周りに、対象となるような相手がいなかったこともあるだろうが、これまでは生きることだけで精一杯だったからなのかも知れない。それならば、野上からそう聞かれたとき、ないと即答できなかったのはなぜなのだろう？ 混乱する頭で、春子は必死に考えてみるが、杳として答えを見つけることはできなかった。すると、春子の心を代弁するかのように野上が話かける。「考えたことがないか……。だとすれば、君は存外幸せ者なのかも知れんな。あるいは、運がよいのかも知れん。男が君らを買って遊び、君らはそんな男を心の内で嘲笑う。そのくらいが丁度良いのさ。……もつとも、男も女も自分の心だけは気ままにできはせんのだがね」 背中を拭い終えた春子が、抱きつくように腕を前に回して、胸元を拭っているときに春子が聞いた言葉である。くっつけた背中から伝え聞く声は、とても深く落ち着いていて、このままずっとこうしていられたらと願わずにはいられないくらいに心地よいものであった。実際、しばらく同じところを何度も拭いていたのだけれど。「小春君。そろそろ、着物を着たまえ」

春子の手を包み込むように握りしめながら、野上が言う。春子はそれで、心地の良い時が終わったことを知った。ぺったりとく

つつけていた体を離すと、自分の前になんとも虚しい空間の広がりを感じる。当然あるべきものが、そのからなくなってしまったかのような気がしたのだ。 無造作に立ち上がった野上が、脱ぎ捨てていた下着を身に着け始める。春子も布団の脇にだらしなく追いやられていた襦袢を身に着ける。少しごわっとした木綿の感触が、いつになく不快なものに感じられた。 下着だけを身に着けた野上が、どっしりと畳の上に座ると、一旦置いていた猪口を手を取った。襦袢姿の春子はいたって普通に、千代香を取って酌をする。その二人の姿は、まるで夫婦《めおと》のように見えたが、一夜限りのお金で成立した関係にすぎない。そのはずであった。「この世の中は不条理だ。今日、君が買われたのも不条理なら、年季が明けるまで男に体を売らなければならないことも不条理だ。世の中不条理だらけで嫌になる。だが、君らがいるから自分のような男が、お国のためにと言ってみせることができる。この後、どんな男が君の前に現れようと、君がここで働く限りそれはかわらん。そこのところは、覚えておきたまえ」 猪口の中の焼酎を一口で飲み干した後、野上の言った言葉であった。そしてその言葉は、春子の一生を決定づける言葉になった。それが良かったのか、悪かったのか。それから遥かに年老いてしまっても、結論はでていないらしい。「はい」 春子は空いた猪口に焼酎を注ぎながら短く返事をする。もう、薄暮を過ぎて、宵闇に包まれようとしていた。ちょうど、窓から見える川岸のあちら側には大きな丸い月が昇っていて、陽が沈むのに呼応して白銀の冴えた輝きをずいぶんと増してきている。焼酎が山盛りに注がれた猪口を野上がしばし覗き込んでいたのは、そこに映った月影を

見ていたのだろうと春子は思った。それから程なくして、完全に陽は落ちてしまう。空を覗き込むと、そこに向かって落ちてしまいそうな気になるほど深い闇の淵に、無数の星々が無造作に投げ捨てられていた。「明かりをつけますか？」 月影の中、朧に包まれて見える野上の横顔に向かって、春子が尋ねる。すると野上は、月でもなく、星でもなく、なにかもつとずっと遠くの方を見たまま答える。「いや、このままにしておいてくれないか」

野上の声は野太くはあるが、どこかに吸い込まれていくように感じられ、春子は急に不安になってしまった。だから、何を考えるでもなく、春子は心の不安をぶつけるように尋ねかける。本当は、聞いてはいけないかも知れないことなのだが。少なくとも、経験を重ねてから後、春子は同じことをしたことはない。「何を、見ているのですか？」 ぶしつけであり、無粋な問いかけであったろう。だが、春子は経験の浅さゆえに、なんの迷いもなくそれができた。野上は、猪口の中に残っていた焼酎を飲み干すと、自然に答えてくれる。「こうしていると、あすこに手が届きそうに見えるな。光が何万年もの時をかけて、ようやく辿り着けるといふのにな」 どうやら、野上は星を見ているようであった。ただ、春子には少し違和感を感じる。星を見てはいても、本当に見ているのは星ではないような気がして。それに、答えもはっきりとしたものではなかった。もつとも、春子にもはっきりと、そうだと言えりほどのものもなかったのだが。「何万年も？」 光とか何万年とか、春子にはまったく想像もできなかったし、それが何を意味するのかも分からない。今度問いかけた

のは、子供のような好奇心からである。「光は一秒間に地球を七週半回ることができる。その光が何万年もかからねば届かぬほど、あの星は遠く離れている。これほど近くに見えるのにな」野上はまるで気にする様子もなく、簡単に教えてくれた。ただし、話はそれで終わったわけではなく、まだ続きがあった。「日本から、飛行機で飛べば僅かに一日。我が帝国陸軍は、南方諸島への進出を考えているらしい。派手な戦果は上げているようだが、すでに大陸では戦線が拡大する一方で収集がつかなくなり始めている。そこに、自分の同期が赴任していった。あの星との距離に比べれば、ほんのすぐそこなのだがな。生きて見《まみ》うることが適うか、あるいは靖国で会うことになるか……」そこまで言ったところで、野上は話をやめる。春子に話たところでどうなるものでもなく、また詳しい話を民間人に話してよいものでもない。だがたぶんこれが、春子が始めて触れた戦争であった。今後、いやおうなしに日本帝国の国民すべてが巻き込まれていく運命の扉。春子には何も言うべき言葉を見つけることができず、ただ黙って横に座っている。すると、野上が自分の膝を二回叩いた。「ここで一緒に星を眺めないかね？」春子は少し戸惑う。野上の方を見ると、胡坐をかいて座っている膝の上に招くように右手を上げて待っていた。春子はそれ以上考えることもないので、手に持ったままの千代香を置くと、巣穴に潜り込む野鼠のように野上の懐に入っていった。自分のお尻が、まるであつらえたみたいに、ちょうどよく野上の膝の間に収まった。空けていた野上の右手が春子を包み込むように抱きしめる。左手に持っていた猪口を置くと、野上は春子の視線に合わせるように南の

空の上方を指差して言う。「あの上の方にある、青白い星がわかるかね？」春子が指の先を目で追っていくと、たしかにそこには青白く光る星があった。「はい」春子がうなずくと、野上は話を続ける。「あの星はベガ。日本では、おりひめ星として知られる星だ。その下に流れる星の河が天の川、銀河系だ。そして、一旦ベガに戻って、そこから右下へと視線を移動して行ってごらん」野上は説明しながら、指の先をゆっくりと動かしていく。春子がその指の先を目で追っていくと。「今度は、ベガより白く輝いている星があったらどう？ あれがアルタイル、ひこ星だ。二つの星の物語は知っているかい？」野上の質問に春子は黙ってうなずいた。これまで、ずっと地面ばかりを見て生きてきた。夜空を見上げて、その美しさに驚いた記憶がなかった。そもそも、そんな余裕などなかった。夜の記憶と言えば痛さと寒さと、気が狂いそうになるひもじさくらいしかない。そもそも、星というものを意識したことすらなかった。春子にとって今の今までずっと、ありふれた日常の一部でしかなかったのである。あれほど沢山の星に名前が付いているということも知らなかったし、それに一つ一つ星の色が違うのだということも今始めて意識した。ただ、そんな春子であっても、おりひめ星とひこ星の話は知っている。春子の住んでいた村にも、七夕を祝う風習はあったからだ。もっとも、春子の家では父親が頭からそういう風習を馬鹿にされていて、七夕の飾りつけをする村人をあからさまに嘲笑していた。そんな父親は、村人全員から嘲笑されていた。だから、春子はおりひめ星とひこ星の話の由来は知ってはいたが、

実際にどの星がそうなのか教えてもらったのは生まれて初めてであった。春子がうなずくのを背中越しに確認すると、野上は星を指していた左手を春子の唇に軽く当てる。そして、太い指先で春子の唇をやわらかくなぞりながら話を続ける。「好きな男と一生添い遂げられる女は、そうそういるものではない。そして、好きな女と一生共に生きていける男もいるものではない。だからあれは、悲劇の物語に見えて、実は理想の男と女なのかも知れないな」春子はどういうつもりでそんな話をしたのか、野上に確かめたかったのだが、唇にあてがわれたままの指がそれを阻み、結局何も言うことはできなかった。野上は春子を膝の間に乗せたまま、また彼方に輝く空の光を指差して一つ一つ名前を教えてください。野上の上に乗る、耳元で低くやさしく語りかけられる声に耳を傾けていると、半分も理解できるわけでもないのにとても楽しくて嬉しくて、二人で一緒に星海の中を散歩しているような不思議な気持ちになった。それは、野上の話が楽しいのか、初めてちゃんと星を見たことが楽しいのか、それともただこうしていることが楽しいのか、春子にはわからなかった。でも本当のところ春子にとって、そういったことはどうでもいいことで、夜が更けていくのを心地よく感じていた。後から振り返れば、それが幸せということになのだろうと思いだすにしても、この時の春子はただそれに包まれていただけであった。

そして、春子にとって初めて夜が明ける。

「どうだった？」ひと仕事あけた穂垂が春子に語りかけてくる。心配そうに聞いてはいたが、あまり深くは聞いてこない。その辺りのさじ加減はさすがである。「ええ……」少し俯いて春

子も短く答える。曖昧になったのは、何も答えがみつからなかったからというだけではない。まだ自分でも分からない、整理されない……いやできない気持ちを含めて、伝えることがためらわれるようなものであったからだ。 野上と共に過ごした星の夜。後から思い起こすと、なにか現実離れした、幻想の中の出来事にも感じられる。自分が、星の中で見た夢なのではないかと。 そんな春子の気持ちをまるで見透かしたように、穂垂はうなずきながら言う。「そう、やっぱり惚れたネ。でも、気にしないでいいよ。野上大尉は特別な男サ。ついた女郎は、大抵惚れる。でも、どんな女も特別にはなれないのサ。あれほどの男が、女郎なんざ買うのもそのためさネ」 春子はハッとして穂垂を見つめる。言っていることの意味が半分くらい理解できなかったにしても、惚れるという言葉に驚いてしまったのだ。 そんな春子を見て、穂垂は笑

春子が娼妓登録してから、四年の歳月が流れた。その間、世間は急速に様変わりしていた。それだけでなく、黄蝶楼にも大きな災厄が訪れていたのである。　去年まれにみる大きな台風が九州本土を襲い甚大な被害をもたらした。沖之村周辺も被害は甚大で、多くの貸し座敷が被害を被り、倒壊した家屋も多かった。県内各地で死者と行方不明者がたくさん出ている。　それに比べれば、家屋が半壊しただけに留まったのは幸運なのかも知れないが、屋根の半分が吹き飛び、屋内が風雨にされされ河から溢れた水による浸水もあったために、容易には貸し座敷としての再開の目処がたたなかった。その間は娼妓や下男の食い扶持を確保することもままならず、結局帰る宛てのある者は国に帰ってもらうことになった。本来ならばまだ年季が明けていない娼妓を解雇するのは、とてつもない損失を被ることになるのだが、再開するまでどれくらいかかるかわからない以上、手元においておくことは手出しだけが増えていくことになり、他にはどうしようもなかったのである。　ようやく黄蝶楼が営業を再開できたのは、それから半年後のことであった。この時、黄蝶楼に残っていた娼妓は現役に復帰した穂垂と、何処にもいくあてのない春子の二人だけであった。ただ春子は、阿南夫婦が黄蝶楼の再開に向けて活動している間、台風の影響が少なかった貸し座敷に間借りさせてもらい娼妓としての仕事を続けていた。その間もらった賃金は、食費代と着物代、それに化粧品代を差し引いた分を全て黄蝶楼の足しにと二人に渡していた。二人は受け取れないと拒否したが、自分

の帰る場所は黄蝶楼以外にないだと強く春子が主張を繰り返すに至り、結局受け入れたのである。　こうして、ようやく再開した黄蝶楼ではあるが、その後半年たった後も経営は思わしくなかった。　世界大恐慌から始まった不況の波は益々その勢いを増し、世界中を暗雲で覆い尽くそうとしている。日本でも例外ではなく、日増しに募る貧困に苦しんでいた。去年、貧困の主たる原因が政界と財界の腐敗のせいであると断じた大日本帝国陸軍の一部青年将校が、二月二六日に1483名の将兵を率いクーデター未遂事件を引き起こした。帝都不祥事件と呼ばれ、後に二・二六事件として知られることになるこの事件をきっかけに、日本の潮流はより一層開戦へと向かって動きを強めていた。　そういう潮流の中で、客層もこれまでとは変化が見られ民間人よりも軍人が多く見られるようになってきていた。軍人というのは世間一般の評価はともかく、給金が少ないこともあり金払いが悪く、冷やかしも多かった。不況の波が押し寄せる中、そういった客層の変化もまた座敷楼業界に追い討ちをかけていたのである。　そうした中、幸いなこともないではなかった。春子についていた客達は、他の楼に身を寄せていた時も、また黄蝶楼に戻ってきたときもずっと鼻息にしていたくれたのである。　もっとも、それ以外の客はほとんど来なくなってしまうと、それが逆に幸いして、春子と穂垂の二人だけでも十分店を回していくことができたのである。　時代背景はどうあれ、この頃の黄蝶楼もそうだが、とにかく自分達がどうにか生きていくだけで必死だった。もっとも春子にとっては、月に一回だけだが、野上が客として会いに来てくれることですべては十分と言えた。　最悪に思えたとしても、

会いたい人と会えるのならば、あの星の夜のようにいつまでも夢を見ていることができた。銀河に裂かれた二つの星の運命は、決して過酷なものではないのだ、とそう感じることもできるのだ。

実際にはまだこの時、春子は何も知ってはいなかった。自分が経験した、あるいは想像していたよりずっと過酷な運命というものが存在するのだということ。父親に殴られ、母親に疎んじられ、貸し座敷に身売りされても、そんなことはなんでもないことだと思えるような現実がいずれ訪れるのだということ。自分のものではない、幾つもの運命を見送らなくてはならなくなるということ。

その日はとても晴れていた。初夏の日差しはとても痛くて、日中はとても外にはいられるようなものではない。梅雨が過ぎたばかりのこの時期は、少しばかりの風がふいたとて、肌に張り付いた汗を拭い去るには程遠い。何をするにもひどく億劫で、それでも商売道具の寝具を干したり着物を洗うことくらいはする必要はあった。ただでさえ日照り続きの客足が、ちょっとしたことで遠のいてしまつては、汗より先に自分が干上がってしまう。そうは言っても、それくらいするのがせいぜいで、座敷の掃除はそこそここに一階の座敷で店番をしていた。売り物である身体を日に晒すことはできないし、そういうことなので、暑いからといって袖のない服など着たりもできない。それでも、さすがに障子くらいは開け放っておかなければやっていられないので、いくらか日に焼ける程度は妥協するしかなかった。障子を開けた窓からは、気まぐれに風が舞い込んでくるものの、ぬるま湯のようであり心

地よくはない。むしろ、縁側に吊るした風鈴のリンという音が耳に届いた時の方が、よほど涼を感じさせる。それでも、陽はいつまでも天頂にあるわけではない。やがて西の地平へと近づいてくる。目が痛くなるくらい、真っ白に感じられた外の景色も、濃度を増し夕暮れが始まりかけているのだと、感じられるくらいになった頃だった。開け放たれた窓の外に、見知った人影を見つける。春子は息がつまりそうになる暑さの中で、見るからにけだるそうに座敷の壁にもたれて客待ちをしていたのだが、瞬時に不快な暑さを忘れた。月に一度くるかどうかの逢瀬の時。決まった日があるわけではなく、何時だって不意に現れる待ち人であった。下男はどうに暇を出してしまっているのか、今だと最初に阿南か手の空いている時には穂垂が対応する。ここで最初に泊まりかそれとも仕切にするかを尋ねて、それに応じた料金を徴収する。それから体が空いていれば春子に声がかかる。先に別の客が入っていたなら、しばらく控えて待ってもらうことになる。これが通常の流れなのだが、この日は違っていた。今日野上の他に、青年将校が一人同行していた。この年には春子の年齢は二十二歳になっていたのだが、その青年将校は春子と同年代に見えた。普通ならば客二人一緒に娼妓の所にやってくるなどない。ところが野上は支払いをすませた後、青年将校を連れて春子の所にやってきたのである。春子を目の前にして、明らかに硬くなっている青年将校の様子を見れば、だいたいの察しはついた。だが、野上の顔を立てるためばかりではなく、心待ちにしていた楽しみを反故にされたことへの不満もあり黙っていると、野上はなんとなくすまなそうな表情を見せてくれた。もちろん春

子にとってはそれで十分で、すぐに機嫌を直すことにする。内心、少なからず抵抗があるとしても。「こいつは自分の飛行中隊で飛行部隊長を務める木戸渉中尉だ。今度、支那への転属命令が来たのだが、見ての通りまだ女を知らんということなのでな。あっちへ行く前に、一番の大和撫子で女というものの経験させてやろうと連れてきた。すまんが、小春の手でこいつを男にしてやってくれ」野上は相変わらず鍛え抜かれた、ごつごつとした立派な体を部下の前だというのに恥ずかしげもなく屈して頭を下げる。女に、それも娼妓相手に頭を下げるなど、明らかに非常識。これが知られると、それだけで野上の名誉が少なからず傷つくであろうに、野上はそれを意に返さない。この当時の軍人としてはもちろん男としても、異端と言っていいだろう。「野上さま、頭を上げてくださいナ。そんなことされたら、あたしの身のおき場所がなくなってしまう。そもそも、あなたさまの頼みを断れるハズなんてありやしませんヨ。あたしなんかが大和撫子なわけないんですけど、精一杯お勤めさせていただきますヨ」穂垂に良く似た独特の口調で春子が答えた。半ば照れながら、もう一つは野上に託された使命感のような物を感じて。すると、野上の横に立っていた青年将校、木戸中尉が直立不動の姿勢をとり、「よろしくお願ひします」と耳が痛くなるほど大きな声で言った。「ここは軍隊じゃないんだ。普通に話せ」苦笑を交えながら野上が忠告するが。「はい！普通に話すであります、中隊長殿！」まったくさつきと変わらない大音量で、木戸中尉が野上の忠告を復唱する。それを見ていた春子は、思わず笑顔になった。「面

白い方ですネ」 春子が楽しそうに言うと、さすがに野上は苦笑を浮かべるばかりであったが、木戸中尉はなんのことだか理解できずに呆然としていた。「自分は、何か面白いこと言ったのでありますか？」 あまりにまじめにそう問いかけるものだから、春子はたまらずふきだしてしまふ。一方野上はなんとも言えない表情になって、木戸の左の肩をぽんぽんと二回叩いて。「まあ、がんばれ」 それだけ言うと、春子に軽く敬礼をしてそのままこの場を立ち去った。春子はその背中を目で追った後、心の中で自分に気合を入れる。たつての野上からの頼みである、仕事というだけではなく十分以上に期待に応えたかった。「こちらに、どうぞ」 春子はガチガチになっている木戸の腕に自分の腕を絡ませると、必要以上に身を寄せて引っ張るように二階の座敷に案内する。野上に比べると細身だが、春子に比べるとずいぶん筋肉質の体を持っていて、毎日鍛えている軍人独特の汗の香りがした。それは何処となく野上の体臭に似ていて、春子にとっては心地よい香りであった。座敷の中に入ると、春子は腕から木戸の腰の辺りに手を移し、より親密に寄りかかるような格好になる。

「さア、おすわりくださいナ」 緊張しっぱなしの木戸に声をかけながら、一旦座らせる。ここまで緊張しては、いきなり布団に連れていってもうまくいかない。春子の初めてのとき、野上がうまく緊張を解いて導いてくれたが、今はまったく立場が逆である。導く役目は春子であって、木戸の心に余裕を持つことが出来るようにうまいこと緊張の糸をほどいていかななくてはならない。もっとも、初めての経験をしようとして貸し座敷にやってくる男子を相手にすることは今までに何度もあったので、気をつけ

るべきことはわかっていた。女が始めての経験をするときには、痛いことを除けば失敗することはまずない。だが、男の場合は色々と厄介であった。極端に早すぎるのはまだ良いほうで、最後まで反応しないこともめずらしくない。どちらも明らかな失敗であり、ちょっとした気の持ちようによるものであった。ただ導くにしても、女の方が優位にいるのだと感じさせてしまうともう役にたたなくなる男もいる。逆に男の本能にまかせ過ぎると、最後までいく前に前に終わってしまうことになる。未通女《おぼこ》が本当の意味で女になっていないように、女を知らない男はまだ男と言えない。普段であっても、そういう半人前を相手するときには気を使う。まして今日は特別であった。野上からたつての頼みごとをされたのは初めてのことだった。絶対にその期待を裏切ることはできない。だから、春子はいつもよりもずっと注意深く木戸の様子を見ながら、慎重にことを運んでいた。ただし、今日は泊りではなく時間による仕切りなので、その間でことを終わらせる必要があった。若干の超過は大目に見てもらおうとしても、さすがに派手に超過してしまったら阿南も追加料金を徴収しなくてはならないだろう。融通が利くとはいっても、限られた時間で体を売るといふ商売なのだ。それをしなくては、この商売で飯を食べていけなくなる。もちろん軍人さんの俸給が少ないということは承知しているので、出来る限り超過しないように春子が気をつけておく必要がある。それとこれは娼妓としての基本なのだが、時間を意識しているのだということを、客に悟られないように気をつける必要がある。横に座った木戸の体に、春子は寄りか

かるように自分の体を押し付ける。春子は意識して掌を木戸のたくましい胸板に押し当てる。すると、力強い鼓動を掌に感じることができた。それは極度の緊張であり、同時に欲望の高まりでもあった。春子は木戸の懐に潜り込むように体を寄せると、下から仰ぎ見るように木戸の瞳を見つめる。木戸の澄んだ瞳の向こう側に、緊張の中から強い欲望の光がその輝きを増すのを確認することができた。春子は上を向いて目を閉じる。ここで木戸が欲望に導かれるままに行動してくれたら、うまいこと床へと移れるはずであった。だが、すぐに春子は自分の目論見が外れたことを悟る。自分の唇に触れるはずであった木戸の唇は、いっこうに触れてこない。普通の男女の恋愛がどういうものであるか、ということを春子は知らない。ここは遊郭であり、春子は遊女。貸座敷を訪れる男は客であり、金を払って行為を楽しんで帰っていく。やってくる目的が自らの欲求を満たすためであるのだから、たとえ初めてであったとしても、自分の欲望に素直になることが当然である。そうでなくては、貸し座敷は成り立たず、春子もいないということになる。なのに木戸という青年将校は、春子に対して感じている欲望を強固に押さえつけていた。この場所で意志の強さを発揮して欲望を押さえ込んだとしても、誰も得をしないのだがそのことがどうもよく分かっていないようである。軍人としての鍛えられた意思の強さもあるだろうが、この場合はそれだけでなく、まだ男になっていない少年めいた潔癖さによるものだろう。春子はなんとも言えない清廉さを感じたが、このままでよいわけがない。この状況をなんとかするために、春子は手管に修正を加える。木戸の懐に潜り込むと、下から少し哀しげで厭ら

しい表情を意識して作り木戸を見上げる。「なぜ、自分を襲ってはくれないの？」と問いかけるように。いつでも余裕があつて、まるで真夏の海のように暖かくどこまでも広くて深い野上。そんな野上にも、ひよっとするとこういう時があつたのかも知れない、と考えるとなんとも言えない不思議な気持ちになってきた。いつも、いつだって、常に包まれているばかりであつた男を、今度は自分が包んであげているようなそんな心持ちになつたのだ。これは、とても不思議な気持ちであつた。もしかしたなら、これが母性と呼ばれるものなのかも知れないが、春子にははつきりとは分からなかつた。というのも、これからすることは、母親にはけして出来ないことであつたからだ。こんな状態になつてもまだ何もしようとはしない木戸に、春子はさらに自分から誘いをかける。とはいつても、無理やりにことを運ぶようなことはしない。ただ娼妓として仕事をするだけならば、それもいいだろう。でもこれは、ただ単に木戸に経験をさせることが目的ではない。木戸が少年から男になるための一つの試練でもあるのだ。もしできることならば、恋人を相手に経験することが一番だろう。だが、そういう相手がいらないから、春子が相手を務めなくてはならないのだ。たとえまがい物の恋愛であつても……いやそうであればこそ、木戸は自分の意思と力で春子を抱く必要があつた。春子は、それまでぴったりと寄せていた体を一旦遠ざける。恥ずかしげに視線を逸らして、木戸の前で立ち上がった。「見て、もらえますか？」 僅かに木戸の元に届く程度の声で、春子が問いかける。木戸は少し口を開いたものの、自分の欲望を口に出す

ことが出来ず、黙ってうなづくだけの勇気も持てず、でも男としての欲望をこらえきることも出来ずに、生唾を嚙下した。木戸が鳴らした喉の音がきっかけとなって、春子はゆっくりと恥ずかしげに浴衣の帯をほどき始める。夕暮れの切なげな光の中で、浴衣をゆっくりと脱ぎ、さらに襦袢の帯を解く春子の姿は、さながら宵の明星のごとき美しさと、男の内なる闇を刺激せずにはいられない背徳感に満ちていた。帯を解き終え、するりと襦袢を足元に落とし、羞恥を身にまといながらも一糸纏わぬ裸体を晒している春子の姿。優美と淫靡が共に住まうその肉体を見て、木戸の右手がとても自然に前へと伸びる。もしかするとそれは、月に向かって手を伸ばそうとした子供のような反応なのかも知れない。けれど、春子にとっては理由などどうでも良かった。今は、自分に向かって木戸が手を伸ばしたという、その行為があればそれでいい。木戸に余計なことを考えさせる暇《いとま》を与えず、伸ばした腕の中に自分の肉体をすするりと潜り込ませる。自分の胸を意識して、木戸の二の腕に押し当たるように計算しながら。肌を直接触れ合わせて、今一度木戸の瞳を下から見上げると、さすがに今度はすぐ唇を重ねてきた。本能的な荒々しい、まったく余裕の感じられない接吻であったが、むしろ春子はそのことを好ましく思う。少なくとも今の木戸にとって、春子は娼妓ではない。そのことがはっきりと分かるから。だから、春子にとって木戸は客であって客ではなくなる。まがい物の恋愛しか存在しない中の女にとって、けして嫌なことではない。実際、自分でもどうしようもないほどの恋に落ちて、楼から逃げ出す女も珍しくはない。確実に、悲劇へと繋がることになるということを承知

の上でだ。ただ、春子は違う。自分が娼妓であるということをわきまえていたし、そもそもここまで木戸を導いたのは春子であった。もし、我を忘れることがあるとしたなら、それは野上との逢瀬の時だけである。春子は木戸がようやく積極的になってくれたことを確信すると「布団の上で、お願い……」と木戸の耳元でささやいた。実際のところ、このまま畳の上で押し倒されてもいいのだが、木戸の積極さがどのくらいのものなのかを確認しておく必要があった。木戸は春子に言われるがまま、自分の体を布団の上へと移動させる。その時、木戸は春子の体を抱いて移動したりはせず、それどころか直接接触しようとはしなかった。この時、木戸が本能に任せて行動しているようでも、まだまだ女に対して距離を置こうとしているのだということを知る。おそらくは遠慮しているのだろうが、そのことは重要ではない。確かに、今までの春子のとった行動は効果があったが、このままどうまくいきそうもない。だから、また春子はやり方を少し変えることにする。木戸に変化を気取られないように。あくまでも、目的は男にすることなのだから。布団に向かって、後ろに後ずさっていた木戸の動きを利用して、春子は上から覆いかぶさるような格好で、自分の乳房をほんの一瞬だけ木戸の顔の傍まで近づけた。その後、耳元に自分の唇を寄せて恥らうようにささやく。「あたしだけじゃ、恥ずかしいです……」明らかに、自分の乳房に釘付けになった視線を意識しながら言った春子は、自分の指を木戸の服のボタンにそっとかける。本当は、客の着ている服を脱がすことなど造作もないのだが、わざとぎこちなくゆっくりと一番

上のボタンを一つだけはずした。木戸の指が近づいてくると、際どい間合いで移動させて下のボタンに指を掛ける。その所で木戸の指と春子の指が出会った。ゆっくりとボタンをはずそうとする春子の指から木戸の指が後の行為を受け継いだ。座敷に入って、ようやく春子と木戸は共に全裸になることができたのだ。この時には、もうだいぶ時間が過ぎてしまっていた。さすがにここまでくれば、木戸のあまりに強過ぎる自制心も抑制されるらしく、春子の体を強く抱きしめてくる。だが、それ以上には行為が及ばない。普通なら、男が春子の体をなでまわすなり、乳房に吸い付くなり始めるか、春子の方から積極的に動いて男の体をまさぐるかするところであるが、この状況からはその流れにもっていきづらい。なんにしても、まだまだ木戸に積極的になってもらう必要があった。ゆっくり誘うように行動できれば一番いいのだが、時間的な余裕がなくなり初めている。実際に行為に及んで、それが終わるまでの時間は経験上ある程度計算できるので、そこから逆算するともうこれ以上は悠長にしていられない。春子は配慮しながらも、少し強引に導いていくことにする。木戸の腕の中で身をよじりながら、その右手に自分の両手を重ねて自分の左の乳房に導く。「これが、女の乳ですヨ」春子が見つけめた木戸の顔には、緊張しながらも普通の男なら誰もが普通に見せる表情が浮かんでいた。しかし、すぐ理性の光が浮かんできそうになったので、その前に春子は問いかけるように言う。「女の乳房は、やわらかいでしょうか？」ひどく直接的な質問をしながら、春子はさらに強く木戸の腕を強く自分の胸に押し当てる。もっと強く自分の胸に関心を向けてもらいたかった。木戸の欲

望が理性に追い払われてしまわぬうちに。それでも、このままではまだ弱いと春子は直感的に悟る。すぐに次の言葉をかぶせる。

「もっと良く、あたしを感じてみてくださいね。この手でこうして……」　春子が介添えするように木戸の手を動かしてあげると、まるでゼンマイ仕掛けの玩具のように、右手を動かし始めた。ようやくここに来て、木戸の瞳からは理性の光が後退していた。春子は間を置かずに次の行動を起こす。木戸の体に自分の指をはわせた。瘦身であるが、その分、不要なもの一切をそぎ落としたかのような造形をした木戸の肉体は、娼妓の目から見てもずいぶんと魅力的であった。もちろん、そのようなことを春子が口に出すようなことはない。そもそも春子は、他の娼妓に比べるとかなり異端な存在であったが、必要以上に客との距離を縮めることのないようには意識している。娼妓の多くは体を売っても心は売らないのだという、最低限の矜持を胸に抱いているものだ。前借金に縛られて自分の意思とは関係なく半ば競争的に自分の肉体を売られているからこそ、自分の意思でやっているのではないのだと自分自身に言い聞かせている。それは、娼妓にとって自分を守るためのささやかな術だ。客との接吻を拒み続ける娼妓もいるが、それが彼女らの心を守る最後の砦なのだ。この時代、そういった娼妓が普通の娼妓であり、むしろ春子のような娼妓の方が希少なのである。ただそれは、春子が客に心売っているのだということを指すわけではない。むしろ春子こそが、娼妓というものを仕事として捉えているからなのだろう。客が喜んでくれたなら、自分も嬉しくなる。ただそれだけのことであった。これは

、普通の職人が感じる喜びに通じる。もちろん世間様にとっては、まともな商売であろうはずなどなかったが。　　すっかりと、陽が西の地平へに重なり、窓のから差し込む夕日は昼に影だけを残して、直接壁をセピア調に染めていた。夕暮れが完全に闇の中に飲まれてしまう前に、ことをすませる必要があった。いくらか時間は超過するにしても、それより前なら言い訳もできる。さすがに、明かりをつけてまで続けるというのは、どうにも言い訳のしようがない。　　春子は、さらに積極的な行動を起こす。それまでは、意識して避けていた男の一番感じる部分に、右手を伸ばして触れたのだ。その前に、木戸の右手を自分の胸に導いたのは、女の手で触れられることへの抵抗をなくするためであった。あくまで主導権は木戸にあるのだと、そう思ってもらいたかった。男は強くて女は弱い。そのことは否定しないが、性に関しては極一部の例を除いてその図式は成り立たない。というか、むしろ立場は逆である。男の娼妓が存在しないように、女の客というものも存在しない。性を生業とする者にとって、男は素人であり女は玄人。それが現実である。ただ、その現実をそのまま客である男に見せ付けてしまうような娼妓は玄人とは呼べない。半人前である。それを受け入れることができる男は極めて少ないからだ。もともと、春子ほど玄人志向の強い娼妓も珍しいのだが。　　春子は手で男の一番感じる場所を刺激しながら、積極的に舌を使って木戸の体も刺激していく。けして大きいとは言えないが、それでも鍛え抜かれた体と同様に、巖のごとく硬くなっているモノを口に含んだ。舌で刺激しながら、さらに硬度を増してくるそれを確認すると、このまま本番に移っても大丈夫だと確信する。春子の

指や舌を使って刺激した技法によるものもあっただろうが、それよりも春子の精神的な導きによるもののほうが大きい。技巧にだけ頼り、男などみんな同じだと言う娼妓もいる。ただそういう娼妓は、男のモノが役に立たなくなった時には、男の責任にするか嘲《あざけ》るかのどちらかである。春子はそういう娼妓とは違う。それが、春子本人にとって良いことなのかどうかはまた別として。適度な刺激を与えつつ、木戸の積極さを引き出しながら、体の位置を自然に入れ替える。このまま自分が上になって自由に動く方が、男にとってはより強い快楽を得ることが可能である。春子は性の玄人なのだ、木戸を手玉に取るくらいの技量はある。だけど正上位になって、春子は木戸のモノを自分の中に導いた。力強いモノが自分の体内にあるのを、春子は感じながら木戸の顔を下から見上げる。目を閉じて歯を食いしばるように、何かに耐えている様子の木戸を、好ましげに、でもじれったそうに見た春子。なるだけ自然に自分から腰を動かして刺激する。表情からすると、おそらく長くは続けられそうもないのに耐えている。最後は木戸が自分自身の意思と力で動きその瞬間を迎える必要があると春子は思っていた。正上位になって自分の中に木戸を受け入れたら、春子を冒すことをためらったりはしないだろうと考えていたのだ。さすがにここまで来てもなを、強烈な自制心を働かせるというのは予想外の事態だった。この状況を進展させるためには、まだもう一押しが必要だったのである。春子は、最後の一押しを言葉に託す。「気持ちいい……です、もっと……」 あえぎ声を混ぜながら、哀願するように春子はね

だる。まるで感じていないというわけではない。意識して声を出しているというのが事実ではある。ただそれでも、芝居と言われると、さすがに反感を感じる。あえぎ声を出すこと、媚態を示すこと、そういったモノは女が生まれてから持っている本能のようなものだから。たとえそれを意図的にやっっていようとも、芝居をしているのだということは違うのだと春子は信じていたかった。もちろんそれは春子の考えに過ぎず、芝居をしているのだと言い切る娼妓の方がよっぽど多いのだが。ただ、どちらにしても、男が女の芝居に気づくことは極めて稀であり、ましてやまったく経験のない木戸に見極めることは不可能である。そして、いかに強力な自制心があったとしても、この状態でさらに遠慮を続けることは不可能であった。さすがに動きはおぼつかないものの、人として本来持っている牡としての本能のままに動き始める。声を上げながら春子はその様子をつぶさに観察し、高まりきらないうちに終わってしまうような不手際が起こらないようにうまく誘導する。これに関しては、木戸の経験のなさが逆に幸いする。表情と動きを見るだけで、すぐにわかるからだ。　　とんとんと遠慮のなくなってきた木戸の動きにあわせて、春子も自分の声と腰の動きを高めていく。二人を覆い尽くそうとしている闇の中、微かに残った薄暮の名残が、二人の体から飛び散る汗に飛び込んで星の欠片のように煌かせている。　　そして、ついに木戸の体が激しい一打ちを春子の肉体に打ち付けた後、仁王の彫刻のごとき力強さを示して固まった。　　すっかりと闇の中に沈んでしまった闇の中で、二人は溶け合う蠟のごとく重なり布団の上で崩れた。　　硬くて見た目よりずっしりとした、木戸の体を受け止めているのは

それほど不快ではなかったが、すぐにでも退いてもらう必要があった。春子は、そのために必要な言葉を口にする。「重いでス」

それだけの言葉で十分だった。木戸は自分の状況にハッと気づくと、すぐに身を起こす。春子の体が急に楽になった。春子は起き上がると真っ先に木戸の服を拾い集める。最後は脱ぎ散らかす形になったが、何処にあるのかはしっかりと記憶しておいた。そのときにはもう宵闇が座敷を侵し初めていた、ことが終わればすっかりと座敷を闇が満たしているかも知れないと予想していたのである。拾い集めた服を木戸の胸元に押し付けるようにして手渡すと、春子はすぐに自分の襦袢を拾い上げる。腰帯まで巻き終わると、そこで天井からぶら下がっている電灯に手を伸ばし、ネジ式のスイッチをカタリとひねる。白熱灯の黄色身を帯びた明かりが、座敷を埋め尽くしていた闇を一瞬で追い払った。ずいぶんと久しぶりにのように思える木戸の伶俐な顔を、白熱灯の下で見ると驚くほどさっきと様子が変わっていることに気づく。自分の服を着ながら、春子の視線に気づいた木戸が見つめ返したその瞳には、無垢な少年めいた光の代わりに、はっきりとした自信の輝きがそこにあった。目の前にいるのは、もう少年を残した存在ではない。一人の男がそこにいる。そんな木戸を見る春子の胸に去来するものは、一体なんだったのだろう。自分がやったことは、しよせん売春と呼ばれる行為に過ぎない。ただそんな行為でも、男が男になるための介助になるのならば、けして無為ではないのかも知れない。この時春子は、初めてそう感じたのである。ただ時代は、そう感じた春子にとって、ひどく過酷な運命をもた

らすことになるのであるが。なんにしても、今はもう時間がなかった。時間を超過しているのは間違いないだろうが、追加料金が発生するかどうかは微妙なところである。もちろん春子は、自分のせいだと主張するつもりであった。だが、おそらく木戸はそれを良しとはしないだろう。それにさらに心配なのは野上である。木戸を連れてきたのが野上である以上、超過料金は野上が支払うことになる。本当に、時間を読み間違ったのは春子であることは間違いないのだが、春子が立て替えると言っても野上は絶対に受け入れない。陸軍大尉の給金など、それほど多いものでないことは、春子は十分承知している。今はまだ前借金の返済分に宛てているが、それがなくなれば春子の収入の方がよっぽど多い。正直春子にとって、超過金の立替くらいそれほど痛手ではない。そのことを承知していたとしても、春子は言ったことはないし今後も言うつもりもない。なぜならそれだけは、けして言うてはならないこと。春子はそう思っていた。これは、なにも野上に限ったことではない。娼妓をやっているような女のことを頭から見下し、軍人であるということを傘に着て威張り散らしている将校に対してもそれは同じである。軍人には敬意を払いつつも、社会的な地位がさほど高くないという現実。その一つの現れが、ひどく低賃金の給金であった。それでも過酷な軍隊生活に耐えながら、国のためにと命を掛けるのも軍人である。そのことを知っているから、自分より俸給が少ないだろうと指摘するようなことだけは、どうしてもしたくなかった。そういう事情があり内心はかなりあせっていたが、せかすようなことはせず春子は木戸が服を着終わるのを待つ。ここで全てを台無しにするようなことは

したくない。それに、軍隊生活に慣れた木戸は服を身に着けるのも遅くはなく、着衣にも一切乱れがない。一方春子は長襦袢だけしか羽織っておらず、しかも帯の締め方もいい加減なのとは大違いである。「お忘れ物はありませんか？」最後に春子が確認すると、木戸は手早く部屋の中を見回して答える。「ないよう
です」

返事を聞いた春子が右手を伸ばすと、木戸はためらうことなくその手をとった。木戸の細身だががっしりとした手を握り締め、その手を引いて一緒に歩き出す。「よかったら、またいつか来てくださいネ」 二階から下へと降りる階段の途中で、春子は木戸に話しかける。それは、客を誘った言葉ではないつもりだった。戦地へ向かう軍人に向かって言ったのだ。生きて帰ってくる保証はなくても、約束があるなら帰ってくる事が出来るかも知れないと。ささやかな願いが込められている。できるだけさりげなく。戦地へ向かう軍人に、命を惜しむような言葉をかけるのは非礼にあたる。それでも、生きて帰ってきて欲しいと願うことを、女がやめることなどできるはずがない。木戸がただの客でしかないと思い込むことができたなら、何も感じずにいられるのかも知れない。だがそんなことは、春子には無理な話だ。「はい、凱旋したあかつきには、かならず」 木戸はその言語に微塵も疑いのない様子でそう答えてくれた。もちろん、その言葉にはなんの保証もないのだけれど、春子はとても頼もしく感じた。 下について控えの間に行くと、そこでは阿南と野上が二人で楽しげに談笑していた。白熱灯の明かりに照らされた二人の男の手には、猪口が握られており、二人ともほろ酔いになっている様子であった。

「んっ？ 終わったか？」 部屋に入ってきた春子と木戸の二人を見て、いつになく陽気そうに阿南が言った。春子は少々戸惑ったが、すぐに頭げて言い訳をする。「すみません。あたし、時間を勘違いしてしまって、遅くなりました」 通じるかどうかは

分からないが、春子はこれで押し通すつもりであった。野上や木戸の前で、お金の話をするととなると話がややこしくなる。ところがそれは、結果的に気の使いすぎとなった。阿南は春子のことは無視して木戸に向かって話しかける。「お代なら、野上さんから頂いてますよ。野上さんには色々世話になってるし、超過分なんていただきやしませんよ」阿南は陽気に言うが、正直以外な思いで春子は阿南を見ていた。これまでに阿南がそんな気前の良いことを言ったことを聞いたことがなかったからだ。良くも悪くもそういうことに関しては、はっきりとけじめをつける人間である。むしろ、そのあたりは穂垂のほうが融通がきいている。最近になって順調に客足が戻ってきているのも、穂垂の魅力ばかりではなく、商売上手なところも大きかった。「今日は、急ぎの用事ありませんのでショ？ さあさ、中に入ってにくつろいでくださいナ」後ろから突然声をかけられた。春子が後ろを振り返ると、千代香と猪口とお酢のつんとした香りが漂ってくる小鉢を乗せたお盆を持っている穂垂が立っていた。春子はあわてて中に入る。入口に立ったままでは邪魔になる。春子に手を引っ張られるように、木戸が後に続いた。「ふふっ。あらあら、中の宜しいことデ」二人の脇をすり抜けながら、楽しそうな笑い声とともに穂垂が言った。春子は、言われてまだ手を繋いだままだったことを思い出し、慌てて木戸の手を放す。それを横目でちらっと見ながら、穂垂はさらに楽しげに、今度は声を立てずに笑った。それを見て、春子は急に恥ずかしくなる。もちろん表情に出すようなヘマはしないが、これではまるで小娘みたいではないか。ずいぶんとたくさんのお金を相手に仕事してきたというのに、たった

一人の男を前に冷静を失ってしまった。そういうところを男に見せるわけにはいかない。もちろん、恥ずかしいということもある。でもそれ以上に、自分のような女の気持ちを知られることで、野上に迷惑がかかってしまうことが一番怖かった。大門の中の世界では、本気の色恋沙汰は禁忌とされている。それだけに、うわさが広まるのは早く、一旦広まってしまえば取り返しがつかなくなる。貸座敷を利用する軍人はとても多いので、男女が二人で個室にいれば話のひとつもでないはずがない。今も昔も、他人の不幸は良い話の種となる。春子の名が口の端にのぼるだけなら問題ないが、万が一にも野上の名前が広まるようなことになっては噂話ではすまなくなる。遊郭より遥かに、軍隊は色恋沙汰による風聞には厳しい。軍の対面と面子に係わるからだ。そもそも何の咎がなくても、軍隊では私的制裁が日常化している。誰も気づかない程度の服装の乱れを見つけたり、復唱が僅かに遅れたり、畳んだ毛布の角が揃っていないり、とにかくあらゆることに理由を見出して私的制裁は行われている。殴られるのは基本的な行為であり、さらに陰惨を極める私的制裁と呼ばれるリンチが日常的な光景となっていた。春子は実際に見たことがあるわけではない。それでも、軍人の一人から聞いたことのある制裁の中に、『対抗ビンタ』というものがあつた。これは命令された部下二人が、どちらかが倒れて動けなくなるまで交互に殴り合あわせる制裁方法である。脅して殴り合いをさせているわけではなく、上官殿の命令に従い交互に制裁を繰り返すのだ。日常的に制裁を受け続けていればやがて、『対抗ビンタ』のような私的制裁も可能になる。軍

隊とはそういうところなのだと言われていたから、想像でしかないが、それでも娼妓との噂でも立つようなことがあれば、本当に恐ろしいことになりそうで怖かったのである。春子は穂垂の意味ありげな笑顔をことさら無視すると、いたって何事もないかのように木戸を招く。「さあ、お座りくださいナ」座敷の奥に寄せてあった座布団を持ってきて、野上の下手の席に置いて言った。木戸がそこに腰を下ろしたのを確認すると、春子はすぐに座敷を出て行こうとする。野上や木戸の相手をしたいのはやまやまだけど、時間が押しているので、次の客が待っているはずだった。「何処にいきなさるんネ？」面白そうに声を掛けたのは、穂垂であった。首だけ後ろに向けると、春子はなんでそんなことを聞くのかと不思議そうにしながら答える。「そりゃ、お姉えさん。お客さんがお待ちでしょ？」いくらかおかしな受け答えになったが、春子からしてみればそう答える他ない。この商売、なんと言っても陽が落ちてからが稼ぎ時。忙しくなるのはこれからだ。ところが。「もう店は閉めてしまいましたヨ。ウチの人も晩酌《だいやめ》を始めましたし、今日は仕事にはなりやしませんサ」穂垂は当たり前のように、店を閉めてしまったことを宣言する。それを聞いた春子は、かくんと肩を落とすしかなかった。自分がやたらと時間を気にして、色々と頑張ってきたのは一体なんだったのだろうか？そんな春子の気持ちを見透かすように、穂垂が付け加える。「あたしらの仕事は仕事で、きちっとやってくださいナ。でも、ここからはお遊びさネ。小春も一緒に楽しみナ」やはりこれは、穂垂の計らいだったのだろう。黄蝶楼の女将でありながら、娼妓としても働いている穂垂

であるからこそ、仕事と私生活との線引きはしっかりとわけている。なんとと言っても、この商売は女の体を売り物にしているのだから。娼妓として働いているだけの春子であっても、気持ちの整理は難しい。ましてやそれを夫婦で生業としているのだから、なおさらつけずらいはずだ。売り物としているのは、本来なら夫婦の間の秘め事であり絆の証でもあるものなのだから。こうして穂垂が、曲がりなりにもきちんと線引きしているからこそ、二人は夫婦としてやっていけているのだろう。春子はそう理解していた。穂垂の方に向き直ると、春子は素直にうなずいた。「はい。そうします」 そうと決めれば、春子はすぐに気持ちを切り替える。たまに引きずることもあるけど、ある程度は気持ちの切り替えが早くないと、一日に何人もの男の相手はできやしない。世の中、野上や木戸のような男ばかりではないのだから。それに、最初からこの二人に気持ちが向いていたということもある。特に、野上に。まだ盆に載せたままになっている千代香と猪口をさらうように取ると、春子は猪口を木戸に手渡す。木戸が受け取ったところにすかさず春子は焼酎を注いだ。「おおっ」 驚いたように言ったのは木戸である。並々と注がれた焼酎は、あと一滴でも増えたなら、あふれ出してしまいそうだった。ただ持っているだけでも困難である。「木戸君、山盛りだぞ。溢さんよう、きちんと飲め」 楽しそうに、あるいは挑発するように言ったのは野上であった。春子が野上に酌をする時には、かならずやっているなので微かに盛り上がるような注ぎ方はもうすっかり馴れてしまっていた。それに、つい癖になってしまっているの

、焼酎だけでなくお茶とかでもこうして注いでしまうことがあった。「はい、中隊長殿。自分は溢さないよう、飲むであります」 軍隊の癖なのか、反射的に復唱するとそのまま一気に口に運び飲み干した。すると、かろうじて保たれていた表面張力が崩れて畳の上にポタリと焼酎が落ちる。畳が濡れて、芋焼酎独特の香りが広がった。「木戸君。しくじったな」 楽しそうに見ていた野上が自分の手にした焼酎をあおりながら言った。すると、木戸は座ったまま背筋を伸ばし、ひどく緊張したような声で声高に答える。「はい、自分は失敗したであります」 直属の隊長命令は天皇陛下の勅命に等しいとされる軍隊において、直属の上官の指示は絶対である。ただ、この時の野上と木戸がそこまで考えていたはずもなく、軍人としてはいたって日常的な行動をとっていただけのことであるが。「よし、なら次こそうまくやってみせろ」 野上は煽り立てるように、再度の挑戦を命じる。もちろん春子はすぐに酌をして、また山盛りに注いだ。結局、木戸はすっかり千代香を空けてしまってもまだ成功することはできず、最後の方はふらふらとしながらまともに酌を受けることもできなくなっていた。女を知っても、酒の方はまだまだであった。酔いつぶれて床の上に倒れてしまった木戸の汗を、春子は拭ってやった。暫くこのまま動けないだろう。それまでに汗で体が冷えてしまったら、風邪をひいてしまうかも知れない。そんな木戸の様子を野上は楽しそうに見ていたが、酔っ払いの様子をいつまでも見ていたところでしかたない。穂垂がついでくれた焼酎を一気に飲み干すと、阿南と話始める。ちなみに、木戸は気づいていなかったようだが、木戸が一杯飲み干す間に、野上は二杯つつ

あおっていた。あまりに、様子がかわらないので、気をつけて見ていないとどれほど飲んでいるのかわからない。「それで、なんとかかなりそうなのか？」 野上の言葉に、阿南は笑って答える。

「貴様が心配する必要はない。だいたいこれでも俺は、貴様よりよっぽど稼いでいるのだぞ」 どうやら二人は、阿南と黄蝶楼のことを話しているらしかった。「確かに俺は、金銭的には役にたたんが、それなりに口利きくらいはできるぞ」 世の中には、軍人風を吹かせる連中は多く、軍人が押し通せばたいがいのことはまかり通る。ましてや日本中が戦争一色に染まりつつあった。人々の口の端に上る言葉の中に、お国のためという文言を聞かない日はないと言ってもいいくらいだ。相変わらず警察と陸軍の仲は最悪に近いが、警察以外の人間は歯向かうことができず言いなりに近い状況である。未遂に終わったとは言え、二・二六事件では軍事クーデターまでひきおこしたのだ。逆らえば非国民であると決め付けられ、どんな目に合わされるか分かったものではない。喧嘩や暴力を生業とするやくざであっても、とても歯が立つような相手ではない。なにしろ、骨の髄まで敵兵を斃すように鍛え上げられた男達ばかりだし、自分達のすることはすべて天皇陛下の御ためだと言っているのけるのだ。 野上の言ったことは、おそらくそういう類の支援であった。 実際に野上がそういうことをするのを春子は見ることがない。だが、いざとなったらそういったことを利用することをためらわないということなのだろう。 阿南は笑ってそれを断ったのだ。「自分の尻くらい自分で拭けるさ。それにこんな商売をやってる以上、消えてなくなることになっ

たとしても、誰にも文句を言わないことくらいの覚悟は決め
とる」 阿南は、今まで一切そういうことは言ったことのない男
であった。というか、店が台風の直撃をうけて半壊したときも、
世の中が戦争の色に染まり始め、中々金払いのよい客がこなくな
ってしまっても、いつも何も言わずに黙々と仕事をしている男
であった。黄蝶楼の改修費用の借入をして、収入が激減して下男
に暇を出した後は、淡々と自分でその代わりをやっていった。ま
るで、そういうことには無頓着なだけなのかと思っていたら、黄
蝶楼の経営者として考え覚悟を決めた上でのことらしい。もっ
とも、すっかり年増になった女将の穂垂と、ここで働くより何処
で生きていくこともできない春子の二人しかいない黄蝶楼では、
他の貸座敷と同様の収入は見込めるものではない。その代わり前
借金として事前に用立てなくてはならない金がいらないので、資
金繰りは厳しいながらもどうにか成り立っていた。 春子もそう
した事情はそれなりに理解していたつもりだが、阿南みたいに腹
を括っていたわけではなかった。経営者としては、むしろ当たり
前のことなのかも知れない。でも貸座敷業者で、ここまで覚悟を
決めてやっている楼主はいないだろう。一般的な楼主なら、娼妓
をいかにたくさん働かせて金を稼ぐか、ということしか考えてい
なかった。一人の娼妓にできるだけたくさん客をつければ、それ
だけ儲かるのである。ひどい所になると、本来親に支払われるは
ずの前借金のうち半分近くを準備金として天引きしてしまう。働
き始めてから後も、食事代とか化粧品代とか、病気になれば治
療費、休んだ間の保証費用、考えられるありとあらゆることに理
由をつけては娼妓の稼ぎから天引きしてしまっていた。大正デモ

クラシーがさかんになると、それに耐えかねた娼妓が裁判を起こして世間の衆目を集めることになった。娼妓の待遇は改善したものの、それ以降貸座敷や娼妓に対する風当たりが強くなり、お目こぼしをしてきていた警察の取り締まりも強化された。今では、新たな貸座敷業者の登録を一切認めない方針の警察所もめずらしくなくなってきた。だから、さすがに派手な搾取はやらなくなってきたが、それでも貸座敷の本質が変わったわけではない。依然として女を食物にしている実態はそのままであった。ただし、世界が大不況の渦中にあり、日本も欧米諸国との戦争やむなしとする風潮の中で、貸座敷業者全体の売上が落ち込んでいる中ではいくら搾取を厳しくしたところで、これまでのようには収益を挙げられなくなってきた。客がないのに、多くの娼妓を抱え込んだままの大手の貸座敷は、益々経営が困難になっていた。そんな中で天災による多大の損害を被ったとはいえ、黄蝶楼は良くやっていた。前借金が残っていた娼妓をあえて解雇したことも、長年務めていた下男二人に暇を出したことも、経費節減につながり結果として黄蝶楼の立て直しにつながったのである。もちろん、この時の春子がそこまで考えていたはずもないのだが、後から振り返れば阿南によってずいぶん助けられたのだと気づくことになったというのが真相である。実際のところ、この時春子が気になっていたのは、阿南と野上の関係であった。野上は陸軍飛行隊の中隊長殿、この時代におけるエリートと言っている。一方阿南は世間的に疎まれてる、貸座敷業者の楼主。普通に考えれば、この二人に接点など見当たらない。野上に初め

て水揚げをしてもらった日から、もうずいぶんと歳月も経つ間に、この二人がたんなる楼主と客の関係ではないということが薄々わかってきていた。それが、今日の会話を聞いていて、確信にかわっていた。少し迷ったが、焼酎をあおっていい気分になっている二人を見ていると、尋ねるなら今しかないと思い尋ねようと決心する。なぜだか、二人がしらふの時に聞くのは躊躇われたのだ。「あの……。お二人のご関係はどういったものなのです？」 まったく韜晦することのない、あるいは曲解しようのない極めて真っ直ぐな質問であった。その質問を受けた二人の男は、それぞれ違った反応を返す。阿南は幾分困ったような苦笑を浮かべ、野上は表情こそ変えなかったが、どことなく楽しげな視線を春子に向ける。その後、野上が阿南に目配せするような視線を向けると、阿南は手の中にあった焼酎を一口であおり、春子の顔を改めて見る。「こいつとは、兄弟みたいなもんでな。尋常小学校に入る前から知っとるのだよ」 聞いてみればいたってありふれた関係であった。ただ、それを聞いた春子は意外に感じた。すぐに、その疑問をぶつけてみる。「主さんは、中のお生まれでしたネ？ ということは、野上さんは……」 中というのは大門の中。つまり、沖之村遊郭街で生まれた子供ということ。中の子供が尋常小学校にあがるまでは、沖の村より外にでることはまずありえない。小さな子供が一人で大門を超えることなどできないからだ。となれば、遊んでいた相手も必然的に中で生まれた子供ということになる。「こいつは娼妓の子供で、年季が開けた母親から置いていかれたのさ」 後を継いで話してくれた内容を聞けば、阿南が話しづらそうにしていた訳が理解できる。親に捨て

られた子供というのはめずらしくない。子供を育てるのが嫌になったからではない。今日のご飯をまともに食べられないような親が、せめて子供だけでもと金持ちそうな家の前に置き去りにしたり、奉公先に子供を預けたまま姿消してしまうのだ。だけどそれはずいぶんと良い方で、田舎にいけば子供を間引きをするような家も少なくはなかった。その意味から言えば、春子も幸運だったと言えるだろう。ただ、きちんと子供を産み育てている家庭の方がよっぽど多かったわけで、幸せな人生のスタートとは言えないということだけは確かなのだが。「それでは野上さん
って……」 不思議に思っていることがあった。たまに、春子自身より春子のことを良く分かっているのではないかとそう思うことが普通にあるのだ。初めての時には、ただ夢中でまったく気づくことができななかったが、信じられないくらい春子にとって良いようにことを運んでくれた。いつも後で反省するのだが、つつい野上に甘えてしまい嫌な客の愚痴を話してしまうことが良くあった。そうすると、野上はどうすればうまくそういった客をあしらうことができるのかを一緒になって考えてくれる。本当に必要なのは、客あしらいのうまさではなく、一緒になって悩んでくれる相手だったのだ。だから、野上と一緒にいるといつでも春子は幸せな気持ちになることができた。どうして、そこまでわかってくれるのか、とずっと不思議に感じていた。なにより、他の男達とは決定的に違う部分があった。こういう仕事をしている女と一緒にいると、普通男は自分を上に置こうとする。男が女の上位に立って庇護下に置こうとするという図式は、いたって一般的

なことであり常識と言っていいだろう。ただ、娼妓を買いに来る男達がみせる態度は、それとはまた若干異なるものであった。春子のことを抱いた後、春子のことを口説こうとする男もいる。その誰もが商売女を口説く男は自分しかいないのだと思い込みが、態度の端々から感じらる。春子のことを見下しているのは間違いない。実際には彼らは春子のことを見てはいないのだ。彼らが見ているのは、娼妓である春子であっても口説くことのできる優しい自分。だから彼らの口説き文句になびくそぶりをして、適当にあしらっている春子のが分からない。そもそも本気で分かろうとしていないのだから当然だ。結局のところ、春子を通して自分を見ているだけのこと。多くの娼妓達は、客になびくふりをして、店を出る客の背中に舌をだす。でもそれが普通のことであり、いたって正常な客と娼妓の関係であった。野上という男は何もかもが普通と違いすぎた。春子にとって初めての男でもあるわけだから、他の娼妓とは感じ方はずいぶん違う。それでも、ずっと不思議だと感じ続けるくらいには、強い疑問であった。ただ、ずっと疑問を感じていながらも何も言い出せなかったのは聞くことが怖かったからだ。真実というものは、けしていいものばかりではない。人の住まう場所にはかならず厠《かわや》がある。そこには不浄のものが溜まっている。そこにあるものを白日の下に引っ張り出してきても、誰も得をしない。秘め事というのは、秘めておいてこそ初めて正常でいられる。春子も、そういった部分に触れることが怖くて、今まで何も聞かずにきた。そう思う理由には、この時の春子は気づいてはいなかったのであるが。それでも、今までは何も聞き出せなかったことが、よう

やく意を決して尋ねてみる事ができた。質問を口にした後に、春子はとてつもなく緊張している。そこまで意を決した春子に対して、まるで足払いをするかのように、阿南はなんの気負いもなくいたってあっさりと告げる。「ああこいつは沖之村の生まれで、俺と一緒に尋常小学校を卒業するまで、ここで暮らしていたぞ」　けして、野上にとって自慢できるようなことではないはずなのだが、阿南は誇らしげに語る。そしてそれは、まだ続いていた。「こいつは大門口の近くにあった銀花《ぎんか》にいてな。餓鬼の頃から空ばかり見上げてる変わったやつだったよ。尋常小学校に上がってからは、飛行機乗りになりたいとばかりいっておってな。娼妓の子供がそんなもんになれるかと馬鹿にされてたが、今では陸軍飛行隊の中隊長殿だ。たいした出世だよ」　自慢げに聞こえたのは春子の思い過ごしなどではなく、間違いなく自慢であったようだ。自分の幼馴染を本当に誇りに思っているのだろう。そう語る阿南の瞳がきらめいて見えたのは、何も焼酎の力ばかりではないはずだ。　自分で言っておいて、余程うれしかったのだろう。手酌で焼酎を注ぐと一瞬で猪口を空にする。その後、猪口をひっくり返して手のひらの上で、ぽんぽんと二回ほど叩いて残っていた焼酎を切ると春子に向かって差し出した。「お前もどうだ？」　春子は黙って猪口を受け取ると、右手を下に左手を添えて待つ。阿南がお酌をしてくれるのかと思ったが、注いでくれたのは野上であった。「いただきます」　春子は猪口を軽く捧げるように持ち上げると、そのまま一度口を付けて湿らした後、二度目で完全に飲み干した。ずいぶん前の話のだが、女

が男のようにすぐに飲み干してしまうのは、やめたほうがいいと春子に言ったのは野上であった。それ以来、こういう焼酎の飲み方をしている。春子は一旦、手元に猪口を置くと野上正面に置いてあった千代香を取り上げて、野上の前にさし出してみせる。野上は手にした猪口をすぐに空にして、春子の前に猪口を差し出した。春子が返杯の焼酎を注ぐと、野上は猪口をつかんだ腕を軽く上げて礼をするといつものように一息で飲み干した。春子はすぐに、一旦目の前に置いた猪口を取り上げると阿南に返す。右手で受け取った阿南に、春子は間を置くことなく焼酎を注いだ。これは返杯ではなくお礼のつもりだ。阿南は野上に目配せで合図を送ってくれていたのだ。顔とかには出せないが、内心では嬉しくないはずがない。この世界、女の体が商品だ。だからこそ、女は自分の気持ちや心を大切に考えるようになる。それは、春子にとってもけして例外ではない。「それでは、さぞかしおもてになられたのですネ？」　阿南が猪口を開けるのを見ながら、春子は話を続ける。半ば確信めいた質問をしながら、自分の気持ちの中になにやらモヤモヤとしたものを感じずにはいられなかった。売女と罵られるような身分であっても、女であるなら等しく抱く感情がある。もちろんそれは、否定されるべき感情だ。なのに、それでもこういう質問をかぶせてしまうあたりも、春子もやはり女であるとしか言えないだろう。さらに、ちらりと穂垂に目を向けると、取澄ましてはいるが興味深そうに聞き耳を立てているようであった。旦那はいても、野上とも初めての客として体を重ねている。気持ちを向けまいとしても、野上のような男が相手では限界があるということなのかも知れない。ただこれに関しては、

春子は自分親を含めて夫婦というものをよく知らないので、想像でしかない。ただし、女のそういう所については、たいがいの男は極めて鈍いので、阿南もまるで気づいている様子がない。それでも、野上には見抜かれているような気がしないではなかった。ただ、表情から読み取ることはできそうもない。これほど経験を積んでも、まだまだ春子は、野上に敵いそうもなかった。「それがなあ。こいつ、こう見えても昔はとんでも無い硬派でなあ。周り中女に囲まれていながら、勉強一筋で女に見向きもせんかったのだ」それを聞いて春子は驚きはしたが、それほど意外であったわけではない。実の所、春子が想像していた通りであった。普通の男のように女遊びはするが、遊び方がひどく違っていただけからだ。ただ硬いだけの男ではなく、とても懐が広い。一人の女だけでは納まりきれないような、そんな気がしていた。女と遊んでも、常に一歩引いて自分と女を見ている。なのに冷たく感じないのは、冷静ではあっても冷徹ではないことにある。たとえば春子を抱いた後、すぐに春子の体に手拭いをかける。少し寒くなると、襦袢をかけてくれる。そんな気遣いが、自然とできてしまう男であった。それを、あまりに自然にやるものだから、女も普通に受け入れてしまう。そういう場合は、野上が客であるということ忘れてしまっている時なのだ。そして、野上と一緒にいる娼妓は、大抵野上が客であるということをかみならずと断言していいほど失念してしまう。もっとも、野上は絶対に最後の一線を越えることはないが。「それでは、昔から罪造りなお人だったのですネ」そう思ったのは春子だったが、実際に言ったのは穂垂

であった。春子にとってその言葉は、口にするには辛い部分があまりに多すぎた。一方穂垂の旦那は野上の顔と自分の妻の顔を交互に見た後、「確かに、ちがいないな。ハハハハハ」そう言って高笑いした。果たして自分の妻の心に秘められた、口に出すことのできない微妙な気持ちに気づかぬふりをして笑ったのか、それともまるで気づかずにいるのか、春子には判断がつかかねた。夫婦の微妙な心の機微は、男女の擬似恋愛を商売にしている春子であっても、あまりに繊細な問題であったからだ。高笑いする、自分の幼馴染に向かって野上が話しかける。「俺のことを酒の肴にするのは楽しいか？」嫌味っぽく言ったのはわざとだろう。さすがに野上であっても、ここまで一方的に持ち上げられると居心地が悪かったらしい。ましてや軍人ともなれば、誰かに誉められるということは普通ありえない経験である。嬉しさよりも気まずさの方が先にたつのは当然であった。それをここまで口出しせずに見ていられたというのは、やはり野上だからだろう。「ああ、そのとおりだ。本当に楽しいぞ。だから、もっと飲め」空けたばかりの猪口に焼酎を注ぎながら、機嫌よく阿南は言った。「ふん。貴様のそういう悪趣味な所は昔からかわらん」阿南が注いでくれた焼酎を一息で飲み干すと、今度は野上が阿南の猪口に焼酎を注ぎかえす。嫌味の応酬をしながらも、この二人はとても楽しそうであった。そんな二人を尻目に、穂垂が春子の近くによってきて耳打ちをするように話しかける。「木戸様を、布団にお連れしますから手伝ってくださいナ」畳の上に転がってからは、ピクリともしなくなった木戸。まるで起きてくる様子がない。さすがに、このままにしておくのはまずい

だろうとは春子も思っていたので、すぐに同意する。「はい。でも、どこに？」　今日はすでに店を閉めている。泊まりの客もいないので、座敷はどこも空いている。そうは言っても客間はいずれも二階にあった。となると、女二人だけで大の男を運びあげなくてはならず、かなりの危険と困難が予想される。「うちの部屋に、布団を用意してますヨ。そこで休んでもらいまシヨ」穂垂が言ったのは、阿南と穂垂が使っている夫婦の寝室であった。「でも、それでは旦那様と姉えさまの寝る場所がなくなるのではないですか？」　二人がかりで木戸の上体を起こしてあげながら、当然の疑問を春子が口にすると。「どうせ、今日は男二人で朝まで話しているつもりでしょうから、気にはませんサ」　穂垂は座卓を挟んで杯を酌み交わしている二人の男を見ながら少し嫌味っぽく、でも楽しそうにそう言った。女を売る貸座敷なのに、どうやらこの先、女は邪魔者らしい。それに、政治のこと、戦争のこと、果ては思想信条のようなこととなると、にわかに女にはついていけない世界になってくる。いずれにしても、女二人はこのまま退散した方がよさそうだ。「わかりました。それでは、せえのでいきますネ」　木戸の左腕を自分の首に回し、穂垂も同じようにするのを見て春子が提案する。「はい。いつなりト」　返事を受けて、春子は穂垂の目を見ながら調子を合わせて声を掛ける。「せえの」　の掛け声と一緒に自分の体を起こした。　木戸の頑丈な体は、細身のくせにずっしりと重量があったが、さすがに二人がかりでやるとなんとか立たせることができた。「……どうしたあ？」　明らかに寝ぼけた様子の木戸が

、かなりろれつの怪しい声で反応を見せるが、足元はまともではなく、春子と穂垂のどちらかがいなくなればすぐにでも倒れてしまいそうだった。「木戸分隊長、貴様は就寝だ。あまり、迷惑をかけるなよ」 野上がからかうような調子で部下に命令を下すと。「はい、自分は寝るであります」 木戸は反射的に穂垂の首にまわした腕でへんてこな敬礼をしながら、必死に命令を復唱する。骨の髄まで軍人なのだろうが、春子の目にはおかしくて、でもとても好ましく見える。それから穂垂と二人がかりで、ともすれば倒れそうになる木戸を引っ張っていき、布団の上に寝かせることに成功した。 春子と穂垂は、どちらともなく顔を見合わせてひとしきり笑った後、二階の座敷にあがって障子を一杯に開けた。 ずっとつけっぱなしにしてあった明かりが、障子越しに虫を集めてしまっていたので、すぐに部屋の中にバサバサと蛾とか金蚊《カナブン》が飛び込んできた。驚いたことに、その中の一匹に立派な角を持った大きな兜虫がいて、どきっとけっこう大きな音を立てて畳の上に落ちてきた。 それを穂垂がひよいと指でつまみあげると、左の掌の上に乘せて眺める。「あらまあ、立派な男っぷりじゃないサ。かっこいいよ、あんたハ」 視線の高さに兜虫を持ち上げて、穂垂が話しかける。兜虫はそんな女の言うことなど、まるで関心なさそうに穂垂の掌に鉤爪をひっかけてじっとしたまま微動だにしない。黒くて硬い甲冑を持ち、立派な角を誇らしげに天に向かって差し上げるその姿は、確かに雄々しさを感じさせる。「兜虫好きなんですカ？」 春子が聞くと、穂垂は手の上の兜虫から目をそらさずに答える。「雄の兜虫は好きだよネ。雌は苦手だけどサ」 いくらか、他人事《ひと

ごと》のような匂いが感じられる言い方だった。例えば兜虫が好きな少年ならば、こういう言い方は絶対にしないだろうというような言い方。大人と子供の違いだと言えばそれきりなのだろうが、春子にはもっと別のものがあるのだろうと思った。もっとずっと根源的で個人的な違い。同じ娼妓をやっている女という共通項があっても、分かち合うことができないそんなこと。「雄に比べたら、雌の兜虫はずいぶんと地味ですからネ」 春子がいたって無難な、多分誰もが思うであろうことを言ってみる。というのも、これまでまったく兜虫について考えたことのない春子にとっては、その程度のことしか考えつかなかったのである。ところが、穂垂はうなずかなかった。「なにネ、雌なのが嫌なのサ」 雄の兜虫はずいぶんと立派で、昆虫の王様と言われるに相応しいのことはあるだろう。それにひきかえ、雌の兜虫は大きめの金蚊《カナブン》にしか見えない。とそんな所が、一般的な回答であり春子にも理解できる範疇であったが、春子にとってはどうにも判断つきかねる穂垂の答えであった。「雌が、なんですノ？」 春子の口にした言葉は、質問というほどの意識はなかった。ただ、そうとしか答えようがなかったからだったのだが。「そうサ。うちは雌は嫌いサ」 穂垂の答えは空に瞬く星のように、すぐにも手が届きそうに思えるのに、けして手の届くことのないそんな言葉であった。ただ、ひとつ気がついたこともある。「もしかして、女が嫌いなのですか？」 虫ではないが、人の女も雌には違いない。穂垂と出会ってからずいぶんと経つが、そんなそぶりを見せたことはなかった。それどころか、春

子にだけではなく他の娘たちにも、随分と気を使っているように見えた。それに、阿南と結婚してから後はより一層心配りをしていたので、気づかない所で疲れを貯めてしまっていたのかも知れない。そうだとすれば、春子にもその責任はあるということになるのだが。「いや、そうじゃない……そうじゃないのサ」 穂垂は反射的に否定する。ようやく理解できるかも知れないと思った穂垂の気持ち、またわからなくなってしまう。さすがに、春子の困ったような表情を見て、思い直したのかも知れない。穂垂はすぐ、今度は聞かれる前に自分の方から説明する。「女じゃなくて、女という存在が嫌なのサ」 ただ、その説明は一層理解しがたいものだった。女は嫌いではないのに、女という存在が嫌いだというのは、どう考えても矛盾している。目の前にある猪口を手にとっておいて、猪口なんかないと言うようなものだ。理解しようとしてみても、春子にはどうにも理解することができない。もっとも、女という性の有り様においては、考えることと感じることの間には差があるということは、それほど珍しいことではない。いずれ穂垂の気持ちを、春子にも理解できる時が訪れるかも知れない。もちろん、それ以上に一生理解できないままなのかも知れないが。ただ一つ言えることは、春子がいくら理解しようと努めたところで、今は無理であるということだろう。

結局、春子はこれ以上話を続けることを諦める。実は、他にも話したいことがあった。兜虫がいきなり飛び込んできたものだから、話が余計な方向へとそれてしまった。「姉さん、聞きたいことがあるんだけどヨいですか？」 改まった言い方をしたのは春子の心に迷いがあったからだ。聞いていいものか、という迷いだけ

でなく、聞いてどうすればいいのかという迷いがあったのだ。それは、この時代の女の多くが感じているであろう不安でもある。新聞は各紙そろって、大日本帝国陸軍の大陸における華々しい戦果を書き記しており、満州国の急速な発展を伝えている。同時に、西欧列強諸国の大日本帝国に対する不当な圧力に、断固たる態度で臨むよう政府に要求する論調で書かれた記事も大量に掲載されていた。記事を読んだ人々の多くがそれに感化され、総力戦をも辞さないという風潮が世間一般には高まっていたのである。そんな中で、国会では国家総動員法成立を目指して近衛内閣が奔走していた。そのことは自体は世論の高まりの中にあって、当然のこととして受け止めていたし、社会主義的な側面のある当該法を疑問視する人間は一部勢力を覗いて多くはなかった。ただそれとは別に、泥沼化し始めていた大陸での戦いのために徴用される男もちらほらと出初めていた。国内での報道からは、まったく事情というものを伺い知ることはできないが、現実には状況はいつかな解決のめどがたっていなかった。そもそも、大陸での戦闘において何をもって勝利となすのか、といういたって基本的な戦略目標すらもないまま戦いを続けているのだから、戦いが終わる道理がなかったとも言える。とりあえず、帝国陸軍に対する差し迫った不安要素はなくて表向きは取り繕っていても、貴重な男手を取られることにはかわりがなかった。大新聞を初めとして、世論すべてが拳国一致の名の下に狂奔していたから、表立った拒否はできないが現実には男達を戦場へと送り出す身になればどうしても不安の方が大きくなる。それを近所の手前とか、世間様の風潮を

考え見せないようにしているだけだ。中にはそういった風潮に迎合して、率先して活動する者もいたのだが、それほど多いということにはなかった。それでも、何処の部落にも一人か二人はいたので、とくに珍しいというわけではない。大門の中にある沖之村においても存在していた。その手の人間はあたりかまわず声高に、かつ威圧的に吹聴するので、彼らの声は春子の耳にも否応なく入ってくるのである。それがまた、春子の内にある不安を煽っていた。もちろん娼妓である春子が不安を口にすることは憚《はばか》られ、誰に尋ねることもできなかった。「なにサ？」

自分の左の掌の上にかがしりと乗ったままの兜虫の背中を、右手の人差し指で軽くトントンと触りながら春子の質問を軽く受ける。春子の悩みがなんであれ、それは穂垂の悩みではない。「もし、旦那様が出征されたら、姉えさまはどうされますか？」徴兵制度がある以上、男であるなら誰もが等しく招集される可能性がある。母であるなら息子を、姉であるなら弟を、妻であるなら夫を、兵隊に取られることになる。まだ、その動きは大きくないものの、これから先そうなると、誰もが話していた。新聞はこぞって皇国を守護するための兵として戦えることを誇りとしろと書きたてていたし、もう誰もが半ば当然のこととしてそのことを受け止めていた。だが、それが規定路線のようになってしまっているからと言って、自分のこととなるとけして覚悟ができていないというわけではない。もちろん、真剣に皇国の将来を憂い、軍人としての努めを果たそうとする人間も多かったが、そうでない者もいたのである。天皇陛下の御為にと声高にいつのり、少しでも戦争を忌避する態度を見せようものなら、力づく

で更生させようとする人間もいる。そういう人間でも、自分が戦地に向かうとなれば話は別であった。日々の中において、好戦的な雰囲気は熟成されつつあったが、それと一人一人の覚悟とはまた別物であった。ただ最後に覚悟を決めるのは男の役割であり、女はそれを受け入れるほかなかったのではあるが。　そういったことを重々承知した上で、春子は質問をする。春子が一番心配していることには直接触れないように気をつかった質問でもあった。「嫌な事聞くネ、小春ちゃんは。まあ、うちの人はあんなふうのでっぷりとしてるからって、徴兵検査で不合格になってくれりゃいいんだけど、無理な相談だろうねえ」　冗談めかして穂垂が言った。まだこの頃は国民兵召集は小規模であり、臨時召集が乱発される以前で、可能性はあるもののそれほど神経質にはとられてはいなかった。もし仮に出征が決まれば、前旗を振って送り出しはするけど、本音では喜んだりはしていない。そこら辺りの微妙にズレた感覚が、穂垂が言うような言葉になったのである。「それじゃ、戦争に行って欲しくないですか？」　いささかも暈《ぼか》すことのない突っ込んだ春子の質問に、さすがに穂垂は苦い表情をする。光は誰にだって必要だが、強すぎる光は目を焼いてしまう。「身も蓋もないネ。そうそうおいそれとは口に出せないのサ。そりゃ、うちのが戦地に行ったところで、お国のためにお役に立てるなんて思っちゃいないシ、ちゃんと五体満足で帰ってこれるか不安だらけだサ。だけど、人様がお国のためにと戦争に行っているのに、うちのだけ行くなとも言えないさネ」　春子ほどではないにしても、穂垂もあまり暈すことなく

答えた。ここにいるのは春子と穂垂の二人だけなのだから。まだ穂垂の話には続きがあった。「それにうちの、あんなふうにしていながら、それなりに覚悟はしてるみたいでネ。子供を作らないのも、あたしに現役を続けさせているのもそのためなのサ」この話を聞いて、さすがに春子は驚いた。こういう商売している楼主としては、阿南の人柄は度が過ぎるくらいに穏やかで、一般的に想像する所の軍人的な要素が皆無な男である。とても、そういう覚悟をしているようにはみえなかった。だけど、それは春子にはまだまだ男を見る目がないのだということなのだろう。野上と親友であるということを今日始めて知ったのはしかたないとしても、穂垂の夫であるという事実は韜晦できないくらい前から知っていることである。でっぷりとした鈍重そうな見かけはどうあれ、男としての魅力を持っているのだということは気づくべきであった。前借金に縛られて、働かされていたはずの穂垂が惚れるほどには。それにしても、この日は春子にとって本当に初めてがたくさんの日だった。初めて、野上から頼みごとをされ、阿南と親友であるという事実を知った。木戸と出会い、初めて戦地へと旅立とうとする男になり切れていなかった男を男にした。一方、木戸の初めての女となった小春は、それまで茫漠としか意識してこなかったようなことを始めてきちんと意識するようになる。親しげに二人で話す阿南と野上を見てみると、それまで意識することのなかった自分の気持ちに気が付いた。それを感じることはできるのだけど、うまく言葉にすることが春子にはできない。それゆえに、本当には理解しているのだとも言い切れない。それでもはっきりしているのは、その気持は春子にとってとて

も大切なものであるということ。ただそれだけである。「でハ、覚悟を決めてらっしゃるのですネ」 春子は胸の内に感じている、なんとも言えない気持ちを抑えこむようにそんなセリフを口にした。いくら考えてみても、そのセリフしか脳裏に浮かばなかったからでもある。「よしてくださいナ。覚悟なんて、決められるわけないでショニ。他に、どうともしようがないだけさネ」 相変わらず、兜虫を指でトントンとつつきながら穂垂が答える。その時突然、窓から強い風が吹きこんでくる。天井から吊ってある白熱電灯が大きく揺れて、畳に落ちている春子と穂垂の影をゆらゆらと大きく揺り動かした。伸びたり縮んだり、複雑に揺れる影が完全に止まりきらないうちに、兜虫が硬い甲冑を開いて中にある透明な羽を大きく広げた。まるで向かい風を捕まえるように、開かれた羽は、すぐに振動を始める。そこから先は一瞬だった。兜虫はがっちりと捕まえていたはずの穂垂の左の掌をあっさりとは放し、向かい風に逆らって窓の外に飛び出して行った。穂垂は少し寂しそうにその後を見送った。「残念でしたネ」 気落ちした様子の穂垂に、春子が慰めるように言葉をかけてやると。「しかたないさネ。まあ、こんなもんサ」 一体どういうつもりで言ったものか、春子にはわからなかったけど、けして虫だけを見ていたようには思えなかった。それは、春子のした質問のせいかも知れないし、穂垂にとって兜虫が何かの思いを呼び起こすためかも知れない。もしかすると、その双方なのかも知れなかった。なんであるにしても、春子はそのことについて深く質問する気はなかった。はっきりと理由は言えないのだけれども、そうした

方がよいと分かっていたからだ。 それに、風が止まった。この話はここまでにしようと思春子は決める。 質問しながら、本当はずっと分かっていたのだ。 真実を追い求めれば追い求めるだけ、自分を含めて誰も特をしないということに。 そのことを感情が納得しなかつただけのこと。 それを感傷だというのなら、その通りであるのだろう。 ただそれでも、春子は質問せずにはいられなかつたのだ。 そんな春子だからこそ、この先社会の底の所で、誰よりも多くの別れを経験しなくてはならなくなつたのであろうが。 春子はそれから、穂垂に同意を求めて部屋の明かり消した。 窓越しに、星空を見るためであつた。 明かりの消えた夜空には、野上と一緒に見上げた時と同じ星たちが煌めいている。 それから春子は穂垂と一緒に、夜更けまでずっと星空を見上げていた。

木戸が大陸へと出征していったから六年の月日が流れていた。その間、日本にも春子の周辺にも本当に大きな出来事があった。その中でも最大のものは、――昨年《おととし》の暮れ十二月八日に起こった出来事であろう。南雲中将率いる日本海軍空母機動部隊がハワイオアフ島にある真珠湾を奇襲して、駐留していたアメリカ太平洋艦隊を攻撃した。撃沈戦艦五隻、大破戦艦三隻、巡洋艦二隻、駆逐艦二隻、その他もろもろの損害を与えることに成功セリと大本営により発表があり、同時に大日本帝国がアメリカ合衆国との戦争状態に突入したことが国民に告げられたのである。実際には、損壊を被った戦艦の内沈没したのは二隻だけで、他は修復されて実戦に再投入されているがそのことに関する報道は一切なかった。それから二年近くが過ぎ、現在日本は太平洋を南下しつつ、戦線を拡大しながら破竹の勢いで進軍を続け占領地を無秩序に増殖させていた。当初は先勝気分に騒いでいた民心も、戦時下の極端に乏しい物資の中ではどうしても冷めてきている。戦時体制に慣れてしまっているということもあるが、新聞やラジオが庶民とは離れたところで浮かれていて、一方民心はだいぶ寒々としたものになってきていた。最近になって召集令状（赤紙）によって徴兵される男達が増えてきている。隣組が集まって出征を祝う光景は日常的に見られる風景になりつつあった。だからと言って、出征する当人や家族が嬉しいわけではない。元々軍人を志した者たちは、とっくに自らの意思で志願して軍人になっている。戦争に勝たなければ日本の未来がないと思

っているのは同じであるが、武器を取り前線で戦うということとなるとまた別ものである。それに、志願を厭うにはそれだけでない理由があった。日本の軍隊、とくに帝国陸軍には設立当初から続く悪習があった。前任兵による新兵へ対する私的制裁である。この悪習が、志願兵を遠ざけさせる最大の要因になっていた。いくら日本国全体が好戦気分に包まれようと、戦勝気分を謳歌しようと、それで誰もいわれなき暴力に耐え忍んでまで志願兵になりたいと思う人間はほとんどいないのである。それでも国民総動員法という強制力はあるにしても、本音と建前を使い分けながら、人々は日増しに苦しくなってくる暮らしの中で、どうにか日常の生活を維持していた。だが、物資は極端に不足している状況が続いている。主な食料や燃料は、まず戦争を維持するために使われた。残りを配給制度によって民間に支給されるようになっている。物資は制限され、特に嗜好品となると、通常的手段だと入手はまず不可能に近く、貸座敷においては必需品とも言える化粧品とか避妊器具、その他諸々の物資もなかなか入手しがたいものがあった。ただ、そこは良くしたもので、軍人の慰安で使うという名目でけして多くはないが、支給がまったくなくなるというわけではなかった。同じ理由から国民総動員法にもとづく徴用に対しても、娼妓にたいしては半ば意図的に見送られていた。もちろん、そこの辺りは微妙な部分でもあるので、ごく少数の例外は存在していた。貸座敷を直接管理するのは警察署であり、陸軍と警察は表立って対立していたわけではなかったが、けして仲のよい協力関係にあったわけではない。市中で何か問題を起こしても、お国のためというお題目を唱えて、法を無視しようとする陸軍

軍人を警察官が心よく思っていたはずがない。一方陸軍軍人としては、自分たちの命をかけてお国のために戦っているという気持ちがあるものだから、犯罪者を取り締まるだけの警察官はお国のための役に立っていないように見える。挙国一致を掲げていても、けして一枚岩というわけではなかった。貸座敷にとっては、戦時体制における客は軍人であり、かと言って警察の許可がなくては営業そのものができない。本来ならば揉め事のケツ持ちをしてくれるはずの極道だが、警察にも軍人にも相手でもまったく役にたたないので、できるだけことが大きくならないように気を使いながらうまく立ちまわる必要があった。さらに、目立たないようにしているが、悪名高い特別高等警察——通称特高も遊郭にはよくやってきていた。目をつけている危険思想の持ち主にの情報収集のためであるが、それが誰であれ貸座敷にとってみれば大切な客であるので教えたがるはずがない。だが、逆らえばすぐに楼主が連行されることになる。超法規的な権限を与えられている特高に、一楼主ごときが歯向かえるはずがない。それなりに優遇されている面はあったとしても、相対的にみればこの商売はけして割に合うようなものではなかった。もちろん、借金に縛られて自由を奪われている娼妓に比べたらまだましだとしても。しかし、足元を見ればきりがない。徴兵されたばかりの新兵などは、毎日私的制裁《リンチ》されながら暮らしている。彼らの日常は日本が戦争に勝利するか、戦場で死ぬまで続くのだ。もっとも、他人の痛みを感じることは出来ないし、ましてや己が不幸を嘆き暮らしている娼妓にそんな余裕はない。春子にそういうことを考

えられるだけの余裕があったのは、黄蝶楼が春子の家となっていたからだ。娼妓としての暮らしが、春子の人生そのものであったからだ。もうずい分と前には前借金の返済を終えていた。普通なら廃業手続きをした後、大手を振って大門を抜けることができたのだが、春子は黄蝶楼に残った。この時にはまた新しい娼妓を雇っていたので、あえて残る必要はなかったのだが、春子には他にいくあてがなかったのである。それに、たまに野上が会いにきてくれるので、此処を離れる理由がなかった。ただ最近では、客で来るというよりは、配属されたばかりの新兵を連れてくることの方が多く、不満といえば二人だけでゆっくりできなくなったということだろう。戦争が始まるまでは阿南の取り計らいもあって、一晚の貸切とかもしてくれたものだけど、戦争が始まってからは野上の泊まりは無くなってしまった。　まだこの時は戦争による直接的な影響というより、国家総動員法と物資の不足による暮らしぶりの変化の方が大きかったのである。　客も以前とは違って、一般の客がずいぶん少なくなり、兵隊が増えていた。大半の兵隊は極めて真面目で規律正しかったが、その分遊び方を知らず、お金もなかったのでごく短時間でことを済ませるとすぐに帰っていった。彼らは娼妓がろくに仕事をせずとも、お礼を言って帰っていくので、ひどく扱いやすい客であった。そのことが、逆に娼妓の横柄さを招くことも多々あったが、一般の客と違い兵隊が娼妓に苦情を申し立てることは皆無であった。そうは言っても、さすがに将校クラスの軍人を相手にして同じような態度をとれば、貸座敷自体が潰されかねない。よほど気骨のある極道が間に立ってくれば、なんとかことを収めてくれることがあるかも知れ

ないが、大抵の場合だと軍人との揉め事は避けたがる。表立って軍に逆らえば無事ですまないのは明らかで、それに彼らだとていつ徴兵されるか分からない。過去に軍とのいざこざがあったとなれば、私的制裁の格好の的になる。軍隊という組織は徹底した縦社会であり、横のつながりは皆無であって、他の部隊の人間に制裁はおろか口出しもできることではないが、軍に楯突いたとなれば別である。それは恐れ多くも天皇陛下に対する反逆であり、国賊と呼ばれることになる。もちろん、運良く特高警察に捕まらなければの話であるが。 軍人とはそういう思考をする。天皇陛下の統帥権は軍人にとって、自分の命よりも重要なものである。そのことを、入隊直後から文字通り叩き込まれている。それに相対する存在を許すはずがない。兵隊は極めて扱い易い楽な客であったが、同じ調子で軍人を扱うと手ひどいしっぺ返しがあるということには注意が必要だった。春子は、嫌々やっている他の娼妓と違い、自分の職業として客をあしらっていたので、楽な客だからといって手を抜くようなことはしなかった。だが、前借り金に縛られて嫌々この仕事をやっている娼妓だと、どうしても客あしらいが雑になる者も少なからずいたのである。この当時は何をするにしても戦争を中心に回っていたから、兵隊の扱いは丁重にしろというお触れは回ってきていたが、男女の秘め事を逐一監視できるわけがない。ましてや、貸座敷を利用する兵隊にしてみても、余計な揉め事を起こしたいと思っているはずがない。一部、面子を気にする高級軍人に気をつさえすれば、概ね手を抜いても、めったに問題は起こらなかったのである。また、楼主から見れば、

手を抜いているのは問題ではあるが、単価が安い軍人相手に余計な手間をかけられて客の回転が落ちてしまうのはもっと問題なので、黙認しているというのが実情であった。 実質的に社会の底辺であり、不浄な仕事とされる仕事であった。それでも自分なりの誇りを持ってこの仕事を続けている春子にとってみれば、こういう状況は受け入れがたいものがある。だからと言って、春子だけではどうにもならないことも確かであった。せめて黄蝶楼だけは、まともな仕事をしようと試してみた。新しく入ってきた娘達に、言ってみたのだが、しょせん前借金に縛られた女たち。どうしても、反感の方が先に立つようであった。ただ、春子も元々同じ立場であったわけだし、今は完全に身を引いていた穂垂も彼女らの先輩であったわけだから、根気よく説明していくことで少しずつ分かってはもらえているようであった。楼主である阿南は相変わらず、娼妓のことにはほとんど口出ししなかったもので、問題を抱えながらも娼妓にとって働き易い環境は整っていた。その結果、黄蝶楼は評判の良い店として客がつくようになっている。結果として戦争によって、黄蝶楼は災害の傷から思いのほか早く立ち直ることができたのである。 だが、所詮戦時中である。良いことばかりが続くはずもなく、黄蝶楼にも来るべき日がやってきたのである。 その日、春子はいつものように客をとっていた。夕方になっても、ひっきりなしにやってくる客の相手をするために、朝からろくに昼食もとらずに仕事をしていた。いくら経験豊富な春子とは言っても、さすがにそろそろ限界だと、客の流れが一段落した所で少し休みをもらおうと阿南に会いに行った所で、薄い紅色をした紙を見せられたのである。「きたよ」

阿南が春子に告げたのは、それだけであった。春子が見たその紙には臨時召集令状と書かれており、手書きで阿南の名前とハンコで出頭先が押してあった。赤紙と呼ばれるこの紙をもらった男子は、指定された場所までこの紙を持って出頭する義務がある。阿南は徴兵されたのだ。このことで、穂垂は嘆いたりとか悲しいそぶりとか一切みせたりはしなかった。もちろんおめでとうなどと言うことはなかったが、愚痴一つこぼすことはない。お国のための徴兵であり、出頭命令が下った以上は他にどうしようもないからである。ただ、その日の夕食は一体どこから調達してきたのか、粥飯ではなくしっかりとした歯ごたえのある銀シャリに、油の乗った鶏肉の照り焼き。それにシジミがたくさん入った味噌汁というとても豪勢な食卓であった。それも、もうこれが最初で最後かも知れないからと、穂垂はよほど奮発したらしく、自分たちばかりではなく小春や他の娼妓達にも振舞っていた。ちなみに、下男は雇っていない。この時期にはどんな貧乏人であろうが、貸座敷業に回せるほどの男手はなかった。ましてや、男子たるもの―一度《ひとたび》召集を受ければ兵隊となるべき義務がある。そうなれば、恐れ多くも天皇陛下の神兵である。貸座敷という卑しい職業とされる下男として雇っておけるはずがない。だから、雇わなかったというより雇えなかったのだ。だから、この日の夕食は阿南と穂垂の夫婦二人、若い娼妓が二人と春子の三人で迎える。「これだけ太った男は他にいないからね。ひよっとして、検査で合格しないかもサ」みんなの前で、穂垂はおちゃらけたようにそう言ってみせた。ただそれは冗談めかしてはいるが、半

分以上は本音なのだろうと春子は感じている。翌日になってすぐに、穂垂は近隣を訪ね歩き女の人をお願いして、一人に一針ずつ晒布に縫い目をいれてもらう。もし寅年生まれの女性なら、自分の生まれた歳の数だけ縫ってもらった。それで千の縫い目を作るのだ。幸か不幸か、大門の内側にはたくさんの女性がいたので、けっこうすんなりと完成する。武運長久を願うための迷信であるが、なんとしてでも生きて戦地から帰って来て欲しいと願う女のせめてもの願いが込められたものである。千人針と呼ばれる、この当時よく行われていた民間信仰の一つであった。出来上がった千人針に、護国神社のお守りと五銭硬貨を縫い付ける。五銭とは死線（四銭）を超えるところから来ている。最後に穂垂は自分の下《しも》の毛を一本抜くと、それを半紙にくるんで縫いつけた。女の不浄の物を身につけていたら弾が避けてくれるという、冷静に考えたら笑ってしまうようなまったくの迷信であったが、女達の必死の願いが込められていることの証であったのかも知れない。もちろん、そういうことに本当に効果があるかどうかはまた別の話であるが。出頭までにも幾分か時間もあったのだが、その間に阿南の友人である野上はやってこなかった。何も言わないのだが、少しでも忠告めいたものでも受けられたなら、阿南の感じている不安をいくらかでも和らげてあげることはできたかも知れない。逆に不安を煽る可能性もあったのだが。結局は赤紙をもらってから三日目の朝に、阿南は黄蝶楼のみんなに見送られて出頭していった。出頭から二週間後、阿南から手紙が届いた。お国のために云々という決まりごとの他に、南方の島への赴任が決まった伝えてきた。軍の機密事項ということで、島の名前ま

では知らされていなかった。実際、阿南が所属した部隊の赴任場所はグアム島であったのだが、知らなかったのはグアム島の名前ばかりではなかった。この時すでに日本帝国海軍はミッドウェー島沖海戦において、主力空母のうち四隻を失う大敗を喫しており、ミッドウェー島攻略戦に投入される予定だった歩兵師団が一時的にグアム島へと駐留することになったのである。そして、この師団はそのままガダルカナル島へと投入されることになる。日本軍はこの島で五千人の戦死者と一万五千人の餓死者と病死者を出すにいたった。生きたままの人間の体に蛆が湧く、そんな地獄絵図のような密林戦がグアム島では展開されることになるのである。だが、本土の人間で終戦までそのことを知る民間人は殆どいなかった。情報が集中すべき大本営ですら、完全には把握していなかったのである。こうして、日本帝国軍が転機を迎えた年に、黄蝶楼も大きな転機を迎えた。特に何をしていたという記憶のない阿南であったが、楼主のいなくなった貸座敷はやはりそれまでのようにはいかなかった。お国のために徴兵されても、国が何かしてくれるというわけではない。だから、貸座敷の主がいなくなったところで同情すらしてくれる者はいやしない。黄蝶楼に出入している化粧品屋とか、避妊具を取り扱っている業者との取引。それに、台風で被害を受けたとき、修繕費の借入金も幾分か残っていた。婦人である穂垂がいるからとからと言って、女が楼主となるとなると中々信用を得られるものではなかった。特に借入金に関しては、残金よりもだいぶ多い額の返済を求められた。完全に足元を見られていたのだが、阿南が詳細な帳簿をつけて

いたので、それを使って穂垂が交渉を続け、どうにか元に戻すことができた。ただしこれは、野上の口添えがあったおかげだと言える。立て続けに黄蝶楼に災難が降りかかってきていて、目の前の問題を解決することに一杯一杯であった。もちろん、そのことで客に粗相があればいけないと気をつけていたのだが、こういう時に限って問題は起きるもので、一番年若い夢美《ゆめみ》という名の娼妓が客と諍いを起こし、それが大事になってしまう。話を聞けば、客が無理を言ったことが原因であったのだが、たとえば春子であればやんわりとあしらうことができたであろう程度のことであった。ようするに夢美に入れあげた客が、自分の女になれと迫ってきたのである。こういう世界であるから、客が娼妓に本気になることは良くある話で、とくにめずらしいことではなかったが、たまたまその客が有力者の息子で警察にも有力なこねを持っていたのだ。夢美はまだ十九歳で、娼妓になってからも中々この世界には染まり切れず、その初々しさが逆に男達にウケている、そんな娘であった。春子からしてみれば、ろくに技巧も持たないような小娘としか思えないのだが、選ぶのはあくまで男である。そういうものなのだと見ていた。だが、結果的にそれが良くなかった。言い寄って来た男に対して、その都度あなたのことは好きではありませんと返して、真っ正直に断っていたらしい。色町の世界において野暮の極みであるが、それで離れていく男もいれば逆に守ってあげたいと思う男もいるようで、なじみの客もできていた。ところが男の中には自分と寝た女は、すべて自分の物になると思い込んでしまう人間もいる。こんな色と恋と欲望をすべて纏めて金に変えて楽しむ世界で、そんなこと求める

こと事態がおかしいと思うのだが、しごく単純な理屈がこの手の男には通用しない。他の男には金で体を売っても、自分だけは特別なんだとなんの根拠もなしに考えることができる手合いである。そんな男に馬鹿正直あんたと寝たのは金のためだと言ってしまえば、騙されたのだということになってしまう。もちろん、常識的にそんなわけはないのだが、男の常識は現実と乖離している。彼個人の世界だけの常識。一人勝手に裏切られたと思い込んだ男に芽生えた感情は怒りであった。警察署とのコネを利用し、管区の警察に圧力をかけて黄蝶楼の娼妓登録を抹消しようと画策したのである。これはある意味、台風の被害よりも甚大な災害といえた。もしそんなことになれば、黄蝶楼には廃業しか道がなくなる。だが、この危機は幸運によって切り抜けることができた。親のコネがあるからとすっかり安心していたのであろう。この男に召集令状が届いたのである。それで、すべてがふっとぶ。召集命令が届いた男に、娼妓にかまっているような余裕はなくなる。それ以来夢美に会いに来ることも、黄蝶楼に関わることも二度となかった。本人がなんと言おうと、夢美に対する思い入れというのはその程度のことだったのだ。結局男が抱いていたのは、恋でも愛情でもなく、ただの所有欲にすぎなかった。これが、これまでに黄蝶楼に起こった主な出来事であった。

今、春子が見ている座敷の窓の外には、川を行き来する舟の白い帆が見えていた。押し分けられた川面が、穏やかな日差しを受けてゆらゆらと煌きながら揺れている。わずかばかりの風を受けて膨らんだ帆から、長く伸びた影の落ちている場所は、夜の兆しを示すように底なしの闇をくっきりと映しだしていた。もう長いこと、春子はこの場所からの景色を毎日毎日ずっと見続けてきたのだけれど、不思議とその景色を見飽きるということにはなかった。それはたぶん春子がいる世界は、とても淀んだ闇の底にあるからだ。窓から見える四角に切り取られた世界が、まるで銀幕に映し出される四角い世界のように見えてしまうのかも知れない。庇《ひさし》に吊るされたままになっている、置いてけぼりにされた風鈴がその存在を主張するかのよう、風に吹かれて二三次りんりんと音を立てる。春子は過ぎ去ろうとしている何かを拒否するかのよう、その音に向かって無関心を決め込んだ。手足を伸ばしてみると、着古した薄紅色の浴衣から日に焼けずにいる白い腕が、心許無さそうに顔を出す。素肌の白が帆掛け舟に重なって、深い闇だけが水面に残って見えた。限界まで伸びきった影が、深い闇に溶けこんで双方の区別がつかかぬそうになった頃、向こう岸に見える民家にぽつぽつと黄色味を帯びた微かな明かりが灯り始める。以前は、遥かに力強い明かりだったけれど、今では星の明かりほどにも見えなかった。もちろんそれは、黄蝶楼も同じである。そろそろ客を迎え入れる準備をしなくてはいけないので、春子が立ち上がって天井からぶら下がった電灯のスイッ

チをひねる。電灯の傘の上から黒い膜がかぶせてあった。できるだけ真下のみを照らして外に明かりが漏れないようにしている。軍部によって定められた灯火管制。それは、夜間空襲において、目標にされないための配慮であった。周囲に広がらない明かりは、かえって人の気持ちを陰鬱にしたのだが、夜空を見上げるとそれが一変する。街から灯りが消えることで、美しい星空をもたらしてくれた。陽が沈んだばかりの西の空は、まだ茜に染まっていたが、東の空では待ちきれなくなった星達が煌びやかに夜空の高みで美しさを競い合初めていた。星空を見ているのが春子はとても好きで、生まれた頃からずっとこうして見ていたような気にすらなってくる。それにしても、今夜は空に流れる光の河が、とても綺麗に見える。天の河によって遠く隔てられた二つの星も、その美しさにみとれているのではないだろうか。いつでも、いつまでも、たとえこの世界から春子がいなくなってもなにも変わることなく、天の河はそこで輝き続けることだろう。あるいは、日本がどう変わってしまったとしても。そうやって春子が空を見上げていた時間は、実際にはそれほど長くなかった。西の空に薄く残っていた茜色が、完全に闇の色へと変わってしまった頃、穂垂の声が耳に届いた。「お客様、お通ししますヨ」

襖を隔てた向こう側から聞こえた声は、いつものようではいながらどこか少し違っていた。一体なんだろう、と春子は不思議に感じながら返事をする。「はい」するとすぐに襖が開かれる。あけたのは穂垂。阿南がいなくなってから、案内は全部穂垂が一人でやっている。開いた襖の向こうから姿を現したのは、思いもよらない人物であった。「木戸さん……」大陸に渡ったは

ずの木戸であった。細かった体型にはずいぶんと筋肉がつき、がっしりとして、幼さの名残はすっかり失われてすっかりと大人の男になっていたが、間違いなくそれは木戸であった。「おひさしぶりです、小春さん。自分は、今度新設される知覧飛行場に転属が決まりましたので、戻ってまいりました」 娼妓に過ぎない春子に向かって、一部の間もないような敬礼をしてみせる。見掛けは変わったとしても、愚直なほどまじめな所はいささかも変わっていない様子であった。 ただの一夜。一度だけ相手を務めただけだというのに、木戸は春子のことを忘れてはいなかったようだ。 けれど、それに関しては春子も同じで、初めて自分が男にして戦地へと送り出した相手のことを忘れることができなかった。 きっとそれは、春子が娼妓であり木戸が女を買った客であるということとは、また別のことだからなのだろう。 かと云って恋愛とも違う。この関係は、一体なんであるのか春子自身にもわからなかった。ただ、分かる必要のないことなのだろうことは分かっていたのだけれど。「さあ、入ってくださいナ」 春子が声をかけるのと拍子が重なり合うように、木戸の背後で襖がタンと子気味良い音を立て閉まった。 春子の方へと歩み寄る姿は堂々としていて、帝国軍人として相応しい。かつてのようにどこか怯え戸惑うような様子はいささかなりとも見て取れない。「お元気そうでなによりです」 春子の正面に立ち、端正な顔立ちに浮かべる笑みはその内にある自信を感じさせた。「はい、木戸さまも」 春子も、商売のものとは違った笑みを浮かべて答える。 そのまましばしの間、二人は互いを見ていたが、木戸がふと窓の外に目

をやった。「今日は、天の川がよく見えます」 窓辺に歩み寄りながら、木戸がふとつぶやくように言った。そんな木戸の後を追うように春子も窓辺に近寄りながら、大きな背中に向かって声を掛ける。「ええ、ここからはよく見えますヨ」 窓から見える星空からは、もうすっかり茜の気配は消えてしまっており、つい今しがたよりいっそう沢山の星達が互いの存在を主張しあいひしめいていた。「ベガもアルタイルもデネブもはっきりと見える。こんな夜空を飛ぶと、そのまま地球を飛び出してしまいそうになるのですよ」 木戸の隣にならんだ春子が見上げると、その瞳には星達が映ってきらきらと輝いてみえた。「それは、夏の大三角ですネ。……星が、お好きなのですか？」 春子が尋ねると、木戸は少し驚いたような表情をする。そのまま、春子の瞳を覗き込むように見ながら答える。「夜間飛行には、星の位置を読むのは欠かせないのです。それに、目を鍛えねばなりませんので、星を見るのは訓練でもあります。もちろん、星が好きなことには代わりがありませんが。それより春子さんも星がお好きなのですか？」 逆に聞かれて、春子は少し照れたような笑みを浮かべる。野上がくるたびに、星のことを教えてくれた。一人で部屋から夜空を見上げているとき、野上の言葉を心の内に思い出しながら、一つ一つ言葉にだして繰り返していると自然に覚えてしまう。そうやっているとき、自然に星のことが好きになってしまっていたのだ。だけど、こんなところで他の男の話をするのは極めて野暮なことだ。ましてや木戸は客だけど、他の客とは違う客である。粗末な扱いなど絶対にしたくはなかった。だから、春子は曖昧な笑みを浮かべたまま、とても短く返事を返す。「はい。

でも、少し詳しいくらいですヨ」 そんな春子に、木戸は何かを感じたのかも知れない。自分から春子の体に手を掛けた。すると、まるで何かに驚いたかのように春子の体が小さくビクッと動いた。胸の奥の方に何かがぶっかった。数え切れない男に体を触られた経験があるというのに、こんな感覚は初めてだった。一体何が起こったのかわからなくなったまま、春子の体は力強く逞しい腕の中にあった。「あっ、なに……」 思わず口をついて出そうになった言葉が、木戸の少し乾いた磯の芳香が感じられる唇によって出口を失った。春子の全身から力が抜け、そのまま畳の上に崩れ落ちてしまいそうになった。支えたのは木戸の腕。太く力強い腕の中に、春子のすべてが受け止められる。自分でも何が起きたのかわからないまま、奔流のように流されていく。理性も感情も一つに合わさり、混沌となって流れ始める。春子にとって、男に抱かれるという行為は仕事そのもの。口をついて出る喘ぎ声は、経験からくる男を喜ばせるための心配りであり、男の放出に合わせて気をやるのは配慮であった。例外はあるにしても、男というのは女が気持ち良くなっていると思わないと気をやれない生き物らしい。だから、春子は客に抱かれて不快感を持つこともなければ、逆に快楽を得たこともなかった。ただ、快感を知らないというわけではない。野上に抱かれるその時だけは、我を忘れてしまいそうになる。だけど、野上はどんなに春子が乱れようともけして理性を失うことはないのです、何度肌を合わせようとも客と娼妓の関係を越えることはなかった。 だが、木戸とのそれはまるで違った。すべてが一瞬にして溶けて無くなった。まるでい

きなり竜巻の中に放り込まれたみたいに、春子の心は何が起こったのか分からないまま遥か高みへと舞いあげられる。もう何が起きているのかすらも分からないまま、春子は木戸の熱くなった体にしがみついていた。不要な殻を脱ぎ捨てるように、二人の男女は着ているものを脱ぎ捨てる。両者の体はまるで一つに融け合うように、互いの体をきつく抱きしめながらそれでも貪り共に喰らいあう二匹の蛇のごとくお互いの体をまさぐりあった。そこにはもう、一点の理性も残ってはいない。化学反応を起こした水素と酸素のように、激しく爆発的に燃え上がるだけ。今の二人にとって、それ意外のことは考えられないし、出来もしない。なぜこんなことになったのか、理由など二人のどちらもわからないしそもそもどうでも良いことであった。春子は無意識でありながらも、自分の持てるすべての手技を駆使して木戸を快樂の高みへと誘う。だが、木戸も手技を駆使して春子を同じ快樂の高みへと誘った。五年の歳月は、春子ではなく木戸により大きな変化をもたらしていたのだ。もちろんそれは、手技の優劣ということではない。手技だけなら春子は玄人で、木戸はあくまで素人なのだ。比較になるはずがない。だが、木戸はあの日と違ってすっかりと男になっていた。女の体を売り物とする娼妓であるゆえ、女でなくなってしまっている娼妓に、女を目覚めさせることができるくらいに。娼妓には暗黙のうちの決まりごとがある。前借金に縛られて、社会の底に囲われている女であるからこそ、この世界で守られている約束ごとである。操を守ることが不可能であるからこそ、自分自身の誇りを保つために決められた暗黙の掟。客に惚れてはいけない。客と寝て本気で気をやってはいけない。体を

金で売っても、心までは売らない。客である男にとってはどうでもいいことでも、彼女達にとってみれば、それこそがほんとうに最後に残された心の砦。もちろん、春子だとてそれは知っている。事情はかなり違うから、そこまで深刻に考えたことはなかったが、野上との関係できちんとそれは身につけているはずだった。だが現実には、いかに理性というものがもろいものであるということ、たんに春子が知らなかっただけなのだ。何一つとして、迷う暇もなくすべてが起きた。結局の所、春子は女であった。娼妓はやめられても、女は捨てられないのだと、たぶんそれが真実であったのだ。この時には。我を忘れるというのが一体どういうことなのか、それが理解できるようになったとき、窓の外に輝いていた天の川や夏の大三角はずいぶんと大きく移動して、もうじき西に見える山の陰へと沈もうとしていた。一瞬慌てるが、春子はすぐに落ち着いてずいぶんと乱れてしまった髪を整える。そこ何分かなら焦りもしようが、もう夜明けも間近になっている。今更何をどうしたところで、どうにもできない。だったら、今宵一夜の間があるうちに、木戸と共に過ごす時間を楽しむだけのこと。そもそも、今日は仕事などしていなかった。時間貸と違って貸切ともなれば、とんでも無い料金になるが、そのお金は春子が出せばいい。前借金の返済はとうに終わっていて、それからずっと働いてきていた。溜まったお金はかなりの額になる。一夜娼妓を一人貸しきったところで、どうということもない額だ。今宵は、春子が春子を貸しきったのだ。娼妓だって、そのくらいの贅沢はしてもいいはず。ただ問題なのは、木戸である

。春子が言ったところで、簡単に納得しないだろうなと容易にさっしがつく。だが、陸軍の尉官に支給される給金からすれば、とんでもない大金であるところは間違いない。なんとか、木戸を説得しなくてはならなかった。奢るとかそういうのはもっての他である。そんなことをしても逆効果になるだけだ。絶対に支払いをすますだろう。それになにより木戸の顔をつぶしてしまう行為である。春子は娼妓なのだから、少しでも引け目を感じさせてはならない。そうやって考えているうちに、春子はよいやり方を思いついた。条件をつけるのだ。かならず、また遊びに来て下さいと。生きてかならず会いにきてくださいと。今は戦時下で、木戸は軍人だ。命令一つで、命を投げ出さなくてはならなくなる。たかが娼妓との約束が、一体どれほどの役にたつのか分からない。それでも、もし春子の肌の感触に未練でも感じてくれるのならば、生きて会いにきてくれようとする考えかも知れないではないか。男はお国の為、天皇陛下の御為に命を投げ出すことが当然の責務だと皆が言う。だからといって、女が惚れた男に、妻が夫に、母が息子に死んで欲しいと願うはずがない。そうであるから、穂垂が阿南にそうしたように、せめて敵の弾が避けてくれよと願いを込めて千人針とか護符のような効き目の程も定かではない | 呪い《まじない》めいたお守りを託すのだ。今はまだ本土に置いては、戦勝続きの報告をずいぶんと信じている人が多かったが、そんな状況であっても、戦場に男を送り出すというのは極めて覚悟の必要なことであった。大切な人のために、なにかできることがあるならば、まだ良いのだが現実にはただ待っていることしか出来ない。新聞は、華々しい勝利ばかりを書き立てて戦意高揚の気運

を盛り立てはいるし、ラジオ放送では高らかに軍艦マーチが流れていたが、それとこれとはまったくの別の話しであった。娼妓である春子が、気高い帝国軍人である木戸に心を寄せているということを、絶対に認めるわけにはいかないが、それでも無事であれという願いだけは持っていてかまわないのではないだろうか。せめて、誰にも知られないように。夜はもう残り少ないが、それでも朝日が登るまでにはまだ時間があった。春子は見苦しくない程度に髪を整えて、手ぬぐいで軽く汗を拭うと起こさないよう慎重に、木戸の腕の中に潜り込む。もう僅かな時間しかないが、木戸に寄り添い肌のぬくもりを感じることもくらいは十分にできるだろう。この先、日本がどうなっていくのか、春子にはさっぱりわからない。だからこそ、ほんの僅かな時間であっても、この時は春子にとってとても貴重な時間であった。木戸の体に寄り添い、逞しい胸板に自分のやわらかな乳房を押し当てたとき、低い声が自分の胸の奥から響いてくるような感じで届いてくる。「自分は、貴方のことをずっと忘れることができませんでした。一度お会いしただけで、貴方にとってはたくさん相手をした男の一人だと、頭ではずっと分かっていたのです。雨のように打ち上げられてくる高射砲の弾の中をくぐり抜け、複数の敵機に囲まれて無様に逃げまわっていたとき、思い起こすのは貴方のことでした」 低く空気を震わせる声は、同時に春子の胸を震わせていた。耳から聞こえるはずの声が、まるで自分の内から聞こえてくるように感じられる。衝撃を受けたニトログリセリンのように、春子の中の感情が爆発してしまいまともな思考ができなくなっ

ている。何か言おうと口を開いても、千々に乱れた思考は何一つとして言葉を紡ぐことができなかった。まるで、そんな春子を気遣うように、木戸は自分の腕の中にいる春子の体を少しきつめに抱き寄せながらさらに言葉を紡いだ。「いえ、困らせるつもりはありません。自分は母も知らなければ、父も知りません。将来を誓った相手もおりません。ですから、いつお国のために散ったとしても、誰一人として悲しませるような人間はいないのですが、それでも自分が思いを寄せた相手にだけは一言なりと伝えておきたかったのです。これは、たんなる自分の我侷なので、このまま忘れてやってください」 木戸はそれだけ言うと、本当に楽しそうにまるで屈託のない笑い声をたてた。その笑い声を聞きながら、春子のはらはらと大粒の涙を落とす。たぶん、この時、生まれて初めてだろう。娼妓であるということを後悔したのは。自分に、木戸の言葉を受け止める資格はない。けして、許されることではなかった。心が痛くて苦しくて、張り裂けそうになっているが、実際にはどうなることもない。現実には起こっていることは、とめどなく涙ばかりがはらはらと零《こぼ》れ落ちてきて、ただそれだけだった。それでも……自分の思いを伝えることが許されなくても、何かを言葉にしなくてはならなかった。「忘れません……あたし……」 大きな言葉が必要だった。自分の内にあるモノをすべて載せておけるような、そんな大きな言葉が必要だった。だけど、春子に生み出せたのは、まるで明け方の空に消えゆかんとしている星のように、頼りなく儂い言葉でしかなかった。でもそれは、春子の身の丈に合った言葉だったのかも知れない。春子はけして多くを望んではいけないのだから。 木戸は

、春子の言葉をどう受け取ったものか、ひどく落ち着いた声で春子に伝える。「まだ、夢を見ることのできる時間です。もうしばらく、自分に付き合ってください」　ぴったりと肌を触れ合わせている春子の体を、さらにきつく木戸が抱きしめる。もし、かなうならば、春子はこのまま木戸と一つに融け合ってしまったかった。だから、どれほど強い力で木戸が春子の体を抱き寄せようとも、もどかしさが募った。もっときつく、このまま息が出来なくなってしまうくらいに、強く抱きしめて欲しかった。もちろんそんなことは言えることではないし、言ってはいけないことだから。春子は、ただ黙って涙を零《こぼ》し続ける。　そして、とても長くて束の間の夜が明けた。　こんなご時世であり、最近ではめっきりと貸切の客も少なくなってしまったが、それでも客と一緒に朝を迎えるのは慣れたものである。だが、木戸と共に迎える朝は、今まで経験したことがない朝に思えた。それは夜の間みんなで楽しく夏祭りが終わった後に迎えた朝に似ているのかも知れない。どうにも表現のしようのない喪失感が自分の中にあった。だが、まだそれは現実のものとなったわけではない。　着替えを済ませた二人の下に、粥飯と味噌汁。それに二切れの山川漬が添えられた朝食が運ばれてくる。人手の足りないおり、本当は春子が運んでこなくてはならなかったのだが、穂垂が気をきかせて先にお膳を運んできてくれたのだ。　春子はこの時、支払いのことを切りだそうか迷ったが、木戸の前でそんな話をするわけにもいかず、それに木戸と一緒に時間を金銭の話で台無しにしたいはなかった。貸座敷ではなくもっと別の場所、別の立場で出会って

いたなら、そんなことを気にする必要はないのだが。でもそれだと、木戸と会うことはなかったわけし、言ってみてもしょせんは妄想でしかない。「お塩を足しましょうか？」 粥飯に味付けするための塩である。さすがに粥だけだと食べづらいので、塩を振って味付けしてある。ただ、好みで調節できるように、幾分薄めの味付けにしてある。春子が聞いたのはそのためだ。多くの場合、塩を足すことになる。「それじゃ、頼みます」 木戸は笑って茶碗を置いた。春子がそれにひとつまみ塩をかけると、木戸は再び茶碗を持ち上げる。するとまたたく間に、粥と味噌汁が綺麗に無くなった。最後に白湯を飲みながら、小さな二切れの山川漬をぱりぱりと音を立てて齧った。軍人さんの食事が早いのは、普通のことだけど、木戸の速さはまるで奇術を見ているようだった。何処かに消えてしまったのではないだろうか、と疑いたくなるような速さである。よほどあっけにとられたような表情をしていたのだろう。春子の方を見ながら、木戸は短く刈り揃えた頭に手をやって、少し恥ずかしそうに頭を掻いた。「いつもの癖で、申し訳ない。でも、美味しかったですよ」 あれで味が分かったとしたら、それはそれで大したものだが、本当のところは何を食っても同じ答えしか言わないのだろう。そうとわかっていても、春子は自分の内側が暖かくなるのを感じていた。もし、自分が作ったご飯で同じことを言われたとしたなら、本当にまるで味が分かっていないとしても、幸せになれるだろう。どれほど苦勞をしても、たった一言で救われるのだから、女というモノは案外単純な生き物なのかも知れない。もっとも、男に金で身体を売っている自分に、そんなことを言われる価値があるかどうか

はまた別のことなのだ、ということも承知していたのだが。 それでもやはり、春子は嬉しかった。「よかったら、これも召し上がってくださいナ」 春子はまだ箸を付けていなかった、自分のお膳を木戸の前に持って行って置いた。もちろん、粥にはひとつまみ塩を余分にふりかけて。本当は、おかわりできたら良いのだけど、客に出す分の配給米などありはしないので、だしている粥は農家から分けてもらった闇米である。そんなに蓄えはない。さすがに、おかわりを用意できるだけの余裕はなかった。そうは言っても、春子ですら満腹にならない程度の量であり、大の男にとって、とてもお腹いっぱいになる量でないことは分かりきっている。それでも、ご飯を振舞われて文句をつけるような人間はまずいない。春子が黙っていたら、木戸はこれ以上なにも要求することはないだろう。だから春子は自分の分を勧めてみた。朝飯を抜くことになるが、それでまた笑顔を見せてくれるのならば、春子はそれで幸せになれる。 遠い記憶の中で、春子はいつも飢えていた。何か食べることができれば、それだけで幸せになれたのだ。だから、お腹を空かせても幸せを感じることができるといことは想像もしたことがなかった。しばし春子の顔を見ていたが、すぐに木戸は笑ってくれた。「では、遠慮なく」 とうとう、再び瞬く間に食べ終えてしまう。あまりの食べっぷりのよさに、見ているだけで気持ち良かった。一度でいいから、木戸がたらふく食べている所を見てみたかった。だが、それは望んでみても、かなわない夢であるのだが。「ごちそうさまでした」 律儀に両手を合わせて箸を置く。茶碗が、風鈴のような

涼しげな音を立てた。それを合図に、というわけではないのだろうが。春子は大切なことを思い出した。一度先に下りなくてはならない。「お膳さげますから、少しまっていてくださいナ」

湯のみだけを畳の上に置いて、木戸の前に二つ並んだお膳を両手に持ってそういった。本来なら、客が帰ってから片付けるのだけど、今はこれを口実に使うつもりであった。木戸がうなずくと、春子はすぐに両手に一つずつお膳を持って座敷を出る。一階まで降りると、一旦流し台にお膳をそのまま載せておいて、すぐに穂垂を探す。といっても、今の楼主である穂垂がいる場所に限られている。すぐにみつけることができた。「お姉えさん。少し、お話があります。よいですか？」穂垂を見かけると、すぐに本題にはいる。話づらいことではあるが、こういったことを持ってまわった言い方したところで、どうにもなるものではない。ところが、穂垂は春子の顔を見たたん、ワケ知りげな笑みを浮べてこういった。「御代なら、もう貰ってますヨ」不意をつかれたのは春子であった。まだ春子は何も言っていない。「えっ？」思わず言ってしまった春子の言葉に、穂垂はもう一度同じことを繰り返した。「御代なら、もう貰ってますヨ。お泊りの代金、全額前金で」普通貸し座敷でお代は後払いだ。というか、前金で貰うというのは今持って聞いたことがない。というのも、貸し座敷では時間が延びればそれだけ沢山お代が貰える。前金で貰っていたら、それができなくなるからだ。強欲な色町の世界において、前金で受け取っておいて、それだけですまそうなんて良心的な店は存在しない。さすがにそれは、黄蝶楼も例外ではない。「前金？ 昨日のうちに、ですか？」

今朝は夜明け前から、ずっと二人で起きていた。渡す暇なんてあるわけない。となれば、昨日しかない。すると、すぐに穂垂が種明かしをしてくれる。「あの後、野上様がお見えになってネ。今日、泊まりになるようなことがあれば、これで支払ってくれとお金を置いてかれたのサ」春子は不意をつかれてしまい、呆けたような顔になった。というのも、この所あまり顔を見せなくなっていたからだ。忙しくなるようなことを言っていたし、こういうご時世だから当然だとも思っていた。だから、まさか木戸が来たその日に、野上までもが訪れてくるとはまったく想像していなかった。いつもなら、先に客が入っていても大抵の場合は待っていてくれた。穂垂の方も木戸は特別な客であるので、後の客がつまっていなければ時間をずらしたりとか、ある程度の便宜を払っていた。なので、やってきてくれたのに会えなかったということは殆ど記憶にない。せっかく野上が来てくれたのに、会うことができなかった。春子は思考が一瞬凍りいてしまう。自分が何をどうすればいいのかが思いつかなかった。「どうすれば……」

停止した思考をそのまま言葉に乗せて、零れるように口から出た言葉は、穂垂への質問というより自分への問いかけであった。なぜかは知らないが、自分がひどく悪いことをしてしまったように感じている。だが、それがなぜなのかはさっぱり理解できない。もちろん、自分がどういう仕事をやっているのかを考えれば、そんなのはひどく筋違いな感情に過ぎないのだが。「だから、お代はもらってるから、早いとこ木戸様をお迎えしてきなさいナ。木戸様も忙しい身なのだからネ」言われて、春子は吃驚《びっ

くり》してしまう。まったくその通りで、急いで戻るつもりが、ずいぶんと待たせてしまっている。本当なら、もう黄蝶楼を出してしまっても不思議ではない時間だ。自分の気持ちはとりあえず封印して、急いで二階の座敷に戻った。「朝の景色も綺麗ですね」 褐色の軍服を一部の乱れもなく着こなして、両手を後ろ手に組んで窓辺に立ち外を見ていた木戸が、後ろを振り向かずに春子に話しかけてきた。春子はそのまま木戸のすぐ後ろまで近づくと、木戸が見ている光景と同じ光景をみつける。朝の日差しをうけて、きらきらと水面が輝やっていた。早出の漁に出ていた船は、もうとっくに戻っていたらしく、水面に映った太陽を切り裂き進む船はどこにも見当たらなかった。今は満潮時にあたるようで、最下流にあるここら辺りの水位はかなり上がってきていて、川の流れもなく湾岸特有のとても緩やかな波が水面をゆっくりと通り過ぎてゆく。川の風景なのに、海の穏やかさがある朝の光景には、いつもとは違った不思議な美しさがあった。もちろん、春子にとっては初めての光景ではないが、木戸の言葉を聞いた後に改めて見てみると確かに、いつもとは違った美しさを感じられたのである。春子はさらに一步踏み出し、木戸の横に並んで立つ。すぐそばから木戸の顔を見上げる。とても端正で男らしい木戸の横顔に、朝日がさしてとても眩しく春子の目には映った。美しいと思う。星を見て感動したように、春子は木戸の顔を見て、心の内に熱いものを感じていた。男の人の顔を見て、そんなふうに感じることもあるなどと、春子はこれまで思ったことはなかったし、想像したこともなかった。だから、すっかりと自分が見とれてしまっていることに気付かなかった。そんな春子に、果た

して木戸は気づいているのだろうか。「それでは、いきましようか」　普通に春子を誘うように、木戸が言葉を口にする。

「えっ？　……ええ、そうですネ」　一瞬、春子は何を言われたのか良く理解できなかった。少し間が空き、どうにか理解することが出来るだけの落ち着きを取り戻したとき、ようやく頷いた。本当ならば、春子が口にしなくてはならない言葉であったのだ。野上と一緒にいる時よりもずっと、木戸と一緒にいる時は仕事に徹することが困難であった。それは野上がそうしたように、春子との距離を置くことをしていないからだろう。それにしても、お粗末としかいいようがない失態である。　春子は照れ隠しのよう、木戸の左の二の腕に自分の右腕をからめる。今まで帰り際の客にすらこんなことしたことはないのだが、反射的にしてしまっていた。ことさら身体を寄せて、階段までのとても儂い距離を並んで歩いた。外と一緒にこうやって歩けたなら、と思うのはたんなる春子の妄想であるが、ほんの一瞬だけそんな気になることはできた。狭い階段はさすがに一人づつしか歩くことができないので、先に木戸が降りて後から春子が続いた。「これは、木戸さま。おはようございます。今朝はもうお立ちでございませうか？」　下に降りた木戸を穂垂が待っていた。深々と頭を下げながら、あいさつの後に質問をする。「おはよう御座います。まだずいぶんと余裕はあるのですが、飛行場までは結構遠いと聞きましたので、少し早めに出たいと思います」　大門を出て少し歩けば路面電車か市営バスが行き交う大通りに出る。そこから駅に行って汽車に乗り換えるのだ。飛行場のある知覧までは汽車で

向かうことになる。「承知しました」 穂垂は頭を下げると、表玄関に案内する。それを見て、木戸が不審がる。「すみません。自分はまだ代金を払ってはおりませんが？」 はっきりと聞いてきた。真っ正直な木戸らしく、いささかも躊躇のない質問である。「はい。お代なら、もう戴いておりますヨ」 春子に言ったのと同じように、穂垂が答える。だがそれで、木戸の不審はさらに増した。「支払いが済んでいる、ということですか？ 一体、誰が？」 木戸にしてみれば、当然そうなる。「夕べ、野上さまがお見えになられて、その時一夜分を戴きましたのですヨ」 穂垂はとくに勿体をつけることなく、簡潔に答えた。

それを聞いた木戸は頷いたが、納得した様子ではなかった。「野上隊長がお見えになられたのか……。しかし、自分は……」 どうにも、浮かない表情の木戸を見て、穂垂はすぐに何かを察したらしい。春子の方はと言えば、木戸があまり嬉しそうではないと言う事はすぐにわかった。ただそれは、生来の真面目さゆえだとしか思わなかった。「木戸さまが、気にする必要はありませんヨ。野上さまは『もし泊まりになるようなことがあったなら、その時はかならずこれで支払いを済ませるように』と言いなさって、お金を置いて帰られたのですからネ」 穂垂は木戸の顔を見た後、ちらっと春子を覗き見る。意味ありそうな合図に見えたのだが、今ひとつわからなかった。すぐに、木戸も春子の顔をちらっと見て言う。「なるほど、中隊長殿らしい。そういうことなら、ここは受け入れるしかないですね」 穂垂はそれを聞くと、うなずいた。「そうしてくださいナ。では……」 二人の意味ありげな会話が一体なにを意味するのか春子には分からず、す

っきりしなかったが、穂垂が玄関へと案内を始めたので春子はそれどころではなくなった。急ぎ靴の準備をしなくてはならなかったからだ。本来なら下男の仕事だけど、災害から後黄蝶楼では奉公人がいないままなので客の送り出しのあれこれは娼妓の役割となっていた。ちなみに、ちなみに迎入れるのは表番をしている娼妓の仕事である。自分の客なら、そのまま座敷に入って代わりにお茶を引いている娘が表番に出るか、誰もいなければ穂垂が表番をする。今は、早朝なのでまだ誰も表番はやっていない。春子は先に回って靴箱の中に軍靴を見つける。軍靴はくたびれていたが、丁寧に手入れがされておりとても綺麗であった。軍靴を三和土《たたき》に並べて置くと、木戸はすぐ靴に足をとおす。陸軍の靴は長靴なので、靴べらは使わず踵を引っ張り上げるようにして履く。靴紐は脱げたりずれたりしないようにきつく縛った。

「お預かりしていたお荷物です」　あまり大きくもない背嚢を穂垂が差し出すと、木戸は軽く敬礼をしてから受け取った。「あの……」　言いかけたのは春子であった。さっきからずっと言い出そうかどうしようか迷っていたことがあった。決心もつかぬままに木戸が去ってしまうという焦りが生まれ、意識せぬままに言葉が漏れてしまった。「いかがされたのです、小春さん？」

春子の様子がおかしいと思ったのだろう、怪訝そうに木戸が尋ねる。この時はまだ迷いは春子の内にあった。だが、余計な時間をかけてしまっは木戸の迷惑になる。それになによりこのまま木戸が帰ってしまったら、春子は絶対に後悔することになるだろう。　だから。「また、来てくださいますか？」　自分は

娼妓、木戸は客。その関係であるならば、いたって自然のやりとりであったはずだ。そして、今も間違いなくその関係であるはずであった。お金のために、自分という商品売る。お金のために、また買ってもらう。春子にとって、自分は商品。ただそれは、肉体だけであればこそ。そこに気持ちが付属してしまったら、もうそれは商品としては不良品。商品ではなく、女になってしまうからだ。そして今春子は、商品としては欠陥品となっていた。

一方そんな事情など木戸には分かるはずがない。ゆえに、一切迷いなく答える。女に対する心遣いとは別に、ごく自然に気持ちを伝えることにためらいがない。野上が、いつでも最後の一步を踏みとどまるのに比べて、木戸は迷いなく最後の一步を踏み出す、そんな男になっていた。「もちろんですよ。お金もないしこれから先忙しくなりそうなので、よくはこれませんが、かならず貴女に会いにやってきます」

そう言って、木戸は端正な顔になんとも気持ちの良い笑みを浮かべて敬礼をした。それを見た春子はなんだかとても嬉しくなり、自分も見よう見真似で敬礼をしてみせる。するとそれを見た木戸の笑がさらに深くなった。今日はこれでお別れだというのに、春子はたいそう楽しい気持ちになる。ついさっきまで感じていた、夏の終わりのような物寂しさなど何処かにいってしまっていた。「お気をつけて」

敬礼をしたまま春子が送り出すと、木戸は玄関の前でもう一度敬礼をして北を目指して歩いていった。春子は、木戸の姿が見えなくなってからしばらく後まで、その背中を見送っていた。

仕事はさらに忙しくなっていた。黄蝶楼だけでなく、どこの楼も同じような状況だった。木戸との思いがけない再会をした頃は、まだ夏の名残が残っていたのだが、一人でいると寒さが骨まで滲み込んでくる季節になっていた。ただ、それをろくに感じられるような余裕はなかった。ほとんど客足は絶えることなく続いている。その大半が、戦地へと向かう前に与えられた特別休暇を使って訪れた兵隊さん達であった。お金が無いので、泊まりの客もいなかったし、また長時間かける客もいなかった。その結果客の回転が早くなり、とても慌ただしく体力的にもきつい日々が続いていた。この年ミッドウェー海戦において帝国海軍が主力空母四隻を失うという痛恨の大敗をきっしている。以後連合艦隊は、戦線が伸びきっていた太平洋各地で次々と敗戦を繰り返しており、失った兵員を補充するためにさらに多くの動員をかけていたのだ。戦地へと赴く兵士の多くは女の肌が恋しくなるらしく、それは必死になって抱きついてくる客がほとんどだった。さらに、戦地へと同行する慰安婦の公募も行われており、貸座敷とは比較にならない高給に惹かれて戦地へと赴く娼妓も増えていた。さすがに前借金に縛られた遊郭の女たちにそんな選択肢はなかったが、私娼ともなるとこの危険な話に飛びつく女も少なくはなかったのである。公娼の数がほとんどかわらなくても、私娼の数は確実に減っていた。だから、その分だけ貸座敷を利用する客が増えることにつながる。最近になって物資の不足は益々ひどくなってきている。配給米も減らされ、民間の経済活動はほとんど息が止まっ

たような様相を呈していたけど、農家と貸し座敷は戦前の大不況よりも、ずいぶんと景気がよくなっていた。それに普通ならば、若い女であっても動員法によって徴用され工場とかヨイトマケでの労働に従事している。だが、遊郭から徴用された女はいない。春子は親に売られてからずっと、遊郭の中の世界で生きてきた。だから、正直大門の向こうに行ったとしても、自分が生きていけるのか自信がなかった。それに春子にとって、外の世界についての思い出は、飢えと恐怖しかない。どんなに仕事が忙しくなったとしても、ここにいる限りちゃんにご飯は食べれたし春子を気絶するまで殴る男はいなかった。外のことは客と話ていれば自然とわかる。ヨイトマケに駆り出された女がどんなことしなくてはならないのか、ということも話に聞かされた。男を良い心持ちにすることはできても、春子の小柄な身体では、土嚢を担いで運ぶことは無理だろうと思った。ここのところこの辺りでも防空壕の設営のため、戦争に駆り出された男たちに代わって働く女たちの姿が見られるようになっていた。働いている女は、沖之村の外からやって来ていたが、中の女とは一切口を聞こうとはしなかった。指示に従って働いてはいても、娼妓が逃げこむための防空壕を設営しているのだとなると、内心忸怩たるものがあつたのであろう。陽が登ってすぐに働いて、陽が沈むまで続く。手ぬぐいを頭からかぶり、日よけをしてはいるが、顔は日に焼けて真っ黒になってしまっていた。ほとんど見た目では男とかわりなくなってしまうている徴用された女たちを見ると、自分も同じようになりたいと思う娼妓はまずいないだろう。これでは、まったく客がつかなくなってしまう。昔は、客をとりたくないから、自分の顔

を自分自身の手で傷をつけた女もいたそうだ。だが、大正が始まってから後そんな女はまずいない。忙しければ、それだけ早く年季があけることになる。もちろん、中には悪質な貸座敷業者がいて問題になることもあった。だが、あまりひどいことをやるようだと貸座敷登録を抹消されてしまうので、今そういうことをする貸座敷業者はいない。むしろ、娼妓に客を取ることを拒否されて立ちゆかなくなってしまう貸座敷もある。そういった楼主が自殺したという話も珍しくなかった。世間一般の常識からすれば、身体を売るという行為は最低で、辛い仕事だと見られている。だが春子から見れば、ヨイトマケの仕事の方がよっぽど辛いように見えるのだ。だから、どうやら娼妓には徴用がかからないらしい、ということを知って内心ありがたいと思ったのは確かである。

だが、それはこの時の春子が、本当はまだ何も知らないでいたからこそ、思えることであつた。今日本は、負け戦をしているのだと。そのことの本当の意味を、実際にはまだわかつてはいなかったのだ。　いずれにしても、この年を堺にして日本国内の様子は変わってゆくことになる。それまでは、春子にとって戦争というものは、仕事が忙しくなったというくらいの認識でしかなかったが、徐々に身近なものとして感じられるようになって来ていたのである。戦争が.....いや、負け戦が一体何をもたらすのか、ということ。もちろんそれは春子だけの問題ではなかったのだが。　ろくに休む暇もなく日々を過ごしていくうちに、どんどん夜が長くなり益々忙しくなっていた。正月になると娼妓達が帰郷したり、思い思いに僅かばかりの休みを楽しんでいても、す

ることがなくなってしまった春子はより一層寒々と感じられる休
みを過ごした。いつもなら黄蝶楼で働く娼妓の中で、一人何処に
も行くあてのない春子は穂垂や阿南と一緒に過ごしたもののだが、
今年は阿南が兵隊に取られてしまったので女二人だけの火が消え
たような正月になってしまった。だから、休みが明けて忙しい毎
日が始まったときには正直ほっとしたことも確かであった。 と
はいっても、姫はじめとって縁起をかついで訪れる客もいたが
、正月明けそうそうにくるような客はそんなに多くはなく、以前
の忙しさを取り戻すまでには数日かかったが。 さらに厳しさを
増す寒さに、一年を通してあまり降ることのない雪がちらちらと
舞い始めた頃、あの日からまったく顔をみせていなかった木戸が
突然やってきた。「遅くなりました」 白い息を吐きながら、
木戸が端正な顔を綻ばせる。「.....お帰りなさいませ」 春子
は少し照れながら、そんなことを言う。不安気に背の高い
木戸を見上げる春子の頭を、木戸が可笑しそうに笑いながら軽く
撫でて答える。「只今帰りました」 それは、二人だけのちょ
っとした儀式であった。 座敷に上がった木戸は、火鉢の前を通
りすぎて障子を大きく開け放つ。すると、外の冷え切った空気が
座敷いっぱい広がった。「うん、やはり此処はいい」 冷た
い空気を心地良さ気に全身で受け止めながら、窓辺に立った木戸
が感慨深げに言った。「ここから見える景色は、けっこう飽き
ないんですヨ」 冷え始めた身体を木戸のそばによせながら春子
が話しかける。本当はとても控え目な発言で、初めてここから外
をみたときから一度も飽きたことがなかった。「この前来たとき
には、そこの桜の木はまだ青々としていたな。もうすっかりと葉

が落ちてしまっていて、向う岸の景色が良く見える」 川岸にまばらに植えられた染井吉野が、夏の間はずっと青々と葉を茂らせ、土地柄もありけっこう秋が深くなるまで葉を残してはいるが、さすがに雪がちらつく季節ともなるとすっかりと葉を落としてしまっていた。冬が過ぎれば桜色にそまるのだけど、それまではいかにも寒そうに枝ぶりだけを見せている。葉がない景色は、なにやらひどく凍えそうな心持ちにさせられるが、木戸が言ったようにその分もっと違う景色を見ることができるので、この光景はこの光景で春子は嫌いではなかった。「ちょうど今は、あの木の向こうの大橋が良く見えるのでス」 明治時代後期に県内一の川幅の川にかけられた石橋のうち、川下から数えて二番目の橋で四連の美しいアーチが特徴である。ちょうど桜の木の向こう側に見えるその橋は、当然ながら冬場のほうがここから良く見ることができた。この前の台風で、水切り石が破損したままになっているのが気がかりだった。「うん、そのようだ。葉の落ちた木が、苔の乗った石組みに良い具合に見える」 春子のどんどん冷え始めた身体を、左手で抱き寄せながら木戸が春子が感じているのとまったく同じ感想を口にした。「はい」 うなずきながら、春子も木戸の体温をしっかりと感じられるように、必要以上にぴたりと身体をよせていく。こんなのは、まったく客にするような、あるいはして良いようなことではなかったが、木戸を相手にすると自然とそうしてしまう自分がいた。甘えているのかも知れないが、意識せずにそうしてしまっているのだから、春子にはどうすることもできない。娼妓としては失格なのだろうと考えれば

理解できる。でも、そもそもそういう意識そのものが、どこかにいってしまっている。だが、我に返る時はすぐに訪れた。春子は、このまま木戸の体温を全身で感じながら、とても短い時を二人で絡み合い過ごすのだと、すっかりとそう思っていた。木戸の次の言葉で春子はすぐに現実に引き戻されることになる。「今日は、どうしてもお伝えしなくてはならないことがあって、ここに来ました」 窓辺に立ち、春子の方に向き直った木戸が、とても改まった口調で話しかけてくる。あまりに急なことで、春子は戸惑ってしまい何も言えずに木戸の瞳を下からただ黙って見上げる。あまりに、真っ直ぐに見つめたからだろうか、木戸はついで目を逸らしてしまうが、奥歯を噛み締めるようにして、今度ははっきりとした意志をその目に宿して春子の目を見る。そして、春子の目の前で木戸はまるで一本の鋼の棒のように姿勢を正して告げる。「先週、野上一史少佐殿は、南方洋上において多数の敵艦載機と遭遇。飛行部隊は勇戦いたしましたでしたが、数の劣勢はいかんともしがたく部隊長殿は撤退を決断、自分がしんがりとなり部隊機を撤退させることに成功いたしました。しかし、ご自身は機関砲を受けられ帰投はかなわなかったそうであります」 その話を聞いても、春子は一体どういうことなのか理解することができなかつた。急に頭のどこかが麻痺してしまったようである。「なにをおっしゃっているのかわかりません」 だだをこねる子供のように、小さく頭を振りながら春子がそんなことを言うと、木戸は直立不動の姿勢を維持したまま今度はもう聞き間違いようのないはっきりとした言葉で春子に告げる。「南方洋上にて、野上部隊長殿は名誉の戦死を遂げられました」 もう春子

にその言葉から逃れる術はなくなっていた。小さな体を木戸の傍らで硬直させている。まるで瞬時に凍結させられたように、身じろぎひとつしない。ただ、か細い胸の奥には、烈風が吹いているであろう。柳葉のような腕をぎゅっと白くなるくらいきつく握り締めた両手が、小さく震えている。何かと必死に戦いながら、それでもどうにか春子は次の言葉をつむぐ。「どうして……」

春子が最初に野上と会ったのは、始めて娼妓になったときである。春子にとっては初めての男であり、夜空に散らばる星屑のように、常には傍らにいなくともいつも春子を見守り続けてくれる存在であった。戦争が始まると、陸軍飛行部隊の隊長である野上はいつ前線へ飛ばされるかわからない。前線へ配属されるということは、いつだって戦死の覚悟がつきまとう。そのことは、幾度となく野上が言っていたことであり、春子も随分と前から覚悟していたはずのことであった。しかし、出会ってから七年以上もの時間が過ぎる中で、決意は磨耗してやがて違うものにすり替わってしまっていた。それは信頼のようであり自信のようでもある。あるいは、幻想と言ひ換えてもいいかも知れない。野上は絶対に死なない。どんなに逢えなくなる日が続いても、ずっとずっといつまでもずっと、野上は生きて春子に逢にきてくれる。いつしか、春子はそんな妄想を現実のものだと思ふようになっていたのであった。それは春子の単なる幻想なのだと、木戸が現実を告げたのだ。「野上隊長はここを訪れた翌日に戦地へと飛び立たれました。自分が赴任したのと入れ替わりとなり、戦地へ配属されたようです。自分も、野上隊長とお会いできたのは、その日の僅

かな時間だけでした」 木戸は事実だけを淡々と告げる。だけど、それを聞いた春子にとっては、穏やかに受け入れられるようなことではなかった。あの日、野上は最後の別れを春子に告げる来たのかも知れない。純粹に仕事とは言えなかったあの日の夜。一晩中木戸に溺れてしまっていたあの一夜。お金だけを置いて立ち去ったのは、野上が残していった春子への最後の贈り物となった。 声が出なかった。嗚咽を漏らす資格もないと思った。春子は、野上からとても沢山のものを貰い続けてきた。初めて出会ったその日からずっとだ。なのに春子は、野上のためになにか一つでもしてあげることができたのだろうか？ ただ貰い続けて、いつだって貰い続けて、野上の好意だけを受け止めてきて。たとえば野上が客で、春子は娼妓にすぎないのだとしても、野上のくれたものはあまりに大きすぎてとても対等な関係とは言えなかった。 春子は奥歯を食いしばり、嗚咽をかみ殺しながらも、あふれ出す涙をこらえることはできなかった。春子には泣く資格はないというのに。春をひさぐ女の涙が、野上を汚してしまいそうで怖かった。 ただその場に立ち尽くし、声を押し殺して涙を溢れさせ続けている春子を、木戸は自分の腕の中に包み込んだ。今日やってきたのは、事実を告げるため。客としてやってきたわけではないのだが、現実には想像していたより厳しいものであった。野上と春子が普通の客と娼妓の関係でないということは、十分承知していた。だから泣くようなことはあるだろうと想像していた。けれど、ここまで悲痛な泣き顔を見せるとは思っていなかったのである。まるで、体の一部をむしりとられていしまうような、そんな苦渋に満ちた泣き顔であった。たとえば恋人が死んだとし

ても、こんな悲痛な泣き方はしまい。同時にそれは、木戸の中のやわらかな部分を針先で突き刺されたような気にさせる。そのまましばらくの間、二人は立ち尽くしていたが、春子が木戸の腕の中で徐々に緊張を解き支えられるようにその身をあずけることでまた新たな時が始まった。「ごめんなさい。時間があるのに」　高い位置にある木戸の顔を、腕の中から見上げて春子は言った。言いながら、木戸の服のボタンをはずしにかかっている。軍服特有のごわごわとした生地を指先に感じながら、硬いボタンをけっこう巧みにはずしていく。ボタンをはずし終えて上着を脱がしてしまおうとした頃、木戸が思わない行動に出る。春子の腕を掴んで、その行動を押し留めたのだ。「すみません。今日は、そういう気にはなれない」　はっきりと行為を拒絶する言葉に、春子は呆然とする。「でも……、あたし……」　行為を拒絶されたとき、春子にはなにも出来ることはなかった。春子は娼妓でしかないのだから。立ち尽くしている春子に、木戸は手にした背囊から取り出した一冊の大学ノヲトを差し出した。「隊長殿からお預かりしていたものです」　春子は反射的にそれを受け取るが、何も考えることができずにいる。「自分は、これで帰ります」　その声を、春子は遠くのほうから聞こえてくる遠雷のように聞いていた。恐ろしくもどこか現実味が欠けている。春子の心が、身体の中から抜けてしまっているような気がしていた。なにも感じ無くても、それでも今日春子の中の何かが激しく軋んでしまっていることだけは理解できた。目の前にある木戸の背中がひどく遠くに感じられた。「下まで……」　座敷をでてゆこ

うとしている木戸を、後から追いかけて春子が言いかける。木戸にならんだところで、その腕に自分の腕をからめてみたい欲求に駆られたが、結局触れることもできないまま春子は下の階へと案内した。結局この時は、何もすることができなかった。ただ、代金は春子は受け取ることを頑なに拒みとおした。もしこれを受け取ってしまったら、春子は自分のことが一生許せそうにないからと頭を下げて木戸に頼み込んだのである。外に出ると、より一層寒さが厳しく感じられた。遠ざかってゆく木戸の後ろ姿を隠すように、雪が舞い降り始める。雪の中に消えていった木戸は、その年ずっと黄蝶楼にやってくることはなかった。

野上が戦死してから一年余りが過ぎ去っていた。すでに春子は二十八歳になっており、この年には二十九歳となる予定であった。娼妓としてはもう高齢と言っていい年齢であり、自分より年下の客が多く見受けられるようになっていた。それは春子が年をとったからというばかりではなく、二十歳にならない未成年の客が増えていたからである。戦局は去年から悪化の一途を辿っており、それにともない物資と兵力の不足が深刻なものとなっていた。物資の不足、特に燃料と資材の不足を補うために、家庭にある金属類の生活用品の供出が義務付けられたり、ただでさえ少なかった米の配給量がさらに制限されるようになってきた。『欲しがりません勝つまでは』というのを合言葉に、乏しい物資でどうにか戦争を維持していた。その一方で、広がりすぎた戦線を維持するための深刻な兵員不足も抱えており、さらに各地での敗戦が続いてくると消耗した兵力を補充することも急務となっていた。働き盛りの男には、すでに赤紙が届いていることが多く、今まで通りの招集ではもはやどうしようもない状態になってきていた。それを埋め合わせするために、大本営はまだ成人になる前の男子を招集の対象に加えることに決めたのである。すなわち、学徒動員であった。学徒動員が施行されたことによって、貸座敷にやってくる客層も様変わりしてきた。健康な若い青年たち、あらかた国内から姿を消してしまっていた。徴兵検査において、甲、乙種合格の判定をくださった男子は当然として、丙種と判定されこれまでなら不合格となるはずだった男子も徴兵の対象とさ

れた。基本的に結核のような伝染性の病気でないかぎり徴兵されたのである。次々に戦地へと出兵された結果、国内から働き盛りの成人男性の姿は姿をけしており、その影響は遊郭にも及んでいた。絶え間なく戦地へと送られていた兵隊は、日を追うごとに少なくなっている。程なくして学徒動員が始まり、再び戻ってきた客層は以前とは変わってしまったのだ。さすがにこの年齢の客ともなれば、一人でやってくるということは逆にめずらしく、年上の前任兵に連れられたり、中には男親に連れられてやってくる少年も少なくはなかった。戦地に赴くのに、子供のままでは忍びないというのが主な理由であり、そのため女を抱くのは初めてという客を相手することが多くなった。客とはいっても相手は少年であり、しかも次の日には戦地へと赴くような人間ばかりなので、中にはあからさまに手を抜く娼妓もいた。囲われた身とはいっても、色事は慣れたものであり、童貞の少年を手玉にとることくらい難しい話ではなかったし、そもそも戦地に行ってしまうえば苦情など言えなくなる。帰ってくる前に、前借金を返済して廃業してしまえば帰って来てもそこには自分はいないのだからなおさら関係ない。それに、戦地へ行った兵隊さんが生きて帰ってくるという保証もないのだ。だから、学徒動員で徴兵された少年兵は、娼妓によってはひどくありがたい客となっていた。遊女として売られた女は、往々にしてこの世の中で自分こそが一番不幸な存在だと思っており、それは一概に否定できないという現実もあったので、彼女達が自分自身の行動を正当化するための理由に使われているようであった。もちろんそういったことは、春子の考え方とは大きく異なっている。そもそも今の自分の境遇を

不幸だと思ったことがなかったからということもあるだろう。なにしろ春子は自分の意思で、娼妓という商売を続けているのだから。戦地へと向かう少年兵のことを、楽な客とみなす娼妓がいれば、ごく一部ではあるがなんとも言いようのない気持ちを抱いて相手を務める娼妓がいたのも事実である。まだ幼さが残る少年達が、明日はお国のためにと日本を離れて遥かな戦地へと旅立つのだ。この一戦、自分の命をかけて戦って、日本の勝利のための礎となりますと言い置いて父や母と別れを済ませた少年たちである。若さに満ちあふれたその肉体には、力強い生命力がありありとその内に存在していた。戸惑いながらも、必死になって女を抱こうとする様子は、あくまで死を拒み続けようとする命の叫びのようにも感じられた。だが、彼らは愚痴一つ言う事なく礼儀正しく礼をして去っていく。そんな少年たちを相手にするのだから、心ある娼妓ならばそれなりの覚悟が必要であった。もちろん、覚悟を決めたからといって、なんらかの答えが見つけれられるような問題ではないのだが。春子にとっても少年兵の相手というのは、単純には割り切れるものではなかった。客としてやってくるのだから、一々気にしていても仕方ないと頭では割りきろうとするのだが、どうしても自分を納得させることのできない何かがあった。自分の身体を売るといふ、ほとんどの女には耐えられない商売をやっているながらも、春子にとってはけして嫌なことばかりではなかったのである。だが、軍人相手だと中々好き嫌いを言っていられない。相手にとっては、自分が人生最後に抱く女となるかも知れないからだ。考えまいとしても、つつい考えて

しまう。それはたぶん、野上や木戸の存在と無関係ではないだろう。ましてやそれが、学徒動員によって引っ張り出された少年ともなれば尚更である。まだ、年が近ければよいのだが、十才も年が違えばひどく幼く見えてしまう。女を知らない少年を、せめてきちんと男として送り出してやりたいと願ってしまうのである。娼妓である春子にできるようなことは、そのくらいしかないのだとそう思っていた。結局誰に言うこともなかったが、春子を抱くときのすまなそうな、それでいて必死になっている幼さが残っている顔を見ると、何かしてあげることはないのだろうかと考えるようになっていた。戦地というものがどういう所なのかは、人づてに聞くばかりでどういう場所かはわからない。それでも、女の肌の温もりを知っていれば、ほんの少しでも生きて帰ってくるための気力の足しになるかも知れない。そうも考えたのである。ただ、日本が挑んだ、あるいは挑まざるをえなかった戦争というものは、春子が考えているよりずっと過酷で救いのないものであった。そのことを春子が知るのはもう少し先のことであった。その時がやって来る前に、春子にはしばしの春が訪れる。昨年のように、とくにめでたくもない正月が過ぎ、さらにひと月が過ぎた頃。年に数日くらいしか積もることのない雪が、世間を白く染めた。薄曇りの空を見上げると、無数の真綿が空いっぱいに浮いているかのように見えた。まるで世界中の音を吸い込んでしまったかのようにしんとした空間は、透明な氷晶の中を覗き込んで見える風景のようであった。素肌を晒していると、痛くなるようなきつい寒さは客との距離を自然と縮めてくれる。一年のうちで最も寒さの厳しい今は、男と女が心も体も自然と寄り添うの

に最も相応しい時期であった。 そんな季節の中で、春子にとって忘れられない人を思い出すのもごく自然のなりゆきかも知れない。もちろん、普段だとして忘れたということもないのだが、ただ思い出すのと違って肌が人恋しくなるのだ。客に売り、見知らぬ男にまさぐられるそんな肌であるが、それでも春子の想いは誤魔化しきれないものらしい。いつもならば、なんにも感じることはないというのに、まるで銅像にでも触れられているかのように感じる時がある。冷たい痛みが素肌を貫くのだ。そういう時には、耐えてやり過ごすしかないのだけど、ただそういう時に限ってなぜか時間が間延びしてしまう。拷問とまでは言わないが、苦痛を伴う時間であるのは確かであった。ただ、ひとつだけ付け加えておくべきなのは、学徒動員された兵隊さんを相手にすたときには、そう感じたことはなかったということ。それはたぶん、必死になって相手しなくてはならなかったからなのだろう。 だけど、春子がどうあれ日常というものは過ぎ去っては、またやってくるものだ。たまに、空から降りてくるものが世界を白く染めてしまうように、違う景色を見せたとはいっても、それだとして日常の一部でしかない。凍える肉体を誰かの体温で埋めるように、日常に変化が訪れたとしても人はその隙間を何かで補うだけのこと。それは、戦争が始まる前からずっと同じことであった。さらに、戦争が始まってからこっち、娼妓にはずっと忙しい日々が続いておりあれこれ考えているような余裕もなかった。日常というのは、しょせん毎日の積み重ねなのだから、あとから振り返ってあれは日常とは違うことなんだと誰かが指摘したとし

ても、本人にとっては中々ピンとくることは難しい。それが、春子にとっての日常だったのだからそうだと気づくことは極めて難しい。　たくさんの兵隊さんや、学徒動員された少年兵の相手をしていることが、春子にとっての日常であった。もっとずっと後になって、その時生きている同業の女から見れば、想像することも困難な非日常に思えたとしても、ごく当たり前の出来事であった。もちろん、娼妓という職業はこの当時においても、真つ当な職業とは言えないものであったのだが。春子が遊郭の外を思い出す時、そこにはひどく辛い記憶しかなく、たぶんそれが春子にとっての非日常となっていたからなのかも知れない。　忙しい日常の中で、不意に客のいない空白の時間ができる。そんな時、春子が障子をいっぱいに向け放つと、素肌を裂くような冷たい空気とともに、空に浮かんでいた無数の真綿の中から幾つかが、誘われるように座敷の中へと舞い込んでくる。春子はその様子を景色の一部にして外を眺めていた。座敷の中と外との隔たりは無くなりかけている。春子の心象風景にはこの部屋があたかも外の景色の一部であるかのように映っていた。自分の体が凍えて震えてくるのを、春子は両手で抑えつけるように冷気に身を晒している。右手に見える四連の橋は、川面にその姿をゆらゆらと揺らめきながら映しており、あたかもあの日の景色を再現しているかのようにであった。　この白い景色も、肌を裂くような寒さも、春子の中にある記憶をよりはっきりと呼び覚ますためにどうしても必要な要素である。けして良いものではないのだが、失いたくない記憶であった。肌に触れてしまうと、一瞬で消えてなくなる真白な綿雪のような想いであったにしても。　だがこの日、身を切るよう

な寒さが運んできてくれたのは、眩いまでに白い景色や凍てついた風だけではなかった。春子の記憶の中にある、凍りついたままの世界が溶けるように自分の記憶と現実とが重なる。白の世界に現れた男の姿は、あの日の記憶と融け合っていた。まるで、あの時に帰ったかのように。春子はそのまま飛び出して行きたかった。だが現実には、ただ唇をかみしめるただけである。ずっとこの時を待っていたのに、体が動いてくれようとしなない。現実には春子がしたことは、開け放っていた障子をかたんと音を立ててしめたこと。眩い世界がなくなって、障子の白に変わった。春子は、怯えたりスのように丸くなり畳の上に座っている。どれほどの男共を相手に体を売って商売してきたとしても、たった一人の男を前にしたとき自分がこれほど臆病になるのだということを、春子は生まれて初めて知った。だから、どうすればいいのか分からなくなってしまっている。男に自分の体をまさぐられることも、自分の体を使って快樂を与えることも躊躇なくできる。でも、その男《ひと》を前にしてどんな表情を見せればいいのか、なんと言葉をかければいいのか、それがまったく思いつかない。こういった感覚は外の女でも同じなのだろうか。普通の女であれば、見知らぬ男に自分の体をまさぐられることに耐えられない。体を任せるということは、自分の心を相手に任せるということに等しいことだとされている。だが、娼妓の世界においてそれは厳密に区別される。だから、体を任せた男を好きになることはない。心と体は常に乖離している。そのことを金のためだと割りきってはいるが、その妥協は女の中の何かを変えてしまわずにはいられない

のだろう。だから、春子は今この時、なすすべなく畳の上で怯えていなくてはならないのだ。普通の女性なら、すぐにその気持ちが一体なんであるのか分かったことだろう。すでに抱かれたことがある。二つの体は信じられないくらいの熱量をもって融け合って、思い出せる限り最高の快樂に浸っていた。しかし、その時でも肉体と心は乖離していた。春子は今日に到るまでずっとそう思い続けていた。否、想い続けようとしてたのである。そうでなくては、これほど長い間、たくさんの男たちが自分の体を通り過ぎて行く間、鮮明に一人の男のことを記憶の中に焼き付けておけるはずがないだろう。そう、けして認めることができなくとも、春子の内にある感情は恋と呼ばれるものであった。たとえそれが、歪《いびつ》なものだとしても。白い障子の向こう側から届いてくる光はまるで夕日のように、擦れてささくれてしまっている畳を寂しそうに照らしている。春子はその中に丸まったまま動かないでいると、障子の向こうから声が聞こえる。穂垂の声であった。「お客様ですヨ」春子はゆっくりと一回眼を閉じて、大きく息をしてから目を開く。「はい」いつものように答えて、いつものように立ち上がったが、一步踏み出した足をととても重たく感じていた。今すぐ駆け出しい気持ちがあるのに、体が思うように動こうとはしない。そのことを深く考える余裕はなく、頭の中にはこれから会う人のことしかなかった。自分が何をやっているのかということすら意識できぬまま、気がつくとき春子の目の前にはとても立派な男の人が立っていた。「お久しぶりです」最初に話しかけたのは、木戸であった。春子はびっくりしたように何度か瞬きをすると口を開く。「……」言葉が出

てこなかった。お客が来た。その対応をすればいいだけなのに、木戸を前にするとどうしてもいらっしやいませの一言が出せない。そんな春子の様子を見て、木戸がどう思ったのかわからないが、春子の肩にごく自然に手をかけると促すように言う。「座敷に案内してください」　そこで初めて、春子ははっと我に返ったように木戸の顔を見た。「そ、そうですネ」　ようやく口から出搾り出すことのできた言葉はそれだった。単なる返事であって、会話という程のものではなかった。二人は無言のまま二階の座敷に行く。すっかり冷えきったままの座敷は、さっき舞い込んできた雪が溶けて畳の上がぽつぽつと濡れている。それを見た春子は、あわてて手ぬぐいを使って畳の上を拭こうとするが、左手を力強い腕につかまれて動くことができなかった。「長い間、会いにこれなくてすみません」　春子の目を見て木戸が言った。確かにその言葉は、はっきりと聞こえていたが、春子は何も答えることが出来ない。ただ驚いたように目を見開いて、木戸のことを見ているだけだ。　そんな春子が何を思っているのか、木戸にはわかるはずもない。だから木戸は、自分の思いを春子に向かって伝えるために、さらに言葉を続けてゆく。「本当はもっと以前にくるつもりだったのですが.....」　言葉を濁すように木戸が言う。そこに秘められた言葉がなんであるのか、という不安がなにより春子の心を萎縮させる。　春子に会うのが嫌だったのか、それとも娼妓に会にゆくということが問題だったのか。あるいはその双方だったのかも知れない。子供の頃の暗い記憶を除けば、遊郭の中しか知らない春子にとって、ここは特殊な世界ではなかった。

そんな春子でも、外の世界とは違うのだと言うことくらいは知っている。それに、一日でも早くここから逃げ出したい、と考えている女ならば大勢知っている。結局春子は、このことに関して否定も肯定もできないし、結論も出すことはできない。だから、なんといいのかわからなくなってしまう。春子の無言を一体どう受け止めたものか、木戸は迷ったのだろう。少しの間、春子のことをじっと見ていた。だが、それで結論が出るはずもなく、また春子の方も何も答えを見出だすこともできず、ただ二人向かい合ったまま立ち尽くしていた。それからしばらくして、急に木戸が笑い始める。「ハハハ！！」結構大きな笑い声だったので、春子は吃驚してしまう。そんな春子の顔を見て、さらに木戸が大きな声で笑った。「……ハハハ。これは、失敬。いえ、どうも貴女とにらめっこをしているような気になったものですから。ほら、こんな具合に」そう言って、木戸が指で自分の鼻を持ち上げて、変な顔を作ってみせた。春子は突然ことできっきよりもっと吃驚してしまっただが、すぐに一緒になって笑い始めた。「あははは」それから二人は一緒になって、笑っていた。木戸の顔がおかしかったというより、何か重しになっていたものが、いっぺんに消し飛んでしまったような、そんな開放感が春子の笑顔をさそった。それと、木戸のあまりに屈託のない笑い声が、もつれた春子の心をととても自然に解き解してしまっただのである。何も考える必要がなくなった。もう、あれこれと想像ばかりが膨らんで、何もできずに立ち止まってしまう必要はなくなっていた。二人の笑い声が収まったとき、とても自然な形で行為が始まった。春子にとっては仕事ではあるが、そう言い切るこ

とができない行為である。ただこの時は、そのことについて考えるようなゆとりは春子には無くなっていたが。春子が自分を取り戻した時、辺りはすっかり暗くなってしまっていた。規定の時間はとうに過ぎてしまっている。我を取り戻すと、春子は急に現実が見えてくる。また以前と同じ失敗をしてしまった。あの時は、野上に助けられることになったが、さすがに今度はそうはいかない。木戸と抱き合うと、もう仕事ではいられなくなる。どうしようもなく、春子が木戸を求めてしまうからだ。夢幻の時間が過ぎてしまえば、後に残るのは現実のみ。どんなにきつく肌を寄せ合おうとも、岸を隔てる星の河のように浪々と二つに分かつものがそこにある。大門のこちら側では、男と女はすなわち客と娼婦。間に流れるのは金。それを越えてゆくことは容易なことではない。今、春子が野上に伝えたいこと。今日の代金は受け取れない。それだけのことなのに、どうしてもそれを口に出すことが出来なかった。口に出して、また拒絶されることを恐れてしまう。客と娼婦、それだけの関係でしかないはずなのだけど、二度と会いに来てくれなくなるのが本当に怖かったのである。その、春子が抱いている怯えこそが二人を分かつ川であった。だが、その隔たりを木戸はとてもあっさり飛び越えてくる。それこそ、春子がまったく想像もしていなかったやり方で。「今夜は一晩、話しませんか？」最初、木戸が何を言っているのか春子にはまったく理解できなかった。「……えっ？」明らかに春子の驚いたような声を聞いた木戸は、凍える闇の中で春子に身を寄せながら、さらに詳しく話し始める。「実は今日は、貴女を口説きに

きました。でも、いきなりというのもアレですから、もっと貴女に自分のことを知ってもらおうつもりです。ですから、今夜一晩かけて話しましょう」 木戸の説明した言葉は明快なものであったが、春子を混乱へと導いた。一体、木戸が何を言っているのか理解できない。「口説きに……ですか？」 一体どういうことなのか、と春子がオウム返しに聞いてみる。「これは、言い方がまずかったようだ……。口説きに、というのは、なんです……。まあその……」 しばらくの間、木戸はなぜか話しづらそうにしていたが、二人を包んでいる闇に助けられるようにして、ついに意を決したらしく、まともに見えないというのにきちんと姿勢を改めて話始める。「ええい、いつまでも迷っていてもしかたない。自分と一緒にあってはいただけませんか？ 今夜一晩話して、その後返事を貰えたらありがたい。自分は、貴女のことを好いています。ですが、もちろん無理に答えてもらう必要はない。ただ自分は野上さんとは違う。好いている女の人と、こういう関係でいるのはとても辛すぎる。ですから、話を受けていただけのないのなら、これっきりにしたいと思っています」 はっきりと、宣言するように言った木戸の言葉に、春子は答えることができない。それはあまりに唐突で、春子にとっての現実とはかけ離れ過ぎている。こういう仕事をしていれば、色恋沙汰など息をするようなものであり、将棋の駒を動かすように男の気持ちを巧みに動かすことができるようになる。でも、どんなに自在に男心を掌で弄ぶことができたとしても、自分の気持ちを自在に動かすことは困難だった。そのこともまた、春子に混乱をもたらした。たとえばこれが、他の娘なら何かちゃんとした忠告なり出来たかも知れ

ない。だけど、自分の身になればこれほど困難なことのよう
に思えることはなかった。 目を見開いたまま、春子
がその場で固まっていると。木戸は己の肉体と一緒
に包み込むように、春子の体に毛布をかぶせる。火鉢
の火は消えており、座敷の中はすっかり冷え切って
しまっている。短い間に、春子の体も冷たくなっ
ていた。凍えて震える春子の体を、木戸の体温がゆる
りと溶かす。それと一緒に、春子の心も自然に溶け
ていた。 今、春子を包んでいるのはさっきまでの情
欲ではなく、とても大きな安心感。もし、春子が親
の愛情を知って育っていたならば、その感覚と結び
つけて考えたに違いない。だが、この時春子が思い
出したのは、親ではなく一人の男の姿であった。春
子に生まれて初めて、すべてを委ねてしまいたくな
る包みこむような安心感を与えてくれた男。春子
を初めて女にして、この世界で春子がゆくための様
々な知恵を教えてくれた。もちろん、それだけでない。
春子が知らないことも、たくさん教えてくれた。とん
でもなく多くのものを受け取りながら、何一つとし
て返すことができないままもう二度と逢うことが
できなくなってしまう。あるいはこの時、彼のこ
とを思い出してはいけなかった。だけど、春子は思
い出してしまった。人の温もりというものは、残さ
れた人の心に消え難く刻印されるものなのかも知
れない。そして春子の場合、初めて人の温もりを
教えた人間が、自分の親ではなかったのだから、た
ぶんどうしようもなかったのだ。 今、春子が感
じている肌の温もりは、春子の気持ちを木戸の心
に近づける。それから二人は、ずっと長いこと話
し続けた。そのことで、さらに春子の心は木戸に
惹か

れていく。それは間違いようのない事実であった。木戸がどんな所で生まれ、どんな学校に通い、どんな友人を作り、どうやって憧れ続けていた陸軍飛行学校に入ったのかを聞いていると、とてもわくわくした。いつまでも続くかのように思えた夜を、やがて光の轍が踏みにじる時が訪れる。その時、春子は最後まで決めあぐねていた木戸の問いかけに、一つの結論を用意していた。日の出を前にした星々の明滅より儂い決心だったが、それでも春子が最後に出した結論だった。間違いなく後悔することはわかっていたのだけれど、春子にはたぶんこの結論以外に選ぶべき道はない。だから、春子は木戸に向かって素直に告げることができた。自分の選んだ答えを。「ごめんなさい、あのお話はお受けできません。……でも、もし我侂を許してもらえるのなら、一つだけあたしの願いを聞いていただけませんか？」一生懸命両足を踏ん張って、両手をきつく握りしめて、それこそ渾身の力を振り絞った言葉であった。体を貫いてしまいそうな春子の必死な想いを受けて、木戸もまたその場に踵を揃えて真っ直ぐに立つ。自分の言葉はもう十分伝えていた、その上で春子に断られたのだ。今木戸の胸中にあるものがなんであるのか理解できずとも、春子の抱えている苦悩に劣るものではないことは確かであったろう。それでも木戸は、その場に留まり春子の言葉を待った。木戸のどこまでも真っ直ぐな視線を受けて、春子は一度大きく息を吸う。そして息を止めて、木戸に向かい深々と頭を下げた。「ごめんなさい。こんなお願いするのハ、本当に我侂だと分かっているんです。でも、どうしても、聞いて欲しいのです……」春子はそこで一步前に踏み出し、身体が触れ合わんばかりの近くから

木戸の顔を見上げる。両手は何かにすがるように、自分の着物の裾をつかんでいた。本当なら、口に出すことも許されないだろうと思っていることを、これからお願いしようとしていた。それを乗り越えるためには、勇気だけでは足りなかった。足りない何かを補ったのは、自分の目の前にいる男《ひと》と、今はもう何処にもいなくなってしまった男《ひと》である。「また、来てください。いつか、許してもらえるなら、ずっと待っていますから、いつかきっと会いに来てください。お金はいりません……だして欲しくないんです。あたしにとって、特別な人でいて欲しいのです……。断っておいて、本当に我侭なんだと分かっています。でも、そうとしか言えないから……お願いします」　また春子は頭を、今度はさっきよりも深々と下げる。自分がむちゃくちゃなお願いをしているのだと、ただの我侭を言っているだけなのだと分かっていたから、春子は頭を下げたまま顔を上げることができなくなってしまう。　そんな春子を見て、木戸はまるでため息のようにも聞こえる吐息を漏らすと、黙って頭を二度ほどゆっくりとなでた後答えを返す。「本当に我侭だ、貴女は。正直、貴女が何を考えているのか自分には想像もつきません。ただ、貴女の必死さは伝わってきました。それにどう応えればいいのか、今の自分にはわかりません。いい加減な答えをするつもりはないので、また貴女の期待に添えるかどうかもわかりません。ですから、もう一つのお願いの方は、ありがたくお受けすることにします」　そう言って、今度は木戸が頭を下げた。ただ、あまりに勢い良く下げてしまったので、二つ頭が結構大きくて小気味良い音をた

てた。二人は頭を押さえて顔を上げると、痛そうにしている互いの顔をしばらくみているうちに互いに笑い出してしまふ。ひとしきり笑った後、春子が先になって下へと降りた。泊まりになることはすでに申し合わせていたらしく、下では食事の準備がしてあった。穂垂が二階に持っていこうとしている所だったので、わざわざ運ぶのも大変だからと木戸が言い、下の座敷で食事を取るようになった。給仕を手伝うときに、春子が木戸のお代は自分が払うからと告げると、穂垂は特別理由も聞かずに「あいヨ」と答えた。逆に春子の方が気になったので、どうしてあっさり認めてくれたのかと訪ねてみると。「あたしも女ですからネ。そりゃ、わかりますヨ」と、意味ありげに答えてくれた。今時めったに手に入らない貴重な白飯と味噌汁、それに胡瓜の浅漬が添えられているお膳を木戸の前に置き、春子は当たり前のように木戸の横に腰をおろす。急須と湯のみは先に運んであったので、木戸の飲みかけの湯のみにお茶を足しておいた。「これは、よいのですか？」　こんもりと山盛りになっているご飯を見て、木戸はかなり驚いた様子だった。これだけの量の白米を全部粥にすれば、何人分の食事にできたことか。そのことを考えれば、当然の反応と言えただろう。「もちろんですヨ。お国のために戦っているのですから、ということでお願いしますヨ」　なにやら含みを持たした言い方に木戸は苦笑を浮かべたが、それ以上は何も言うことなく箸を持って両手をあわせる。「では、遠慮無く頂きます」　前とおなじくらい良い食いっぷりで、山盛りにあったご飯が瞬く間になくなってしまった。「ごちそうさまでした」　再び両手をあわせると、茶碗の上に箸を置く。チンと澄んだ音がした。

春子は、何を話す間もない早業に、少し恨めしげな視線を送るが、木戸の方はまるで気づかぬ様子で音もたてずに一息でお茶を飲み干した。また、何も話せずにおしまいになるのかと春子は思ったが、意外にも木戸が言葉を見つけてくれた。「うまい。こんな良いお茶が良く手に入りましたな」言葉が向けられた先は春子ではなかったが、春子は嬉しかった。「はい。たまたま知り合いの者が知覧に用がありましてネ。その時に、お願いしましたのサ」お湯を足しに来た穂垂が、急須の蓋を開けながら答える。「ほう、そうですか？ 知覧のお茶は確かにうまいですからな」木戸はそう言うと、本当に嬉しそうに笑う。春子も木戸の顔を見ると、また嬉しくなった。春子はお湯が足されたばかりの急須をゆっくり動かして、開いた茶葉の残りを拾ってゆく。「はい。あすこはホンに良いお茶が取れますヨ。新茶とはいかないけど、配給のお茶だけでは、白湯と変わらないですからネ」贅沢品とは呼べないようなお茶でも、戦時体制下の配給制度になってからはぜいたく品のようになってしまっていた。戦争が始まるまえと比べてお茶が無くなってしまったわけではないが、搬送手段が限られてしまい結果的にぜいたく品になってしまっている。なので、どうしても配給で足りないと思う人間は、配給を通さない市場、いわゆる闇市で入手するか、直接農家に買い付けに行くのである。今木戸が飲んでいるお茶は、農家から直に買い付けた品物ということになる。本来なら法的に違反する行為ということになるが、これに関しては真面目に守っている人間のほうが皆無に近かった。というのも、人間がまともに生活するのに必要な

量の物資が配給されていなかったからである。かと言って食料がないというわけではなく、農家には十分な量の物資があったのである。だから流通がうまくいっていないという理由が大きかった。そのことは警察当局も把握しており、よほど派手にやらない限りは見ても見ぬふりをしているのが現状である。もちろん、それですべてが補えるわけではなかったが、サツマイモや澱粉を固めて作ったすいとん汁といったものもあったので少なくとも餓死するようなことはなかった。「これは、随分と世話になってしまったようで、すみません」 木戸は火傷しそうに熱いお茶も一息で飲み干すと、居住まいを正して頭を下げる。「いやサ。そんなに改まってもらっちゃ、こっちの方が気がひけますヨ」 穂垂はそれだけ言い残すと、半ば逃げるような感じでお湯の入った薬缶を持って座敷を出ていった。春子はそれを見届けずに、すぐ空になった湯呑みにお茶を注ぐ。さっきよりも黄色味が濃く、注いだ茶碗の底は薄く濁って見える。少々お茶が出すぎているようだ。注がれたお茶を飲み干そうと、また湯呑みを手にとった所で、木戸が中を覗き込んだ格好のまま固まってしまう。「なにかありました？」 不審に思った春子が聞いてみると、木戸は中を覗き込んだまま答える。「茶柱が立ってますよ……」 嬉しそうにと言うよりは、驚いたような木戸の口調が春子は気になった。茶柱が立つというのは珍しいことかも知れないが、そこまで驚くようなことではない。「どうされたのです？」 木戸に体を寄せて、春子が木戸の持っている茶碗を覗き込むと、春子も同じように驚いてしまった。「ひい、ふう、みい……全部で、六本も立ってますネ」 さすがにこれだけ一度にたくさん、茶柱

が立つのを見たのは初めてだった。それほど大きくない湯呑みの中に、これだけ幾つも茶柱が立っていると、ボウフラでも浮いているように見えて少々気味悪く見えてしまう。木戸の表情を見ていると、どうやら春子と似たような感想を抱いたようだ。「これは、めでたいのだろうか？」誰に聞くというわけでもなく、木戸が漏らすようにそんなことを言うと、春子はすぐに答える。「もちろんですヨ。縁起の良いことがたくさんあるのですから、めでたいに決まっていますヨ」それしかない、という感じで春子は強く主張する。春子にしては、強く断定的な言葉であった。ただ、あまり強い言葉を言い慣れていないせいなのか、どうにも説得力に欠けているようであった。それでも木戸は春子の言葉を受け入れることにしたらしい。身を寄せてきた春子の体を左手で軽く抱き寄せると、右手で二度ほど頭を軽く撫で、鮮やかな笑顔を浮かべて頷いた。「そうですね。素直に喜びましょう」それだけ言うと、木戸は手に持っていたお茶を一瞬で飲み干した。湯呑みをちゃぶ台に置くとすぐに、春子は急須に残ったお茶を注ぎ足そうとするが木戸が湯呑みを左手で塞いでしまう。「せっかく、縁起が良いのだから、ここでやめておきましょう」特別に木戸が縁起を担いでいるということではなく、兵隊というのはだいたい似たような所がある。見知らぬ土地へと戦争をしに赴くとなれば、何かに縋りたい気持ちにもなってしまうのだろう。春子は所詮娼妓であって、兵隊さんではないのだからあくまで想像でしかないのだが。「はい……。わかりました」木戸の言葉を聞いた春子は、いかにも残念そうな様子を隠さずに返事を返

した。それは、別れの時が近づいたということの合図でもあった。木戸の申し出を断ったのは春子であったが、それでも別れは辛かった。拒絶しながらその相手を心が痛むほどに求めるということは、とても矛盾した行為であるのだと、ろくに学校に通ったことのない春子でも理解できる理屈だった。でも、それでも、頭で理解していても、ちっとも辛さが和らぐことはなかった。何かの合図のように、木戸が膝を二回ほど軽く叩く。そして、三度目に膝を立ててスツと立ち上がった。春子は木戸の足に縋りつきたくなる衝動を抑えるように、自分の胸元を左の掌で強く押さえながら木戸の後を追い立ち上がった。それから残された時間は、座敷を出て玄関に到るまでの十歩分ほど。木戸の長い足なら、数歩も歩けば付いてしまう。そんなとても短い距離を、春子は何もできずに歩いてしまった。春子が靴箱の上から長靴を持ってきて、木戸の目の前に並べると「ありがとう」と礼を言ってくれた。木戸が靴を履いている間、春子はどうしても言いたい一言が言えずにいる。言葉が胸の奥の方でとても大きな「凝り《しこり》」になってしまったかのように春子には感じられる。この凝りは、あまりに重くて大きかったので、春子にはどうすることも出来なかった。もし、自分の胸を切り開いて木戸に向かってさらけ出すことができたとしたなら、春子はためらうことなく、そうしたかも知れない。だが、この時は結局のところ瞬《まばた》くほどの間でしかなかった。「それでは」春子が最後に淡い期待を抱いた『また』という言葉は添えられることなく、木戸から別れが告げられる。馬鹿みたいに春子は口を開きかけたまま、どうしても言葉を何一つとしてかけることができずに頭を下げた

。すると、目から涙滴が落ちたので気づかれないよう指先で拭う。たとえもう会えないとしても、いやそうであるなら尚更、別れに涙を見せるなど縁起が悪い。春子は自分の不甲斐ない心を叱咤すると、努力の限りをつくして笑顔を作り顔を上げる。春子は娼妓だ。それも他の娼妓達とは違い、娼妓たろうとして娼妓をやっている。誰に誇れる生業ではないが、だからといって自負がないわけではなかった。ならば自分が心を寄せている男を送り出す時こそは、その自負の使いどころだろう。気持ちよく送り出すのだ。自分の心がどうであろうと、この先どれほど自分が後悔することになろうと、そういったことは今は何一つとして重要ではなかった。「お忘れ物はないですね？」最後の最後で自分自身を取り戻した春子は、いつも客を送り出す時の言葉をかけた。「ええ、大丈夫ですよ」木戸は春子を真っ直ぐ正面から捉えるように見ながら、そう答える。そして、その後春子にとってまったく思いも掛けないような、奇跡的なことがおこる。気がついたとき、春子は木戸の腕の中にいた。圧倒的な力強さで、体がきしむほどの強さできつく抱きしめられていたのだ。何が起こったのか、一瞬わからなかったが、本能的に身体中の力がすべて抜けてしまい、包みこむような感覚に完全に身を委ねてしまう。それでもだ、春子は立っていた。自分の足で、寄りかかることなく。ここは自分の場所だから。もっとも自分から口にしたくなかったことも言わなくてははいけなかった。「もう、お発ちになられなくて、いけませんヨ」春子としては、できるだけ押さええているつもりだったが、その声はわずかに震えていた。気づかれな

ったかと心配もしたけど、木戸はきつく抱きしめていた腕をゆっくりと解いていく。少しずつ、でも確実に大きくなっていく隙間は、春子にとってはあまりに遠過ぎる距離であった。「では、自分はこれで」春子の正面に立ち、踵を揃えてそれは見事な敬礼をして木戸が最後の別れを告げる。春子は木戸の真似をして右手を額にあててみる。お世辞にも様になっているとは言えないが、春子がやると子供が兵隊さんごっこをやっているみたいでどこかしら可笑しかった。だからだろうか、木戸は最後に一度だけ笑顔を見せてくれる。水面に陽光が映ったような、そんな一瞬の煌きであったが、その瞬間を自分の胸の奥の方に焼き付けることができた。それだけで、春子にはもう十分であった。引き戸を開いて外に出ると、景色はすっかりとくすんでいた。屋根をみると斑に白く昨日の名残が残っている。地面はすっかりと泥濘んでいて、雨が降った後よりももっとずっと粘り気の強い泥が水たまりを重たく濁らせている。無造作に踏み出された足が、嫌な音を立てほんの僅か泥の中に沈んだ。その時に濃灰色の飛沫が飛んで、磨きあげられていた軍靴にかかってしまう。だけど木戸は、そのことをまったく気にする様子もなく、ただ真っ直ぐに進み続けた。一度も後ろを振り返ることなく。去ってゆく木戸の後ろ姿を見ながら、春子は自分があの泥になってしまったような気がした。いや、本当に春子は泥なのだろう。今春子の頬を伝う涙は、重く貼りつくように感じられるではないか。汚れのない雪も一旦地に落ちれば、たちまち白い輝きを失って汚らしい存在に変わる。汚れた者が交わることで、清廉さは輝きを失う。けっして、汚してしまってはならない者が存在するのだ。そう考える

ことで、春子はようやく木戸の背中に自分の背を向けることができた。 玄関をくぐり抜けると、そこは泥の中。春子の住むべき世界であった。

日本の置かれた状況は益々悪くなってきていた。絶え間なく戦地に男たちが駆り出された後の本土は、赤い残り火が張り付いている炭のようにやがて燃え尽きそうになっているのが、誰の目にも明らかであった。それでも紙面では、あいかわらず華々しい戦果が見出しを飾っており、日本は今にも米国を相手に完全勝利をしそうな塩梅であった。子供ならともかく、さすがに大人ともなれば開戦から五年近くが経ってなお、生活が悪くなる一方であるこの状況がおかしいと思わない人間はいなかった。だからと言って、戦争に負けていいというようなこともないのだが、ただこの戦争に勝てるとも思えず厭戦気分は床下に揺蕩う煙のように、人々の心に薄く広く蔓延していたのである。だがそうであればあるほど、一部の人間はよりヒステリックに戦勝を叫び、少しでも日本の勝利を疑う人間には制裁を加えてでも考えを改めさせようとしていた。面白いことに、そういったことをことさら主張する男は、様々な理屈をつけては兵士として志願することを拒んでいたものである。戦争という大義をことさらに主張して、戦争に勝利するためという理屈を付けてさえいけば好き勝手できる。もっとも度を超えてそれをやった男が、不慮の死を迎えることもあった。だが、結局のところそういうことは、遠雷のようなもので、まだ実態の見えない驚異でしかなかった。配給はとても足りているという状況ではなかったものの、不足分を入手することは可能だったし、まだ餓死するような状況ではなかった。ただし、すでに開始されている学童疎開の子供たちに関してはひどく劣

悪な状況になっていた。親元から引き離された子供たちは当然、配給分の食料しか与えられず、どうにか餓死者こそ出さないものの全児童が等しく飢餓状態にあった。そんな話を聞いたところで、誰もが似たような状況にあったので、特に同情するような者はいなかったのであるが。ただそれととも、まだ本土から見れば戦場は遠くに感じられていたのだ。もちろん、それは民間人にとってということであり、戦地にいる兵隊達は正に地獄のただ中に入っていたのであるが。春子はもうじき三十路を迎えようとしていた。黄蝶楼ではもちろん、沖之村でもかなりの年増となっていた。やってくる客の殆どは十才近くも年下であり、ひと回りも年が離れている少年もめずらしくはなかった。戦況が日増しに悪化しているのを証明するかのように、客となった年若い男達は、快樂を求めてくるのとは明らかに違っていた。殆どの娼妓は長くても三年から四年もすれば、年季が明けて堅気になるが春子はこの仕事を十二年近くも続けてきたことになる。その間、自分の身体を抱いた男たちは、とても数え切れない数になっていた。だからこそ分かるのだが、戦争が始まり戦地へと向かう男たちは明らかに快樂だけを求めてきているわけではない。それが、ここ半年ほどはひどく顕著に感じられた。直接肌を触れあわせ、その体温を感じてみると、その中にある奔流のような感情が僅かなりと感じられような気がしてくる。もちろん、春子は男ではなく、ましてや戦地へと赴く将兵ではないので本当の心を汲み取ることができるとは思っていない。ただ、そうやって、自分の肌で少年達の瑞々しい肉体を感じていると、自分胸の奥を針先で刺し貫かれるような感覚を覚えるようになっていた。中には、自分の欲望を春子にぶ

つけることにひどい罪悪感を感じるのか、春子の肌に手を触れることが出来ないような少年もいた。だが、その少年が特別だったわけではなく、彼らの多くは一様に純粹だったのである。そもそも、彼らを遊郭に連れて来るのは面倒見よい先任兵か自分の息子を少年のまま戦地へと送り出すことを不憫に思った男親が多かった。もちろん、一般の女性にとって此処は不浄の場所であり、まったくもって容認できるような場所ではなかったが、だからと言って自分の息子が子供のまま戦地へと旅立つのを不憫と思わぬ道理はない。だから、その前に嫁でもと考える親は多かったが、娘の親にしてみればすぐに死んでしまうかも知れない男の所へ娘を嫁がたくないと考えるのは当然である。いくらでも、お国のためにと応援はするが、そのために自分の娘を犠牲にしたいとは思わないのである。そういうことであるから、所詮金で買う女とは言っても少年たちが男になるためにはこういう場所はどうしても必要だったのである。そこら辺りの事情も、春子は十分に承知していて、兵隊さん……特に少年兵を相手にする時には細心の注意を払うように心がけているつもりだった。それでも中には、どうしてもモノが役に立たずついに男になれぬまま戦地へと赴く少年もいた。そういった少年には、春子はかならずお守りを渡して、かならず生きてまたここに帰って来てくれるようにとお願いした。その時には、絶対に自分がちゃんと男にしてあげるからと言って。すると、殆どの少年は日本の必勝を誓うとともに、生きて帰ってきますと誓ってくれた。一人だけ、無言で泣き出した少年がいたが、その時春子は黙って彼を抱いてあげた。すると、

その少年はぽつりと漏らすように、お母さんと言った。その少年にもお守りを渡して同じ言葉を伝えると、彼は涙を拭いた後、何も約束せずにしゃんと背筋を伸ばすと、春子にただ黙って敬礼をして去って行った。そんな束の間の出会いと別れを繰り返していたのだが、事態に大きな変化が訪れる。春子が今まで想像もしたことがないような、とても過酷な変化であった。寒さがずいぶんと遠のいて、黄蝶楼の窓の外には一年のうち最も美しい光景が広がっていた。冬のうちはただ殺風景で、ひどく寒々とした枝ぶりを見せていた川沿いの並木が、今は淡い薄紅色をした小さな花を夜空の星もかくやというほど沢山咲かせていた。ただただ薄紅色の花が全景を多い尽くすかのように咲き誇る光景は、見事という他なく、たった二週間ほどで一斉に散ってしまうその姿も合わせて、この国を象徴する花とされる。戦地に赴く将兵が口にする、お国のためにみごとに散ってみせるという言葉は、正にこの花をことを思い言っているのだ。ただ美しいからというだけでなく、日本国民にとって、この花は間違いなく特別なのである。そして、それ以上に日本帝国軍人にとっては特別であった。

桜。その花の名前を口にするのではなくても、自分の生き方の規範とする者は沢山いる。まさか、桜に導かれたというわけではないのだろうが、もう二度と会うことがないだろうとあきらめてしまっていた | 男《ひと》と再開する。その時春子は座敷の中にふらふらと舞い込んできていた桜の花びらを、右の指先で摘んで左の掌の上に乗せて眺めていた。散り始めた桜は儂く、その後に残るのは人の記憶の中にだけ。春子は美しくも潔いこの花の欠片を覗き込んでみると、いつも自分の肉体の上を通りすぎ

ていった男たちのことを思い出さずにはいられなかった。好きとか嫌いとかそういうことはなく、ただ男と女の関係でしかない。感情とかあるいは気持ちとか、遊郭に落ちてきた女が一様に口にする心までは売らないとかそういうややこしい話でもなく、ただ純粹に人の性《さが》が生み出す関係。単純に女である春子はずっとここに在り、男である彼らは己が命を散らしてゆく。春子にとっては、そのことが良いことであるとも、あるいは悪いことであるとも判断は付きかねる。それでも、少なくとも男たち... ..兵隊さんたちのことを厭うたことはなかった。もしかするとそれは、初めての男が野上だったからかも知れないし、木戸と出会ったからなのかも知れなかったが。今、桜は満開であった。柔らかな日差しの中に、時折吹く風に乗って舞う花びらの中から、その男《ひと》は現れた。現れる時はいつも突然だったが、なぜだか今日だけは驚くことはなかった。溢れるほどに咲き乱れた桜の中に見える彼の姿は、欠くことのできない景色の一部に見えた。ただ瞳に映る光景は、春子の中にある心象風景との間に、大きな隔たりが存在していたのだが。それがどうあろうとも、しよせんは春子の心の内でのことにしか過ぎず、春子はそのことをついぞ誰にも話すことはなかった。それだからこそ、その時の光景は、以降三十六年に渡ってずっと春子の心に残り続けたのかも知れない。春子は穂垂が声をかけに来るの待つこと無く、下の階に降りた。木戸が目指しているのが、黄蝶楼ではなく他の店であるかも知れないということに、この時の春子は思い至ることすらなかった。当たり前のように下の階に降りると、春

子はごく自然に土間に降りて玄関の扉を開ける。開かれた玄関から強い風が一散に流れこみ、それと一緒に桜の花弁が何枚か玄関から入り込み中で舞い踊った。踊る風の中で春子は息を吸う。芽吹き始めた草花と春の香りが身体に満る。目の前に広がる大気の中に、桜花が人の形をしてそこにいた。まるで花神に向かって礼を示すみたいに、春子は黙って頭を下げる。「お元気そうですね」春子が再び頭を上げるのを待って、そう声をかけたのは木戸であった。「木戸さまも、ご無事で……」儂い男たちの命は、生きてあるというそれだけで十分嬉しい出来事であった。ただ、そのことを顔に表現するというのはいささかなりとも、はばかれる時代でもあった。女たちはともかく、死を賭して御国のために尽くすということが本分であると男たちは教え育てられてきたのである。もちろん、そのことに不満や不服を抱く者も、あるいは反駁する者もいたし、なんとか徴兵を逃れようと試みるものもいた。だが、男達は自分の運命を進んでではないにせよ、受け入れ出征していった。木戸のように、未だ内地に残っているというのは、極わずかな例外であり奇跡とも言える。ただ、そのことを喜ぶことができないというのも将兵としての性である。特に、同期の連中や上官や後任兵が次々と前線に出征して行って、戦場に散っていったとなれば内心忸怩たる思いを抱えているのであろう。そのことは、ついで木戸が口にすることはなかったから、春子はただ何も聞かず一切触れることはなかった。「さあさ、中においでくださいナ」出迎えた春子が木戸を中に招き入れようとした、しかし木戸はその場から動かさず中に入ろうとはしなかった。明らかにおかしい態度に、不思議に思った春子が木

戸にどういうことなのかを訪ねようとすると。「今日は、こいつを連れてきたのですよ、小春さん」 その言葉と一緒に、長身の木戸より一回り小柄な男が木戸の背後からひよいと姿を現した。まだ真新しい軍服があまり良く似合ってはおらず、お仕着せのように見える。綺麗に刈り上げられた坊主頭は逆に過ぎるほどに良く似合っており、何処から見ても学生にしか見えなかった。眩しそうに春子のことを見る仕草といい、間違いなくそこにいるのは少年であった。少年兵を見るのは初めてではないし、相手をしたことも初めてではない。でも、彼を見た印象は、具体的に何処が違おうと指摘することは出来ないのだが、それでもはっきりと何か違っていた。もちろん春子はそのことについて触れたりもしない。代わりというわけではないのだけど、春子にはもっと他に聞かなくてはならないことが存在した。「木戸さまハ？」 言葉短く、それだけを尋ねる。「このまま帰るつもりです。本当は、貴女にお会いするつもりもありませんでした。ただ、こいつのことをよろしく頼みます」 もちろん、その言葉の意味は明確であった。結局の所、こんな場所に男が来る目的というのは一つしかない。ただ、それが意味することが、人によって異なるだけだ。特に、戦争の前と今とでは。木戸の顔を見て、胸の奥に膨らんだ想いを両手で握りつぶしながら、春子は精一杯の力で微笑を浮かべ今一度頭を下げる。「はい、よしなに賜りました」

再び春子が顔を上げたとき、木戸は敬礼をしていた。以前と変わらず、本当に見事な敬礼であったのだが、ただその瞳の奥にある物はなんとも表現のしがたい哀しみとも強烈な意思とも、ある

いは覚悟とも取れるような光が宿っていた。それが、一体何を意味するのかは、この時の春子にはまったく理解することができなかった。それでも、これまでとは何かが違うのだということだけは、はっきりと意識していた。 敬礼をした右手を下ろすと、木戸は大きく一步前へと足を踏み出す。春子の目の前に木戸がいる。ただそれだけのことなのに、聞こえてしまうのではないかと思えるくらい鼓動が高鳴っている。激しく明滅を繰り返す雷光が、春子の体を貫いた。ほんの少し前までは、自分の中にこれほど激しい感情が存在しているものなのだとは想像もしていなかった。だけどそれは、竜巻に背を向けて立つ人と同じようなもの。気がつけば、どうすることもできずただ舞い上げられてしまうだけだった。 ただ、それでも春子はここに立っている。あの日から、何度も思っていた。そうしないほうがいと分かっていたところで、どうしようもなく幾度も繰り返し考えてしまう。もし、木戸の申し出を受け入れていたなら、どうなっていたのだろうか、と。だがどれほど考えたところで、絶対に結論が出ることはありえない。それは、過ぎてしまった過去なのだから。木戸と再会することが出来たというのに、いきなり別れを語っている。それこそが、現実だった。 もちろん、そんな心の内など見せることなく、春子は木戸に向かって微笑む。他の客を相手に微笑むのとは違ってしようと、笑顔を作っているという点では一緒だ。そういうことが自然にできてしまう自分のことが、春子はとても嫌いだった。 そんな春子の動揺に気がついていないのか、それとも気づかぬふりをしてきているのか、なんの反応もみせず木戸は正面に立ちポケットから茶封筒を取り出す。分厚いとは言

えないが、それでもある程度の厚みがある封筒であった。春子の瞳を正面から捉えたまま、木戸は春子の手を取るとその手の中に封筒を押しこむようにして握らせる。見てはいない、でもその中身がなんなのか春子にはすぐにわかった。「これは、どういうことですか？」不審に思った春子が尋ねる。大金とは言うには微妙な額だが、木戸にとっては相当な大金のはずだ。軍人に支払われる俸給はかなり上の階級になっても、春子の収入に比べるとずっと少ない。生活費が殆どかからない軍隊生活とは言っても、これだけの額を貯めるとなるとかなり長い間かかったはずだ。おそらくは、貯金していたお金のすべてかそれに近い金額だろう。そういったことくらいは、すぐに察しがつく。一体なにがあったのだろうか、と思うのが当然であった。「あまりたいした額ではないですが、これで、ここを尋ねてきた飛行隊の新兵共を、男にしてやってはくれませんか？」その話を聞いて、理由はわかった。上官として、部下のことを気にかけてのことだった。だがそれは、春子の感じた不信感を拭うどころか、更に増すことになった。……いや、ここに至れば、不信というよりは不安と表現すべきだろう。まるで、木戸が本当に桜の花びらのように、今にも散ってしまいそうに見えてきた。「それは、全然構いません……でも……」不安を口にしてしまったら、それが本当のことになりそうな気がして、これが精一杯だった。木戸は春子の手が封筒を握りしめたことを確認すると、手を放し一歩下がる。急に開いた二人の隙間に風が桜の花弁を連れて舞い込んでくる。「自分は振武隊の隊長として、沖縄への出撃が決まって

おります。ですから、自分は再びここにやってくることは出来ません」 この時の春子には、それがどういうことなのか理解することはできなかつた。難しいとかいうことではなく、単純に兵隊さんが戦地へ向って出征するということが次元がまるで異なる話だったからである。「それは……」 どういうことなのか、と続けるつもりだった。しかし、言葉にはできなかつた。理解できていなくても、予感めいたものはあつたからだ。それが、ひどく残酷な話になるであろうと。しかし、そんな春子に向かって、木戸は真つ直ぐに話を続ける。雲のない空にも似た清廉さ。こういう形で出会つたことを、幾度も繰り返して後悔するほどに、気持ちの良い男であつた。「自分は隼に乗り、こいつを含む他の部下と共に、沖縄方面に展開する敵艦に対して、体当たり攻撃を敢行します」 このところ、グラマンヘルキャット等の空母搭載型の戦闘機による空襲が頻繁にあるようになり、まだ大型爆撃機による大規模な空襲はなかつたものの、連合軍が近くまで来ているのだということを誰もが知つていた。太平洋の制海権をほぼ手中に収めた連合軍に対して、主力空母の大半を失つてしまった海軍飛行部隊は、陸上基地から飛び立って組織的な体当たり攻撃を繰り返すようになっていた。作戦当初はそれなりの戦果をあげたこともあり、大本営によってさらに何倍にも水増しされた戦果が国民に向けて発表されてた。そのことは、春子の耳にも入つてた。一つの命で敵艦を一隻づつ沈めるのだと、ずいぶんと勇ましい話であつた。だが、そのことが意味するのは、死ぬことを前提にした作戦だということ。生きることが、絶対に許されない作戦。春子は、まったくの他人事のような気がして、普通

に戦争という日常の一つなのだとその程度に受け止めていた。だが、こうして木戸の口から聞かされると、その作戦が本当に意味することを痛いくらいに実感できる。それでも、春子にできることは一つしかない。そのことを、ただ受け入れること。「はい……」春子の口から出た言葉はそれだけであった。もっと、他になにか気の利いた言葉が欲しかった。でも、それが何であれ春子の口から出てゆくことはとても無理だったろう。今の春子にとって言葉は、容易に扱うことができないくらい重たいものになっていたからだ。それにもう一つ、春子にとって言葉にしてはならない想いもあったから。眠らせておかななくてはいけない感情。それが、野上の記憶と共に蘇ってしまっていた。だがそこまでだ、そこから先に進むことは出来ない。いや、してはいけない。満開の桜を背景にして、自分の前に立っている木戸の姿を、春子は自分の中に止《とど》めようと、しっかりと瞳を開いて見つめた。それだけが、今の春子にできることだから。永遠と一瞬が破綻なく融け合う時の中で、この瞬間確かに二人は二人の時を過ごし、それでも時は確実に流れ去る。「それでは、自分はこれで失礼します。どうか、体に気をつけて末永くお元気で」敬礼をして、木戸が最後に告げた別れの言葉は、春子を気遣うものであった。春子の手の中で、くしゃりと小さな音がする。「木戸さまも……」春子の声は、そこで途切れる。言葉が見つからなかったのだ。たぶん、春子が娼妓でなければ、もっともっとたくさんのことをできたのだろう。かけるべき言葉もあったのだろう。なにより、自分の心の全てを言葉に変えられ

たのだろう。でも、それは現実ではなかった。結局春子にできたのは、口をつぐみ見よう見まねで不器用な敬礼をしてみせることくらいであった。それを見て、木戸は小さくうなづくような仕草をして、敬礼していた右手をゆっくりと下ろし、その場で左を向く。その場で黙って立っていた少年兵の肩を軽く二回叩くと、そのまま西の門に向かって歩き去る。その背中が、春子が木戸を見た最後の姿となった。「ごめんなさいネ。さあ、入りまシヨ」木戸を見送った春子が、それまで店の前で待たされていた少年兵に声をかける。すると彼は、明らかに緊張している様子でぎこちなく頷いた。「さあ、どうぞ」春子はわざと自分の体を少年兵の痩せた体に寄せて、絡めるように腕を取る。できるだけ女を匂わさず、でも女を感じさせながら。何も言えず、引っ張られるようにして少年兵は春子と共に玄関を潜った。板の間には、穂垂が正座して座っていた。「よいのかネ？」他のことには触れずに、穂垂が春子に言った言葉はそれだった。その言葉の意味することは、春子あまりに明白であったが、「お客さまですヨ。お代はこれで……」穂垂の言葉には触れることなく、自分の手の中に握りしめていた茶封筒を穂垂に向かって差し出す。ずいぶんとクシャクシャになってしまい、見た目も酷い有様であったが、穂垂は何も言わずにそれを受け取った。「確かに、お預かりしときますヨ」握り潰されてしまった封筒を、床の上に置いて丁寧に引き伸ばした後、中身を特に確認することなく穂垂が答える。「二階です、こちらへ」まだ腕をとったままの春子が、軽く少年兵を引っ張るようにして二階の座敷に案内する。座敷にはまず少年兵を先に通して、春子が後に入り背中

越しに襖をピシャンと高い音を立てて閉めた。その音に驚いたのか、少年兵が小さく身をすくませる。極度に緊張していることの現れであった。「あたしの名前は小春。よかったらお名前、頂戴してもよろしいですか？」最初に自己紹介から始める。そういうことを抜きにして、いきなり始めるほうが本当は楽でよいのだが、この少年兵を相手にそれはしたくなかった。「じ、自分は安藤藤太曹長であります。こ、小春さん」ほとんど緊張がピークに達しているようにも見える。春子はは少年兵、安藤に身を寄せながら木戸のことを思い出してしまった。木戸の初めての時もこんな感じだったなど。ただ、木戸の時には確かにあった大切なものが欠けている。言葉にはしないし、してはいけないことだけど。「安藤曹長サン。年増でごめんなさいネ。お嫌なら、若い娘《こ》と変わってもいいですよ？」ことを始める前に、春子が確認する。本当なら一度ついた娼妓の交換になんて応じることはないのだが、今日は特別である。安藤藤太にとって後悔するような時間を過ごさせるわけにはいかなかった。此処から帰る時には、少年ではなく男になって帰っていってもらおう。それは、春子が果たさなくてはならない誓約だと思っているから。「いえ、自分は小春さんがいいであります……」安藤はぎこちなく、それでもはっきりとそういい切った。ただ、春子はそんな安藤に含みのようなものを感じる。春子自身はまだまだだとは思っていても、現実にはずいぶんと年齢の開きがある。母親にはまだまだ届かないとしても、年齢的には母親の方が近い可能性もある。どうしても、春子のことを受け入れることのできないとしても当然

であった。母親とは違うのだと頭ではわかっている、体が受け入れないことも多い。生まれてから半分近い時間をこの世界で生きてきて、そういう男性を何人も知っている。お金を出してまで女を欲するくせに、どう頑張ろうと女を抱けなくなる、それが男であった。だから春子はそここのところは、ずいぶんと気をつけていた。努力や技巧だけではどうしても乗り越えることのできない部分であるから。もちろん欲望を滾らせて、全力で春子の肉体をむさぼろうとする男もいる。その時にはただ流れに身を任せればいいので、春子は何も悩む必要もないので仕事としては楽であった。ただ、現実にはそういう客はそれほど多くない。だから、ちょっとしたことで躓く可能性がある。　　今、春子は身を寄せながら、安藤はどうなんだろうと注意深く見ている。「そう、ありがとうございます」　　礼を言いながら、春子は自分の指を安藤の体に滑らせてみると、若い男の体が敏感に動いた。悪くない反応である。これなら、木戸と交わした約束どおりに少年を、少年のまま送り出さなくてもすみそうだ。　　ところが。「ま、まって……ください」　　安藤が、荒くなった声で春子の行為を遮った。間際になって怖くなったのだろうか？　初めての体験に脅える女はままいるし、それほどではないが男にも稀にいる。春子が反射的に思ったのは、安藤そういう一人ではないかということである。「こわいですか？」　　男にいうならそれは侮辱として受け止められてもしかたない。ただ、殆どの場合効果的な言葉であった。攻撃的になると、殆どの場合男の性欲が増すのが普通であったから。もちろん度が過ぎると逆効果になることもあるが、これくらいならそうはならないと、春子は経験上知っていた。

だが、春子は間違っていた。前提が間違っていたのである。

「そうじゃないです。少し、お話が聞きたくて」 安藤が止めたのは別の理由からであった。「なにを、ですノ？」 聞き返した春子だったが、言葉を口にした時にはおおよそ察しはついていた。というのも、特に考えなくても心当たりは一つしかない。

「隊長殿とは、お知り合いなのでありますか？」 そう、木戸のことである。玄関先でのやりとりが、気になっていたのだろう。いけないとは分かっている、結局あんな目立つ場所で未練を晒してしまった。通りがかりの通行人ならば、恥をかいたというくらいですむだろうが、木戸に連れられてやってきた少年にはそれなりの説明をする必要があった。「もうかれこれ八年ほど前になりますか。その頃から、良くしていただいていますのサ」 馴染みの客であるということ、簡単に告げる。木戸にとって、初めての女が春子であるということや、まやして二人の間にあった微妙なことまでは当然ではあるが触れることも匂わせることもしない。「そうなのですか」 表面だけでの説明であったが、安藤にとっては十分だったらしく、納得したように頷いた。それをうけて、今度は春子が訪ねかける。最初に、聞いておかなくてはならないことがあったから。「今日は、お泊りできますか？」

戦争が始まってからこっち、めったに泊まり客はいなくなってしまったが、できれば安藤にはそうしてもらおうつもりだった。お金は木戸からもらっていたし、仮に足りないとしても春子の裁量でどうにでも出来る。おそらく、木戸よりずっとお金を持っている。借入金はとっくに返済し終わっており、その後は使い道の

ないお金がどんどん貯まっていったからだ。不足分が出たとしても、十分それでやっていける。それに事情を話せば、誰にも話さないという条件付きで穂垂は春子の好きにさせてくれるだろう。最悪の場合でも、春子がただ働きをすればすむことだ。だが、軍部から外泊許可が降りていなくてはそれもままならない。普通の短い時間では、なにも出来ないまま終わってしまうかも知れず、そのことが心配だったのだ。絶対に安藤を少年のまま出撃させたくはなかった。二度と戻らぬことが前提の、必死の作戦である。せめて男にして送り出したかった。安藤のために、春子がしてあげられることはそれしかなく、そうであるならばけして失敗はしたくない。女も知らない少年が、御国のためと言い含められて敵船に体当り攻撃をするなどあまりに悲惨ではないか。そう考えるのは、所詮春子の手前勝手な我侭なのかも知れない。それでも春子には、安藤に少年のまま散って欲しくはなかった。「……はい」　安藤は少し戸惑った様子を見せながらも頷いた。どうやら、時間的な余裕はできたらしい。春子は、内心ほっと胸をなで下ろす。ただ、殿方のモノは非常に神経質な部分があるので、最後まで安心するようなことはない。どんな状況でも女性を襲うことができる男性も確かにいるが、それは特例であり概ねちょっとしたことがきっかけで出来なくなることが普通だった。ましてや初めてとなると、さらに慎重に対応しなくてはならない。ただそれは、春子が丁寧にやっていればすむことなので、実際にはそれほど難しいことではない。だから、本当に気をつけなくてはならないのは、それ以外ということになる。ただ、それが何なのかは、これ程経験を積んだ春子であっても分からない。結局のと

ころ、人それぞれということなのだろう。だとしたら、安藤という少年はどうなのだろう、ということになる。だからといって直接言葉で聞いてみたところで、生理的な反応なので本人にも答えられるわけがない。反応を見ながらやっていくしかない。そういうことなので、ゆっくりと時間をかけられるということは、とても都合がよかった。「では、隣に座ってゆっくり楽しみましょうネ」 春子は楽しそうに言いながら、安藤のすぐ横に自分の身体を摺り寄せる。急に近づいた春子に驚いたのか、わずかに上体をのけぞらせるような仕草をしたが、その場から動くようなことはしなかった。春子はこれで少し安堵する。どうやら、逃げ出すようなことはなさそうだ。稀な例ではあるが、いざとなった時、急に帰ると言い出す男もいたからだ。お金はちゃんともらうと言っても意思は変わらず、そういうのは春子にとって、いささかなりとも矜持が傷つけられる事態であった。ただ、それだけならば春子の気分が悪くなるだけのことなので、客を逃してしまったということを除けば支障があるわけではなかった。だが今日はそうはいかない。どうしても、春子は最後までやり遂げなくてはならないのだから。「はい！」 いきなり耳元で、下階に届かんばかりの返事をされて春子は吃驚してしまう。金属音のような耳鳴りを聞きながら、春子は安藤の作りのしっかりとした耳元に口を寄せて囁きかける。「だめですヨ。他の座敷の人たちが驚いてしまいますから」 それを聞いて、今度は安藤が吃驚したような顔を見せる。どうやら、自分が大声をだしたことに気づいていなかったらしい。ただそれは、春子には分かっていたことだったので

、特に驚くようなことではなかった。それに、自然と身を寄せるきっかけができたので、これを利用して自然な流れでこちらを向いた安藤の口を吸う。ただ、深くはせず、すぐに身を放す。春子にとっては、ひどく軽い冗談のような口づけであったのだが、安藤にとってはかなり衝撃的な出来事であった。春子の方に顔を向けたまま、固まってしまっている。普通だと、欲情が盛り上がった男からこのまま押し倒されるか、逆に受身の客が相手だと春子がこのまま押し倒してしまう流れになる所だが、春子は焦らずに少し身を離れた今の距離を保つ。すると、少し安藤が不安そうな表情をみせたので、春子はすかさず手を伸ばす。触れたのは安藤の頬。そこからすべらせるように指先を動かして、安藤の乾いた唇へと移動させる。まるで、紅を塗るように指を唇の上で動かしながら、安藤の瞳を少し下から上目遣いに覗き込むようにして見る。殆どの男は、これで少なからず反応を見せるのだが、安藤は固まったままだった。表情も固まったまま、このままでは反応が分からない。だから、本当の反応を調べるために、手を伸ばして確認すべきなのだが、春子はあえてそれをしなかった。安藤の瞳の奥に見つけたものが、春子の身体を突き動かしたのである。こうせずにはいられなかったという、半ば本能的なものであった。獲物に飛びかかる猫のような仕草で、いきなり安藤の唇を奪った。深い口付けではないが、それでもついにむような軽いものではない。はっきりと、安藤が春子のことを意識できるほどにはしっかりとした口づけであった。右手を安藤の頬にあて、左手を安藤の背中に回してきつく抱き寄せる。息を止めたままなのはわかっていたので、春子は適当な所で安藤を開放してあげる。

少し、顔を離してまた安藤の瞳を覗き込むと、春子がさっき見つけた瞳の奥のものはまったく変わることなくそこにあった。この時の春子には、それがなんであるのかなどまったくわからなかったが、それでも他の客とは違うのだということはなんとなく理解できる。そんな春子が、次にとった行動は安藤を自分の頭を自分の胸の中に、きつく抱きしめることであつた。安藤は一体どうしているのか分からなくなっているのか、春子にされるがままになっている。だが、あまりに強く抱きしめすぎたのだろう。「すこし、痛いです」 苦痛を訴えてきた。春子は、いくらか力をゆるめるが、安藤の身体を開放まではしなかった。そうしたまましばらく待っていると、ようやく安藤の腕が自分の身体に巻き付けられるのを感じた。そこで春子はようやく安藤の頭を開放して、身体をすべらせるように動かし下へと移動する。自分のお尻をあぐらをかいている安藤の膝の上に乗せて、正面から安藤の唇を奪う。今度はさっきより、もっとずっと濃厚な口づけであつた。春子が考えていることは一つだけ。忘れさせること。今だけは、春子と一緒にいる間だけは、何も考えなくてもよいように。 安藤の体温を感じながら、春子は自分自身を意識して高めていく。でも、のめり込むわけではない。春子は女を売っていても、女になってはいけないのだから。この世界で生きる女にとってそれは常識であり、それを超えることは非常識となる。春子の場合には彼女らとは別な理由から、それを避けていたのだが、結局やるべきことに差があるわけではない。ただ、春子はそのぎりぎりの所を手繰り寄せようとはしている。女であることを避けながらも、

女であることを求めるという矛盾を抱え続けるという点で、春子は明らかに普通の娼妓とは言えなかったが。娼妓の肉体を求めながらも、娼妓を見下す男たちと、自分の身体を求め甘い囁きにたやすく心を揺らす男に内心舌を出す娼妓たち。互いを必要としながらも、互いを蔑む奇妙にねじれた関係。それが、この世界においては常識というものであった。そこからほんの少し、半歩だけ踏み出そうと春子はしている。故に、春子は異端であった。自分を高ぶらせながら、春子は冷静さも保ちつつ、安藤の身体を左手でまさぐっていく。まだ服の上からなので、はっきりと感じることはできないが、それでも明らかに呼吸が荒くなっていることとしつとりと汗ばんできていることを感じられた。間違いなく、安藤は興奮している。そこまで、春子は一旦身体を放す。すると、安藤は魂が抜かれてしまったような表情になって、春子の顔を見ていた。身体を用意していた布団の上に移すと、安藤の視線を意識しながらゆっくりと帯をほどき、襦袢を肩からするりと下に落とす。ただ、胸は両手で覆い、すぐには見せない。もちろん、恥ずかしさからではなく、さらに強く安藤の意識を惹きつけるためだ。まるで、掌で転がる玉のように、安藤の視線は春子の狙い通りに胸元に集中する。さらに春子はじらしながら、とてもゆっくりと腕を自分の胸元からほどき、安藤の方に差し伸べる。「さあ、こちらにおいでくださいナ」笑顔を浮かべて安藤のことを誘う。すると、安藤は少しの間固まっていたが、まるで花卉に引き寄せられる蝶のようにふわふわと春子の方に吸い寄せられてきた。春子は手の届く距離までよってきた安藤の右手を、すぐに自分の両手で抱え込むように捕まえる。まるで砂に

落ちた雨のように、安藤は春子の中に引き込まれる。そこから先は春子という海の中で泳ぐ魚のようであった。熱帯の海の中、安藤にとってはすべてが初めての体験で、何を考える余裕もなく思う間もなく春子の思うままに泳がされている。やがて安藤は、自分が一体何者であるのかということすらわからなくなりつつあったが、際どいところで春子はそれを許さなかった。安藤の瞳の奥を覗き込みながら、春子は自分の瞳の奥をのぞかせる。それはまるで、春子が女なのだということをことあるごとに、しっかりと確認させているかのようであった。　だが翻弄される安藤は少年であった。若すぎる健康な肉体が、たとえどれほど気をつけて制御しようとしたとしても、春子の柔らかな肉体に包まれていつまでも抗していられるはずがない。ついに安藤は春子の中で気をやってしまう。ただそれは、春子にとって最初から分かっていたこと。すぐに自分の口を使って、安藤の物から力が抜け出さないように元気づけてやった。若さ故に堪え切れない肉体は、若さ故に力を失う前に元の力を取り戻す。春子は自分の中に導きながらも、自分の肉体を使って安藤の指を誘っていく。女として敏感な場所に触れると甘い声を出し、さらに次の行動を誘うのだ。それを繰り返していくことで、それまでただ春子に翻弄されるだけであった安藤が、初めて自分から動き出して。女がどういったものであるのか、安藤は今初めて知りつつあるのだ。そして、春子はそれを教えている。春子が野上という男を知って女になったように、安藤は春子という女を知って男になろうとしている。娼妓にとっては大勢の客の中の一人に過ぎないが、安藤にとってはと

ても大切な儀式であった。そして、春子はそのことを初めから意識していた。普通の客にとっては、泊まりで女を買うのは長い時間だ。けど、春子にとっては、今夜一晩しかないのだという思いのほうが強い。今夜一晩だけで、出来る限り女というものを教えたい。少年から一人の男になるためには、あまりに短い時間であるのかもしれない。それでも、春子はできるかぎりのことはやろうと決めていた。だけど、あせりは良くない。いくら若いといっても限度があるし、ちょっとしたことがきっかけで、出来なくなることもある。二度目の精を放った時、春子は安藤の身体をきつく抱いてその耳元でささやいた。「少し、休みましょ」 熱く鼓動する若い息吹を感じながら、春子は自分の腕の中に命そのものを抱きしめていた。生まれて初めての行為を体験して、一向に高ぶりが鎮まらぬらしく安藤は春子の身体を激しく愛撫し続けている。もちろんそれに合わせて、行為を再開することもできたが、春子は喘ぎ声で応じるだけで反応はみせない。どんな男であったにしても、男の限界値は女に比べてずっと低い。なにしろ娼妓は、一日に何人もの男を相手に肉体を売り物にしているのだ。たとえ若さがあると言っても、この調子で飛ばしすぎるとあっけなく限界が来てしまうだろう。だから、春子がきつく抱きしめて押しとどめていたのだけれど、やりすぎると安藤の中の炎が消えてしまうのでそこら辺りのさじ加減には気を配る必要があった。「小春さん、小春さん、小春さん」 春子の腕の中で、源氏名を連呼しながら春子の胸に顔を埋めようとしている。まるで、母親の乳房を探している赤子のようで、春子はなんとも表現のしようのない感覚を味わっていた。乳首を激しく吸いた

てる安藤の頭を、春子はきつくなりすぎない程度に抱きしめていたが、じきに春子自身にも限界が近づいてくる。ほんとうならば安藤の反応をつぶさに見ながら、それに合わせて行動をしなくてはならないというのに、春子はそれができなくなってきていた。性的な高まりがないとは言わない。こういう商売をしていれば、不感症気味になるのは間違いないが、時には高ぶったりすることもある。ただ、今みたいにもうだめそうだという感覚になることは滅多にあるものではない。何人もの男を相手にしていると、雑巾がすれてやがてはボロボロに擦り切れてしまうように、女の心も擦り切れていつてなかなか反応しなくなってしまうものだ。ましてや春子は、娼妓の中ではかなりの年季を積んできている玄人だ。豊富な経験を元に、当然のように対応できるはずであった。だが、安藤を相手にしていると、その経験がどうもうまく働かすことが出来なくなるようであった。確かに春子が、安藤を男にするために導いているということは間違いようのない事実である。けれど、今まで経験したような感覚とはどこか違っていた。何もかも、すべてを任せきってしまうような、野上への想いとも違う。心がざわめき浮かれ、どこまでも一つになりたいと願った木戸への想いとも違う。もちろん、たくさん相手にしてきた他の客ともまったく違う。春子にとっても、初めて感じる感覚であった。あえて表現するならば、このまま包みこんで、子宮の奥深くにしまい込んでしまいたい、そんな感覚である。経験がない。それゆえに、春子でも堪えきることができなかつたのである。女であるから娼妓になった、でも娼妓であるから女ではいられ

ない。でも、たまに女としての欲求を堪えきることが出来なくなることもある。それが今だった。まるで命そのものをぶつけてくるような安藤を、自分の身体で包んでいると次第に膨らんでくる愛しさに春子はすっかりと飲み込まれてしまっている。貪り合い、融け合うような絡み合いとは違い、全てを包み込むようなこの感覚が、今の春子にはとても心地良かった。その感覚を、春子は確かに楽しんでいたのかも知れない。安藤という名の嵐を受け止める大海のように、表面では同じように猛りながらも奥深くから見つめ続けている。だから、安藤の高まりに合わせて春子はぴたりと息を合わせて応じることができた。その時は春子の中から自分がどこか遠くにいってしまい、安藤だけを感じ続けていたのだ。表面上は、いつも春子がやっていることと同じことだが、安藤をまったく違う結果へと導くことになる。本来なら、とうに果ててしまってもおかしくないところから、安藤の高まりをゆるやかに受け止め、荒々しい動きから、もっと緩やかに落ち着いた欲求へと転化させてゆく。そうすると、ただただ必死だった安藤にも、徐々にゆとりが生まれてきて、欲望のみに突き動かされていた行動に、変化が生じてくる。見えていても、なにも映していなかった瞳に、春子のことが映るようになった。まずは肉体。次に顔。最後に表情。この変化は行動にも現れてくるようになった。春子の身体をまさぐりながら、表情が変化する場所をより強く刺激するようになってきたのだ。たぶんそれは、無意識でやっていること。それを、春子が口にだして補ってあげる。「そこっ……、いい」この一言で、安藤はさらに変わった。ひたすらに自分の本能のまま動いていた、そこに余裕が生まれ春子の存在

を意識した。そして今度は、春子の感覚を意識し始めたのである。相手をしている女が気持ちよくなっているのだと感ずること、男はより強く自分を高ぶらせる。そのことが、ようやく分かってきたのである。春子は、さらに教えてあげる。下にあった自分の身体を入れ替えて、安藤の上にまたがった。体位を正常位から騎乗位に変えたのだ。明かりは消していない。これだと安藤は、下からはっきりと春子の裸体を見ることができる。自分が今抱いている相手が生身の女であるのだということを、その目でさらにしっかりと意識するはずだ。相手の汗や体温を感じるだけで男を感じることができる女と違い、男はその目で見ることで女を感じる。その感覚を春子が共感することはできないが、今まで娼妓を続けてきた経験から自然と身につけた知識であった。それに、どんな女も男に見られることを意識しない女はいない。だから本来は、生まれた時から本能的に身につけているはずのことなのだろう。ただ、それを性に直結させるには、女には色々と邪魔なものが多いというだけかも知れない。春子はそれを意識することで乗り越えて、安藤に自分をさらけ出す。見られることを意識しているゆえに、妥協のない肉体はどんな女より女らしい曲線を描き、安藤の目の中に映り込む。安藤は、春子の下でまぶしそうにその美しい身体を見上げた。安藤は春子に導かれ、その身体に包まれながら、しっかりと自分の中の男を拾い出していった。どれほどの時間が経っただろうか。灯火制限で消されてしまった闇の中、二人は互いを抱きしめ合ったまま静かに目を閉じていた。春の闇は少し肌寒く、感じる体温はどんな毛布より心地良く感じさせ

てくれる。微かに伝わる相手の鼓動の高鳴りが、互いがまだ眠りに落ちてはいないことを遠雷のように伝えていた。「起きてますか」　息するような声で春子がささやくと、まったく待つことなく返事が帰ってくる。「なんでしょう？」　いきなりではあったが、もしかすると話しかけられるのを、ずっと待っていたのかも知れない。「特攻に行かれるの、怖くはありませんか？」

春子の質問は、多分質問としては口に出す前に終わっているような類の質問であった。爆弾抱えて飛び立ったら、もう生きて帰ってくることはないのだ。どう答えるにしても、怖くないはずがない。ただ、あえて春子はその質問をする。これは、どうしてもしなくてはいけない質問だと思ったからだ。「……思い残すことならあります」　問に沈黙で応じ、安藤は代わりにそんなことを言った。黙して語らないことを答えとして受け取った春子は、安藤の言葉を受けてさらに問いかける。「何か、あるのですか？」　とても気の利いた問いかけではなかったのだけど、安藤の望んでいた言葉はまさにそれだったのだろう。地面に落ちたゴム毬のようにすぐに言葉が跳ね返ってくる。「自分の今の母は、父さんが再婚して母親になった継母です。何一つ不自由なく徴兵されるまで、育ててもらっておりました。でも、一度もお母さんと呼んだことがありません。何度となく、呼んでみようとしたのですが、気恥ずかしくなってどうしても呼ぶことができなかった。こうして自分が皇国の未来のために必死の作戦に赴かんとするときになって、今更ながら激しく後悔しています。どうして、あの時お母さんとお呼び出来なかったのだろう……。お母さん、お母さん、お母さん……」　なんども、お母さんと繰り返す安

藤の身体を春子はただ黙って抱きしめる。それしか春子にできることはなかったから。春子は幸か不幸か親の温もりというものを知らずに育った。いや、親は春子にとって恐怖そのものであった。それでもなお、思慕の気持ちがないわけではない。春子ですら、そういう思いを抱くのだから、安藤の想いというものがどれほどのものかは察することができる。安藤が今一番気に病んでいるのは自分の命が尽きるのではなく、後に残されることになる継母のことなのだ。そういうあまりに純粋な少年だからこそ、皇国のためにと生きて帰ることの出来ない体当り作戦に赴くことができるのだろう。ただそれは、本来ならば当然あるべき少年たちの未来を奪うことでもある。とうぜん、そのことは少年達自身が一番分かっていることであった。それでもなお、彼らを選んだのは自分の未来ではなく、皇国でありそこに暮らす日本人の未来であったということなのだろう。そうでなければ、あまりに辛すぎる現実だから。ただ、現実はこれから加速度をつけて転がり落ちていく。日本全土を巻き込みながら。アルコールが気化するように時間が過ぎ、二人の世界を覆うたおやかな静寂の中、自分の腕の中で安藤の息が単調に安らいだものになったことを感じると、春子もその後が続くように眠りに落ちていた。

あくる日の朝、春子は安藤を普通に送り出した。普通の泊まりの客となんら代わりなく、かける言葉もいつもと変わらず。安藤もいたってほがらかに、特に何の変わった言葉もなく、これから向かう先のことなどまったく気にする様子もみせることなく。ただ、春子に話しかけると、春子が手を取ったとき、いちいち

まごつくようなうぶな少年はそこにはいなかった。春子に向けられた顔は、少年ではなく男であった。春子は胸の中が、羽毛一枚分くらい軽くなったような気がした。安藤を送り出した春子は、客のいなくなった座敷に戻り随分と以前にもらったノヲトに、鉛筆で安藤の名前を書き込んだ。すると俄に濡れてしまった紙に鉛筆の先がひっかかり、ちょっと破れてしまう。だから春子は、大急ぎでノヲトを閉じて紙の代わりに畳を濡らした。s

ついに、本格的な空襲が始まった。去年くらいから、グラマン戦闘機は我が物顔で空を徘徊するようになっていたし、桜の花が緑の葉を茂らせる頃になって、ついにB29を主力とした爆撃機部隊が押し寄せてきたのである。日曜日の午前中ということもあり、空襲警報の発令も行われることなく市民は完全に不意をつかれる形で空襲を受けることになってしまった。この時、春子は一通り朝のうちにしておくべき座敷の掃除や洗濯物等の雑用をすませており、少し休んだ後に春子は客を迎え入れるための準備に取り掛かろうとしていた。春の日差しを吸収して、いっぱい膨らんでいた布団を平手で思い切り叩いて、気持ちの良い音をたてていると、遠くの方からその音に合わせるようにドーンという地響きのような音が聞こえてきたのである。火山の爆発に似た音は、それよりずいぶんと生々しくそれでいて現実味を欠いているように春子には聞こえた。ふとんを叩く手を止めて、音の聞こえた空をみあげていると、ひゆるひゆるという風切り音と大気を震わせる炸裂音が絶えることなく繰り返され始めた。音を頼りに目を凝らすと、北北東の空が胡麻を撒いたようになってるのが見えた。その胡麻からさらに小さな芥子粒が地上に向かって落ちてくるのが見える。その芥子粒が落ちる時に笛でも吹いているかのような風切り音が聞こえて、地面に落下した後黒い塊のような煙が立ち上り、空振《くうしん》を伴った炸裂音が聞こえてくる。日常の中に突然割り込んできたその光景は、春子には現実味が薄く感じられどうすればよいのかということも考えつかず、ただ

その光景を眺めていた。「なに、ぼっと突っ立ってんノ？ 他の娘はみんな防空壕に行ったヨ！」 春子のいる中庭に裸足で穂垂が飛び出して来る。春子は驚いて穂垂の顔を見た。「防空壕？」

もちろん意味が分からなくて聞きかえしたわけではない。防空壕に避難するという発想が、今の春子の頭の中にはさっぱり思い浮かばなかったのである。「こっちに、きなさい」 そんな春子の手を掴み、穂垂は命綱でも手繰り寄せるかのような勢いで引っ張った。「あっ……ハイ、わかりました」 肩から取れてしまいそうな力で引っ張られて、春子はようやく我に返る。それで初めて気がついたのだが、空襲を知らせるはずの警報がまったく鳴っていなかった。日常の光景に突然姿を現した沢山の爆撃機の群れと、そこから砂粒でも落とすとしてもいるかのように見える爆弾の雨が、何が起きているのかを教えてくれている。 囲われた女たちが暮らす沖ノ村《おきのむら》の中では、外と違って本格的な防災訓令は行われてはいなかった。それでも、ことあれば最寄の防空壕に逃げ込むように通達はされていた。春子も逃げるべき場所は知っていたので、穂垂には先に防空壕に向かうように頼み、自分は一旦座敷に戻った。一人になると、それまで何処か夢の中での出来事のように聞こえていた、ひゅーひゅるるるという何処か間の抜けたように聞こえなくもない音が急に恐ろしげに聞こえてくる。少し前までにはだいぶ遠くの方から聞こえていたはずの音が、急速に近づいてきていることが春子にもはっきりと理解できるようになった。そうになると、それまでまったく感じることのなかった焦りの感情が湧き上がり、春子はせつつかれるように身支度を始める。といっても、何を持ち出すわけでは

なく、もんぺに着替え頭には三角頭巾を乗せる。一般の女性にとっては普段着ではあっても、遊郭で生きてきた春子にとってはほとんど無縁のものであった。ただ、防空壕に向かうのにそれらしい服装をしていないと、後々まずいことになる。だから、春子はもんぺに着替えようとしたのだが、あせる気持ちがかえって着替えを手間取らせてしまう。普段より余計に時間をかけてしまった春子が着替えを終えたときには、爆弾の風切り音と爆発音はもう間近に迫ってきていた。だが、春子はこのまますぐに逃げ出すわけにはいかなかった。まだやらなくてはならないことがあったからだ。押入れの中に手を突っ込むと、底の方に入れてあったノートを引っ張り出す。次にタンスの引き出しを開けて、風呂敷を一枚取り出すと急いでノートをそれにくるみ、お腹の辺りに巻きつける。そこまでやた後、ようやく春子は階段を駆け下りて玄関に辿りつく。丁度そのとき耳が痛くなるほど大きな、ドーンという音が聞こえてきて、家の壁全体がガタガタと揺れる。爆弾が投下されている位置が、かなり近づいてきている。春子が靴を履いて外に飛び出すと、北の空が黒くなっており、悪夢めいた恐怖を感じた。まるで自分の頭上に落ちてくるかのように感じられる爆弾は、黄蝶廊の玄関先から少し北の方に落下して派手な爆炎を吹きあげていた。その光景を間近に見て、春子は僅かな間だけど、立ち尽くしてしまう。今無数の爆弾が降り注いでいるまさにその辺りに、これから向かおうとしている防空壕があった。爆発音で我に返った春子は、周囲を見回した後、南に向かって走り出す。もちろん、そこに防空壕はない。あるのは川であった。だけど、

春子は絶え間なく投下され続ける爆弾に追われるようにして、川に向かうしかなかった。川の土手をよじ登ると、後ろを振り返る。爆弾が丁度大門の辺りに落ちるのが見えた。続いて爆炎の後に黒煙が立ち上る。もちろん、それで終わったわけではなく、遊郭の至る所で爆炎が燦めいた。耳が痛くなるような爆音に辺りが包まれた時、春子は意を決して川の中に飛び込む。春子は泳いだことがなく、当然泳ぎ方を知らない。だが丁度この時は干潮で、川の砂地が顔をのぞかせている。春子は踝くらいの浅瀬に飛び降りた。水しぶきがぱあんと音を立てて跳ね上がり、春のまだ暖かくなりきれない水しぶきが春子の服を湿らせる。和らいだとはいっても、冬の名残を留めてている川の水が、春子の足を引っ搔いてゆく。だけど、春子はそんなことは気にもとめずに頭の上を見上げていた。絶え間なく続いているひゆるひゆるという音が、自分が今飛び込んできた土手のすぐ上から聞こえてきたような気がしたのだ。そして、春子が生まれてから今まで聞いた中で一番大きな音が聞こえる。それが何かと考える間もなく、たくさんの土砂がざあっと音をたてて降り注いできて、春子の頭に積もる。酷い耳鳴りの中で、パラパラという音と土砂に混じって何かが川面に飛び込むバシャバシャという音も聞こえていた。ただ春子は防空頭巾で頭を隠し、土砂が目に入らないように瞼を閉じていたので、それが一体なんなんのかの確認はできていなかった。結局そのまま春子はしばらくそこから一步も動くことが出来なかった。頭から降りかかってきた土砂は、すぐに止んのだが、春子は怖かった。怖くて、川の中で立ち尽くしていることしか出来なくなっていた。それからしばらくして、春子はあることに気

づく。冷たい水の中に浸かったままの足が、千切れてしまいそうなくらい、痛みを感じているということではない。何時の間にか、辺りがとても静かになっていることに気づいたのである。まるで世界が一瞬で凍りついてしまったかのように感じる、そんな静寂だった。人の声も喧騒もなく、ただ何もない空白の場所。それが、春子の今いる場所になっていた。春子はその不自然さに気づかざるをえなかった。あまりに終りが唐突だったから、どこか遠くのほうでまだ続いているような、そんな気がしていたが、どれほど耳を澄ましてみても何処から聞こえてくるのかまるで分からず、ようやく春子はその音が現実には存在しないのだと気がついた。気づいた後、春子はゆっくりと砂に埋まっていた足を引き抜く。川底の砂が、足の甲をさらさらと流れ落ちる。春子は歩き始めた。耳が痛くなるような静寂の中を歩き、春子は上へとつづいている階段をみつけて、ようやく春子は急な斜面に申し訳程度にあった階段をよじ登り、土手の上に立つ。そこから見えた世界は、ついさっきまでとは違うまったく見知らぬ世界であった。ただただ広がる平地には、視界を遮るようなものは殆どなくなっていた。全壊をまぬがれた建物もあったが、それとても無傷でいる様子はない。家の半分が消えてしまっていたり、壁だけになっていたり、あるいは柱だけが残っている家もあった。ただ、まともな建物は春子の見る限り存在しない。土手を降りると、足元には大量の瓦礫が散乱しており、ただ歩くだけでも苦労する有様だった。春子はふらふらとよろめきながら、前に進んでいく。そして、しばらく行った所で立ち止まった。そこは黄蝶楼があっ

た場所。だが、今はただの瓦礫の山に過ぎなかった。春子は人生の半分以上を過ごした場所は、その痕跡すら留めてはいなかった。　　ついさっきまで玄関だった場所に立つと、春子は周囲を見回してみる。やはり、もうそこには何一つとして、かつての装いを保っている物はなかった。春子は自分が今何を考え、どう感じているのかということすらも分からないでいる。何も無くなってしまった世界に立ち、自分が何をすればいいのか空っぽの頭の中にはまったく思い浮かばなかった。それでも、春子は歩き出していた。何を求めるというわけではないのだが、春子の足は一人だけで動いていたのである。そして、歩を進めるにしたがって、春子の心の中に自分が置かれた現実がしっかりと入り込んでくる。春子が暮らしていた中の世界も、大門の外の世界も別け隔てなく一様に瓦礫へと変わった。そして、そのことをはっきりと理解できるようになると、春子はさらに大切な約束を思い出す。すぐに春子は駆け出した。足元がひどい状態になっており、何度もつまづいて倒れてしまったが、目的の場所まではほとんど一直線に進むことができたので、時間はさほどかからなかった。「穂垂姉さん！　穂垂姉さん！」　地下に掘られた防空壕の入り口へと走りよりながら、春子は叫んでいた。その声は防空壕に近づいていく度に、どんどんと悲鳴に近いものとなる。防空壕の入り口があった辺りには、大きな穴が開いているばかりで、入り口が何処にあるのかまるで分からなくなっていた。春子は、場所を間違ったのかも知れないと、悲鳴ともつかない大きな声で穂垂の名前を叫びながら、周囲をぐるぐると走りまわる。だが、たくさんの爆弾が落ちて瓦礫と化した街中では、走り回れば回るほど、より一層

が今何処にいるのか分からなくなってしまう。長い年月、見慣れていた景色は何処にもなく、ただただ見晴らしのよい見慣れぬ風景が広がり続けるばかりであった。だけど、走りまわっているうちに、春子は自分の腰ほどの高で砕かれた、丸く太い柱を見つけた。まるで原型を留めていないが、確かに見覚えがある。春子は、周囲を見回してみても、少し離れた場所に、もう一つ同じように砕かれた柱があるのを見つけた。高さは違うが太さはまったく同じもので、どちらも年季の入ったくすんだ色をした柱であった。それで春子は、その柱がなんであるのか確信することができた。遊郭を中と外、二つに分けていた象徴。少し前まで沖之村の大門であった物であった。春子は柱を背にして西を向く。大門は北に向かって開かれていた。大門から外には出ず西に行った所に、防空壕はあったはずだ。その記憶を頼りにして、春子は西に向かう。すると、さっき見たばかりの光景がそこにあった。大きな穴の空いていたあの光景だ。やはり、この場所が防空壕のあった場所に間違いなさらしい。同時にそれは、爆弾が防空壕の入り口を瓦礫に変えてしまったということも意味していた。それにもう一つ気がついたことがある。空襲が終わってけっこう時間が立つというのに、まだ誰の姿も見えていないということ。今頃は防空壕の中から全員でてきていてもいい頃である。でも、誰一人として姿を現した者がいない。春子はさっきは素通りしたすり鉢状になった穴の中を恐る恐る覗き込んでみる。でも、そこには、なにもなかった。本当に何もなかった。入り口は完全に塞がれてしまっている。春子は考えることなく動き始める。穴の中に溜ま

った土砂に手を突っ込んで、素手で土砂を掻き出し始める。底に溜まった土砂はただの土ではなく、細かい木片とか中には釘とかも混ざっていた。土砂を掻き出すたびに何処かしら傷つけて、春子の手はすぐにボロボロになってしまう。それでも、春子はその作業を続けた。痛みを感じ無いわけではない、どんなに痛くても春子にはやめることが出来なかった。穂垂は春子にとって、唯一家族と呼べる存在なのだから。だけど、いくら大切に思っている、どれほど強い意思があつたにしても、爪が割れ指先の皮がすっかり剥けて血まみれになり、まともに力を入れることができなくなってしまった手で掘り進むことなどできるはずがなかった。土を掻き出そうとしても、まがらなくなった指が、土砂の表面に流れだす血をこすりつけるだけ。土砂は爪の先ほどもそこから動いてはくれなかった。そんな状態で腕を繰り返して動かし続ける春子の行為は、自分自身に対する拷問にも等しいものであつたけれど、春子自身にはその行為を止めることなどできなかつた。まるで、やめる方法を忘れてしまったかのように。 やがて、陽が大きく西に傾いた頃、唐突に春子は両脇を抱えてられて、その場から無理やり立たされる。「穂垂姉さん、穂垂姉さん」とずっと繰り返して言い続け、春子は両脇を抱えられた格好でまだ目の前の土砂を掻き出そうと両手を動かし続けた。「貴様、何をしておるか？」春子のすぐそばで、男の人が聞いている。痩せこけ日に焼けて浅黒い顔をした男の顔を、春子は確かに見たが一体自分が見ているものがなんなのかすぐには理解できていない様子であつた。自分の両脇にも一人ずつ男が立っていて、彼らが春子を立たせたのだけど、春子はそのことにはまったく気づいていない。

それどころか、春子がなぜ今立っているのかということにも気づいていなかった。抱えられたまま、まだ目の前にある土砂を掻き出そうと両手を動かし続けている春子を見て、声をかけた男は苛立ったふうに舌打ちをする。そして、警告もせずいきなり春子の頬を平手で張った。春子の頬がビシャンと高い音を立てる。よほど遠慮無く叩いたのだろう、中が切れたらしく春子の口から血が流れ落ちる。かなりの衝撃があったためか、さすがに春子は一発で正気に戻り吃驚した顔を自分を殴った男に向ける。そこで改めて、男は春子に向かいもう一度さきほどと同じ質問を繰り返した。「貴様、ここで何をしとるか？」男の言葉を一旦咀嚼するかのように自分の中に受け止めると、春子はようやく自分に今何が出来るのかということに思い至る。春子は真っ直ぐ伸ばすことも、あるいは閉じることもできなくなった指で目の前の地面を指し示すと、すっかりかすれてしまった声で懇願する。「そこに、防空壕の入り口がありましタ。だから、早く……お願いしまス」何かに取り憑かれたような表情で、春子はそれから何度もお願いしますと繰り返す。そんな春子に男は見下したような一瞥をくれると、顎で周囲をぐるりと示して高圧的に言う。「貴様にはこの様子が見えとらんのか？ お国のために戦う力にならん者を助けているような余裕はない。それに、これでは到底助からんわ。無駄なことをするくらいなら、利用できる物資がないか貴様も探すのを手伝え」腕章を付けて偉そうにしてはいるが、その男は民兵であり軍人ではない。だが、軍人以上に好戦敵であるのは、彼らに共通する特徴だろう。普段ならば、春子にとっては

それですんだはずだ。彼らの言う事やすることは、何一つとして春子と関わりのあるものではなかった。でも、今は違う。目の前にいるこの偉そうな男は、春子にとってすぎることのできるただ一つの希望なのだから。　　一体ボロボロになっている小さな身体のどこに、それほどの力が残っていたものか。春子は悲鳴とも叫び声とも判断の付きかねる大きな声を上げると、身体全体を使いまがいてもがいてついには二人の男の腕を振り払う。自由になった春子は、すぐさま偉そうな男に詰め寄った。まだ血が流れだしたままになっている両手で、偉そうな男の上着をつかむと縋りつくように懇願する。「助けて下さい。お願いします、お願いします……」　　何度も、お願いしますと繰り返す春子に、男はあからさまに不快感を示す。自分の服をつかんだ春子の両手を、力任せに引き剥がすともう一度春子の顔面を強打する。ただ、さっきとは違って今度は拳を固めて強打した。たまたら、春子の身体は吹き飛んで地面にたたきつけられる。地面に倒れた春子の姿を真上から一瞥すると「汚い手で触るな」と言い捨てて、春子に目を向けることなく他の二人に対して視線で合図を行い、この場から立ち去ろうとする。だが、立ち去ろうとしたその時、男の左足が何かに引っかかったかのように、動かせずあやうく転びそうになってしまう。「貴様、なんのつもりだ？」　　男が視線を足元に落とすと、自分の左足に縋りつく春子のぼろ布のようになった春子の両手が見えた。「助けて下さい、助けて下さい……」　　何度も繰り返す春子の言葉に男は心底いらついたらしく、反対側の足で春子の脇腹の辺りをおもいきり蹴飛ばした。「くどい。皇国臣民ならお国のために死んだことを喜べ、屑が」　　よほど深く蹴

りが入ったためか、春子は嘔吐をする。するが、ろくな物を食べていないので、まともに出てくるものはなかった。そんな状態でも、春子は縋りついた男の足を放そうとはしない。「汚い。放せ、放さんか」　続けて三回男が春子を蹴る。脇腹、胸、そして頭。ここで、春子の意識は途切れた。　肌寒さを感じて春子が意識を取り戻したとき、辺りはすっかり闇に包まれていた。口の中に砂利と血が混じった、じやりじやりとした抵抗を感じてそれを吐き出そうとする。だけど、すっかりと乾いてしまっている口ではうまくいかなかった。だから砂利を吐き出す代わりに、口の中にあっただころころと転がる物を吐き出した。冷たい月の明かりに照らされて、小石のようなものが地面の上にくろがった。煌梨《きらり》と月影を反射したそれは、折れた歯であった。頭を蹴られた後に顔も蹴られていたらしい。春子は吐き捨てた歯が、奥歯であることを確認してほっとする。前歯の折れた娼妓なんて、笑いの対象にしかない。　春子は立ち上がろうとして、自分の左手に強烈な痛み以外の感覚がなんにもないことに気づいた。動かさないというより、動いているのかもわからないような状態である。とりあえず上半身だけを起こして左手を見ると、親指と人差し指と中指の三本が、おかしい方向を向いている。この強烈な痛みも、まったく動かすことができないのも、どうやらそのせいだったらしい。顔を蹴飛ばされただけではすまずに、男が履いていた頑丈そうな軍靴で左手をおもいっきり踏み潰されていたようだった。　春子は立ち上がろうとして、これ以上力が入らないことに気がついた。色んな意味で、もう限界がきているらし

いと悟る。周りを見回すと瓦礫しかない。黄蝶楼もこの瓦礫の一部になっている。立ち上がってみたところで、結局春子に行く場所なんてないのだ。そう思うと、自然と体から力が抜けてしまう。地面に、仰向けに転がった。場所を特定するのが億劫なくらい、全身が隈なく痛いよと悲鳴を上げていた。その痛みをことさら無視するように、空を見上げる。東の空高くに登った月と、全天に輝くいくつもの星座が春子を迎えてくれた。思い出したのは、野上のことだ。生まれて初めて、春子が星座と出会った夜のこと。あの日は天の川がとても美しく輝いていた。まだ一番美しく見える季節までは間があるが、それでも西の空にはっきりと輝いて見えている。今見ている天の川が揺らめいているのは、春子が流している涙のせいだろうか？ そして、織姫と彦星を隔てる美しい川が、あの日と違ってとても寒々と瞳に映るのは春の夜空に吹く冷たい風のせいだろうか？ 春子はどうにか動かすことのできる右手を広げて、掌を自分が寝ている地面の上に重ねる。結局春子は、なんにもすることができなかった。この下に埋もれてしまったままになっている穂垂を助けだすことができなかった。さすがに、もう生きているとは思っていない。でも、それでも、春子がすべきことはある。このままだと、戦地に行っている阿南が戻ってきたときに、遺灰すら渡すことができない。でも、もう春子は自分が限界だろうと思った。この土の上で死体になる。そうなれば、ほどなく無縁仏として処理されて吊われることになるだろう。春子は、そのことを申し訳ないと思った。自分ばかりが、と。だが、いったい春子にどうしようがあったというのだろうか。その時、もう一度見上げた星空に、長く尾を引いて流

れる一筋の光が一瞬煌くのを見つけた。流れ星である。そして、それが消えた後には、また何一つとして変りなく輝き続ける星空があった。それを見ていると、ほんの少しだけ春子は自分の心が軽くなるのを感じる。しよせん世界にとって、自分はその流れ星のようなものだろうから。そう思ったとき、春子は自分が大切な約束をしていたことを思い出す。そして、自分の胸元をさぐるとそれはあった。一冊の大学ノヲト。春子にとって、とても大切なものだ。ここに書かれているものは、誰にも見せることなく春子が冥土に持っていくものである。まだまだ約束は果たせていないけど、春子にとってただひとつの誇りでもあった。その事を考えたとき、春子は初めてまだ死にたくないと思った。そう思うと同時に、全身を襲う痛みから逃れることが出来るのなら、このまま死んでしまっても楽になりたいと願っている自分に気がついた。星を見上げながら、再び春子はゆっくりと体を起こす。痛みはさっきより強くなっていたが、それでも諦めずに立ち上がった。そして、辺りを見回す。瓦礫のずいぶん向こう側に、微かなあかりを見つけた。それは、まるで地上落ちてきた流れ星のようにみえた。春子は、足をひきずるようにして、そちらに向かって歩き始める。何度も倒れたが、そのたびに自分の胸元に右手を押し当て、何度でも立ち上がり歩き続けた。

二度目の大規模な空襲があった時、春子はすでに市街地を離れていた。一度目の爆撃と違って、二度目の爆弾は遅延式の爆弾が使われていて、すでに数日が過ぎているにも関わらず、市内は昼夜を問わず散発的に爆発音が何処かしらから聞こえてくる。何らかの理由から避難することのできない人間は、いつ炸裂するかわからない爆弾に神経をすり減らす毎日がつづいている。ただずいぶん前から、空襲を懸念していた幕僚本部からの通達によって疎開が勧められていたおかげで、犠牲者の数はそれほど多くはなかった。ただ、大量の遅延爆弾と不発弾の存在が市街地の復興や亡骸の回収を妨げていることには間違いない。市街地のほぼ全域が危険区域になっており、市街地に留まるというなら覚悟を決めておかななくてははいけなかった。疎開する市民に国からほんの僅かの額であるが、国が家屋を買い取りたいという打診があったのだが、ほとんどの人はどうせ空襲で破壊されてしまうのだからと受け取りを拒否していた。この頃になると、大本営や新聞各紙がいくら浮かれた報道をおこなっても、国民の大部分は日本が戦争に勝利するという話を信じていなかった。そもそも空からは、米軍により日常的に宣伝のビラが撒かれるようになっていて、いくら軍部が真実をひた隠しにしようとしても、日本の置かれている状況は結構つぶさに知られていたのである。それに、検閲はあっても人の噂話までは検閲できるはずもなく、いよいよもってこの国はまずい状況に置かれているのだという話が、伝染病のように広まっていた。そして、ついに本土に対して大規模な空襲が行わ

れるようになってきた。都市部では空襲を避けて疎開が行われていたが、すべての住人を移住できたわけではなく、主に子供が対象になった。残った大人は戦争のために駆りだされるが、もう物資はほとんど底を尽きかけており防空壕の設営とか、空襲に備えての防災訓練とかそういうことくらいしかすることはなかった。ただそれも、湯水のように失われ続ける兵員を補充するために、次々と若い男達が動員されてゆくために労働力の空洞化は進み、市民活動そのものが破綻寸前にあった。都市部では様々なインフラを空襲によって破壊されても、もうそれを復活させるだけの力は残されてはいなかったのである。いつ果てるとも知らない戦争において、若者たちは絶望的な戦場に赴いていった。いくら大本営が旗を振ったところで、勝ち目がないと誰もがそう思っている戦いに。そんな悲惨な状況の中でも、最も過酷な任務を与えられた若者たちがいた。特別攻撃隊に赴任を言い渡された若者たちである。まだ二十歳にもならない少年たちがたくさんいて、必中の命令とともに敵艦に対して体当たり攻撃を敢行していった。絶対に生きて帰ってくることを許されない必死の出撃。確かに命令はあったが、若者たちはそれぞれの決意とともに出撃していったのである。春子と共に過ごした若者は、涙を流しても最後は笑ってみせた。野上や木戸がそうであったように、ある種の覚悟を持って生きてきていたからなのではないかと思っていた。だから春子は、少しでも彼らのために何か出来ることはないのかと考え続けた。だから今では木戸から最後に託された仕事だからというだけではなく、春子の大切な思いになっていた。でも黄蝶楼は失われ、それどころか遊郭街そのものが壊滅してしまっていた

く復旧の目処がたたないでいる。ただ、幸いなことに軍隊がいれば、かならず慰安婦の募集はあった。誰彼構わずということなら、私娼として働けばいいのだが、それでは軍人の相手はできない。基本的に軍人の性交渉は妻以外には認められていない。たとえ恋人同士で好きあった中であっても、性交渉を行えば軍法では強姦となる。外地に出征した軍人の規律を守るための、世界でも例をみないほど厳しい軍律であった。唯一例外とされるのが、指定された公娼との性交渉である。だから慰安婦は常に応募されていたし、従事する女たちの待遇は軍によって手厚く保護されている。特に健康面に関しては、とても厳格で公娼を続けるためには指定された医師による定期的な診断が必要とされた。春子はこのとき、左手がうまく動かさなくなっていた。そのせいで、診断で落とされるのではないかと心配していたが、病気ではないからと合格を貰い慰安婦になることができた。この当時、度重なる爆撃のせいで市街地はすでに壊滅していた。遅延式の爆弾や、不発弾やらが何時何処で爆発するかわからない危険な状態にあっただし、そもそも県内随一の遊郭があった沖ノ村は跡形なくなっている。そこで働いていた娼妓もかなりの数が死んでしまっている。そういうことも合わせて考えると、春子のように長年娼妓を務めた女はむしろ貴重だった。春子が不採用になる可能性は殆ど無かったということになる。高原を切り開いて作られた飛行場から歩いて三十分ほどの場所に、春子は小さな一軒家を借りた。本来の家主は戦禍にあって亡くなっており、空き家になっていたところに春子に移り住んだのである。沖ノ村が壊滅してしまっ

、正式に認可を受けた遊郭はなくなっていた。それもあり、本来なら絶対に許可されないはずである一人きりの貸し座敷を開くことができた。ただ、あくまで目をつぶって貰っているだけなので、外で客待ちをするとか目立つようなことはできなかった。それでも、肝心の陸軍飛行基地にいる兵隊さんたちには話しが通っており、客はぼちぼちとやってきた。ここを利用する兵隊さんたちと違い、近所の人たちにはとても評判が悪くあからさまに出て行けと言う者達もいた。もちろん、春子がそれに応じることはない。村八分にされても、食料は軍から直接配給を受けていたのでなんとかなる。春子がよほどのいざこざを起こさなければ、此処を立ち退くような事態にはならなかった。ただこの場所で公娼の仕事をする以上、まったくの無風ということになるわけがなく、あから様に嫌がらせをしてくる者も多かった。牛の糞を玄関先に捨てられるのはまだ良い方で、外を歩いている時に石をぶつけられたことも稀ではなかった。そういう仕打ちをうけても、春子は黙って耐えていた。どんなにお金をかせいでも、娼妓が蔑まれるのは当たり前のことだったし、客の男たちをいかに小馬鹿にしてみようが、それは所詮強がりではないということを思い知っているのも娼妓であった。もちろんも春子もそれは例外ではない。ただ、すべての娼妓が春子のように耐えられるということではない。春子には自分の体や命よりも、大切なことだと思い決めたことがあったから。それは、娼妓でなくては出来ぬこと。どれほど忌み嫌われようとも、これは自分でなくてはできない仕事であった。平屋の、二間続きの家。畳はすっかりと磨り減っていて、用意した布団は詰められた綿が、すっかりと潰れて一枚の板の

ようになっている。春子はことこまめに陽に当てて、かつての姿を取り戻させようとするのだけれど、布団は頑として今の姿を変えようとはしなかった。その布団を、朝方畳に敷いて客を待つ。近くに家はないといっても、人目が皆無というわけではない。表の通りは昼間は人通りが多くて、待っていれば確実に人目につく。だから、座敷の中で客を待つのだが、窓がない作りの家出障子を開けていけば、外で待っているのとかわりがない。それに、家を開けてできるような仕事ではないから、すっきりと閉めきった風通しの悪い家の中、梅雨を迎えようとしているじめっとした暗がりの中で待ち続けることになる。そうやって待っていると、もう客は来てくれないような気もしてくる。実際に、黄蝶楼では考えられないくらい暇が多く客も少なくなっていた。招集されて外地に向かう兵隊さんが、ここまでやってくることはないのだから当然ではある。そうは言っても、待ち続ける時間があるだけ不安が膨らむのはどうにもできるものではなかった。もうずいぶんと長いこと西の空に居座り続けるようになってきた太陽が、西の山間に隠れるとこの辺りは驚くほどの闇に包まれる。虫たちの声を潮騒のように聞きながら、春子はようやく家の障子を解放する。そうすると、手を伸ばせばすぐに触れることができそうな星がいつでも空いっぱい撒かれていた。でも、ずっと見続けていた星空は、春子の目にはとても秩序のあるきちんと整理された光景に見える。教えてもらった星たちや星座が、いつだってあるべき時、あるべき場所に間違いなくそこで輝き続けている。街中でも、まったく同じ星たちを見ていたのに、ここで見星たちは明

らかに違っていた。ずいぶんと、星たちが多く見える。もう、ずいぶんと前になるが、野上が言っていたことを春子は思い出していた。夜の空を飛行機で飛ぶと、星の海の中を飛んでいるような気がしてくると言っていた。街中にある黄蝶廊の四角く切り取られた窓から見ていると、あまりよくわからなかったがこうしてここからこうして見てみるとそのことがなんとなくだが理解できるような気がする。本当に飛行機で星の海の中を飛んでみないと、本当にはわからないのだろうけどさすがにそれは春子にとって夢の中の話であった。飛行基地がほど近く、灯火管制で地上に灯りのまったく見えない夜。月から落ちる銀の雫が世界を知るための唯一の恵となる。満月にほど近くなると、月からの恵がどれほど世界を輝かせているのか、ということを知ることができた。街中では灯火管制があると言っても、月明りだけで暮らすようなことはない。もちろん遊郭では、夜に灯りは必要不可欠だったから、幼い頃の記憶を除けば夜の闇の記憶というものはほとんどないに等しかった。本能的に闇に恐れを感じていても、月から零れ落ちてくる雫が映し出す世界の見事さはそれを凌いでいる。昼間家の中に閉じこもって客を待つ薄闇の中より、よほど輝いていた。それは、客を待ち続けている自分をあまり考えなくてもすむからということもあるかも知れない。春子が星たちの中で白銀に煌く世界を眺めていると、ふいに虫たちの声がゆらめいた。すると、春子は軒先から立ち上がり、障子を閉めて防空電灯笠に覆われた電灯を点ける。灯りが真下の畳を照らしす。丁度その辺りで、玄関の方から「御免下さい」という声が聞こえてくる。客が来たのだ。春子は「お待ちください」と声だけ先にか

けて姿見に自分を映して服装に乱れがないか手早く調べる。これから迎える客のことを思えば、粗相があつてはならなかつた。一夜きり、たった今宵きりの客と遊女の関係だけど、一期一会の関係となることはほぼ間違いないのだから。　続きにある四畳半の座敷を抜けて土間に降りると、玄関の引き戸を開ける。すると、まだ二十歳になっていないであろう若者が、真新しい軍服に身を包んで立っていた。背筋を伸ばして、いかにも緊張した面持ちで白銀の光を浴びて立ち尽くしている。周りには人影はなくどうやら一人でやってきたようだ。「さあさ、なかにおいでなさいナ」　さっそく春子は自分の両手で包みこむようにして若者の手をとると、ひっぱるように家の中へと誘う。貸座敷として登録はしてあつても、元々なんの変哲もない一軒家なのだから黄蝶廊にいた時のように客の相手をするにはできない。今回はたまたま一人きりだったからよかつたが、何人か客が一緒にやってくると土間か外で待ってもらうしかなくなる。最悪の場合、経験のある客にはお引き取りいただいていた。さすがに纏めて相手をするわけにもいかないのだから、こればかりはどうしようもないことだつた。そう頭の中では思つていても、春子の胸の奥にはしこりが残ってしまう。ただ今は、その心配はない。「あ、あの」　布団が敷いてある座敷に引っ張ってこられた若者が、緊張のあまり少し裏返りかけた声で春子に声をかける。「まずは、おすわりなさいましナ」　先に畳に座つた春子が、下から若者を誘うように手を引っ張つた。若者が何を言いたいのか、あるいは話そうとしたのか春子にはすっかりと理解できていたけど、わざとそのこ

とをはぐらかすように話かける。「曹長さん、お名前を教えてくださいナ」 真下だけを照らす電灯の灯りで肩章を確認して、春子は質問をする。黄蝶廊では、客が教えないかぎり名前を聞くようなことはしなかったけど、ここにやって来てからはかならず名前を聞くようにしている。こういう場所にくるのは初めてなのであろう若者は、とくに疑問を持つことなく普通に答えてくれた。

「ハイ。自分は陸軍飛行隊所属、――後藤昭一《ごとうしょういち》曹長であります」 どんなに緊張していても、氏名だけはきちんと言った。いかにも、軍から叩き込まれた通りに、反射的に答えた感じだった。ただ民間人に、それも娼妓相手にそこまで明かす必要はないのだから、教え方に問題があるような気がする。もちろん、春子はそういったことに口を出すようなことはしないが。「では後藤サン、もっと近くによつてくださいナ」 膝を突き合わせるくらいの距離だったが、男と女の距離としてはいささか間が空きすぎている。ただ初めの経験である後藤には、そのことが理解できていないことは最初から分かっていることだった。春子は自分から近づくのではなく、あえてそのことを後藤に告げる。今日は一人だけだったので、こういう所に少しづつ時間をかけることができた。普段だって手を抜いているというわけではないが、複数の客があればどうしても一人ばかりに時間をかけていることはできなくなる。黄蝶廊では、基本的に規定の時間で料金をいただいていたから、それが普通だった。けれど、ここでは春子しかいない。料金も春子が決めて、時間もすべて春子の裁量でやっている。さすがに、あまりに短すぎるというのは問題だけど、客に応じてそこら辺りは変えている。後藤のような客が

一人でやってくれば、他とは違った対応になるのは当然であった。「ハイ！」 敬礼でもしかねないような勢いで後藤は答えたが、実際に近づいた距離は拳一つ分くらいのものだ。これでは、二人の距離が近づいたとは言えない。後藤の表情を見ると、緊張が更に増しているのがわかる。まるで、緊張が膨らみすぎていまにも破裂してしまいそうだ。春子は手を伸ばして後藤の膝に置いたまま、もう一度誘い直す。「あたしの横に、来てくださいナ」 その言葉に、後藤はハツとした表情を見せる。ようやく、ということなのか察したらしい。「す、すみません」 真面目に頭を下げると、後藤は立ち上がって春子の横に寄ろうとする。それに合わせて春子も一緒に立ち上がり、自分の小さな体を後藤の懐に潜り込ませた。ただ、後藤はそれからどうしていいのかわからず、そのまま立ち尽くしている。春子は意識して下から覗き込むような格好で後藤を見上げる。このまま待っていても、後藤が何もしない……いや、できないことは春子には分かっていた。だからこの格好で、つま先立ちになり後藤の唇に自分の唇を重ねていった。最初は軽く、ゆっくりと時間を重ねて深いものへと。その頃になると、春子の背中の向こう側で迷っていた後藤両手がためらいがちに、でもしっかりと春子の腰に回された。まるで、恋するもの同士がするように、口づけを交わした二人。自分のやっていることは、まともな娼妓のすることではないと春子は承知している。娼妓の常識からしてみたら明らかにやっていることがおかしくて、こんなことをする娼妓は疎まれるだろう。だが、他の娼妓に受け入れてもらいたいと思ったことは一度もな

いし、そもそもそこまで深く考えて行動しているわけでもない。決意があってやっていることだが、本当のところは感情とか衝動がその芯になっている。何があっても、春子は同じことをしていたであろう。今こうして此処にいるのは、様々な条件が重なり合った結果だけど、少年兵と肌を合わせているのは春子が自分で選んだ道であった。それがどんな結果につながったとしても、後悔することはないと思っていた。だから春子は、先を演出していく。絡み合っていた唇を解《ほど》くと、春子は一旦身を離す。このままの流れで、ことを運ぶのが一番簡単で手間のかからない方法だったけど、まだ夜は長く続く。後藤がここにやってきた目的は承知していたけど、春子はそれですませるつもりはなかった。春子にとっては本当に沢山いる客の一人だとしても、後藤にとってはただ一人、生涯最初で最後の女となるのだから。そして、春子はそのことを知っているのだから。「さあ、脱がしてくださいナ」春子は少し恥ずかしさを装いながら、後藤に背を向けて言った。これは儀式だ。春子の着ている服を脱がしていくことで、後藤は少年である自分を脱いでゆく。春子の服の背中にあるファスナーにかかる後藤の指が震えている。恐れているのは、自分自身。清いだけの少年に芽生えていたはずの性と、今はっきりと向き合っているのだから。春子は何度か失敗しながら、ひどく不器用に背中ファスナーが下げられていくのをただじっと待つ。今、言葉は必要ないことを知っている。少年たちが春子のことを、性の対象なのだとはっきりと認識する、そのための儀式であった。「できました……」ファスナーを下までおろした後藤が報告してくる。もちろん春子が望んでいたのはそ

れだけではない。むしろ、これから先が大切だった。「まだ、ですヨ」 春子はゆっくりと言葉を区切って後藤に告げる。これで、後藤はわかってくれるはずだった。深い口付けを交わしたことで、大胆になれているはず。「ハイ」 妙に掠れている、少し裏返ったような高い声で後藤が答える。すぐに春子が少しだけ後押しする。自分の着ている洋服の両肩を、自然な感じでわずかに落とした。すると、それに誘われるように後藤が春子の服の両肩に手をかけ、洋服の袖から両手を抜く。一旦、腰のところに溜まった上着を、今度は上に持ち上げて頭からすっぽりと抜いていく。完全に抜いてしまうと、春子は後藤の手を取って自分の着ているスカートのボタンのところに誘う。大人の男でも、スカート止めてある場所を迷ってしまうことがよくある。ましてや、まともに女に触れたことのないような若者だと、まずわからない。だからスカートの時には、なるべく自然にその場所まで誘ってあげるようにしている。 後藤はごく自然にボタンをはずして、スカートは春子の足元にわだかまった。後は下着だけだが、そこから少し敷居が高くなるらしく、動きが止まってしまうことがよくある。それは後藤も同じだったようで、なかなか春子に触れてこようとしない。春子は少し待った後、後藤をもう一押しすることにする。「このままほっておかれるのは、はずかしいですヨ」

本心はともかく、すくなくとも後藤には春子の言葉は愛らしい女性の訴えのように聞こえた。それが、後藤の最後の行動を促すためのきっかけとなる。上の下着は肩紐でふわりと一枚来ているだけなので、それほど苦労することなく脱がせることができる。

残るのはもう一枚。その一枚が一番の問題である。たぶん、それが最も敷居が高い。春子にとっては、日常であっても後藤にとっては、ひどく非現実的なことのはずであった。だけど、今ここで春子がかかる言葉はないし、できるようなこともない。それに、春子が背中を向けていたのはこのためである。男とやらなくてはいけない若者に、まるで女に傳《かしず》くようなまねをさせたくはなかった。たとえ、それを若者自身が気にすることがないとしてもだ。戦争に赴くことが男の本分だとしたなら、その男達を立てることが女の本分だと春子は思っていたから。そういう考えは、娼妓にとって異端であっても春子はそれを続けるだろう。女衞に買われてこの世界に足を踏み入れたのは一緒だとしても、春子はこの世界以外で生きようと思ったことがなかった。たぶん、売女という表現は自分にこそ相応しいのではないかと、春子は思っている。「すみません」 僅かに震えている指が、申し訳なさそうに春子のお尻に触れた。後藤が謝る必要なんてまったくないし、誘ったのは春子のほうだ。だけれど、春子は黙って後藤のしたいようにさせていた。春子の裸体を見て、少なからず後藤の欲望が高まっていることを確認していたからだ。後は後藤が自分の欲望に対して素直に反応してくれたら、次の段階にすすめるはずであった。ただ、たまにだけ自分の欲望を見せることを忌避する男がいる。その時には、春子の方からしかけなくてはならなかった。「んっ」 春子が小さく声を漏らす。背中に後藤の指から触れたからだ。すぐにそのまま、後藤の腕が前に回される。前に回された手に春子は手を重ねて、自分の両の胸に導いた。特別大きいとは言いかねるが、それでもツンと上を向いた

綺麗な乳房は、春子にとって女としての美しさの象徴であった。春子が見ても特にどうということはないのだけど、男達にとっては魅力に溢れている。それを感じることは、誰にも話したことはないのだけれど春子は誇りに思っていた。春子が自分の乳房に後藤の手を導いたのは、そこが春子が最も好きだと思う場所であり、男が強く求め続ける場所なのだと知っているから。春子が後藤の手を導びいて、その手が自分の胸に重なったが後藤の両手は、固まったようにしばらくの間動かなくなった。春子は辛抱強く、後藤の両手から自分の両手をはずすことなく押しえ続けた。遠慮はしていても、後藤は健康な男子である。やがて、本能が命じるままに、春子の胸を揉みしだき始めた。それに合わせて、春子は声をだす。甘い声。相手の気持ちを高めるために。娼妓であるなら、かならずそうするように。もちろん本気ではない。だが、それと知らない男に見分けることはできないし、そう知っている男は知らないふりをする。だから、どちらにしても同じこと。春子は声を出しながら、自分の右手を後ろに伸ばし後藤の首筋に絡めてゆく。左手は下に伸ばし、太ももを刺激しながら中心部に向かって動かしていく。春子に対して、後藤は最高の反応を見せていた。春子は後藤の腕の中にすっぽりとくるまれながら、身体をするりと入れ替える。首筋にからめたままの右手で後藤の頭を引き寄せて、不意をつくように半ば強引に口づけをしかける。それで、左手の動きが止まっていたわけではなく、あつと言う間に後藤の着ている服のボタンを外し、履いていたズボンのベルトも外してしまう。おそらく、後藤が自分で脱ぐよりもずっ

と素早く、服を剥ぎ取られていた。完全に裸になった二人は、とても自然の流れにみをまかせふとんの上で絡みあう。後藤の動きはとても不器用で、御世辞にも上手いとは言えないけれど、春子がそうであることを本人に感じさせるようなことはけしてしない。それが、娼妓の仕事であるのだから。もし、娼妓という仕事に熟練というものがあるとしたら、正しく春子はそれであった。数えきれないくらいたくさんのお客を相手にしてきた春子にとって、特に苦勞するようなことではなかったが、ただそれでも細心の注意を払っていた。この後藤には、時しかないのだから。しかし、最後の最後。後藤の動きが止まった。春子は、十分いけると思っていた。干支が一回りするほど、ずっと娼妓を続けてきた。いろんな男を相手にしてきたし、体調によってはうまくいかないこともあったけど、真摯にやってきたつもりだった。少なくとも、小娘の頃とはまったく違うと思えるくらいには自分に自信があった。それなのに、春子はこの時、後藤のことを理解しそこなってしまう。春子の上に覆いかぶさり、手は春子の胸に触れたまま、頭を枕に潜り込ませるようにして、後藤は突然動くことをやめた。春子は自分の耳元で、くぐもった嗚咽を聞いていた。両手を後藤の身体に回すと、微かだがそれでもはっきりと震えているのがわかる。何があったのか、一体どうなったのか、そんなことを聞くことは、今の春子にはできない。そもそも聞く必要もなかった。自分の上に乗ったままの後藤の背中に腕を回して、やわらかに抱きしめる。右手の指で後藤の背中をトントンと叩きながら。それは、後藤にとっては母親の胸で刻まれる鼓動のようであったのかも知れない。震えは収まり、嗚咽は落ち着いた吐

息へと変わった。変化したのは、そればかりではない。春子に再び向けられた後藤の顔からは、焦りのようなものが抜け落ちてひどく穏やかな表情になっていた。そして、春子の視線に気がつくくと、なんとも言えない朗らかな笑顔になった。そして、春子の上からごろんと横に転がると、後藤は布団の上で仰向けになったまま春子に謝る。「申し訳ありません」それが何を意味しているのか、認めたくなくても春子には分かっている。もちろん後藤が謝る必要なんてない。むしろ、謝らなくてはいけないのは春子の方である。娼妓として、間違いなく失敗した。それも、絶対にやってはいけない致命的な失敗である。だが、そのことを口にするのはやってはいけないこと。特に、若者に対しては侮辱になってしまう。たとえば、どういう表現を使おうとも、それは一緒だった。男として、役に立たなくなると指摘しなくてはならないから。何もかも分かっている、春子にできることは後藤の横に黙ったまま、ただいることであつた。それからしばらくして、後藤が話しかけてくる。空に向かって投げ上げた何かを、右手で掴みとるような仕草をしながら。「自分は、男になれませんでしたね……」そう言った後、何かをつかんだ右手を開いて、掌を見る。もちろん、その中には何もなかったのだけれど、後藤は自分の開いた掌をじっと見ている。「……もう一度、頑張りませんか？」春子は少し迷ったけれど、そう言ってみた。悔やむ気持ちはまったく変わらず、胸の中にわだかまっている。だから、その言葉を言わせたのは春子の我侭であつたのだろう。「いえ、もうだめなようです。自分の物だというのに、いくら頑張

ってみても役にたちそうにありません」　なんの屈託もない様子で、後藤ははっきりと答える。暗い電灯のあかりに向かって差し出した右の掌をじっと見つめながら。　そんな後藤を見ながら、どうしても春子は諦めきれなかったけど、それ以上しつこく言葉を重ねることはできなかった。男の性に関しては、おそらく後藤自身よりも春子のほうがずっと詳しい。そもそも努力したり、意思の力で男がどうにかしようとするほどうまくいかなくなる、ということは何度も経験してきたことだから。だから、そうならないように色々と考えたつもりだったけど、逆にそれがよくなかったのかも知れない。どんなに悔いが残ったとしても、今の春子にはどうにもできない。だから春子は、これまでは絶対にしなかったことをしようと決めた。それは、踏み出すこと。今いる場所から先へと。それは野田にも、木戸にすらしなかったことだ。木戸からはあれほどはっきりと言われたのに、春子はついに今いる場所から一步も踏み出すことができなかった。それなのに木戸は、本当に最後の最後までまた春子に手を伸ばして、自分の大切なものを託したのである。たぶん、それは春子にしかできないことなのだ、とそう信じて。もし、ここで踏み出すことができないのなら、春子はけして自分を許すことができないだろう。それは、娼妓の小春としてではなく、春子という一人の女として。

「後藤さんのことを、教えてくださいナ。おつかあはお元気ですか？」　春子の一步目はいたって普通のことだった。しかし、これまで春子が客にそう言った質問をすることはなかった。客の身の上を知ろうとしなかった。知りたくないからではなく、怖かったからだ。自分の身体の上を通りすぎていく男達。彼らに、少

しでも情が移ってしまうことが恐ろしかった。客として来た男達は、春子とつながり金を置いて去ってゆく。それが、娼妓の仕事であり、あくまでお金だけでつながる関係でなくてはならない。前借金でその身を買われ、欲望をさらけ出す男達を小馬鹿にしながら、この仕事から抜け出す日を夢見て働く。そんな女たちにとって、客は敵とまでは言わないにしても、相容れない相手でなくてはならなかった。もし、その関係を踏み出してしまうと、自分自身にとっても、客でる男にとっても、不幸の種になる。それは、この世界の常識であり、春子も一線を超えて溺れた娼妓を自分の目で見えてきていた。春子にとっての事情は、そういった娼妓達とは違っていたが、それでも娼妓には違いなかった。春を売る間は女郎でいられても、恋に焦がれる夏を迎えてしまえば、やがて燃え尽き秋がくる、そして凍れる冬が訪れると雪に埋もれて消えてしまうのだ。それが娼妓の運命。生き続けたいのなら、春に留まるしかない。けれど、娼妓は女。どれほど狂い咲こうと時が来れば散りゆかねばならない。それは、春子も同じであった。ただ、女であるからには、実を結びたいという願いもあるのだ。それが、夢幻だと分かっている。「はい、故郷に一人……」戸惑いながら後藤が答えると、春子は小さく声をたてて笑う。「あはっ。普通、おつかあは何人もいませんヨ」春子の指摘に、今度は後藤が笑った。「そう言えばそうですね。確かに、一人と言うのはおかしい。ハハハ」それから二人は、一緒に笑った。普通に考えれば、それほどまでにおかしいことではないのだけれど、二人の笑い声はしばらくの間やまなかった。ようやく後

藤は笑うのをやめると、急に春子に抱きついてくる。横になった春子の胸の中に顔を埋めるようにして。春子はあまりの力強さに吃驚したが、後藤の体が小さく震えているのを感じると、頭を抱えるようにして抱きしめた。自分の胸で流されるもののことは、一切みないようにして。小さく呟かれる、お母さんという声は聞かないようにして。しばらくそのまましていると、それほど時間が絶たずに後藤は落ち着きを取り戻す。真下に灯された電灯の仄暗い灯りが、周囲を取り囲む闇の中で抱き合う二人に小さな安らぎを感じさせてくれていた。その電灯の中で見る後藤は、春子の方が恥ずかしくなるくらい純粹で幼く、透明で美しかった。そして、あまりに淀みのない透き通った美しさが、春子から見ると痛い程に哀しく見えた。もちろん、春子はそんな想いを相手に悟られるようなことはしないのだが。　　変わりに、春子は別なことを聞く。聞きたかったことではなく、聞かなくてはいけないことを。そうでありながら、ずっと避けていたことを。前に踏み出したのだから。「なぜ……どうして、特攻なんてするのですか？」

軍の命令だということは知っている。でも、理由がそれだけではないということも春子は知っている。結局の所、すべての人間が軍命に従ったわけではない。なりふりかまわず逃げ出した人間もいたし、そもそも兵隊に取られたくないために病気のフリをする者は普通にいた。醤油を大量に飲んだり、冬ならば外で水浴びをして風邪をこじらせ癆咳を装ったり、様々な方法で徴兵検査で不合格判定をもらおうとする者はけっこう多かったのである。だから、軍命だからと言って、それだけで無条件に従うというわけではない。入隊してから後、限りなくリンチに近いシゴキを受け

て兵隊として教育されていくが、それでも全員が無条件に従ったというわけではない。特に田舎になれば、やり過ぎた軍属が行方不明になることもしばしば起こることだった。たとえ後からいくら調査した所で、村ぐるみで口を閉じるのだから何の証言も聞けるはずがない。大日本帝国陸軍といっても、けして絶対の力を持っていたわけではないということ。そんなことは、教えられなくても誰もが知っている暗黙の了解のような所があった。確かに、訳のわからいうちに南方の戦線へと送られる兵隊はたくさんいた、でもそこで死んでいく人間には命令以外の理由が必要だったのである。死ねと命令されたから死んでしまう人間は存在しない。死んでしまえば誰にも知られず消えてしまうとしても、一人ひとりそれぞれの理由がそこには存在する。春子が尋ねたのは、その理由の方。今までなら、絶対に訪ねようとはしなかった。自分が、少年兵の最後の女となる以上、そのことを自分の胸に刻み込まなくてはならないとずっと思っていた。でも、そうすればもう純粹に娼妓と客としてだけの関係は維持できなくなるのだということも分かっていた。春子は、そこを踏み越えた。そんな春子に、天井から降りてくる薄暗い電灯の灯りを少し眩しそうに見ながら、後藤は話してくれる。誰にも話すことのできない、自分の本心を。「一人一艦の精神で、敵に体当たりをするのだと自分は命令されました。先に飛び立った先輩達も、そう言われていたはずです。なのに、連合軍による空襲はひどくなるばかりで、少しも戦況は良くなる兆しを見せません。一人一艦ではとても足りないくらい、多くの敵艦がいるのでしょう。この先、自分や自

分のような人間が何度特攻を繰り返したところで、おそらく日本は戦争に勝てません。でも、負けるにしても、自分のような覚悟を持った人間がこの国にいるのだと連合軍に分からせることができれば、南方の国々や支那で行われていたように、一方的に搾取され続けるだけの植民地にされることはないはずだと自分は信じています。今、自分のこの命で、将来この国に生まれてくる子供たちの未来を贖うことが出来るのならば、自分が特攻する価値は十分にあるはずだと思っています」 眩しそうにしながら言ったのは、まだ少年とも言える年齢の軍人であった。「きっと……きっと……」 春子は、その続きを言おうとして、言い出せなかった。涙に言葉を詰まらせたから、というだけではない。その先は、きっと春子が口にしない方がいい言葉だから。そして何よりも、これほど怜悧で純粹で麗しい少年が最後に抱いた女は自分なのだという事実。春子にとってそれは、良くも悪くも軽々しく口にできるようなことではなかった。 なんにしても、春子は語るのをやめ、自分の身体を後藤にぴったりと寄せていった。 しばしの眠りが訪れるまで、春子は後藤を静かに抱きしめる。 後藤の言葉を、自分の胸の奥にしっかりと沈めながら。

翌朝、春子は朝食を作った。だし汁もろくに取れていないすいとん汁でしかないが、後藤はうまいと言って残さずに食べてくれた。その後、春子は最低限の代金を受け取って、後藤を送り出す。 玄関を出たところで後藤は春子を一度だけ振り返り、踵をカツンと鳴らして見事な敬礼をしてみせる。 野上がしたように、木戸が見せてくれたように、後藤もこれから自分が赴く運

命の過酷さをまったく感じさせない朗らかな笑顔を春子に向けた。どうすれば、こんな良い顔で笑えるのだろうと春子は思った。

春子は、後藤に向かって深く頭を下げて答える。軍にとって後藤は、たくさんいる兵隊の一人に過ぎないのだろうけど、春子にとっては一人の男だ。結局、少年のまま出撃することになってしまったけれど、自分が後藤にとって最初で最後の女であるということには変りない。そのことを知っているのは、後藤自身と春子だけしかいないし、これから先もそのことを知られることはないだろう。二人だけが知っている真実。それだけのことなのだけど、それがどれだけ大切なことであるのか、春子は承知しているつもりだった。千の言葉をつくそうとも、たった一夜の關係にたぶん勝るものはないのだと春子は信じている。いや、信じたいのかもしれないが。死に赴く男であればこそ、より深く重く清廉な意味を持つのだと。ただ一つだけ、この行為に影を落とすものがあるとしたなら、それは春子自身。ただ一人を想い、送り出すことができる女ではないのだから。春子が蔑まれることはあっても、尊敬されるようなことは絶対にない。そんな女なのだ。仮に春子と特別な關係になったとして、それは若い軍人にとって汚点にしかならない。唯一、春子との關係が正当化されるとしたならば、それは春子が公娼であるという一点のみ。男が女を買うことが正当化されていた時代。だから、春子がお金をもらうことで、一夜の行為は正当化される。もちろん、春子自身が正当化されることはないが、後藤や他のたくさん兵隊さんがいささかも責を負うことはない。と、春子は思っていたし、信じてもいた。だからこそ、今こうして後藤を送り出すこともできたし、今までに

何人もの軍人さんを相手にすることもできた。たとえ他人に何を言われようが、誰に自慢することができなくとも、そのことは確かに春子にとって秘めたる誇りに他ならなかったのだ。だが、その誇りは戦争が終わって、大きく変容してゆくことになる。恥を忘れた女達や性と金に群がる連中の手によって。春子は後藤の後に、何人もの少年兵を男として送り出すことが出来た。二度と帰ることのない作戦に、彼らは一様に笑顔を見せて去っていった。春子は彼らの名前を一つ一つ誰に見せることもできないノートに書き記し、思い出を心の中に刻み同時に深く沈める。思い出すことがなくとも、けして忘れぬように。

そして夏が来る。最後に飛び立った少年を送り出してから約ひと月後、大日本帝国政府はポツダム宣言を受諾し大東亜戦争が終わった。

終戦直後の混乱期、春子は人生の中で最も多忙な時期を迎える。日本へと進駐した連合軍のために、日本国政府は多くの公娼や私娼を雇入れ慰安業務に従事させた。連合軍といっても、その中心はアメリカ兵であり、性犯罪を憂慮した内務省の判断によるものであった。春子は敵であったはずのアメリカ人が、一体どういう連中なのかということが知りたくて、慰安所が敷設されるとすぐに働きだした。ただ、貸座敷とは違い、完全に日雇い労働となっており、決められた時間に決められた場所にいくとトラックがやってきて、集まった女たちを荷台に乗せて慰安所まで連れていく。慰安所にいくとひっきりなしに白い肌をした大きな男達がやってきて、ことが終わるとすぐに立ち去ってい

った。何か話しかけてくる男もいるが、英語なので何を言っているのかほとんどわからない。自分の技量を披露しようにも、ゆっくりするだけの時間もない。結局、春子の当初の思惑はなにも叶えることができず、ただ機械的に男達の性処理をするだけになっていく。基本、それほど手間がかかるということはないが、日本の男達と違って短い時間であってもかなり強引に自分の性処理を行おうとするので、強姦に近い扱いをうけることもしばしばだった。そういうことが毎日繰り返されると、やがて自分が公衆便所にでもなったかのような気分になってくる。貸座敷のように前借金による縛りはなく、報酬を天引きされることもないので、実入りは比較にならないほど多かった。でも、どんなにたくさんの収入を得られるからといって、春子にはどうしてもこれがまともな娼妓の仕事だとは思えなかった。そんな春子にとって、矛盾するようだけど、外国人相手に客をとる理由はまさにたくさんの収入があるから、という一点しかない。敗戦後直後の日本で、これほどの高収入を得られる仕事は他になかった。特に、女となれば仕事は限られてくる。春子のような経験豊富な娼妓だけでなく、まったく経験のない素人でさえ自分の女を売って稼いでいるような時代だった。道端で客を取り、腰だけを付き出して性行為を行うパンパンと呼ばれた娼婦たちが繁華街の至る所で見られるようになったのもこの頃である。春子は、そういう女たちのことを娼妓と認めてはいなかった。そして、こういう時代だからこそ、自分の貸座敷を始めたいと思った。すっかり、瓦礫となってしまった黄蝶楼の代わりに、新しい貸座敷を建てようと決める。何一つとして誇りを持たない仕事を続けたのは、その目標ができたから

であった。必死だった。だが必死だったのは春子一人だけではない。誰もが等しく必死だった。配給も完全に止まり、明日の食料すらままならないそんな時代。それでも、時と共に街は急速に復興を始める。疎開していた住人が戻ってくると、真っ先に自分が住むべき家の立て直しが始まった。最初は瓦礫の中にぽつぽつとあばら屋が立ち始めただけだったが、そこかしこで棟上の光景が見られるようになり、すぐに瓦礫の痕跡は消え去った。沖之村も戦後の復興を反映するかのようになり、急速に復興を遂げた。政府から予算がついたこともあり、貸座敷業者に対する融資も行なわれた。ただ春子は、そういった融資話を飲むこと無く、黄蝶楼跡地に自分で稼いだお金を使って、かつての黄蝶楼より部屋数が少なくなってしまうが、自分の店を持つことができた。前借金などで縛らなくても、働きたいという女はたくさんいたし、春子自身もまだ現役で働くことは可能であった。それに、終戦の翌年になるとGHQからの要請を受ける形で、それまでの取締法が廃止され公娼制度は実質的になくなった。もちろん、借金を抱える女性がいなくなったわけではなく、借金の形に身売りをする女性がいなくなったわけではない。だが女性が、公然と売買されることはなくなった。沖之村を取り囲んでいた塀はなくなり、空襲によって破壊された大門が再建されることもなくなった。だが、警察は風俗営業が可能な地区を一定区域内に封じ込めるために地図に赤く線を引き、これを厳しく取り締まった。これが、後に赤線と呼ばれる地域になる。終戦後五年程たつと、戦後の混乱はだいぶ落ち着きを見せ始めたが、この頃になると朝鮮戦争が始まった

。日本は米軍の重要な戦略拠点となり、いくら厳しく取り締まっても風俗の需要は高まり、この頃、沖之村も最盛期を迎える。需要の高まった風俗営業は管轄の警察署が決めた赤線地域を超えて出店し始めるようになり、戦争特需によってあふれた金を目当てに男も女も砂糖に群がる蟻のようになっていた。人身売買事件も各地で起こり、地域外の住人との摩擦も頻繁におこるようになっていた。特需目当てで急速に規模が拡大していった遊郭も、朝鮮戦争の集結と共に急激な不況にあえぐことになる。少しでも金を稼ごうと女たちは、そこらを歩いている男を、強引に誘うようになったし、店側もそれを黙認していた。そんな中、政治家の不正に遊女がからむ事件が起こる。その売春婦の中に未成年者が含まれていたことで、さらに大きな事件へと発展した。当時流行りであった女性運動に火がつく形で、沖之村遊郭に対する弾圧が始まった。春子の貸座敷も大きな影響を受けて、収入は激減して当時働いていた娘の殆どにやめてもらわなくてはならなくなった。これまでなら、その流れは一時的なものだったが、今度は一向に衰えることなくついには売春防止法が施行に至る。沖之村にあった大部分の遊郭は、施行と同時に店を閉めた。栄華を誇った沖之村はこの時、一旦幕を閉じる。この時は、さすがに春子もどうしたら良いのか、と真剣に悩んだ。他の者と違い、春子は生まれてからずっとこの世界で生きてきた。多くの大切な男《ひと》を見送ったのも、彼らの想いを抱いてきたのもすべてが此の中であった。今更、外の世界でどう生きていけば良いのか、春子には想像も付かない。しよせん春子には、他の世界で生きてゆくことなどできそうもなかった。春子は、店の名前を変えて蜚

旅館と名乗った。いくばくかの宿賃をとって、男女に自由恋愛の場所を提供すると言う名目であった。この頃になると、客の嗜好が大きく変化し始めていた。単に行為そのものを提供するような昔ながらの形態では、客がやってこなくなっていたのだ。そんな中で、それまでにはなかったサービスを売り物にした性風俗が登場する。個室型の浴室の中で、女性が垢すりを提供するという特殊浴場。当時、トルコ風呂と呼ばれていた新しい形の風俗店は、泡踊り等のサービスで男たちの欲望をがっちりと掴み取り、店舗が一気に全国中に広がっていった。その流れは沖之村にも及び、蛍旅館のすぐ近くに四店舗の大手風俗店が次々と店を開いた。蛍旅館の客足はすっかりと衰え、蛍旅館の他にも旅館に転向して細々と生き延びていたいくつかの旅館がついに耐え切れず店を閉めた。　だが、性風俗の多様化はそれで終わったわけではない。トルコ風呂はソーブランドと名前を変えた頃になると、技術を競い合う時代は終わりを告げより恋愛っぽさやフェチズムのような特定のニーズに合わせた、多様化の時代へと変わってしまっていたのである。　不景気の時代が長期化し、店にも客にも資金がない時代になると、デリバリーヘルスという店舗を持たない店舗が主流となり、それまでの風俗店舗も斜陽の時代へと突入する。

そんな時代の変移の中で、春子も蛍旅館も静かに年を重ねて老いていった。そして、誰にも気にされることなく、ひっそりと姿を消そうとしている。だが、それは春子が特別なわけではなく、風俗に身を置く者の宿命なのだろう。沖之村という土地名もなくなってしまうていたし、消え去った貸し座敷のことを思い出す

者も、話題にする者もない。初めからそこには存在してはいなかったかのように、消えてしまっても誰も気づかない。春子もまた、そんな中の一人であったのだ。かつて娼妓であった一人の女は、間もなく姿を消そうとしている。とうに新たな時代から取り残され、ほんの何人かの人間しか彼女のことを知る者はいない。社会の底で生きながら、春子は歴史の中の片隅にいた。たとえ誰からも忘れ去られようとも、確かにいたのだ。証も記憶も、消えてしまうような儚い存在だとしても。しかし、春子は今はまだ、此処にいる。

すっかりと、世界は光を取り戻していた。闇を追い払っていたはずの電灯の明かりが、もうその意味を失ってしまっている。私は湯のみを静かにちゃぶ台の上に置くと、今度は意識して仏壇に目をやった。老婆……いや、春子さんは天涯孤独。ついで、家族というものを持つことがなかった。だとすれば、仏壇があることが不自然。弔うべき仏様がいないということになるのだから。でも、一晩を越える長い話を聞いた後では、その仏壇が存在する理由も、位牌や過去帖の変わりにずいぶんと傷んだ古ぼけた大学ノートが置いてある理由も、とても自然な光景に見えるようになっていた。「春子さん。手を合わせてもいいですか？」

仏壇を見ながら私は春子さんに許可を求める。「あんさん、ほんとに良い人だね。ぜひ、そうしてやってくんさいナ」春子さんは、返事をしながらすっと立ち上がると、仏壇の前にかがみ込み、仏壇の前の蠟燭立てに蠟燭を挿して今時めずらしい燐寸《まっち》を取り出す。一回では点かずに、三度目擦ったとき、か細い陽炎のような火が立ち上がり、鼻につく二酸化硫黄の匂いが部屋の中に広がった。私はその小さな炎が蠟燭に移るのを待って、仏壇の前に移動する。すると、仏壇の前に置かれた座布団を、春子さんが直してくれた。私は、一度仏壇を見上げると、鍾を一回鳴らし手を合わせ頭を下げる。ここに位牌はない。でも、祭られているはずの仏は、最大の敬意を払べき存在であった。私は座布団から降りると、春子さんに一つお願いをする。「もしよかったら、あのノヲトを拝見してもよろしいでしょ

うか？」　もしかすると、大変失礼なお願いをしているかも知れない。そう思いながらも私はどうしても、頼んでみずにはいられなかった。とても長い年月《としつき》を、娼妓として生きてきた、到底普通とは言えない一人の女性の話。それを聞いていた中でも、最も気にかかっていた物であった。歴史そのものを語った老女の言葉を、形ある存在として手に取って見ることができるのだ。私が、その誘惑にあがらうことなど出来ようはずもない。

「よいですよ」　春子さんは、思ったより遥かに気さくに答えて、仏壇に置いてあった大学ノヲトを手にとると、私の目の前に差し出した。ずいぶんと古ぼけ色がくすみ、表紙もゆらゆらと波打ってあちこち擦り切れて破れそうになっている。背表紙が少し新しそうに見えるのは、おそらく以前修復したからだろう。見た目よりはずっとしっかりしている。紙が取れてバラバラにならないように、ノヲトの二箇所穴を開けてハトメ使って補修強化した後、綴り紐を使って閉じてあった。私はそれを受け取ると、すぐには開かず元いたちゃぶ台の前に一旦戻る。そこで私は姿勢を正して座り、台の上でノヲトを開いた。　表紙をめくると、文章とかは一切なく、あまり上手いとはいえないがとても丁寧な字で男性の名前が、一行に一人ずつ書かれていた。めくっていくと、とても古い紙だから明らかに色が褪せているのはしかたないとしても、あちこち紙が波うち歪んでいる場所があった。それだけでなく、ペン先ほどの大きさを小さく穴が開いている場所もある。紙が破けてしまっているのはしかたないとしても、問題なのは理由の方だった。歪んで波打っている箇所、それにこの敗れた箇所。私はそのどちらもすぐに想像がついた。これは、濡れた後。水

に濡れた紙を乾かすと、こんな感じで波打つようになる。濡れた紙に小さな字で名前を書くと、丁度こんなふうに穴が開いてしまうことがある。そして、こんな具合にノヲトを濡らしたものを、私は一つしか想像することができなかった。 涙。 話を聞いたときには、このノートに名前を書き記した時のことなど聞けなかったが、こうして見ていると有々と想像することができた。歳若い兵隊を送り出した後、その名前をノヲトに一人ひとり書き記したのだろう。生きて帰ることの許されない戦場に向かう彼らを、春子さんがどういった気持ちで送り出したのかは想像することしかできない。戦争がない時代だからということではない。たとえ戦争があった時代であっても、特別攻撃隊が行った作戦は明らかに異端であり異質。アメリカ軍人の間でカミカゼと呼ばれ恐れられたのは、彼らがあげた成果ゆえではなく、その異質さゆえであった。彼らと言葉を交わし、最後の相手をした女性が一体何を考え何を想うのか理解しようとしても多分無理だろう。それでも、想像することくらいなら出来る.....と思いたい。 名前が書き記るされたノヲトを、誰に知られることもなく、戦後五十五年もの間ずっと仏壇に収めて手を合わせ続けてきた一人の女性の話を聞くことが出来たのだから。 私は自分の感想を口にするこことさえできず、ただ黙ってノヲトを春子さんに返した。春子さんは、ノヲトを受け取ると、仏壇に戻すことはせずにはたぶん引越し用に準備してある小さな包の中にそれをしまった。 私は、それを見ながら春子さんに尋ねる。「そういえば、この家を出られるのはいつですか？」 なんととも凶々しいのだが、春子さんが

話してくれることをいいことに、結局一晩明かしてしまった。これだけ聞いても、まだまだ他にも聞きたい話がたくさんあった。最初は生涯を性風俗に捧げてきた一人の女性の話を聞くことができる。それだけで満足できると考えていたのだ。だけど、戦前から始まる春子さんの生涯は、自分が想像していたものを遥かに超えていた。いいとか悪いとか、低俗とか高尚とかそういったことではなく、私はただ圧倒されていたのだ。なんでもないことのように話す春子さんに向かって、私が話しかけることは、いたって平凡でなんの力もない言葉に過ぎない。もちろん、春子さんはそんな私のことを否定することはないだろう。ただ受け止めてくれるだけだ。受け止めきれなかったのは、私の方。結局の所、私にできることと言えば春子さんの話を聞くことだけなのだと思います。だから、話すこと……いや、聞くべきことはまだまだたくさんあるはずなのである。それになにより、私自身がもっと話を聞きたいと思っていたから。しかし、無常にも朝日が古ぼけた畳の隅に残った夜の残滓を追い払う。星がいつまでも空に留まっていられないことと同じ理由で、夜は老婆と私が二人の間からも消滅していた。どれほど長い時であったにしても、過ぎ去ってみれば一瞬とかかわらない。時の残滓は等しく記憶となるのだから。私は、次の記憶に手を伸ばそうとしている。「夜が開けてなさるネ」春子さんは暴力的な強さを示す陽光を、眩しそうに見ながら言葉を繋ぐ。差し込んだ陽光は、春子さんの顔に刻まれた年輪のような皺の一つ一つを蛍光灯などとは比較にならない強烈さで浮き彫りにしてゆく。私は、黙って春子さんの顔を見ている。「今日、引越しさネ」春子さんは、年月と共に落ち

窪んでしまった目を少し何処かに彷徨わせて、そう答えた。春子さんは何を見ているのだろうか。私は尋ねもせずに、その答えを考えてみた。もちろん、その答えが見つからないことなど承知のうえで。「急ですね」 私は、殆ど反射的にそう言っていた。正直な気持ちというよりは、それ以外に言葉が思い浮かばなかったから。春子さんは、特に表情を変えることもなく、いたって当たり前のように答える。「元から決まっていたことサ。急でもないさネ」 言われて、私は照れ笑いをする。確かに最もな意見だから。長いこと春子さんの話を聞いているうちに、ずいぶんと前から知っているような気になってしまっていたのかもしれない。少なくとも、私の中では。「はは。それはそうですね……。それと、もしよかったら、二階から外を見せてもらえませんか？」

私はそんな照れ笑いに紛らわせながら、春子さんに一つお願いをする。これまでだって、ずいぶんと無理なことをしている。本当なら、とてもお願いできるような立場ではないということは承知の上でのお願いだ。この旅館がなくなると聞きいた。すると、これが最初で最後の機会となる。だから、どうしても見ておきたかった。「誰もおらんから、よいさネ」 春子さんは、上体を重機か何かで持ち上げるような億劫さで、ゆっくりと立ち上がる。私はそれを見て、胸の痛みを感じながらもそれを飲み込んだ。私にとっての最後の機会、それをどうしても逃したくなかったからという我侷であった。自分の我侷で春子さんに負担をかけているという事実は、けして愉快的ことではなかったが、結局そういう人間であると自分を言いくるめる他ない。春子さんが、

承知してくれたということを、唯一の言い訳として。立ち上がると、春子さんは人を切り刻むように照らしてくる日差しの中から抜け出して、廊下へと続く襖を開く。私は、その後へと続いた。幾分ひやりと感じる板張りの廊下は、私の体重をうけてわずかに撓む。相当な年月を経過している板は、丁寧に磨いてあっても腐食が起きているのかも知れない。おそらく戦後すぐの頃に立てられたであろう建物は、材料とかあまり良いものを使ってはいないだろう。たぶん、このまま旅館を続けたとしても、相当大胆なリフォームをしない限り、この家はそんなに長く持ちこたえられそうにもない。春子さんがそうであるように、家もまた終わりの時を迎えようとしていたのだ。きしむ階段を上り二階に着くと、左右二つに部屋があった。どちらも引き戸になっており、広くもない踊り場からでも問題なく入ることができる。見た目、どちらも同じ造りになっていたが、春子が案内してくれたのは向かって左側、すなわち東側の部屋だった。中に入ると、畳だけがある空っぽ部屋があった。部屋の隅には亜麻色の所が何箇所か見受けられる。女の子が客の相手をするための部屋であるが、それなりの調度品は置かれていたのだろう。押入れも開け放たれたままになっており、中にはなにもない。引越し直前の部屋はひやり感じられるくらいに空虚で、想像以上に広々としていた。春子さんは部屋に入るとすぐ、磨りガラスになっているサッシの窓を大きく開ける。すると、開けたままの扉を風が通り過ぎ、遠くの方からリンという音が微かに届いてきた。心地良い風を感じながら、私は開け放った窓から外を眺める春子さんの隣に立つ。まだ昇ったばかりであるが、今日一日続くであろう過酷さの前兆として

は十分過ぎる日差しを受けて、桜の木に生い茂る緑葉がとても眩《まばゆ》い。「ここから、見ていたのですか？」なぜだか、私はそんなことを言っていた。質問なのか、それとも感慨に似た何かが言葉になったのか、私自身にも判断がつきかねる。

「ほんとは、ネ。そこに、石橋が見えたのサ」春子さんが指さした先には、ちゃんと橋が見えたのだが、石橋ではなく鉄とコンクリートで出来た広く大きな近代的な橋だった。「ああ、ハチロク豪雨ですね」もう随分と前の話になるが、市街地を襲った豪雨によって江戸時代からずっと使われてきていた石橋が崩壊してしまっていた。春子さんが言っているのは、その橋のことだろう。「そうさネ。ここから見える石橋は、そりゃみごとだったもんサ……」そう言った後、春子さんは突然咳き込むような声をだした。私は不安になり、自分より随分と低い位置にある春子さんの顔をかがんで覗き込む。すると、皺の間に分け目ができるように、春子さんの口が僅かに開き口の端が小さくつりあがっている。どうやら、具合が悪いわけではなく、笑っているらしい。

「可笑しいですか？」私は確信が持てないまま、半信半疑で春子さんにそう聞いてみる。なぜ笑ったのかも分からないのだから。「いや、ネ。ここからこうして眺めるのは、もう随分と久しぶりさネ。あんたがこなけりゃ、ここからこうして見ることもなかったからネ。……あんなに、好きだったってのにネ」とても長い時。一人の女性の一生に等しい時間。それはあまりに長くて、自分自身ですら忘れてしまうほどの時間だった。ここから見る風景には、その時が映されているのだろう。窓に切り取られ

た風景は、いつでもいつまでも変わらないように見えても、本当はとんでもなく長くて遠い旅を映してきているのだ。その旅路は、あまりに遠く遠く離れすぎていて誰もそこにたどり着くことはできない。ただ僅かに、人の記憶がそれに近づくことができる。この時、間違いなく春子さんには私とはまったく別の光景が見えていたはずだ。少なくとも、私などより遥かにはっきりと、無くなったはずの石橋が見えていたはずだ。私には想像と妄想の両方を駆使したとしても、限界がある。そうだとすると、今こうして同じ光景を見ているということには、十分意味があるのだと思いたかった。私の横で春子さんが、ふうっと大きな息をつく。しわがれた、すこし震える掠れ声だ。年相応の声なのだが、私にはなぜだか春子さんが急に年をとってしまったように感じられる。「すみません、お疲れになられたのではないですか？」

私が気遣うような声をかけると、春子さんはしわくちやの顔に笑みを刻んで答えを返す。「もう、だめだネ。あたしにや、お日様がきつ過ぎる……」そう言って、部屋の奥にある日差しが直接届かない場所にとことこと歩いて行って、そこにちょこんと座り込んだ。私は、もう一度外に目を向けて、眩い緑を記憶に焼き付けると窓を閉める。サッシが小さくタンと鳴った。ずっと身体をなでていた風が止まり、私に絡みつく。ほんの僅かな未来に、それは私にたくさんの汗をもたらすであろうことは容易に想像がつく。もっとも、今はそんなことより春子さんのことだ。「大丈夫ですか？」聞いたところでどうなるものでもなく、我ながら間抜けな質問だなと思いつつも私はそう尋ねていた。春子さんは、何も言わずに私に向かって手を伸ばす。私は意味が分から

ないままその手を掴んでみた。とても水気のない乾いた、老木の枝のような手が私の掌の中にあった。私が、春子さんの両手を包み込むようにして握っていると、春子さんはもう片方の手を私の手に重ねてくる。「若いネ、あんた」 私の手を手繰り寄せるようにして、春子さんはゆっくと立ち上がりながら言った。私はなんとも答えることができずに、ただ黙っていると春子さんは急に近づいてきて私の顔を枯れた指先で撫で回す。もう、一体どういうことなのかさっぱり分からず、私は黙って成り行きに任せていた。すると、気の済むまで撫で回した後、春子さんはふうっと息をつく。その間、春子さんは落ち窪んでしまった瞳で私を見ていたのだが、私には私を見ているようには見えなかった。聞いたりもしないし、聞くつもりもない。だから私の想像でしかないのだが、たぶんあの見えない橋を観るように、春子さんは私以外の誰かを見ていたのだろうと思う。深く息をついた春子さんは、私の掌の中から乾いた手を引きぬくと、とことこと歩いて座敷を出ていった。私は、閉じてしまった窓に目をやり、磨りガラスを通して差し込んでくる日差しを眩く一瞥した後、春子さんの後をゆっくりとついていった。元の部屋に戻ると、すぐに私は尋ねる。「何かお手伝いできることはありませんか？」 昨日までは、なんの係わりもない存在だった。今だって他人であることにはかわりはないのだが、たんなんとはいえない程度に関係にはなっていると思う。少なくとも、私はそう思っていた。後は、春子さんがどう考えるかなのだが。「もう、あらかた処分してしまったからネ。後は、この身一つだけさ。もうするようなこと

は残っちゃいないサ」 春子さんは、皺の中に埋もれてしまいそうなくらい目を細め、私に答える。はっきりとは断定できるほどではないが、私には嬉しそうな表情をしたように思えた。「もしよかったら、どちらに引っ越されるのか教えていただけませんか？」 また、会いにいきたいという下心があったからだ。一晩かけて沢山の話を聞いた。でもそれは、まだ一晩しか話をきけていないとも言える。 春子さんは、とくに迷う様子もみせず、すぐに答えてくれた。「済世会病院だよ」 春子さんが告げたのは、ここから歩いて三十分ほどの距離にある病院の名前だった。「それって……」 私は、驚いた。驚いて言葉を続けられなくなってしまう。身寄りのない年老いた女性の引越し先。長年すみ続けてきた家を立ち退いてまで引っ越すその場所が、普通の引越し先であるとは思わなかった。老人ホームとか、そういう所を想像していたのだ。春子さんが告げたのは病院、それも癌治療で有名な病院である。そこに、家を処分して引っ越す……いや、入院するということがどういうことなのか私にだってすぐに想像がついてしまう。「木戸さんに、これを預かって欲しいんです」 春子さんは急に私に身を寄せると、私の手にあの大学ノートを押し付けてくる。「えっ？ どうして？」 私は戸惑い、そして驚いた。これが、春子さんにとってどれほど大切なものなのか、私には痛いくらいよくわかる。おそらく、春子さんにとって唯一にして最高の財産だろう。とくに退院できぬと覚悟を決めた身であれば尚更大切に思えるのではないのだろうか。「旅館を処分したお金で、入院費はどうかできたんですけどネ。家族と呼べる者もないこんな婆《ばばあ》じゃ、死んだ後を託せる

ような人間はいやしませんのサ。あたしの骸は焼却炉にでも投げ込んでくれりゃいいけど、これは.....これだけはどうにも忍びなくて、最後までこうして手元に置いておいたのですヨ。絶対にこれは、世間様の目に触れちゃいけない、でもあたしには処分することもできなかつたのサ。だから、あんた様に預かって欲しいのサ。老婆最後の頼み。どうか、後生だと思ってこれを預かってはもらえませんかネ？」 春子さんの言っていることは十分、なっとくいくことができるものであった。だが、その意味することはとても重い。私が抱え切れるか不安になるほどに。 迷っている私を、春子さんは見抜いたのだろう。私の手を取って、大学ノヲトを握った私の手に、枯れた両手を重ねてくる。少しひやりとする春子さんの両手に包まれて、覚悟の決まらぬまま春子さんの決意を引き受けようと頷いた。「わかりました.....私に出来る範囲でよかったら」 私の住む家に、仏壇はない。春子さんがそうであるように、私もまた身寄りという者がいない。朝晩拝むようなことはできそうにもないし、それだけの覚悟もない。せいぜいできることは、これがどういう物であるかという記憶を受け継ぐことくらいだろう。ただその記憶は、公にしてよいものではないが。「ありがとう。ほんに、ありがとう」 無数の年輪が刻まれたような手で、私の手をこすりながら春子さんが頭を下げる。嬉しかったのだろうけど、私にはどうとも答えることができない。どれほどの覚悟があつて引き受けたわけではなく、これといって出来ることもないからだ。今、なんと答えた所で私の言葉は誰より私自身に白々しく聞こえてしまうことだろう。 私は

、ずっと帰ってしまうこともできず、春子さんがほぼ一生を過ごして来たこの場所を去るまで一緒にいた。無慈悲な太陽が天頂に昇り、焼け付いたアスファルトが容赦ない高熱で路上にあるあらゆる物を高熱で調理している。私はともかく、高齢で重い病を患っている春子さんにとっては、拷問にも等しいような苦痛に感じられるはずだ。でも、春子さんは一言たりとも苦痛を訴えたりはしなかった。私は健康だ。春子さんがどれだけ苦痛を感じていようと、その苦痛を一寸とも感じることはできない。私がタクシーを呼ぼうと尋ねたとき、春子さんはその提案を断った。それを特に考えることもなく、普通に受け入れてしまったのはたぶんそのせいだ。あくまで想像でしかないのだけど、春子さんが感じている苦痛の半分でも感じる事ができたなら私は救急車を呼んでいたことだろう。 私が最初に玄関を出て、春子さんが後からでてくる。ちょうどその時、はずさないまま軒先に吊るしておいた風鈴が僅かばかりの風に吹かれて、リンと小さく音を立てた。それはまるで、この家から春子さんへの最後の別れの挨拶であるかのように私には感じられた。 春子さんが歩き出す、病院へと向かって。その姿が茨の冠を頭に抱き、自分自身の死刑台を担いで歩き続けた聖人のように、私には見えた。もともと、この老女のことを、最後に看取る人間は病院の看護師と医師だけで、彼らが記憶の片隅にでも留めているなどとは夢々思っていないが。だけど、私だけは彼女のことを死ぬまで記憶に留め、何度も何度も思い起こすことだろう。そして、私の手の中には彼女の古い記憶と意思が形となって存在している。 少し歩いては、すぐに立ち止まる春子さんと共に、私は歩いた。幾度も手を貸そうと申し

出る。その度に「これが、自分で歩くの最後になるかもしれないからネ」と言われて拒否された。たとえ、彼女の歩いてきた生涯が、誰からも認められないようなものだとしても、間違いなく彼女は誇りある生涯を生きてきたのだ。私だけはそのことを心に刻んでおく必要があった。もうじき、彼女の人生に幕が降りるその時まで、彼女は誇りを持って生きようとしている。彼女は、生涯を籠の中の鳥として過ごしてきた。それは、普通の女性とはまったく違う人生だ。彼女が幸せだったとは、私にはどうしても思えない。だけど、彼女がそれを望んだとも思えない。今、私の手の中にある若者達の記憶。彼らが選んだものと同じ道を、春子さんは彼女なりに歩もうとしたのではないだろうか。そうでなくては、彼女がこんなにも高貴に見えるはずがない。私は共に歩きながら、そう考えていた。 陽が大きく西の空に傾き、ほんの心持ちではあるが、太陽がその威力に陰りを見せたその頃、ようやく春子さんは病院につき、私の役割はここで終わる。

そして、現在。 あれから十年が過ぎていた。結局、春子さんが生きていた間には、再び会うことはなかった。入院してわずか三日後、春子は他界していたのだ。私がいに行った一週間後はあまりに遅すぎた。身寄りのない春子さんは、葬式なしで直葬によって火葬されるとそのまま無縁墓地に埋葬されていた。私は墓地を探し出して、墓参りだけはさせてもらった。それから年に一度だけ、墓にやってくると拝んでいる。 坂の途中にある墓地にたどり着くためには、それなりに急勾配の石階段を登らなくてはならず、墓に着くころにはすっかりと汗だくになってしまう。

空を見上げると、ずっと高い彼方に一つだけ雲が浮かんでいた。太陽がすぐ傍にあり、目を細めて見ていたのだが、あまりに眩しくて目が痛くなってしまった。目を再び前に戻すと、ひどく雑多に並んでいる墓石が強力な陽光を受けていっぱいに育っている緑に覆いつくされようとしている光景が見えた。この墓石の殆どは墓名が刻まれておらず、名も知れぬ人を弔った跡なのだと理解することができた。私は、緑の中に空いている道を通り、さらに先へと進んだ。すると、ひときわ大きな墓石が緑に囲まれて姿を現す。団地の中に空いた、とても清とした空間であった。そこだけ緑が払われて、墓石の前には供えられた花がある。筒状の花瓶は満杯で、私は自分が持ってきた花束をどうしたものか迷った。

目の前の一際大きな墓石は、無縁仏だけでなく家族が亡くなり供養を受けられなくなった仏達を纏めて供養するために建立《こんりゅう》されたものである。春子さんも、今はここに眠っている。その性格上、年に一度の供養以外は訪れる者もなく、墓を参ろうという人間もまずいない。実際、毎年この日に墓参りしてきた私も、今までそんな経験は一度もなかった。だがよく考えれば、そもそもこの墓に奉られている仏は春子さんだけではなく、そういうことが起こっても不思議ではないだろう。……というか、今までそうならなかったことの方が不思議なのかも知れない。そういうことであれば、なおさらすでに挿してある花を引き抜いてしまうようなことなどできるはずもなく、春子さんには申し訳ないが私の持ってきた花束の中から一番大きく綺麗な菊を一本だけ引き抜くと、花瓶の隙間に押し込むように挿した。無理やり入れた感はあるが、ここは少しだけゆずってもらおう。

残りの花束は持って帰るのもあれなので、途中にあった無縁墓に
供えさせてもらうつもりだった。私はポケットから御線香とラ
イターを取り出すと火を点ける。一旦ついた火を振り払うよう
にして消すと、線香の先から香りたつ煙が立ち昇った。香台にな
るくぼみには、もう殆ど燃え尽きかけている線香が残っていた。
私は、横たわっている線香の灰の跡に寄り添わせるようにして、
火を点けた線香を置いた。墓石の前に立ち、両手を合わせると
静かに頭を下げる。春子さんにかけるはずであった言葉を思い浮
かべながら。永遠に届くことのない言葉は、私の口元からでてゆ
くと、夏の日差しに焼かれて灰になる。その言葉は届ける先がも
うなくて、陽炎のゆらめきに等しいものだ。私は、ずっとそ
う思っていたのだ。この時までは。「すみません。失礼で
すが、木戸さんではありませんか？」声が聞こえる。涼や
かな、若い女性の声だ。私の名を呼ぶ声に惹かれるように振り返
ると、白いワンピースを着た女性が立っていた。まったく見覚え
のない女性で、不審に思う代わりに見とれてしまう。美しさに目
を奪われたというわけではない。なぜか、とても懐かしい感じが
したからだ。私が思っているより、ずっと長く彼女を見ていた
のだろう。女性は怪訝そうに、私にもう一度確認してきた。「
あの.....木戸さんではありませんか？」私は右手で軽く頭を叩
いて自分を正気づかせると、ゆっくりと頷いた。「そうですが...
...春子さんのお知り合いの方ですか？」たぶん、偶然ではない
。私より先に来ていた人物がいて、今日は春子の命日だ。たぶん
、それ以外にはないだろうと見当をつけた発言だった。「はい、

春子は私の祖母です」 以外な言葉であったが、私は驚かなかった。「そうですか。どうりで懐かしい感じがするわけだ」

私は、正直な気持ちを話す。たった一夜だけを共に過ごした老婆。でも、彼女が語った人生はあれからずっと僕の中に住み続けている。何度も自分の中で反芻した物語。目を閉じれば春子さんの声が、枯れてなお清々としたその姿が、はっきりと蘇ってくる。目の前の彼女に、春子さんの姿を感じたのはけして思い過ごしなどではない。「あの……ありがとうございます」 春子さんの孫娘は、私に深く頭を下げる。私は、彼女の姿を見ながら想像を巡らせた。春子さんが一人で死んでいったこととか、無縁仏となったこととか、彼女がここにいることとか。春子さんの人生に圧倒されたように、目の前の女性の人生にも圧倒されるかも知れない。今はまだ妄想でしかないが、そんな気がしていた。「よく、この場所がわかりましたね？ いつからです？」 私がこの場所を知ったのは、むしろ行幸といえた。春子さんが亡くなる直前に出会い、死に目に立ち会えなかったとはいえ、春子さんの死に係わった人たちの話しを聞くことができたのだから。「母は祖母のこと嫌っていて、一言も話してくれようとはしません。だから去年、色んな人にお会いして、ようやくこの場所にたどり着くことができました」 強い日差しにゆらめく長い黒髪を右手の指に絡めて、耳の後ろに流しながら言った言葉に、私は十分納得したように頷く。「そうですか」 普通の女性にとって、春子さんの生き方は到底認めることができるようなものではない。それが、実の娘ともなれば尚更なのだろう。普通に生きていきたいと願うのならば、その存在自体を封印したくなるのかもしれ

ない。「ずっと、花束を持って、毎年お参りにきてくれていると聞きました。本当は、あたしがしなくてはならなかったことなのに。本当に、ありがとうございます」　また、頭を下げようとする彼女を、わたしはすぐに押し留める。「どうか、やめてください。これは、私がそうしたくてやっていることです。あなたに頭を下げられると、正直困ってしまいます」　彼女のことを責める気持ちはまったくくない、でもすべてを受け入れるということではけしてない。「あっ、ごめんなさい……」　また、頭を下げようとする彼女を、私は手を使って押し留める。そして、何処までも抜けてゆくような青い空を見上げながら言う。「もし、お時間があるなら、場所を変えてお話しませんか？　あなたにお尋ねしたいこととか、お話ししたいこととかありますので」　誘ったのは嬉しかったからだ。春子さんの物語はまだ終わってはいなかった。それに、十年前だと目の前の女性はまだ二十歳そこら。その時には話せなかったようなことも、今なら話すこともできよう。今此処で出会えたということも、僥倖だと思う。「はい……、ぜひ。あたしからもお願いします」　伝えたいことがある。それは、私にとっての望みだ。たとえば今見上げる空に輝く太陽が、ひどく無慈悲な存在であるのに、半年過ぎれば慰撫を齎す存在となる。私が伝えたいと願うことが、彼女にとってそのどちらになるのかは私にはわからない。でも、それでも伝えたいと思うのだ。　二人で並んで、街並みへと続く階段を降りてゆく。その時、私は彼女に質問をした。本当は最初にしておくべきだった質問だった。「もし差し支えなかったら、お名前を教えても

らえませんか？」 私の質問に彼女は驚いたような表情を見せ、その後すぐに頭を下げる。「ごめんなさい、すっかりお伝えした気になってました。阿南です。阿南穂垂といいます」 私は、その名前を聞くとすぐに一つの質問をしていた。「もしかしたら、稲穂が垂れると書いて穂垂さんですか？」 私の質問に、彼女... 穂垂さんは驚き今度は足を止めてしまう。「えっ？ よく分かりましたね？ 今まで言い当てた人なんていなかったのに。普通、瞬いて飛ぶ蛍を想像しますよ？」 疑問形で返されたけど、私は答えず足も止めなかった。先へと進む私に、穂垂さんはすぐに少し小走りで追いついてくる。私は、穂垂さんが自分と並んだくらいのタイミングで言葉を紡ぐ。穂垂さんに話しかけたというのではなく、彼女に聞いてもらうために。「やはり、あなたには伝えておくべきですね」 私が、そこで言葉を一旦切ったのは、穂垂さんに一つの質問をしてもらうためだった。そして、穂垂さんはその期待に応えてくれる。「それは祖母の.....春子のことですか？」 私が話しを切り出すまでもなく、二人が出会ったときからたぶん予想できたこと。.....いや、もしかするとそれより前に、分かっていたのかもしれない。私は答えずに、その場で立ち止まると右手の方を指差して、春子さんに尋ねる。「あの店でかまわないですか？」 私が指差したのは、小さな喫茶店であった。入り口の扉は片側の開き扉で、黒に近い色調でゴシック調を思わせる落ち着いた雰囲気がある。「あたしは、どこでもかまいません」 穂垂さんの一言で、場所が決まった。私が先頭に立って適度に冷えた店内に入ると、わずかに遅れて穂垂さんがついてくる。それほど広くない店内には人影はなく、どうやら私

達二人が唯一の客であるようだった。私は、一番奥にある二人がけのテーブルを選んで座る。そんなに広くない丸テーブルに向いあって二人が座ると、すぐに口ひげを蓄えたいかにもマスターっぽい見かけをした男がやってくる。左手に持った水を、私と穂垂さんの前に置く。水滴がついたグラスの中に入った氷が、涼やかな音を立てた。脇に挟んでいたメニューを私に渡すと、黙ってそこに立っている。私はそれを開くと、すぐにアイスティを注文する。そして、開いたメニューを穂垂さんに渡そうとするが、彼女はその前に私と同じものと言った。私にあわせたというより、少しでも早く話を聞きたかったのではないだろうか。私にはそう思えたが、それは私の妄想かも知れない。マスターが軽く頭を下げて去っていくとすぐに私は自分の膝の上に乗せていたバッグの中からノヲトを取り出す。とてもとても古ぼけた一冊のノヲトである。「これを……」 わたしは、そのノヲトをテーブルの上に置くと、穂垂さんの方に向けて押しやった。「これは、なんですか？」 あまりに古ぼけたノヲトを前に、穂垂さんは明らかに戸惑ったような表情になっている。私の話を聞こうと、内心身構えていたのかも知れない。それなのに、いきなりこのような古いノヲトを見せられたのだ、疑問に思うのが当然だろう。「私は、遊郭というものに興味があつたんです」だが、私はその疑問には答えることなく、話を始める。「歴史の表舞台には絶対に登場しない、でもどんな時代にも存在したはずの女性たちがどう生きたのか、そのことが知りたかった」 そんなふう

に話を続ける私に、穂垂さんはさらに怪訝そうな表情を強めたが

、何も言わずに私を見ている。初めて会った女性にするような話でないことは、私だとて十分承知している。ただ、それでも話さなくてはと思っていた。それが、ノヲトを受け取って戸惑っている穂垂さんの疑問にも答えることになるのだと知っているから。

「だから、私は旅館に行ったのです。そこで彼女と.....春子さんと出会った」 それから、私の.....いや、春子さんの長い話が始まる。ちょうどその時無口なマスターによって届けられたアイスティーのグラスが、水の入ったグラスの横に置かれた。水のグラスを手にしていた穂垂さんがそれをテーブルに置こうとしたとき、アイスティーのグラスに触れて、リンと鳴った。その音は、不思議と風鈴の音のように涼やかに聞こえた。

〈了〉